

---

# 人形はいつかたどり着いた

TG 0 9

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

人形はいつかたどり着いた

### 【Nコード】

N9737N

### 【作者名】

TG09

### 【あらすじ】

人形として生と死の螺旋を回り続けた青年は、いつか魔法に辿りつく。

空の境界 オリジナル Fate といった流れで続いていく予定です。

かなりの鈍足。

正直バトルや恋愛要素は遠いですが、それでも良いという方はどうか読んでください。

因みに、今まで読み専門だったので文章力は低いです。

そうだった意味でも成長を生暖かく見守っていただけると幸いです。

追記：arcadia様の方でも同作品を投稿しはじめました。

## 第一話（前書き）

かなり最低系。

読専だった私が無謀にも書き出してみました。

ぶっっちゃけ続くはずがないと自分でも思っていますが、何時の日にか書き切ることが出来ることを祈っています。

内容はTYPE MOONの多重クロスというテンプレもテンプレなもの。

さらに加えて最強系というダメっぷり。

所謂オリ主なのでそういうのが嫌いな方は回れ右してください。

\*所謂習作なので文章力には期待しないでください。

## 第一話

振り上げた包丁を振り下ろす。

その度に目の前の『誰か』の肉塊はビクンと痙攣する。

刺す。

痙攣。

刺す。

痙攣。

刺す。

痙攣。

刺す。

痙攣。

・

・

・

・

・

・

刺す。

……遂に痙攣すらしなくなった。

こうして『誰か』を殺すのは何度目だろう。

思い出すのも億劫なほどの回数殺してきた。

思い出す必要がないほど殺してきた。

……そこまで考えてふと思う。

『誰か』とは誰なのだろう。

『誰か』を何度も殺すなどという矛盾、そんなことはあり得るのだ

ろうか。

ヒトは一度死ねば殺すことなど出来ない。

それなのに何度も殺される『誰か』とは、そして何度も殺す自分は誰なのだろう。

……

……

……

…

そんなことは些細な問題だ。

何故ならもうすぐ俺は目覚め、ここでの事など忘れるはずだから。全てを忘れ、また新たな日常を繰り返す。

例え俺にとって最後の一日だとしても、世界の大多数の人には関係のないことである。

それに何度でも繰り返すことが出来るのだから。

……俺は今まで何を考えていたのだろう？

何か大事な、とても大事なことを考えていたような気がするのだが。

まあ思い出すことが出来ないのなら無意味なことなのだろう。

目覚めが近い。

## 第一話

俺の朝は早い。

午前二時、未だ日が昇る前に目覚める。

そして手早く身支度を整えると眠ったままの母さんに挨拶をして家から出かける。

マンションの廊下を歩きエレベータホールまでやってくる。

薄暗い廊下はどことなく不気味だが至る所が凝っていてどことなく高級感が漂っている。

俺が住んでいるここ小川マンションは、元は社員寮だかなんだかを目指して造られたものらしい。

それがバブルだかなんだかの不況で個人の手にわたり普通のマンションとして使われることになったということである。

バブルの頃に造られたからなのか、オーナーが高級志向だったの  
かなり高級な造りになっており月々の値段もかなりのものである、  
らしい。

らしい、というのほうちはそんなものを払っていないからだ。

そもそもこんな高級マンションにうちののような貧乏所帯が暮らして  
いられるのは死んだ父がマンションのオーナーと懇意にしていたか  
らだとかなんとか……と、気がつけばエレベータの扉が開き俺の搭  
乗を待ちわびていた。

俺は急ぎエレベータに乗り込む。

腕時計は既に2時20分を示している。

だんだん寒くなってきた、白い息を吐きながらそんなことを思う。

今年の冬を無事に越すことができるだろうか。

暖房代すら払うことが出来ないうちではそんな考えにも嫌なりアリ  
テイが伴なう。

もしかしたらか『母子家庭一家凍死』なんてニュースが現実になる  
のではないか…

そんな縁起でもない妄想にふけっているとバイト先のコンビニに辿  
りつく。

さあ、今日も労働に勤しもう。

朝の8時20分。

登校時間ギリギリに学校に滑りこむ。

学校では優等生で通っている俺は眠りへの誘惑を必死にはねのけて  
授業に挑む。

一度教わっているからといって時間が経てば忘れてしまうものだ。



故に学校への通学に必要な資金の大半を奨学金に頼っている俺は真面目に勉学に勤しむ必要があるのである。

今日もいつものように代わり映えない学校が終了する。

部活動などに所属していない俺はその足で朝のコンビニへととんぼ返りする。

そして再び労働に勤しむのである。

夜の10時。

家に帰ってきた俺は母親と自分の食事を作り、正常な思考すらも難しくなっている母親に機械的におかゆを食べさせる。

……いつからだろう、あの優しかった母がこんな状態になってしまったのは。

キツカケは些細なことだったと思う。

元々病弱だった母が風邪を引いたのだ。

いつもの事だからと風邪薬を飲んで家事をこなしていた母は…その日の晩に倒れたのである。

すぐさま病院に電話し、診察を受けた母は原因不明の病に掛かっていた。

症状は風邪のようなもの。

しかし脳の細胞が徐々に死んでいくというのである。

既存の病ではない。

現在の医療技術では治療どころか原因の特定すら不可能です。そう言われた時の絶望は計り知れないものだった。

次の日の朝には目覚めた母に安心していた俺は、医者診断を信じてはいなかった。

……信じたくはなかった。

しかしある朝目覚めた母が父親のことを忘れていたという事実が否応なしにそれを信じさせることになった。

徐々に記憶をなくしていった母は精神的にもどんどん退行していった。

さらに、退行したからなのかそういう機能が死んだのか…母は箸を持つことができなくなるのを皮切りにどんどん日常生活に必要な機能すら失っていった。

一時は入院していた母だが高額の治療費を払うことができなくなった俺は母を家に戻し世話をすることになったのである。

そんな回想に耽りながら目の前でおかゆを食べさせられている母を見る。

視点は定まらず虚空を見つめている。

いや、何も見ていないのかもしれない。

口の端からは食べる際にこぼしたおかゆがこぼれている。

ヨダレを垂らし、排便すらも自力で行うことができなくなった母のおむつを帰る必要もあるだろう。

かつての美しく優しかった母の面影はそこにはない。

年齢こそ四十に届くか否かだがその様は介護されている老人そのものである。

そんな母に対して俺が思うところは余り無い。

母の優しさを知っている。

母の思い出は生きている。

母の想いは知っている。

だから俺は頑張っていける。

……でも最近、すこしだけつかれてきました。

さあ眠ろう。

明日も早いんだから。

……ふと、めがさめた。

なにかの鳴き声が聞こえる。

こんな夜中に誰が泣いているのだろうか？

母だろうか？

あんな状態であっても母は時たま正気を取り戻し一人泣いていたの

を俺は知っている。

おれは息を殺して鳴き声の聞こえる台所へ向かう。  
そして、そこで見た光景を理解できなかった。

あの美しかった母が涙と鼻水に顔をぐしゃぐしゃにして包丁を持っている。

問題なのはそれを喉に向けているということだ。

「かあ…さん？」

自分でも声が震えているのがわかる。  
あのヒトは何をしているのだろうか？

「もう…いやなの…高美に迷惑を掛けたくはないっ……………大切な思  
い出を忘れたくは…ないの！」

あのヒトは何を言っているのだろうか。

「だから…ごめんなさい……………もっと早くこうしていれば高美は自分  
のことだけを考えて生きていられたのに……………死ぬことも出来ない  
弱い母さんで…ごめんね？」

だからあのヒトは何を言っているのだろうか。

「母さんが…何を言っているのか……………アハハハ…包丁を持ってると  
危ないよ？ 母さん筋力ないんだから」

「だから ね？包丁を置いて今日はもう寝ようっ？」

「……………」

母さんの泣き声が止まる。

これまで見たこともないような強い意志を秘めた眼で俺を見つめている。

その眼に秘められたモノが何であるのか俺には判らなかった。

謝罪？感謝？哀しみ？決意？

どれでもなく、そして何れでもあった。

そして、その瞳はなによりも明白に母さんの意思を俺に悟らされるのであった。

「ねえ…やめよう？…俺なら頑張っていけるから…だから…ね？」

「ごめんなさい…私は良い母親ではなかったけど……なによりもあなたを愛していました」

そういつて母さんは両手に抱える様に持っていた包丁を自らの喉に

つきさした。

頬に暖かなモノが流れる。

呆然としていた俺は、ああそういえばシャワーを浴びていなかったな、なんて見当違いなことを思い出していた。

前方から温かいシャワーを浴びる。

そのシャワーはおかしなことに、何故か赤かった。

命がこぼれ落ちる。

どう仕様も無いほどに熱い命の雫が流れだしていく。

気がつけば俺は母さんの握っていた包丁を手にもって、何故か死に瀕した母の身体に包丁を突き刺していた。

何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も  
何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も  
何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も  
何度も何度も  
何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も  
何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も  
何度も何度も  
何度も  
何度も

・  
・  
・  
・

気がつけば 目の前には動かなくなつた肉塊が転がっていた。

手に持った包丁は微妙に欠けてしまっている。

骨にでも当たつたのだろうか。

まあどうでもいいかと投げやりに口に出し、再度目の前の肉塊を能面のよゝな顔で見下ろす。

そうして、そのまま、手に持った包丁を自らの喉に突き入れた。

先程まで包丁を肉塊に差し込んでいた際に同じような感触を手に感じていたというのに、自らの手と喉の中に鋭くもグニユリとした感触を感じ、何故かそれがおかしくて、俺は笑った。

笑いながら俺は包丁を自らの喉に突き刺す。

身体は痙攣を始めたがそれに構わず刺した包丁を横に動かしていく。

自らの命が流れだしていくのがわかる。

それが、先程感じた『誰か』の命の雫に似ていて、泣きたくなるほど嬉しかった。

どんどん失われていく思考。

そんな中、最後に、一つだけつぶやいた。

さあ はやくねむらないと あくむは ねむれば あすが はじまるんだから

それはいつか彼が母から聞いた魔法の言葉。

まだ病弱ではあるものの元気だった母親の腕に抱かれて、虐められたことを慰めてもらっていた時のこと。

嫌なことがあったときは眠りなさい、どんな悪夢でも眠ってしまえば新しい明日が始まるのだから。と。

そういつてひどく優しい手で頭を撫でてくれた。

そんな、世界全てが満たされていた素晴らしい時代を思い出しながら、杯門高美は永遠にその時間を停止した。





そんな  
ゆめ  
を  
みた。

## 第一話（後書き）

こんにちは。

今まで読み専門でしたがいろいろあつて黒歴史を晒してみました。  
第一話上げましたが自分でもびっくりな展開です。

…アレー？コメディになるはずだったんですけど。

まあそこら辺は素人の習作というところでひとつ。

誤字脱字はどんとこいですが、作者はとても精神的に弱いので叩きは勘弁してください。

叩かれるかたは『糞小説かいてんじゃねーよ』とは云わずに優しさを以て立ち去ってあげてください。

それでは、長くなりましたが第二話も頑張つて書いていきます。

## 第二話（前書き）

第二話です。

自分で読み直しても意味不明ですが、とりあえず上げます。

## 第二話

目覚めは速やかだった。

とてつもない悪夢を見ていたような気もするし、いつもどおりの夢だったような気もする。

時計を見れば午前二時。

素早く支度をしてバイトへ向かわなければならぬ。

洗面台に向かう傍ら台所を覗く。

一瞬だけ 『誰か』 だった肉塊と真つ赤な血溜まりが見えた。

………そんなワケが無い。

あれはどこまで行っても夢なのだから。

………そもそもその夢すらもよく憶えていないのだから。

そんな頭の混線を眠りのせいだと決めつけた俺は本格的に頭をシャッキリしようと洗面台を目指す。

現実から眼をそらすのは辞めよう。

何故俺はさっきから移動すらせずに視点の移動が出来るのだろうか。  
もっといえば、

オレノ カラダ ハ ドコニ イッテ シマッタノダロウ？

取り乱してしまっていたが、結局のところ俺が動くことが出来るのはこのマンションの中だけらしい。というか、マンション内のことであればその場所を見てもいないのに認識出来るという不可思議な状態になってしまっている。

これはどういう事なのだろうか？

・ ・ ・ ・ ・

結局、考えても仕方がないという結論に至った。そもそも、こんなオカルトじみた現象が現実には在り得るはずがない。

であるからしてこれは夢である、QEDってね。

……ええまあ現実逃避なんですけどね？

## 第二話

目の前？には無数の死体。

現在認識出来るマンションの一部。  
具体的には円柱状になっているマンションの西棟、こちらにある部  
屋に無数の死体が放置されている。

吐き気？をこらえながらそれら死体を認識していく。

その中の二つ。

何故か妙に寒気が走るモノを見つけた。

なぜだろう。

他の死体同様吐き気をもよおす点は変わらない。

他の死体同様腐ってしまっていて見るに耐えないのは変わらない。

他の死体同様悲惨な死に方をしているのは変わらない。

他の死体同様放置されているのも変わらない。

だけど、ダケドダケドダケドだけどダケドダケドだけどダケド……

……

その死体が放置されている部屋に見覚えがあるのはなぜだろう？

そのその光景に既視感を覚えるのはなぜだろう？

そしてなにより、

その屍肉と骨がまとっている衣服に見覚えがあるのは ナゼダ

□ ウ？

俺は認めたくない現実から眼を逸らそうとして、不意に誰かと眼があつた。



一目見て、先程まであれほど動揺しショックをうけていた無数の死体の事など吹き飛んだ。

その男は一言で言えば『地獄』だった。

『地獄』というものを見たことはないが、『地獄』という概念を人の形にすればこうなるであろうと思わせるような男だった。

全身に黒を纏い、その中にある鍛え上げられているであろう肉体は、しかし躍動感など一切存在していなかった。

肉体が存在していないことなど先程確認したはずなのに今にも吐きそうな嫌悪感を感じる。

何故かは分からないが目の前の『地獄』を許すなと魂が、俺の根底が叫び続けている。

しかし、目の前の男にそんなことが出来るだろうか。

ともすれば相対しただけで死にかねない。

そんな規格外に何を以て許すなど、立ち向かえるというのだろうか？

そんな風に（肉体はないが）固まっていた俺に目の前の『地獄』は語りかけてきた。

「貴様何者だ？ 私の結界内にオカシなモノがいると感じてみれば………その魂、この結界と一体化しているのか………ふむ、今朝方機能が停止したあれと関係があるのだろうか……」

目の前のこいつが何を言っているのかは一切わからない。

しかし、聞いてはいけないと。

聞いてしまつては己の根底が崩れ去ると深いところからの警鐘が鳴

り響く。

俺は既に慣れてすらいいたマンション内の移動を行い、自らの家に帰った。

「フーーーーー…… あれなんだよ、怖すぎ、絶対人間じゃないって……！」

安堵のためか悪態が口をつく。

「とにかくさ」どこへ行く「……えっ？」

気がつくとも目の前に先程の男が立っていた。

先程男と出会ったのは一階ロビーだった。

俺は一瞬で部屋まで戻ってきたのだから物理的に俺の部屋に目の前の男が存在するというのはおかしい。

そこまで考えたところで、おれは未だに『物理的におかしい』などという『現実』に縋っていることに笑いがこみ上げてきた。

目覚めてからここまでおかしくないことなど一つも存在していなかったというのにおかしいなどと言っている自分が心底馬鹿らしかったのである。

「おまえはなんだ？」

問うてみる。

答えてくれるとは思っていなかったが、何かを口にしなければこの男と一緒に存在するという事に耐えられなかった。

「魔術師 荒耶宗蓮」

「はぁ？」

こいつはなんと言ったのだろうか？

『魔術師』？

そんなものが存在する筈があるだろうか？

確かに俺自身おかしな記憶を持って生まれたり、今現在オカルトな状況になってはいるが…… 案外いそうな気がしてきた。

「それでその魔法使いがなんの用だ？」

「……………ここに至ってこのような『想定外』は抑止だともい  
うのだろうか…ふむ、とりあえず事が終わるまでは眠っておくが  
い」

こちらの質問に答えるでもなく、男は不意に手をこちら（壁）に向  
けたかと思うとその手を握りしめた。

その瞬間、肉体など無いというのに全身に強烈な痛みを感じ、俺の  
意識は白濁していった。

どれだけの時間が経ったのだろう。  
気がつけばどこもしれない場所にいた。

空間がかしいでいるのか、自分自身がおかしくなったのか…判別は  
つかないが少なくとも常識的な場所ではない。

さらにいえば未だに俺の肉体は存在しておらず、意識だけの状態の  
ようである。

俺はあの男が近くにいないということを確認した後意識を飛ばして  
この空間を調べてみることにした。

•

・ ・ ・ ・ ・

ひとつわかったことはこの空間が途方もなく広く、壁という壁など存在していないということであった。

無限の空間など概念的に存在するはずがないのだからどこかに終わりがあるのだろうとは思うものの、現在の俺にこの空間の終わりを見つけることは出来なかった。

どうしようもなかったので現在の自分の状況について改めて考えてみる。

「あの死体……やっぱり俺のなんだろうか？」

あの死体、妙に泣きたくなるような、感情を引っ掻き回されるような死体。

妙に見覚えのある内装の部屋に、妙に見覚えのある服をきた死体。

………きっと俺の死体なのだろう。

その考えが妙にストンと心に収まる。

理性ではなく、本能があれば己自身だと確信している。

であれば間違いなくあれは俺だ。  
そして必然的に横で倒れていた死体は母さんのモノなのだろう。

俺は夢をみていたのだろうか？

死体の状況から見て昨日今日死んだものではない。

であれば、昨日まで過ごしていた現実が夢であるということになる。  
…常識的に。

しかしあれほどリアルな夢など存在するのだろうか。

夢というのは基本的に都合よく出来ているものである。

であるのに、昨日まで見ていた夢は妙にリアリティがあり、都合主義など一切存在しなかった。

有り体にいえば、あれが夢だとは俄にも信じられなかった。

であるならばあれは現実で死体が嘘ということになるがあの死体は

……

思考がどう仕様も無い袋小路になっていることに気が付き、とりあえずその思考を放棄する。

次いで自分自身の現状とこの空間について考える。

現在の自分は所謂幽霊のような状態なのだろう。

肉体が存在せず、しかし認識だけが存在している。

……それって地縛霊ではなかるうか？

自分自身の考えに少し凹む。

しかし地縛霊ではないかというのが現状の自分の知識で出すことが出来る精一杯かつなんとなく妥当っぽい説であることは自分自身否定出来ない。

……まあそれはなかった事にして、この空間はなんだろう。どこまで行っても壁すら存在しない不思議空間。

というかこの空間と一体化している自分が出口どころか果てすらも認識できないということはそもそもここに出口などという概念は存在しないのではないだろうか？  
であれば無限空間？

そんなものがあるはずがない。  
どっかの偉い先生もいつていた、無限を無限たらしめるのは有限を定義するからだ、と。

つまり、何が言いたいかというと俺には全く意味がわかりませんということだ。

そもそも、長いこと思考してみても自分は地縛霊っぽい存在であり、出口の見えない部屋に監禁？されているということだけしか判らない時点で俺の常識で測れない事態なのだろう。

であるならば、何も考えずに眠る方が良いだろう。

母さんもいつていた。

判らいことがあるのなら考える必要はないって。

.....



・  
そうして俺は夢を見る。

この星の夢。

この世界の夢。

何が何だか判らない夢。

そもそも理解すら求められていない夢。

ありとあらゆる ユメ ヲ ミル。

そうして俺は何かに触れ ナニカ ヲ テニイレタ。

## 第二話（後書き）

まあやっとこさテンプレに近づいたのかな、と。

ぶっちゃけ、分かる人には分り易すぎるネタですが、判らないヒトには全く判らないネタです。

内容の酷さというか分かりにくさについて何かアドバイスがあれば  
お願いします。

それではまた。

## 第三話（前書き）

超展開な話

オリ主とか主人公最強とか嫌いな方はバックしてください

### 第三話

「式 ソレを回収しておけ」

「嫌だね 面倒くさい 第一これはなんなんだ 俺の眼でも死が視えないなんて 真っ当なものじゃないだろう」

「とにかく ここにはもう時期協会のヤツらがやってくる そんなところにこんなものを放置しておくわけにもいかないだろう」

「だったら橙子がやればいいだろう」

「しかし私は黒桐を治療をしてやらねばならないんだが… お前がやるのか？」

「ああ 幹也のことは俺がどうにかするからお前はそれを持ってさっさと帰れ」

「ほー ふうくん なるほどね」

「なんだよ」

「なんでも そうか ではこれは私が運ぼう … ったく肉体労働は得意じゃないんだがな」

「良い気味だ これからは少しは動いておくんだな」

「肝に銘じておくよ」

### 第三話

目を開ける。

そんな行為に意味はないんだということは今なら分かっているがそれでも人間らしく眼を開ける。

頭の中にはおかしな知識があるがソレは置いておいて、ここはどこだろう。

廃墟のような、それでいてどこかのオカルティストの工房のような、そんな場所だ。

壁際には無数の人形や骸骨、意味のわからない骨董品が所狭しと並べられている。

とにかく、肉体…正確には違うが、とにかくこの世界に於ける肉体を手に入れたのだから自らの足で立つてここがどこなのか探索してみよう。

と、不意に違和感を感じる。

まるで立つことを拒んでいるような、それでいて実はそこまで引きとめようとしていないような…

少なくとも今まで感じたことがあるような感覚ではない。

意識してみれば似たような『膜』のようなものがつつすらと何重にも張り巡らされている。

まるで蜘蛛の巣だ。  
鬱陶しく思った高美は左手をその『膜』のようなものを破るように動かす。

「なんだこれ 蜘蛛の巣に脆いし破けば消える……なんか破くのが楽しい気もするけど 今はとにかく鬱陶しい」

そうして無数の『膜』を全て消し去り、高美はこのおかしな建物の探索を行うのであった。

そこは先程軽く見渡した時に感じたとおりにおかしな場所だった。本物の人間かと思紛う人形が置いてあるかと思えば妙にシユールな人形も放置されている。

というか、そもそもこれほどの人形であればこんな場所に放置されているというのもおかしな話であるのだが…。

妙なナイフや遙か昔のコンパスのようなもの、水晶の玉、何かの骨が置いてあるかと思えば横にはノートパソコンもおいてある。

……きつとこの部屋の主は少しズレた人なんだろう。

そんなふうに分と失礼なことを考えながら部屋を探索する。

探索とはいってもさして広い部屋でもなく、わずか数分で部屋の中を大体把握することが出来た。

察するにここは趣味の部屋、なにかを作る工房なのだろう。

それらしい工具もおいてあったし割とこの推測は正しいのではないだろうか。

そんなことを思いながら部屋を出ようとした高美は、高美が寝転んでいたあたりにおかしなものを発見した。

「なんだこれ？ 魔法陣？に壊れた…石？ なんか刻んであったっばいけど粉々になってるし……なんだったんだらう？」

よく分かりはしないが直感的にあの『膜』に関係があったのではないかと思う。

そこまで考えて、やはりよく判らなかつたため部屋から脱出？することにした。

まあ、鍵もかかっていなかったから監禁されていたのかも不明ではあるのだが。



「で あれはどうしたんだ 橙子」

唐突に着物姿の少女、式が問いかける。

「あれ？ あああれのことか あれなら下の工房で結界を雁字搦めにして封印しているよ まったくなんで私があんなものに関わることに」

タバコを灰皿に押し付けながらシヨートの髪に眼鏡を付けた妙齡の女性、橙子が答える。

「結局あれはなんだったんだ？ 俺の眼で死が視えない時点でまともなモノじゃないだろうけど」

「うん？ あああれはね 所謂魔法使いというか魔法そのものというか……」

「魔法っ！？」

それまで我関せずとなにやら難しい書物と格闘していた少女、鮮花が悲鳴じみた声を上げる。

「魔法って…鮮花や所長も魔法使いじゃないんですか？」

眼鏡をかけた温和そうな青年、幹也が鮮花と橙子に向かって問いかける。

「違うよ黒桐 というかこの前説明したと思ったんだが もう忘れたのか？」

「僕には所長たちのいうオカルトはあまり良くわかんないんですよ  
未だに鮮花が魔法使いなんてものをしてることすら反対なんです  
から」

「兄さん 魔法使いと魔術師は別物です そして魔術師の道は私が  
自分の意思で選んだことです 兄さんは口を出さないでください」

「でも今からでも普通の道に戻つとかないと将来苦労するぞ」

「ですから「そいうでもないぞ 黒桐」っ」

「? どういう事ですか 所長」

「鮮花の歳であそこまでのことが出来るのであれば将来は引く手あ  
まただ……というかこれも話したな」

「はあ」

幹也が分かっているような分かっていないような曖昧な返事を返す。  
彼にとってオカルトな話題はよく判らないし基本的に関わるつもりも  
ない。

……今回の一件ではもろに関わってしまったのだが。

「で? 結局あれはなんなんだ?」

式がお前たちのコントには飽きたとでも言わんばかりに問い直して  
くる。

「今回の事件 ああ荒耶が起こした奴だ それは何を目指していた

ものかは覚えているか？」

「ええ 確か式の身体を乗っ取ってあか：アカシツクレコード？とかいう場所に行こうとしたんですよね？」

「乗っ取って：まあそうだな黒桐 つまりはもとから」「に繋がっている式の肉体を通して」「に辿り着き 所謂真理を得ようとしていたわけだ 奴は」

「でも確か抑止力がどうとかで誰もたどり着けないんじゃないんですか？」

「よく覚えているじゃないか黒桐 その通り 本来そんな試みが成功するはずがないんだが：何故かあれは至ってしまったらしい」

「らしいって どうしてそんなことが分かるんですか？」

「それはあれが現代の技術では絶対に到達できない技術を用いて編まれたものだからだよ」

「あれはね黒桐 現代の如何なる資源・時間を用いようとも絶対に不可能な領域の業で括られている つまりは魔法だ」

「所長がいう魔法がどんなものかは知りませんが どうしてその魔法とかいうので造られていることイコールで至ってしまったとわかるんですか？」

「えらく興味津々だな黒桐 お前はこっちの話題には興味がないと思っていたが」

「ええ できる事なら関わりたくはありませんが 今回は関わった

手前最後まで知っておきたいんですよ……聞いて理解できる話でもないでしょうが」

「なるほど 式のためか」

そういつて黒桐をからかいながらも橙子の視線は式と鮮花の方を向いている。

その視線から鮮花は顔をそらし、式は早く続きを話せと言わんばかりに睨みつける。

「おーこわい 解説するとね黒桐 現代において魔法なんてものに到達出来るのは」「に到達できたこととイコールなんだよ」

「魔法というものはね魔法使い以外には知られていないモノなんだ知られていないからこそ巨大な力を有している ほら いつぞや話した魔術のキレが鈍るというやつと同じ理屈だよ」

「10ある力は2人が知れば1人5の力しか使うことが出来ないだろう？ つまりね 魔法使いつていうのは10ある力を10使えるもののことをいうんだよ」

「はあ つまり誰も知るはずのない魔法を使った存在であるあのヒトは つまり逆説的に魔法使いであり」「に到達している筈だつてことですか？」

「良い理解だ つまりはそういうことだよ」

「式があれの死を視ることが出来ないのはあれが現代の常識から乖離した存在だからだろう つまり式の脳があれを認識出来ないから死を視ることも出来ないそういうわけだ」

「これで満足か 式」

そういつて橙子は説明を締める。

そうして新たなタバコを取り出して口に咥え、火をつけようと……してタバコを口から取り落とした。

「どうしたんですか所長？」

いつも泰然としている橙子には珍しい呆然とした顔。僅かな驚きと共に幹也は橙子に問いかけた。

「おい 橙子 目を覚ましたんじゃないのかあれ」

見れば式も妙に警戒している。

「師匠！ 兄さん 私たちの後ろに隠れていてください」

鮮花まで悲鳴のような声で幹也に下がる様に警告する。

こと此処に至って幹也は自分以外の三人がなにかを感じ取り、割と危険な状況にあることに気がついた。

自分自身が何も感じられず、あっちがわの話題に精通している三人が反応しているのを見た幹也は素直に三人の後ろに下がる。

三人は警戒しながら事務所のドアを見る。

暫くして幹也にも三人が経過しているものが近づいてくるのがわかった。

何故なら、三人が警戒しているであろうモノが下手くそな鼻歌を歌いながら三度ノックをして「失礼します」とドアを開けたからである。

廊下に出た高美はとりあえず上の階から調べていくことにした。  
廊下はまさに廃墟といった趣で、決して素晴らしい建物とはいいが  
たい。

しかし、高美はそれでもご機嫌だった。

なぜだか知らないがかつて無いほどに身体の調子がよく、今なら空  
だって飛べそうだったからである。

「フンフンフーン　フンフフフーン？」

普段はしないような鼻歌さえ勝手に出てくる。  
それ位ご機嫌だった。

暫くすると目の前に扉が現れる。

中からはなんとなく人の気配？のようなものを感じる。

人がいるのならノックをしなければ、と常識的に考えた高美はノッ  
クをした後、

「失礼します」

と、叩いてドアノブに手をかけた。

ドアを開けてまずはじめに思ったことは「俺なんか悪いことしました？」だった。

これまで見たこともないようなレベルの美女・美少女が妙に警戒した眼でこちらを睨んでいる。

睨まれる覚えなどない高美はとりあえず、

「すみません 俺何かしたんでしょうか」

と思ったことを問うていた。

「はあ つまり橙子さんの張った結界？を俺が何の考えもなしに全部消し飛ばしてやってきたから警戒していた と？」

「そのとおりだ えーと 杯門高美だったか」

「はいそうです」

つまりはそういうことだった。

あの『膜』みたいなのは結界だったらしい。

工房の中で割と労力をかけて張った結界を俺が面白半分で消し飛ばしてやってきたから警戒していた、と。

要するに警報機をぶち壊しながらお宅訪問してきた相手を警戒した、ということなのだろう。

それは警戒するだろう、そう考えて高美は謝罪を行った。

「本当にすみませんでした 全然そうだったものだとは知らずに

……なんていうか蜘蛛の巣みたいで邪魔だったんで払っちゃったんですよ」

「蜘蛛の巣 ……いや なんにもうまい」

「橙子 お前の結界とやらは蜘蛛の巣並らしいぞ？」

妙に打ちひしがれている妙齡の女性、橙子さんをからかうように着物の超絶美少女、式さんが追い打ちをかける。

「式！ そんなわけ無いじゃない 橙子師は一流の魔術師です その橙子師が張った結界が蜘蛛の巣と同程度なワケが無いでしょう」



そんな式さんの揶揄に学生服の少女、鮮花さんが反論する。

「鮮花 ありがたいんだが そういうのは恥ずかしいからやめてくれ まあ尊厳のためにいつておくと私の結界はそこそこ固いぞ 先日荒耶ほどではないがな」

「ようするにあれだ 杯門のそのバカ魔力で無理やり結界をぶち破ってきたからそんなに脆かったのであつてだな……」

「つまりはあれですか 高見くんの方がとても強かったから 高見くんを縛っていた鎖が壊れてしまったのであつて 鎖の硬さの問題ではない」と

そういつてまとめたのは温和そうな面に眼鏡をかけた青年、幹也さんだった。

「まあ そういうことだ黒桐 しかし魔術師として自信を無くすなモノがモノだから出来る限り強固な奴を張ったんだが」

「ところで 自分が何を出来るのかは理解出来ているんですが この力はなんなんでしょうか？」

「……こいつは傑作だな 魔術師が追い求めてやまない魔法を手に入れたのが 魔術のまの字すら知らないモノとは」

「いいだろう せっかくだからここで一度お前の置かれた現状というものを教え込んでやろう」

そういつて魔術師、橙子さんは俺に説明を始めた。

### 第三話（後書き）

改行とかレイアウトとかよく分かっていないので読みにくいのは勘弁してください。

もしかしたら方言が混じっているかもしれませんが、どうしても判らないもの以外はスルーしてください。

因みに私は鹿児島&長崎人です。

さて今回の話、一気に物語を進めてみました。

ぶっちゃけ擬似シリアスは私には続けられませんでした。

基本デウス・エクス・マキナで行きます。

いろいろと描写を省いているので主人公の設定が意味不明という場合は感想で書いていただけると設定（黒歴史）を上げます。

こっからさきどんどん時間が飛んでいくと思われませんがそれは仕様なので勘弁してください。

彼らの口調が違う！とか三人称と一人称が書き分けられてねーとかいうツツコミがあれば是非アドバイスください。

なにぶん今まで書いたことがあるのはレポートぐらいなもので。

それでは

## 第四話（前書き）

この物語はご都合主義です。

作者の脳が黒歴史なため展開や文体が二転三転します。

厨二が嫌いなた、習作なんか読んでられるかというかたはすぐに  
バックしてください。

それでは

## 第四話

魔術。

魔力を以って行う秘儀、禁忌の類ではあるが奇跡ではないものにと。

人為的に神秘・奇跡を再現する行為の総称。常識から乖離した現象だが資金と時間に制約をつけなければ現代の技術で再現可能な神秘を指す。

…らしい。

らしい、というのは高美が未だに魔術というものを根本的に理解していないからである。

とにかく、一時間にも及ぶ橙子からのレクチャーを受けて高美が理解したことは

- 1・魔術は魔力を使って不可思議な現象を起こす技術。要するにフアンタジー。
- 2・魔術師は「」というものを目指している研究者である。
- 3・「」とは神様の座ともよばれ、ありとあらゆるものが存在する場所らしい。
- 4・魔法とは魔術とはことなる『奇跡』であって、基本的に「」に辿り着いて創りだすものらしい。

ということである。

橙子曰く、「まあ間違っていないが合ってもいない」とのこと。

そして最後に、

5・俺はフアンタジー

らしい。

#### 第四話

「ファンタジーってどういうことですか？」

「だから言葉通りだよ 正真正銘のファンタジー つまりは『奇跡』だ」

「いえ ですからそのファンタジーって何なんでしょうか？」

「ん？ つまりはお前は魔法によって存在し、お前が持っている力が魔法であるということだよ」

高美的理解5番についての橙子との問答である。

魔法とは魔術でも科学でも到達することの出来ない『奇跡』らしい。少なくとも高美はそう理解している。

しかしながら、どこかから引つ張り出してきたこの力が本当に魔法なんていう大仰なものなのだろうか、という疑問もある。

いつてはなんだが自分ごときにそんな『奇跡』の力なんてものが備わっているのだろうか、と。

が、俺の肉体は完膚なきまでに腐りきっていたにも関わらず現在普通に生きて？いられるのだからつまるところ死者蘇生された？のだろうか。

であるならば確かにそれは魔法なのかもしれない。と、高美は勝手に納得した。

つまるところ、そういう力があって自分にとって不都合は今のところ無いのだからということに納得したのだった。

「それでその魔法ってどうやって使うんでしょうか？」

「なんていうか使い方は漠然とわかるんですけど、使い方は分からないっていうか…」

「なんだそれは、そもそもお前自身の肉体を再構築する際に一度行っていないくは話が合わないのだから使い方は分かっているはずだろう」

「まあ肉体を再構築というのも正確には違うんだが……今言っても理解出来ないか」

高美の疑問に対して『こいつ何言ってるんだ？』な顔をした橙子が返す。

高美自身、自分がいつていることが矛盾していることは理解している。

確かに自分は一度この力を行使しているはずだし、どういった仕組みなのかも完全に理解している。が、

「ですから システムは理解しているんですけど そのシステムを動かす方法が分からないんですよ」

高美が精一杯自分の思い？を伝えようとする。

「つまりプログラミングの知識はあるけど そのプログラムをどうやって走らせるのが判らないってことかな？」

これまで黙秘を貫いていた幹也が見かねて口を出してくる。

が、橙子にとっては幹也の例えの方がチンプンカンプンだったのか

「プログラム？ 走らせる？ 黒桐は何を言っているんだ？」

橙子は割とアナログな人だったらしい。

まあ生粋の魔術師がPCに詳しくかったら逆に怖い。

それが元魔法使いの卵ならなおさらだ。

「ですから 術式は理解しているけどその術式を起動するための魔力の扱いなどが判らないということですよね 高美さん？」

幹也も轟沈されて見るに見かねたのか鮮花が口を挟んでくる。流石は浅上女学院というか現代の魔術師というべきだろう。

ハイテク（科学）もアナログ（魔術）も何でもござれである。

鮮花の説明で理解したのか、橙子が得心がいったという面持ちになる。

「なるほど 魔術師でもない高美はそもそも魔力の扱い方や術式の起動法すら知らないわけか」

「たしかに それではいくら高度な式を有していても意味はないな」  
本当おかしな因果だよな、と橙子は呟いた。

高美としては使えるものは使ってみたい。  
というか、純粹に魔術というものに興味があった。  
自分の中にすごい魔法が眠っているというのならなおさらである。

「あの 橙子さん？ もしよろしければ俺に魔術の指導を行ってはいただけないでしょうか？」

「……………」

黙りこむ橙子。

それを見た幹也は助け舟をだす。

「橙子さん 彼もこう言っていることですし なにより鮮花も既に教わっているんですから一人や二人増えるくらい大丈夫ですよね？」

「魔術を一から教えるとなると仕事に回す時間が減るがいいのか？」



ただ一言、橙子がそういつただけで幹也は理解した。橙子が仕事をしない 収入がなくなる ただでさえ少ない給料は絶望的、と。

こうなつては強く勧めることのできない幹也は再び沈黙する。見かねたのか鮮花が再度フォローに回る。

「橙子師 確かに一人弟子を増やすのは大変でしょうが ほんの少しだけでも修行を見てあげられないでしょうか？」

「……………」

鮮花の言葉を受けた橙子は沈黙したままおもむろに眼鏡を取り出して身につける。

「あのね鮮花さん そして高美さん 私は 魔法使いが大つつつつつきらいなの」

おわかり？なんて花が咲いたような笑顔で問いかけてくる。

本来笑顔というのは攻撃的なモノだと聞いたことがあるが、美人がやるとここまで怖いのだな、と高美は他人事の様を考えていた。

つまりは現実逃避である。

怖いということもあったし、自分に指導を行ってくれない理由が橙子自身の好き嫌いによるものだったとは思いついたのだ。

「あの その 橙子さん？ どうしてそこまで魔法使いを嫌っておいでなのでしょう？」

なんとなく地雷である気はしていたものの高美は問いかける。  
すると問いかけた瞬間完全に殺す眼をして橙子が高美を凝視する。

「あなたに それを話す 理由が あるでしょうか？」

「……………すみませんでした」

怖かった。

正直なところプライドなんてものは捨てて土下座しそうなくらいに怖かった。

そんなんでだかよく判らない恐怖空間をぶち壊したのは完全に第三者。

高美の知らない女性の声だった。

「ホントーアネキってケチよねー えーと新米くん？ 私でよければ見てあげようか 魔術」

なんて言葉と共に窓をぶち破ってやってくる。

なんていうかこういう人たちって変人が多いんだろうか？

なんてことを高美が思っているうちに事態は急展開を見せる。

「何故お前がここにいる！ ここはお前のくるようなところではないぞー！」

「あら 私は新しい同胞を見に来ただけよ まあ意地悪しているおばさんがいたから彼を助けてあげようかなーなんて思ったりはしてるけど」

「お前には関係ないだろう　すぐさま窓の修理代をおいて帰れ！」

「ふーん　そんなこというんだ　人の金庫から勝手にお金もって買って買物しているのに？　ふーん　厚かましくなつたわね　おねえさま？」

「なんだその口調は気持ち悪い　そもそも私の方がお前に何度も奢っているんだから別にいいだろう　差押という奴だ」

「なによ　姉貴より私の方が奢っている数は多いわよ　食べ放題だからってバカス力肉ばっか食べちゃって　年なんだから自重しなさいよね」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

どこまでも続いていく微笑ましい言い争い。

まあ変なビームがビュンビュン飛んで、変な影が走り回っているのを微笑ましいといえるかどうかは見るもの次第ではあるが。

そんなどこまでもくだらない、そして危なっかしい姉妹喧嘩を眺めていた高美が理解したことはそう多くはなかった。

- 1・ビームを撃っている女性と橙子さんは姉妹だということ
- 2・橙子さんのほうが姉であるということ
- 3・橙子さんが2　歳であるということ
- 4・ビームを撃っている方は高美と同じ魔法使いであるということ

である。

随分と前のような気もするが、ついさっき魔術について教わっていた時に魔術とは一子相伝であり魔術刻印という刺青みたいなものが後継者には贈られると言っていたのを高美は思い出した。

そして目の前で飛び交う喧嘩から拾った情報。

これらを総合して導きだされる解は……

「もしかして橙子さん 妹に魔法を盗られたから魔法使いが嫌いなのかな……」

頭の中に留めておけばよかったその考えを無意識に口にしてしまう。言葉そのものはとても小さなものだったが、高美がつぶやいた瞬間あれほど騒がしかった喧騒がピタリと止まる。止まっていた。

不思議に思った高美が顔を上げると、笑いを堪えようとしているビームの女性と笑顔の中に修羅をたたえた橙子さんがこちらを凝視していた。

流石に機嫌を完全に損ねたと思った高美はどうにかフォローを行なおうとするものの結局良い言葉は浮かばない。

「というかそもそも話、ほとんど何も知らない橙子相手になにかフォローが出来るはずもないのだ。」

「えーああーそん「いいだろう」っへ？」

よく判らない音を発しながら必死に取り繕う言葉を探していた高美の言葉を遮って橙子が告げる。

「だからいいと言っているんだ 魔術の指導の件私が責任を以て承

るっ」

「どっとうしてまた？ いえ！！大変ありがたいんですけど……」

流石に脈絡が全くなりいきなり承諾してくれたことに疑問を覚える。ついさつき地雷を盛大に踏みまくったあとなのだからなおさらである。

いつの間にか外れていた眼鏡を着け直し橙子が告げる。

先程よりは多少落ち着いている様に見える。

「さっきまでは多少大人気なさ過ぎました こいつと高美くんは違うのに ごめんなさいね」

妙に馬鹿丁寧な口調で謝られる。

「いえいえいえ！！ ありがたいんですけど本当にいいんですかなにも返せるものなんて無いんですけど……」

今はマンションどころか戸籍すらもどうなっている状況下不明である。

そんな高美が返せるものなど身体しかないのだが……。

「それは出世払いということだね それならいいでしょうっ？」

見惚れるような笑顔で告げられる。

確かにそれならなんとかなりそうではある。

そう考えた高美はすぐさま『お願いします』と言葉を返すのだった。

その様子を見ていたビームの女性は呆れたように肩をすくめたあと  
トランクを持ち直し、

「それじゃあ 問題も片付いたようだし 顔見せも終わったし私は  
還りましようかね」

そういつて出てきた窓に足をかけ、最後に『私の名前は青崎青子  
時計塔に来たときはよろしくねん』なんて言葉と一瞬の哀れみの視  
線を高美に残して飛んでいった。

青子が窓から出ていって暫く、橙子が窓に向かって何事かをつぶや  
くと窓はひとりでに組みあがっていき元の形へと修復された。

「橙子さん！ 今のが魔術ですか！？」

魔術らしい魔術を見たことがなかった高美は興奮して修復された窓  
に近づく。

「ああそうだ これから高美が学んでいくものだ」

「ふむ そうだな まずはガラスの修復を目標に学んでもらう …

…安心しろ私の指導はスパルタだからな」

そんな安心出来る要素の欠片もない言葉を吐く。  
気がつけばいつの間にか眼鏡が外されている。

………というか、今更ながら橙子さんはあの眼鏡で性格が変わるらしい。

所謂二重人格なのだろうか。

眼鏡をかけているときは丁寧な話し方で、眼鏡をはずすと怖くなる。高美からすればそんな認識だが、いつそ見事なまでの二重人格だったし、鮮花や幹也が突っ込んでいないことを見るにデフォなんだろう、と己を納得させた高美だった。

「あのースパルタとかいららないんで 出来れば丁寧をお願いしたいんですけど〜？」

「あぁん!？」

メガネなし橙子に押されていた高美はそんなへタレたことを言ってみるがヤクザのような顔で返される。

なんていうか逆らっちゃいけない空気が流れている。

そこまで考えた段階で高美は気がつく。

さっきの不自然な流れはこれを見越してのことだったのだと。

つまるどころ地雷を爆破させまくった高美に対して絶対的上位から逆らうことの出来ない仕返し（修行）を行うつもりなのだ。

「さぁ 善は急げだ 早速修行を始めるぞ さぁ さぁ さぁ さぁ」

だんだんにじり寄ってくる橙子を前に、高美は青子の遺した最後の視線の意味を静かに悟った。



#### 第四話（後書き）

なんていうか意味不明すぎる内容に。

いつか文章力が上がれば書き直すことも出来るんだろっが…

ぶっちゃけプロットをそのまま載せているといっても過言ではない気がしてきた。

肉付けが苦手なんですけどどうすれば良いのでしょうか？

どなたか教えていただけると幸いです。

## 第五話（前書き）

前回は引き続き設定のお話ばかり。

設定集を晒せばいいとは分かっているもの…

やっぱり素人は設定集をさらして会話文に集中した方がよいのだろうか。

今回はそんなお話です。

## 第五話

「まずは高美の現状から説明しよう」

修行を開始した橙子は戦々恐々としていた高美に対してそう告げた。

「現状……ですか？」

「その通り、現状だ お前は自分自身がどういった存在でどういった状態にあるのかを正しく理解しておくべきだ」

「はあ」

唐突に『理解しておくべきだ』と告げられた高美は気の抜けた返事をする。

現状、自分自身に異常など感じられないためおかしな状態であるなどとは夢想だにしなかったのだ。

………死んで生き返ったという点を除いては

「そもそもだ、お前は今現在この世界に存在していない」

「はっ？」

いきなりの存在否定に高美は真っ白になった。  
誰だって『君は存在していない』なんて云われれば似たような反応だろう。

「いや 彼は今ここにいますよ 橙子さん」

呆然としている高美へのフォーローなのだろうか、幹也が橙子に問いかける。

高美は未だ再起動しないまま幹也と橙子のやりとりを見つめていた。

「だからね 今眼の前に存在していると思われているのは所謂幻なんだよ 実体を伴った幻」

「だからどういう事ですか？ というか実体を伴った幻って……存在するってことじゃないですか」

確かにそうだ、と段々と正常になってきた脳で考える。  
幻というものはいかなれば映像と一緒だ。

何モノにも能動的に干渉することが出来ないあやふやなものを指すのだろう。

であるならば、現在会話し、現実に行動している高美が幻であるなどということがあり得るだろうか？

そもそも、実体のある幻などというものは本物の存在となんら変わらない。

そのことを疑問に思った高美は橙子に問いかけた。

「実体のある幻ってどういう事なんでしょうか 橙子さん」

「ああ、混乱させてしまったか……なんていうかなお前の本体はこの世界（物質界）には存在していないんだ」

「つまり？」

「つまりはね、高美 お前の本体である魂は星幽界というところに存在していて、現在私の目の前に存在するおまえは物質界に干渉している『杯門高美』という現象が実像を結んでいるに過ぎないんだ」

「はあ、よく判らないんですが」

「だから、お前は遠くの世界に居ながらこの世界を観測し、干渉することで結果的にこの世界に存在している様に見えるだけなんだよ」

「……………」

「普通の人間ってのは実体（肉体）があつて初めて現実に干渉できるだろう？ お前の場合はそれが逆なんだ、現象があるから実体がある。つまりはね順序が逆なんだよ、おまえは」

「つまり原因があつて結果が存在するのが普通なのに、俺の場合は結果があるから原因も発生している、ということですか」

「ああ、その理解で正しい。式がお前の死を見ることが出来なかったのも魔法云々だけでなくそれも原因の一部だろう。なんだって存在しているのが上位世界なんだ、いくら式でもおいそれとは干渉できないさ」

高美の理解が得られたことに満足したのか橙子はタバコの煙を吐きながら笑う。

幻……高美は己の手のひらを凝視する。

これも幻で現実に存在していないというのだろうか。と自問しつつ高美は橙子に視線で問いかける。

「心配するな、高美。確かにお前のその実体は幻のようなものだが現実には干渉出来ている。おそらく物を食べることも排泄をおこなうことも、子をなすことだって出来るだろう。ほら、ここまで出来ているのなら肉体がどうかは関係ないだろう？」

慰めなのかどうかは不明だが眼鏡を外しているにも関わらず優しげな言葉を高美にかける。

「それにだ、我々人間だつて何を以て『存在』しているかなんて定義は曖昧なものなんだ。それならこの世界においては絶対に死なず殺されず年を取らない無敵っぱさがあるお前の方が何倍も特だろう？」

驚いた。

何に驚いたってこんな優しい言葉をかけてくれる橙子にもだが、それ以上に高美にとって聞き逃せない言葉があったことにだ。

『死なず殺されず年をとらない』つまりは『不老不死』ということだろうか？

「あの、橙子さん？ いまサラツとすごいこと言いませんでした？  
不老不死がどうか？」

高美が橙子に問う前に幹也が橙子に問いかける。

高美としては出鼻をくじかれた感はあるものの聞きたいことは全く同じだったのでおとなしく聞き手にまわることにした。

「ん？ だから死なず殺されず年を取らずってことだよ、読んで字の如く……………ところでなんで高美はそんな顔をしているんだ？」

高美の顔に浮かぶ困惑や疑問は見透かされていたらしい。

橙子は本当に不思議そうに高美に問いかける。

「お前の状況を見るにお前が得た魔法は三番目のものだろう であるならば不老不死なんて当然だと思うが……………理解していなかったのか？」

「ええ、まあ」

困惑気味に高美も返す。

高美は自分が何を成すことが出来るのか、そしてそれをどう成せばよいのかは理解はしていた。

が、その成したことがどのような意味合いを持つのかは知識を有していないが故に全く無理解だったのだ。

それに思い至ったのか橙子は納得した表情になる。

「なるほど お前はドがつくほど素人だったな つまり結果と方法は知っていてもその結果を解釈出来ないということか …… 難儀だな」

「それでどういうことなんですか」

改めて高美は尋ねる。

つまりだな、そう前置きして橙子は説明を始めた。

「『魂』というものがある これは物質界ではなく、その上にある星幽界という概念に所属する物体の記録、世界そのものの記憶体で物質界において唯一永遠不滅のモノだが、魂単体でこの世に留めることはできない 肉体がなければ留まれないが、その時点で“有限（肉体）の死”がついてくる 故に本来は永遠不滅のモノである魂にもある種の死が存在するわけだ」

ここまでではわかるな？、と視線で問いかけてきた橙子に高美は頷く。要するに本来魂つてのは無敵物質だが人間の身体に入ることによって弱体化するってことだよな、高美はそのように内容を整理し理解していた。

高美の顔を見て、高美が妙な理解をしていると気がついたのか橙子は微妙な顔になるものの、まあいい、と喋って続きを始めた。



「そう、つまり魂は単体では物質界に存在できないし、物質界に存在するには肉体が必要になる 故に本来不老不死というものは存在しえないというわけだ」

「はあ じゃあ俺の不老不死というのも間違いないんじゃないですか？」

「話は最後まで聞け 本来はといっただろう 今のお前の状態は魂だけで物質界に干渉している状態だと先程の説明の際に説明しただろう つまりは第三の魔法というのは魂単体で物質界に干渉できるような生命を創りだす業のことを指しているんだ」

「つまりあれですか？ スタートレックの『Q』みたいな高次元生命体になってしまったってことですか？」

「……おまえ本当に高校生か？ なんていうか世代が… まあいい、そつだな高次元生命体、まさにそれだな うん良い理解だ」

高美の例えがよほどのを得ていたのか満足そうに頷いた橙子は、何故か『はっ』とした様子で

「おい高美………お前ロケットペンシルって知ってるか？」

と問うていた。

「橙子さん………」

幹也が呆れたようにいう。

自分の知らないところになにかあったのかな、と考えつつも高美は橙子の質問に答えた。

「ええ、あの銃弾を装填するように後ろから芯を入れていく文房具のことですよ。割と使っています、それがなにか？」

高美の現状について説明していたはずなのに唐突に始まったロケットペンシルの話題。

高美はなにか深い意味があるのだろうかと考えつつ橙子の疑問に答えていた。

そんな高美の考えなどつゆ知らず、橙子は妙に勝ち誇った顔を幹也に向けていた。

「ふふん！ どうだ黒桐 私が古いんじゃないかって黒桐がモノを知らないだけだということがわかっただろう」

「いや、高美くんが特殊なだけでは？ ……というかそんなに悔しかったんですか、僕がロケットペンシルを知らなかったのが」

「いいや違うぞ、黒桐がロケットペンシルを知らなかったことはどうでもいいが、それでジェネレーションギャップを感じさせられるのが嫌だったんだ」

「はあ、よく分かりませんが 微妙なお年頃って奴ですか？」

「……………ほお、黒桐 いつになく強気だがどうということだ？」

妙にはしゃいでいた橙子が一転して能面のような顔になる。  
こと此処に至ってマズイと感じたのか幹也は必死に話を逸らしはじめた。

「ところで、その高次元生命体とかになるとなにがどう変わるんですか 所長？」

「……………まあ今回は見逃してやろう……………給料日が楽しみだな」

橙子の最後のつぶやきに幹也は『横暴だ！』と抗議するも華麗にスルーして説明を再開した。

「そうだな、高美がその所謂高次元生命体になってなにがどうかわるかという……………私にも良く解らん」

勿体ぶった割に結局『良く解らん』で済まされてしまった高美は橙子に食って掛かる。

流石にこの流れでそれはないだろう、と。

「ですけど、その……………予想とかは出来ないんですか？」

「予想、ね……………まあ今のお前の現状を見ればなんとなくな 例えばさつきも言ったがおそらく何をしても死なない不老不死の存在になっているのは間違いないだろう さらにいえば現在のお前からは同じ生命として馬鹿らしいとしか言いようのない魔力が発せられているから大方魂を炉にした永久機関でも積んでいるんじゃないか？  
あとは……………星幽界から現象として現実干渉しているという仮説が正しいのならば、お前は現実世界の物理法則一切から解放されているはずだ」

そう一気に話しきり、新たなタバコに火を灯す。

……………なんていうか本当に無敵っぽい。

少なくとも死ぬことだけはなさそうな気はしてきた。

「さてこれで基本的なお前の現状説明は終了だ 何か質問はあるか？」

伸びをしながらそう問いかけてくる橙子。

高美としては何が分かって何が分かっていないのか未だよく分かっていない。

とにかく今はこの大量に詰め込まれた情報を整理する時間が欲しかった。

「いえ、今は特に とうか今は詰め込まれた情報を処理するので手一杯で……」

「そうか…ん？」

橙子さんが何かを言いかけたところで事務所のドアが開く。そこには式が立っており、その目線は幹也に固定されていた。

「やあ、式 どうしたの？」

「別に、たまたま近くを歩いていたから顔を出しただけだ…」

幹也は時計と式を見比べる。

時計は普段幹也が帰宅する時間を指していた。

その様を見ていた橙子はニヤリとした表情で

「黒桐、今日はもう上がってもいいぞ 余り待たせると怖そうなお姫様も来ていることだしな」

そう式に向けて発していた。

当然の如く式は橙子を睨むものの、結局はなにも云わず事務所をあとにするのだった。

「あ、待ってよ式　と、お疲れ様でした所長　さようなら高美くん」

そういつて幹也は慌てた様子で出て行った式を追いかけていく。橙子はその様を見ながらクツクツとどっかの悪役の様に笑い続けるのだった。

とりあえず……「ごちそうさま？」

リアルでラブコメを見せられた高美は心中でそう呟くのであった。

## 第五話（後書き）

話がぶつ切りで、唐突に場面が変わり、時系列も分かりにくいってのは理解しているんですが、他の方の小説のように自然な感じで地の文を書くことが出来ません。どうすればよいのだろう。

それはともかく、第五話読んでいただきありがとうございます。文字数が少ないため割と速く更新が続けられそうな今日この頃です。

今話でついにテンプレ系最強主人公の片鱗を晒しましたが。

……ぶつちやけ魔法についての解釈は私の独自設定です。

何れ新たな設定が出てくれば変更しますが…出てきますかね？

そもそも高美が魔法どころか魔術すら知らない素人なためあの程度の解釈が妥当かな、と。

ですから微妙に解釈がブレている点は仕様です。

それでは、感想や誤字脱字報告、アドバイスなどなんでもいいので待っています。

設定集（前書き）

黒歴史爆誕

## 設定集

杯門高美 (Haïmon Takami)

12月31日生まれ。AB型。身長178cm、体重73kg。

小川マンション三階の308号室に住んでいた青年。唯一の肉親である母と一緒に生活していた。

市内に存在する高校に通っており、成績・素行共に優秀な生徒だった。

高美と母親である晴美は大変な仲が良いことで知られていた。晴美は数年前から病に臥せておりほぼ寝たきりの状態だった。

晴美の病状は現代の医学では解明できない所謂不治の病であり、以前は入院していたものの医療費の問題で病院から退院していた。晴美の病は徐々に心身衰弱していき記憶や知識を失っていくというものだった。

高美が晴美を殺したのは看護に疲れたからというだけでなく、愛する母が自分の為に死ぬぐらいなら最後くらいは自分が殺してあげようと思ったから。

所謂ヤンデレでマザコンだった。

晴美を高美が殺す頃には日常生活すら難しいほど病状は進行していたが、殺される直前に謝罪と感謝を残して逝った。因みに、高美は晴美を殺した直後自らの命を絶った。



『杯門』とはかつて魂の起源を追い求めていた一族であり、『両儀』と同じく超能力者の家系だった。

現在では没落してしまったもののその異能は健在であり、『杯門』の一族は高確率で人間性を喪失し起源に覚醒する。これは魂の起源を追い求めていった結果純度が上がりすぎてしまったが故。

高美も幾度も繰り返される螺旋の中で自らの起源を覚醒させ、正真の転生者、そして魂に奇跡を宿すが故の巨大な魂を以て現象となった。

『収束』するという起源に目覚め、擬似的とはいえ死亡し肉体を失った高美はその起源そのものの現象として小川マンション内で確立し、マンションと自らを同化させた。

荒耶が両儀式の肉体を確保し、空間遮断の結界の中に封じた際にマンションと同化していた高美は自らの魂の炸裂を以て『両儀式』の肉体から「へと至った。

「へと至った高美は失われ、断線していた第三魔法の基盤を世界に再接続することで魔法を習得した。「から通常空間に戻る際に魂に向けて何者かが干渉してきたものの逆に取り込んでしまいその魂すらも吸収した。

高美は魔法を得たもののそれは新たな道を「から引いてきた訳ではなく、以前存在していた道を再度繋ぎ直しただけである。本人は意識すらしていなかったものの本来の第三魔法の使い手は高美に吸収されたため正真の第三魔法の使い手となった。

荒耶宗蓮、蒼崎橙子、魔術協会の誰にとっても高美が『至ってしまった』のは想定外のことであった。というかそもそも三者共に高美の存在など意識すらしていなかった。

荒耶は目覚めた両儀式によって殺され、橙子は赤雑魚を処分した後両儀式と落ちていた高美を回収して伽藍の洞へ退避していった。文字通り飛んできた魔術協会のお偉方は「」が開かれ、それが成功したという形跡だけを確認して歯ぎしりしながらロンドンへと引き上げていった。

よく判らないモノに成っていた高美は橙子によって回収され、暫くの時を経て人型へと変わった。これは『杯門高美』の魂の設計図を元に再構築された姿であり、生前の高美そのものだった。

目覚めた高美は橙子が張っておいた結界を意識すらせずにその膨大な魔力で破りながら伽藍の洞を探索し、そのあまりの暴挙を察した橙子に発見された。

橙子によって現状を説明された高美は橙子の元に身を寄せることになった。鮮花の弟子になることになった高美は、ルーンやカバラなどメジャーな魔術を教わっていた。

高美は橙子と同じく『物を作ること』が得意で、橙子から教わった魔術では人形作りや結界に適正を示し、その次にルーンや『強化』が続いた。

魔術師としての腕前は2000年の段階で見習いレベルだが、結界に関しては相当の腕前。ルーンやカバラ、人形作りの腕前もそれなりといえはそれなり。因みに、存在そのものがある意味常識から乖離している高美は触媒なしで飛行の魔術を行使できる。

高美のルーンはその膨大な魔力にモノを云わせることで魔術師相手にでも間接的に投影することが出来る。とはいっても当然のことながら効率は限りなく悪く、いくなればチリを燃やすためにミサイルを用いるようなもの。

戦闘スタイルは橙子と同じく使い魔任せだが、魔術師としては未熟だが途方も無いほどの魔力量を誇っているため正面きつての戦闘には限りなく強い。半面、未熟なために本来の魔術師らしい戦闘は苦手。

使い魔であるメイだが戦闘はほとんど行わず、他の無機物系使い魔？が戦闘を担当している。

メイはあくまで癒し系。

## 設定集（後書き）

………矛盾の上に咲く花は…

本当にすみません。

設定公開して読者さんに脳内補完していただければ物語がチンプンカンプンになると思ったため晒しました。

ええ本当はこんなものなくても文章力だけで全てを描ききりたかったんですが…ムリポって感じなので。

因みに、致命的なミスがあればご指摘お願いします。

\* 一部改正しました

## 第六話（前書き）

やっぱりあんまり進んでいない第六話。

今回から少しだけ書き方を変えてみました。

前回までよりは多少読みやすくなっている…はず？

## 第六話

午前中に帰った鮮花さん、そしてついさっき幹也さんと式さんが仲良く帰っていったことで伽藍の洞には俺と橙子さんだけが残ることになった。

「さて、お前はこれからどうするんだ」

椅子に腰掛けながらボウッとタバコをくゆらせていた橙子さんがそう聞いてくる。

……………俺の帰る場所はどこなのだろうか。

真実かどうかはわからないが、小川マンションは式さんに解体？されたらしい。

つまるところ俺は完全な家なき子ということだ。

それにそもそも……………母さんはもういないのだろう。

小川マンションでの日々は、一度死んだからなのか、それともやはり夢のようなものだったのか曖昧だ。

しかし、母さんだけは俺がこの手で殺したという確信がある。

脳の記憶には存在していないはずなのに、おれの、この魂が、かあさんをころした かんしょくを おぼえて いる。

だからこれで本当に、俺の居場所は亡くなってしまったのだろう。そんなことを考えていると、俺が答えなかったことを不審に思ったのか橙子さんが再度問いかけてくる。

「どうした、これからの当てはあるのか？」

「……いえ、全く。そもそもマンションも自分の居場所も亡くなってしまった俺にはもう帰る場所はありません」

「そうか。ならばそこら辺を自由に使って良いから今日は休め……考えたいこともあるでしょう？」

最後の一言だけは眼鏡を付けたのか、酷く優しい口調だった。おそらくこちらの思いなどお見通しなのだろう。

流石は年のk「高美くん？」

「っはい！ いえ何も言っていないですよ？」

やはりこの人は鋭いと思う。

…いろいろな意味で。

「ところで、本当にここで寝ていいんですか？ 仕事の書類とかあるんじゃない…」

「大丈夫よ、あなたならおかしなことはしないだろうし…それともするの？」

悪戯っ子のような体で聞いてくる橙子さん。

「しませんよ！」

俺はすぐさま否定していた。

流石にそこまで落ちぶれてはいないし、最低の人間ではないつもりだ……自分も含めて二人の人間を殺しているが。

鬱だから考えるのは辞めよう。

そんな風に百面相している俺が可笑しかったのか、いつの間にか扉の方に移動していた橙子さんが話しかけてくる。

「どうしたの？ ……ああ、もしかして一人じゃ眠れないとか？ 仕方がないから今日だけは一緒に寝てあげましようか？」

「……………結構です」

「間があつたわよ？」

「俺だって男の子なんです 察してください というわけで今日はありがとうございます それではおやすみなさい！」



からかわれているのは分かりきっていたので無理矢理に話を終わらせる。

半ば追い出すような形になってしまったが俺の精神衛生のためだ。

……まあこの所有主は橙子さんなので俺に橙子さんを追い出す権利なんてものはないのだが。

それでも素直に帰ってくれたのは疲れていたのか、俺を思いやってくれたのか

…後者だと良いのだが。

兎にも角にも今日は疲れた。

今まで知らなかった常識、魔術、そして魔法。

これらについてはおいおい理解を深めていけばよいだろう。

とにかく今は肉体？が眠りを欲している。

……まあ眠る必要はないので精神的なものではあるが。

とにかく今は眠ろう。

母さんも言っていた「どんなときだって明日は素晴らしい日になる」と。

## 第六話

目覚めは爽やかだった。

というかそもそも自分は眠っていたのかどうかすら曖昧なのだが、とにかく気分は爽快だった。

目覚めた瞬間完全に覚醒していた頭で周囲の確認をする。

打ち捨てられた廃墟を無理やり小学校の職員室にしましたといわんばかりの事務所。

それが、俺が一晩を過ごした場所である。

時間を見れば朝の5時。

昨晚は何もやることがなかったので橙子さんから聞いた話のおさら

いをしてすぐ眠ってしまった。

…しつこいようだが、眠ってはいないものとにかく眠ったということにしておこう。

そんなこんなで何も無い日には速く起きてしまった俺はそのままボーとこれからのことを考えるのであった。

\*\*\*\*\*

しばらくして橙子さんが起きだしてくる。

時計を見れば午前7時。

ずいぶんと長い間ボーとしていたようだ。

主観的な決め付けだが、橙子さんは社員である幹也さんが出勤してきたあとに重役出勤してくるタイプに見えたため多少驚きを感じた。

「おはようございます 橙子さん」

「ああ、おはよう高美 ……それで、虚空を睨んで何をしていた

んだ」

社長席？に腰をかけながら聞いてくる。

…聞いてくる割には視線一つよこさない無関心ぶりではあるが。

「いえ、これまでのことと、これからのことを少し…」

多少歯切れが悪くなる。

魔術師として弟子にはもらったものの、現在の俺には衣食住のほぼ全てが存在していない。

というか誰もツツコミを入れなかったが、現在の俺の格好はマツパに布一枚をローブのように巻いているだけである。

正直なところ俺がそんな奴を街で見かければ即警察に通報するレベルのヤバさだ。

そんなことを考えていると橙子さんが興味なさ気にテレビを付ける。

……小川マンションのニュースをやっていた。

曰く、今回のマンションの倒壊事故によってマンションに住んでいた住人の大半が死亡したらしい。

「……………」

機械的に読み上げられていく犠牲者リスト。

その中に『杯門高美』と『杯門晴美』の名が存在していた。

「高美、お前死んだらいいぞ？」

橙子さんが笑えない冗談を投げかけてくる。が、今の俺はそれに答える余裕はなかった。

妙な虚無感に襲われる。

自分の根底が崩れていくような、それでいて何も変わっていないような。

しかしそれらは極論すれば、『ああやっぱり』という感慨なのだろう。

昨日、そして昨晚考えた時点で自分と母さんが死亡していたのはほぼ確定事項だった。

だから今更悲しむことなどなにもない。はずだ。

「死亡が確認されたってことは戸籍とか消去されるんですかね？」

妙な感覚を引きずったまま俺はそんなどうでも良い（どうでも良くはないが）ことを聞いていた。

「まあそうなるんだろうな　今から警察と役所に届け出てみるか？」

私は生きています、て」

「いえ、そんなことはきつと出来ないでしょう　俺は小川マンションで死んだ　今生きているのはその残りカスですよ」

「……そうか、そうだな」

「……………」

「ところでコーヒを淹れてきてくれないか？　いつもは黒桐にやらせるんだが今日はどうにも早く起きすぎてしまったな　一つ屋根の下で男と一緒にだったから緊張したのかもしれない」

場の空気を変えるためだろうか、橙子さん自身自分がそんなに繊細

ではないと理解しているだろうにそんな冗談を言って俺に「コーヒー」を要求してくる。

「わかりかした 台所はどこですか？」

「ドアを出てすぐのところだ ……とここでさっきの私の発言は完全無視か？」

「了解です ……橙子さんもお疲れなようなので座って待っていてください ミルクや砂糖は入れますか？」

「ブラックでいい はあゝ なんと面白くないなお前は」

「それはどうも では行ってきます」

「お前の分も淹れていいからな！」

そんな声を背に台所へ向かう。

台所なんていうものだからある程度設備が整っていると思っていたのだが、正直なところ小学校の水道の横にコンロが置いてあるだけにしかみえない。さらにいえば三つある蛇口のうち一つを除いて全てが針金で雁字搦めに固定されている。

…本格的にこの建物は何なんだろう

そんな疑問を抱きつつも淡々と作業を進める。

薬缶に水を入れ、コンロに火を灯す。

ゆらゆらと揺れる火、これは今の俺の不安さみたいだな、なんて馬鹿なことを考えているうちに湯が沸く。

……ところで、インスタントコーヒーしか淹れられないのだがそれでいいのだろうか？

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

二人分のコーヒーを持って事務所に戻ると幹也さんが出勤していた。

「おはようございます幹也さん コーヒー飲みますか？」

「ああ おはよう高美くん いや大丈夫、君が淹れたんだ、君が飲みなよ」

挨拶をかわしながら思う。

本当幹也さんはいいい人だなんて、それに引き換え…

「遅いぞ高美 コーヒー一杯淹れるのにどれだけ時間をかけているんだ」

なんて意地悪上司みたいなのを言うてくるこの人はなんなんだろう。

ああ、まさに意地悪上司か。

なんて一人で納得しつつ橙子さんのデスクにコーヒーを置く。

「インスタント程度しか淹れられなかったんですが大丈夫ですか」

「ああ、というかあそこにはインスタントしか置いていないのだからそれで良かったに決まっているだろう 君、目はきちんと覚めているか？」

なんて皮肉を飛ばしている橙子さんはきつと完全に覚醒してしまっているのだろう。

「起きていますよ というか俺って眠る必要が無いような気がするんですが……」

「そつえばそうだな ということはあれだな 不眠不休で魔術の指南を行っても問題は無い、と」

橙子さんは苛めっ子なのだろう。

昨晚からどうにも弄られて仕方がない。

なんとなく答えは判りきっていたものの自分よりも橙子さんとの付



き合いが長い幹也さんに聞いてみる。

「あの、幹也さん 橙子さんっていつもこうなんですか？」

「勿論だよ 個人的にはいつも眼鏡を掛けていて欲しいんだけどね」

なんてことを俺の耳元で囁いてくる。

……別に幹也さんや俺が変な趣味を持っているわけではない。

あくまで橙子さんに聞かれたらマズイからだ、なんて判りきつたことを考えながら『やつぱり』と納得するのだった。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

「それじゃあ魔術の特訓に移ろうか」

俺が幹也さんと談笑していたところに突然橙子さんが提案する。  
魔術の指南というのはこちらとしても願ったり叶ったりだ。  
であるから

「はい お願いします」

と俺は答えていた。

## 第六話（後書き）

はいこんにちは。

また中途半端なところで終わってしまいました。

次回から本格的に魔術修行編に入ります。

個人的には物語を進めずオカルト&設定厨全開の話も書きたいんですけどそんなことしていたら『Fate』どころか『空の境界』すらも終わらないので結構飛ばしていきます。

因みに、『空の境界』編は基本的に不介入です。

というか時系列的に介入できる事件がほとんど限られているし、介入したところであまり事態に大きな変化を与えられない。

というかこれから先の時系列に於ける物語に介入すると原作的意味で物語がだいなしになってしまうため基本修行編になっていきます。

目標としては修行編は5話以内に収めたいと思っておりますが、もしかしたらほとんど端折ってキング・クリムゾンする可能性もあります。

とにかく、完結目指して頑張りますのでどうかお付き合い下さい。  
それでは。

## 第七話（前書き）

どうしても進まない物語。

今回もほとんど進んでいません。

独自解釈や設定があるかもしれませんが。

そういったものを許容できる方、まあ読んでやんよ、という心の広い方だけお読みください。

## 第七話

「それではまず魔術を行う前にお前の属性から見てみることにしよう」

修行を開始してすぐ橙子さんがそう告げる。

因みに幹也さんは上の事務所で一人仕事をしている。  
今現在いるのは目覚めた際にいたあのトンデモ工房だ。

ところで、属性とは所謂ファンタジーに出てくるような属性のことだろうか。

火とか水とか…。

なんてことを考えているうちに橙子さんの話は進んでいく。

「属性というのはいかなければだれもが背負っている『起源』のようなものだ」

「『起源』…ですか？」

またしてもよく判らない単語が出てくる。

起源、とは何のことだろうか。

言葉的には何らかの原因のようなものだと思うのだが…

「『起源』というのは始まりの因で発生した物事の方向性　つまり  
aという存在をaたらしめる核となる絶対命令のことだ」

「はあ」

いきなり話が難しくなっていく。

つまりはどういう事なのだろうか。

「つまりだな、『起源』というのはお前や私が存在している根本原因だ。これがあるからお前や私は存在しているし、これがあるから世界も存在している。」

「……つまり存在理由みたいなものですね？」

「まあそんなものだ。荒耶はそれを呼び起こすことが出来ていたよ。うだが……これは関係ないか。」

荒耶……荒耶宗蓮。

小川マンシヨンのオーナーにして俺や母さんをあの螺旋に取り込んだ魔術師らしい、が今はどうでも良い。

「その『起源』ってのが属性なんですか？俺は火とか水とかそういうファンタジーなモノだと思っていたのですが。」

正直な感想を告げてみる。

『起源』がどうか云われようともよく判らない。そもそも自分が何故存在するのか、なんて哲学的命題に魔術では答えが出せているというのに驚きを感じるくらいだ。

そんなことを思っていると橙子さんが『まあそうだな』といって解説を再開する。

「確かに『起源』というのは魔術師にとって重要なものだが、広義の意味ではお前がいう所謂ファンタジーな属性の方を属性と呼ぶ一般的には地水火風空、日本だと五行の木火土金水なんかが有名だな。」

「なるほど」

「普通は一人一つの属性を背負っているんだが、時たま幾つかの属性を背負っている奴もいる。まあ珍しいのでそういるわけでもないがな」

なんていつて締めくくる。

やっぱり属性はファンタジーなものだったらしい。

確かに『起源』なんかよりも火とか水の方が分かりやすくて良い。が、では『起源』が属性と叫びたのは間違いだったのだろうか？ その疑問を橙子さんにぶつける。

「ん？ ああ起源というのはね、属性を突き詰めていったものなんだ。つまりね火や水なんかの属性ってのは世界を構成している一要素に過ぎないが『起源』ってのは世界そのものの存在原因なんだ」

「はあ。つまりはどういう事なんですか？」

橙子さんの説明は難しすぎて良く分からない。

そもそも元一般人である俺にとっては属性ですらファンタジーなのに世界の存在原因なんてものはスケールが大きすぎる話だ。

「つまりだな、地水火風空なんかの、お前風に言うところのファンタジーな属性は大別、その根本原因である『起源』は詳細なことだ」

わかるか、と視線で問ってくる。

流石に今回の説明で多少は理解した。

つまり属性はアバウトな分け方をしたものであり、割と万人を振り分けることが出来るということだ。そして『起源』というのはその属性をさらに突き詰めていっても突き詰めることも出来ないほど属性を詳細にした形、ということだろう。

確かに云われてみれば当然だ。

世界は地水火風空なんて少ない要素だけで構成されているはずがない。

世界ってのは無数の要素が重なりあって存在している。

つまり属性ってのはその要素を大まかに割り振ったものなのだろう。そしてその一つ一つの要素というのが『起源』ということなのではないだろうか。

橙子さんにそう確認してみる。

「まあそうだな、うん 確かにその理解で問題ないだろう」

「ありがとうございます」

俺の理解は概ね正しかったらしい。

よかった。

と思ったあたりでふと疑問に思う。

橙子さんの属性はなんなのだろう、と。

「ん？ 私の属性？ ああ 私の属性は『風』だ…というよりも私の実家、青崎の家系はだいたい風の属性を背負っている 忌々しいことだが先日ここに襲撃をしかけてきたバカ女も同じ属性だ」



忌々しそうに吐き捨てる。

先日の件で妹さんと仲が悪いのは十二分に理解していたので先日の様に地雷を踏み抜く前に話題を変える。

「属性についてはわかりました　ところで属性を見るって、そうするんですか？」

やっと実践的な内容に移れるのだと思うと妙にワクワクしてくる。自分の属性というものにも興味はあることだし、どうやってその属性とやらを確認するのだろうか。

やはり、有名なアレだろうか。

コップに水を入れて葉っぱを浮かべる、例の。

そんな期待を込めて橙子さんを見つめる。

すると橙子さんは妙なモノをみたような顔をしていた。

「おまえが何を考えているのか知らんが地味なものだぞ　いっとなればタロットゲームだ」

そういつて橙子さんはカバンの中から何枚かのカードを取り出す。それを見て少しだけがっかりする。

ああ水　式じゃなんだ、と。

そんなバカなことを考えていた俺は橙子さんの声でふと現実に帰った。

「さあ　ちゃっちゃと始めるぞ　さっきの説明で余計な時間を食ってしまったからな」

そういつて俺の属性診断テストは始まった。

## 第七話

心理テストだかESP検査だかよく判らない時間を過ごしたあと、  
橙子さんは簡潔に

「おまえの属性は大別して地と風の二重属性、詳細は収束だ」と告げた。

いきなりのごとで面食らう。

つまりは属性が地と風で『起源』が収束ということだろうか？

そう橙子さんに確認すると「そうだ」とこれまた簡潔な答えが帰ってくる。

橙子さんがなにも云わないのなら特に問題はないのだろう。

そう考えて次を促す。

「それで、属性は分かりましたけどこの後は何をするんですか？」

「次はいよいよお前の魔術回路を起動していこうと思う 先日私の結界をぶち壊した際にはかみたいな魔力を垂れ流しにしていたから割と簡単なことだとは思うんだが」

そういつて橙子さんは俺に集中できる体勢で座るようにいう。

よく判らなかつた俺はあくらをかいて背筋を伸ばしながら座ることにした。

「それじゃあ始めるぞ 私がお前の身体に魔力を流すから、外から入ってくる違和感を察知してそれに集中するんだ ……ではいくぞ」

そういつていきなり橙子さんが俺の首筋に手を当ててくる。

ひんやりとした手がいきなり当てられたため『ひゃう』なんて声が出たものの、橙子さんの冷たい視線で集中を余儀なくされた。

意識を自分の中に向ける。

確かに首筋にある橙子さんの手からはなにか今まで感じたことの無いものが流れこんでくる気はする。

首筋から入っていった力は全身を周る。

たとえるならばそれは氷だろうか。

全身を巡っていく力は妙に冷たく、背中に氷を入れられたときのよ  
うな違和感を感じる。

……これが魔力。

その感覚を忘れないため、俺はさらに自分の中に潜っていくのであ  
った。

\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*

「高美 おい高美！」

気がつけば橙子さんの手は首筋から離れていた。時間にして僅か五分程度。

しかし俺には数時間にも感じられていた。

アレほど全身を冷たいものが這いずり回っていたというのに異常なほど汗をかいている。

「気分はどうだ？」

眼鏡を外している橙子さんが妙に優しい気がする。

橙子さんこそ大丈夫だろうか。

なんて失礼なことを考えていたのが読まれたのだろう。

「元気そうだな」なんていって乱暴にタオルを投げ渡された。それで汗を拭きながら尋ねる。

「あの妙に冷たい感覚が魔力なんでしょうか？」

「冷たい？ ああお前がそう感じたのならそうなんだろう 魔力の感じ方なんて人それぞれだからな」

「そうなんですか」

とりあえず汗を拭き終え、橙子さんに向き直る。

「次はどうするんですか？ あっもしかして今のでま…ま…魔術回路？とかいうのは起動できたんでしょうか」

魔力というものを感じることは出来たがそれでもう魔力を扱うこと

ができるのだろうか、そういった意味を込めて問いかける。

「いや 今のは魔力を感じさせて魔術回路の起動をやりやすくしただけだ 次は本格的に魔術回路を開く」

そういつて言葉を切った橙子さんはニヤリと意地悪そうな顔をして問いかけてきた。

「さて、高美 今から魔術回路を開くわけなんだが……辛いが速い方法と楽だが時間のかかる方法、どっちが良い？」

なんてことを聞いてくる。

辛いが速い、おそらく力技を行うということだろう。

別に急いでいるわけでもないのでゆっくりな方法で問題はないのだが…。

「どちらを選択したかによって何か問題でも発生するんですか？」

「うん？ いや私が行うんだ 万全の体制で行うし問題なんてものは発生しない……少なくともお前には」

妙に引っかかる言い方をする。

どういうことなのだろうか。

お前には問題ない、つまりは俺以外の誰かには問題が発生するということだろうか。

とはいっても、俺の魔術回路の開きかたで問題が発生するヒトなんて存在するとも思えないのだが…

頭を捻ってみても答えの出でこなかった俺は素直に橙子さんに問うてみた。

「俺には問題が発生しないって……だれに問題が発生するんですか？」

「ああ、お前の修行が長引くということは私もまた付き合わされるということだ」

……つまりは橙子さんに迷惑をかけるということだろうか。

そんな俺の考えを見通しているのか橙子さんはやはりニヤニヤした顔で告げてくる。

「いや、私が迷惑ということはない 曲がりなりにも弟子のためだ その程度の労力は喜んでかけるとも」

…なんていうか感動した。

ちよつと意地悪な人だと思っていたが橙子さんは実は素晴ら「が、私の時間がとられるということは仕事をしないというわけで…… ああごめんなさい黒桐くん、今月の給料は諦めてちよつだい」

前言撤回。やっぱり夕チが悪い。

どこから取り出したのか、いつの間にか眼鏡を装着していた橙子さんは態とらしい泣きまねまでしている。

妙に脱力したものを感じつつ、確かに幹也さんには迷惑をかけるな、なんてことに思い至る。

彼だって生活があるだろうし、余り迷惑をかけるわけにもいかない。

式さんと一緒になるための貯金も必要だろうし……

なんてちょっと下世話なことまで考えた俺は

「速くて…辛い方をお願いします」

と告げていたのだった。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

俺が橙子さんにハメられてしばらく。

橙子さんはなにやらゴソゴソとカバンの中を漁っていた。

そうして暫く、橙子さんがなにやらよく判らないものを取り出して



きていた。

「さあ これを飲み込め」

「いや…えっ？ それは、なんですか？」

妙な冷や汗が止まらない。

「見て判らないのか？」

……目玉だが？」

…見てわかるから困っているんです。

とはいえない。

代わりに

「これはどなた様の目でしょうか」

と問いかけるのが精一杯だった。

それなのに「ん？ 私のものだが」なんて普通に返してくるから困る。

なにより

「でも橙子さんの目はちゃんと二つともあるじゃないですか」

そうなのだ。

橙子さんの目だというのなら目の前にいる橙子さんの目玉が二つあるのはおかしい。

……こんな思考を行わなければならない現状がおかしいというツッコミは勘弁で。

「まあ確かにそうなんだが……言っていないかったか？ 私は人形師だ つまりこれは私を模した人形の目玉ということだよ」

冷静に橙子さんがそう告げてくる。

人形師。

人形。つまりは偽物ということだろうか？

そう考えて橙子さんの手のひらにある目玉を見つめる。

……どう考えても本物です。ありがとうございます！。

「いや、どうみても本物じゃないですか これ」

たまらずツッコミをいれる。

そのツッコミに対しても涼しい顔で

「私が作る人形はね 私と全く同じ性能なんだ つまりは肉体的には私自身と一切変わらないんだよ」

なんてトンデモ設定を告げてくる。

自分自身と全く変わらない人形。

それは人形といえるのだろうか？

「まあだからこそ封印指定なんてものをうけてしまったんだが……  
それでどうするんだ？」

そういつて手のひらの目玉をさし出してくる。

うっ、やはりかなりグロい。

眼球だけでなく視神経らしきものまで付随しているため『抉りたて  
ホヤホヤ』といった感じた。

が、橙子さんは至極真面目な顔だし、きっとこれも魔術師からした  
ら常識的なことなのだろう。

魔術師になろうとしているのだ、一般的な常識なんて捨てて魔術師  
の常識というものを手に入れる必要がある。

そんな決心をした俺は恐る恐る橙子さんの手から目玉を受け取り、

それを一飲みにした。

## 第七話（後書き）

やっちゃんいました。

因みに、目玉に関する理由も一応あります。

まあネタなんですけど。

属性と起源のあたりはかなり独自設定です。

『Fate』でいうところの起源と『空の境界』でいうところの起源が同一のものは微妙でしたが、これから先クロスさせていくために結構こじつけで擦り合わせを行ないました。

とにかく、物語的にはほとんど進んでいませんしバトルや恋愛はまだまだ先です。

……なんていうかこのペースだと修行編だけで相当数の話数になりそうなんですが、個人的にはサクサクいきたいところ。

やっぱりディアボロ（ドッピオ）か咲夜の力をかりるしかないのだろうか？

今日は諸々忙しいのであと一回更新が有るか無いか…きつと無い気がします。

どうか気長にお待ちください。

## 第八話（前書き）

今回も修行編。

やっぱり独自解釈などがあるのでそういったものが嫌いな方は回れ右をしたほうが良いかもです。

## 第八話

「まさか本当に飲み込むとはおもってもみなかった」

あの後。目玉を飲み込み、ともしれば死んでしまうような熱が身体の中を暴れ狂い、いつそ意識を手放した方が楽なんじゃないかと思われるような痛みに耐えた俺に橙子さんが向けた言葉である。いくら温厚な俺でもキレてしまいかもしれない。

そんな意思を十全に伝えられるように、未だ満足に動かない身体に鞭打って橙子さんを睨みつける。

「ハツハツハツ、いや本当は直前で止めるはずだったんだが…勢い良く飲み込んでしまったお前にも非があるんだぞ」

そんなことをのたまう。

「止める止めない以前に、目玉を飲み込む以外の方法があったのならそつちを先に提示してください 何も知らない俺は橙子さんを信じるしか無いんですから」

うう騙された、と身体に残る熱、目玉が口から入って喉を通って行くリアルな感覚を思い出して精神力がガリガリ削られていく。

……忘れよう。きっと男は女に騙されて大人になっていくんだ。

そんな風に自己武装しなければ耐えられないところまでできていた俺は再度橙子さんに視線を投げかける。

「それで、あの御巫山戯ですけど全く意味が無いなんてことはないですよね」

流石にあんなものを飲み込まされて、こんなに辛い体験をしたのに何の意味もない御巫山戯だったなんて云われたら本気でキレるかもしれない。

その思いを視線にのせる。

流石に罪悪感はあるのか申し訳なさそうで橙子さんが説明を始める。

「いや、意味はあった 目というのは魔術回路の塊だ 邪視とか魔眼なんていうものはその典型だ 私自身の眼球であるアレをお前に飲ませることで擬似的に私の回路とお前の回路を同調させて無理やり回路を開いてやったんだよ どうだ？、お前の身体には既に魔術回路もスイッチも存在しているはずだが …… 頭の中になにかスイッチみたいなのはないか？」

「スイッチですか？ 押しボタンのな？」

「いや、スイッチというのは人それぞれ違うものだからどうともいえない ボタンのようなスイッチの奴もいるかも知れないし、自らを殺すイメージのもの、性的興奮をスイッチとするものと様々だ」

「つまりどういふものなんですか？」

流石に人それぞれと云われれば見つけようもない。

「スイッチってのはあれだ、人間から魔術師へと自らを切り替えるための概念的なものだ 自分の中に深く潜ってみる きつとなにか手応えのようなものがあるはずだ」

「はあ」

そう云われて自分の中に意識を向けてみる。  
伊達に長いこと生きていないからなのかそれとも元からの資質なのか、自己に潜るのは比較的簡単に出来た。  
あとは所謂スイッチを探すだけなのだが……。

どこまでも深く、潜る潜る潜る。

自分と云う意識が自分自身に飲み込まれそんな不思議な感覚に陥る。

それでも『ある』というのなら見つけてみせよう。

探す探す探す……

そして、

「みつけた？」

何かおかしな感覚を掴む。

イメージ的には撃鉄だろうか。

無数の撃鉄が俺の中に並んでいる。

勿論視覚的な意味ではないが、それでも確かに撃鉄は俺の中に存在している。

「見つけたか？ ではそれを押してみろ それが魔術回路を起動するためのスイッチだろう なに、心配するな暴走したとしても周囲に被害がいかないようにきちんと処理するさ」

なんて安心していいんだか不安になればいいんだか判らないお墨付きをもらう。

俺は再度意識を撃鉄に向ける。



数えきれないほどの撃鉄がたたき起こされるのを今か今かと待ち望んでいる。

……しかしどうすればよいのだろう。

撃鉄を起こすとはいっても実際にそれが存在しているわけではない。

……いや、確かに存在しているが触れることは出来ない。

そんなものをどうすればいいのだろう。

「橙子さん？ どうやって撃鉄を起こせば良いんでしょうか？」

「撃鉄？ ……ああお前のイメージはそうなのか、そうだな自分自身を作り替えるイメージ、自分自身が違うものへと変化するのだという覚悟、そういった自己暗示が必要になってくるんだが」

そういつて一旦言葉を切る。

「まあ今のお前にいっても分からないだろう そうだなイメージしる自分が銃弾となって自分自身という銃に装填される きっとそんなイメージでいいはずだ」

自身を銃弾に、自身の銃に装填する。

そう強くイメージする。

とはいってもそんな突飛な空想がすぐさま出来るはずがない。が、

やらなくてはいけないのだ。

奇跡に挑むモノを魔術師と呼ぶのなら、不可能を可能にするのは必須条件、どこか前提条件であるはずだ。

出来るできないじゃない。

やるんだ。

自分を騙せ。

…イメージする、銃弾には魂を、銃身には肉体を。

そして撃鉄を上げる。

銃弾を装填しろ。

カチリ、とどこかから音が聞こえた。

## 第八話

s i d e   c h a n g e

膨大な魔力が立ち上る。

工房に仕掛けてあった幾重にもなる結界が一瞬のうちに消し飛んでいく。

私は呆然と立ちすくみ、気がつけばタバコは地面に落ちてしまっていた。

「ハハハ、もう笑うしかないな 世の魔術師がみれば卒倒する これほどの魔力、協会の一部門が丸々一世紀使っても無くならないんじゃないか？」

嫉妬とかそんな事の前に呆れるしかない。

今は結界がぶち壊されたこともとりあえずはどうでも良い。

優先すべきは目の前で魔術師としての第一歩を踏み出した新しい魔法使いへの歓迎だろう。

なんて柄でもない殊勝なことを考えていたからだろうか、突然高美が意識を失う。

……魔術回路は開かれたまま、魔力は垂れ流しのまま。

……さて、これをどうするべきだろう。

さすがにアレほどの魔力、私がどうこうできるものではないのだが……。

そんな風に半ば現実逃避している思考を自覚する。  
しかし、それを辞めようとは思わない。

とにかく、本当に、どうしようもないほど呆れる他ない。

……せつかくの魔力だ、垂れ流しているのも勿体無いし破られた結界の構築に使用させてもらうか。

なんて根本的解決には至らない方法を取る。  
……まあ現実逃避なのだ。

s i d e   c h a n g e   e n d

気がつくとよく判らない魔法陣の中に横たえられていた。  
横のほうでは橙子さんがなにやらゴソゴソとしている。

……あまり良い予感はないので速く起きよう。

そんなことを考えて起きあがろうとしたところ、

「動くな高美   もうすぐ終わる」

なんて有無を云わせぬ口調で告げてくる。

師匠命令であることだし、そもそも橙子さんに逆らうと碌な目に合

われないというのは短い付き合いの中でもなんとなく理解していたのでおとなしく従う。

橙子さんはよく判らない呪文のようなもの…まあ正真正銘の呪文なのだろうが、を唱える。

暫くは工房に橙子さんの呪文だけが響いていた。

「もういいぞ」

なんて呪文を終えた橙子さんが告げてくる。

それを聞いてすぐに起き上がるうとした俺に再度橙子さんが告げる。

「いや、まて、まずはその魔術回路を閉じておけ 閉じ方は開くときと一緒にスイッチを、お前風にいえば撃鉄を下ろせば良い」

そう橙子さんに云われてやっと気がつく。

そういえば魔術回路が起動しっぱなしである、と。いつ意識を失ったのかは判らない。

魔術回路が起動しているということは起動まではできたのだろうか……うん、なんとなく起動したところまでは覚えている。

そんなことを思いながら起動する時とは比べ物にならないスムーズさで回路を閉じる。

「あの、橙子さん 俺はどうして意識を失っていたんでしょうか？ それとさっきやってた魔術？はなんだったんでしょう？」

一息に問いかける。

橙子さんは何時取り出したのか灰皿にタバコを押し付け、新たなタバコを取り出して啜えながら語り始める。

「まずお前が倒れていたのは一種のショック症状だな　いままで使われていなかった魔術回路にいきなり膨大な魔力を流したことによってお前の回路が急に活性化され、結果お前自身がその衝撃から身を守るために意識を落としたんだろう　いくなれば詰まっていた水道に大量の水を流しこんで詰まりを無くしたようなものだ」

そういつて啜えたタバコに火を灯す。

「はあ、つまり初めて魔術回路を起動したから身体がびっくりしたと　ではさっきの魔術はなんだったんですか？」

気絶していた俺を保護してくれていたんだろうか、なんて淡い期待？のようなものを感じながら問うてみる。

そんな俺に微妙そうな顔をしながら、やっぱり現実は甘くないとでもいうように橙子さんは告げる。

「さっきの魔術はうちの工房の結界を張り直す儀式だ」

「はあ」

正直期待はしていなかった、がやはり落胆は多少ある。

勝手に期待して勝手に落胆していたので処置なしではあるが。

「なんだ、その恨めしげな顔は　そもそもお前が馬鹿みたいな魔力を垂れ流すだけ垂れ流して気を失うのがいけないんだ　お前のおかげでうちに張ってあった結界はおるか魔道具までほとんどパーだ　つたく、いたすぎる出費だよ」

だからな、なんて前置きをして。

「どうせ大損なんだ、それなら無駄に垂れ流していた魔力を少しでも有効活用すべきだろう」

「俺が悪かったのは理解しました で、結局どうということなんですか？」

「だから、お前の垂れ流していた魔力を使って一等強力な結界を張ってやったんだよ まあ準備の暇もなかったんで急ごしらえの二級品だが魔力だけは無駄にあっただけだから、構成はともかく強度だけならピカイチだ」

なんて半ば自棄っぱちの様に告げる橙子さん。

乾いた笑いを浮かべる橙子さんは妙に恐ろしかったが俺が悪かったのは理解できた。

「なんか、本当にすみませんでした いつかキッチンとお返ししますので、どうか待っていてもらってもかまいませんか？」

「ああ、別にいいよ 世にも珍しい魔法使い様だ きつとすぐ返してくれるのだろうからな」

だろう、なんて目で聞いてくる。

正直自信の欠片もなかったがとりあえず意気込み、目標だけでもとということで俺は強くうなずいていた。

「よし、ならば今はこの話題は終了だ ところで、もう一度魔術回



路を開いて、そして閉じてみる 魔術師にとってそれは基本中の基本だからな、魔術を習う習わない以前にそれができなければどうしようもない」

ほら速くやれ、なんて言いながら俺を促す橙子さん。

流石にあれだけの被害をだしておいて全く成果がないというのも申し訳ないと思った俺は先ほどと同じように自分の中へと意識を向ける。

集中力を高め、再度スイッチを探し始める。

大丈夫、一度は出来たんだ、きっと今度も出来るはず。

そう念じながら、強く集中しようとした俺は……いと也容易くスイッチを発見した。

正直なところ拍子抜けである。

アレほど意識を集中させて見つけたスイッチがいとも簡単に見つかる。

一度見つけたから簡単になったのだろうか、なんて思いながらも橙子さんの要求に応える。

銃弾には魂を、銃身には肉体を。

そして一気に撃鉄を上げていく。

カチン、と音がして撃鉄が上がる。

それをい皮切りに無数の撃鉄が一斉に上がっていく。

いつでも銃弾を発射できるように、『杯門高美』という人間を魔術師へと作り替えていくように。

そうして、意識としては数十秒、実際には刹那の間に俺は魔術回路を起動することに成功した。

炉で生成された魔力が回路を満たしていくのを感じる。

仮初の万能感、そうと分かかっていてもなんでもできるような感覚に陥りそうになる。

これが魔術回路、そして魔術師への第一歩。

そんな感動とも自己陶醉ともとれる感覚に酔っていた俺に冷たい声が浴びせられる。

「気持ちわかるが速くそれを閉じる 折角張った結界が軋みを上げている もう面倒くさいことはゴメンだぞ」

その言葉で一気に冷却させられる。

たしかにそうだ、これ以上迷惑をかけるわけにもいかない。

そう思いながら再度撃鉄へと意識を向ける。

そして撃鉄を下ろしていく。

銃弾を発射する際のような苛烈さではなく、矛を収めるような慎重さで。

そうして、起動するときよりも少しだけ戸惑った終了を成功させた俺は橙子さんに向き直る。

「終わりました」

「ああ、まさか二回目でそこまで回路を制御するとは思わなかったが、まあ嬉しい誤算というやつだ」

そういつて俺の眼を見つめた橙子さんは「で、だ」

と前置きをしたあと。

「おめでとう、これでお前も魔術師への第一歩を踏み出したわけだ、なんて妙に優しい言葉を投げかけてくれていた。

「ありがとうございます」

それが妙にうれしくて。

自分でもびっくりするくらい感情のこもった声を出していた。

「今日はこちらまでにしておこう、流石に詰め込みすぎても意味が無い、いいか高美、私が見ていない場所で魔術回路を開くことは許さ、ん、しばらくの間は持て余すだろうが我慢しろ」

なんて言いながら背中を向ける橙子さん。

その背中に、

「明日からもご指導宜しくお願いします」

これまでと、そしてこれからの感謝を告げていた。

橙子さんは手を上げて返すだけで振り返ることなく工房から出て行く。

魔術師、魔術を用いる者。

今日、この時、俺は魔術師への第一歩を踏み出した。

## 第八話（後書き）

またしても修行編。

高美が魔術師への第一歩を踏み出しました。

魔術回路や魔力についても割と独自解釈です。

なにかツツコミがあればお願いします。

さて、次から本格的に魔術師としての修行が始まるのですが迷っています。

正直なところ、魔術の修行なんて書いていたら際限なく書くことが出来てしまいます。

それをどこまで引つ張るのか、それともやっぱりキング・クリムゾンか…。

修行編、それも魔術師としての第一歩までを書くだけでここまで時間をかけてしまっている以上ここから『過程は消えさり、結果だけが残る』なんてことをするのもどうかと思うのですが…。

ぶっちゃけネタバレですが、この後に続くロンドン編でもそれは出来るんですよね。

というか魔術修行編をこっちでしてしまうとロンドン編でかくことがコメディだけになるとい…

悩ましいです。

そういった意味でも、ご意見ご感想をお待ちしています。

## 第九話（前書き）

この物語はフィクションです。

独自解釈・独自設定が吹き荒れますが、そういったものに耐性の無い方、嫌悪感を感じられる方は今すぐ「戻る」をおしてください。

## 第九話

「今日から本格的に魔術の修行に入ろうとおもう 私としてはお前が魔術師になるうがなるまいがどちらでも良いのだが、一度教えると言った手前最後までキチンと面倒は見てやる だから安心しておけ」

なんて妙に男前なセリフと共に魔術の修行が始まる。

俺は柄にもなく興奮していた。

昨日の魔術回路を起動した際の興奮が蘇る。

俺の知らなかった常識。

俺の知らなかった世界。

そこにはどんな神秘が存在しているのだろうか。

先日、橙子さんが一瞬で窓を修復していたのを思い出す。

曰く、あれは初歩の初歩ということだが…。

本当に楽しみだ。

どんな魔術から教えてくれるのだろうか、そんな期待を込めながら橙子さんを見つめる。

そんな俺を微妙そうな顔で見ながら橙子さんは俺に告げた。

「何を期待しているかは分からんが……まずは魔術師としての常

識、知識の習得から行なってもらおう」

「一々説明しては時間の無駄だからな、なんて言いながら俺の方に六法並に分厚いのではないかと思われる本をボン、と投げてよこす。」

「それを明日までに読んでおけ なに、安心しろ それは初心者用の魔道書だ 今のお前でもなんとか読み解くことは可能だろう」

「そう言いながらタバコの煙を吐く橙子さん。」

実践的な魔術の指導を期待していた俺としては期待を裏切られた形になってテンションダダ下がりなのだが、今はそれ以上に致命的な点を橙子さんに告げなければならない。

「あの、橙子さん？ これは何語で書かれているんでしょうか？」

「ん？ ラテン語だが？」

それがどうした、と言わんばかりに本当に不思議そうな顔をする橙子さん。

そんな橙子さんに俺は告げなければならないのだ。

「ラテン語なんて読めませんよ そもそも現代の高校生が読めるものなんて日本語と僅かな英語だけです …… まあ趣味（黒歴史）でドイツ語くらいなら辞書片手に読めますが ラテン語なんてチンプンカンプンです」



「はあ？ …… 鮮花は普通に読めていたんだがな そうなのか、これもゆとり教育の弊害というやつなのかな？」

「ゆとり教育は関係ありません！ というかそもそも、日本の教育カリキュラムにラテン語なんて組み込まれてはいません こういつては情けないですが、最初から読むことが出来た鮮花さんがおかしいんです」

なんて本当に情けないことを告げる。

「どうしたのか…… 魔術はともかく言語を一から教えなおすというのはめんどくさ…… もとい大変なのだが」

流石に仕事をしてやらねば幹也が泣くからな、なんてことを嘯く。どうしたものだろうか。

さっきのセリフに本音が混じりかけていたような気もするが、確かに橙子さんも俺の修行ばかりに時間を割くわけにもいかないのも事実。

新たな言語を一人で習得しようとするのは酷く効率が悪い。

こんな時、誰かラテン語を教えられる人物がいればよいのだが…。

「おはようございます 橙子師」

どうしたものと頭をひねっていた時、救世主が伽藍の洞に舞い降りるのであった。

## 第九話

「つまり高美さんにラテン語を教えろ、というわけですね」

なんて聞いてくる鮮花さん。

……肉体年齢？的には同い年、精神年齢的にはこちらがかなり上のはずなのだが自然と「さん」をつけてしまっ。

美人さんだからなのか、それとも根本的にこの人には叶わないと無意識で感じているのか。

そんな無駄な思考に走る。

…まあ恥ずかしさからの当否なのだが。

気をとりなおして鮮花さんに向き直る。

「はい、橙子さんに読むように言われた魔道書がラテン語で書かれていて、俺には読むことが出来なかつたんです。橙子さん曰く、これからも必要になるからこの機会に覚えてしまえ、と」

素直に事情を説明する。

橙子さんは幹也さんが出勤してきたため既に仕事を始めている。

……前言撤回、ニヤニヤしながらこちらを見ている。

「でも橙子師に教われればよいのではないですか？」

鮮花さんがそう問いかけてくる。

まあ確かにそうなのだが…

「いえ、橙子さんも仕事をしないと幹也さんのお給料がなくなるということで……いえ、勿論鮮花さんもお忙しいとは分かっているんですが……」

なんて殊勝な態度で言ってみる。

……因みに、幹也さんのことを出したのはあつちでニヤニヤしている美人さんの入れ知恵である。

まあそれを実践している俺も最低といえば最低なのだが。

そんなこちらの考えなど知らないように、

「そうですか　では仕方ありませんね」

なんて了承の言葉を返してくれるのであった。

「あ、ありがとうございます！」

……幹也さんが効いたのだろうか、なんて考えるおれは本当に最低かもしれない。

そんな自己嫌悪に陥っていた俺の顔を鮮花さんが覗き込んでくる。

ここ伽藍の洞にいる女性は式さんしかり橙子さんしかり鮮花さんしかり、今まで見たことがないくらい美人さんばかりである。

そんな美人さんがこちらの顔を覗き込んできているものだから、俺の心臓（あるのかは知らないが）は一気に心拍数を上げる。

整った鼻梁、長いまつげ、スツと天然の朱が走る唇。

それが今眼の前まで来ている。

動揺しまくっている俺のことなんてお構いなしに、とところで、なんて前置きして鮮花さんが告げてくる。

「高美さん？　私たちほとんど同い年だと思えますので　そこまできしこまった話し方をしなくても良いんですよ？」

……それよりも今は少し離れていただけなのでしょうが、  
内心そう思いながらも答える。

……いい匂いだな、とか離れて欲しくない、なんてことは断じて思っていないので。念のため。

「いえ、なんていうか自然とこんな話し方になってしまつというか……それに黒桐さんにはこれからラテン語を教えていただくわけですし、橙子さんの弟子であるということは俺が弟弟子にもなりますから」

なんて告げてみる。

本当は気恥ずかしい、というのが大半を占める理由なわけだが。

因みに、地の文の鮮花さん表記は幹也との混同を避けるための仕様です。決して心のなかでは呼んでいるというわけではありません。

微妙にメタな思考が走つたような気がするものの、まあそういうわけだ。

これから教えてもらつ立場になるわけだし、礼儀というものは必要だろう。

「そのようなことを気にする必要もないのですが……それより、黒桐さん、では兄さんとかぶつてしまつので鮮花で結構です」

ここの女性は皆男前なのだろうか。  
なんてことを考えてしまつほど、そう告げた鮮花さんは格好良かった。

「わかりました あ、鮮花さん これからご指導のほどよろしくお

願います」

「承りました、高美さん」

因みに、教えるとなったらビシバシいくので覚悟してくださいね、  
なんて可愛らしく付け足す鮮花さん。

それを見て、……本当、これで超絶ブラコンじゃなかったらな、  
なんて失礼なことを思うのだった。

\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*

机に向かうこと数時間。

昼過ぎに鮮花さんは帰っていった。  
なんでも友人との約束があるのだとか。

因みに、現在机の上には大量の『宿題』が出されている。

午前中、徹底的に基本的な文法を教わった俺は橙子さんが引つ張り出してきた辞書片手に格闘中というわけである。

とはいえ朝から頭をフル回転させてきたからだろうか、少し煮詰まってきた感がある。

俺は、ちょうど一区切りついたことだし小休止を淹れることにした。

因みに、現在、事務所には俺と橙子さん、式さん、幹也さんがいる。

息抜きがてら自分以外の三人を観察してみる。

橙子さんは仕事をしているんだかいらないんだかよく判らないがとりあえず何かの図面に向かっている。

人形作りはもとより建築、果てにはアニメまで作っているらしいのだがその関係なのだろうか。

……というか、橙子さんがアニメを作っている場面など想像すら出  
来ないのだが、怖いもの見たさで見たくはある。気がする。

次いで幹也さん。

こちらは書類と睨み合いながら時折どこかに電話をかけている。これだけ真面目に働いているのに給料は不安定、現物支給もあれば未払いもある。なんていうのはかなり不憫だと思う。

まあいざとなれば式さんに頼ることも出来るのだろうか…

とにかく、こんなところでなくもつとちゃんとした場所でもやっていけそうなのだが、何故ここで働いているのだろうか？  
なんて疑問は失礼なのだろうか。

最後に式さん。

橙子さんから漏れ聞いたところによるといいところのお嬢さまらしい。

確かに立ち居振る舞いにも華があるし、現在はソファアに座ってポ―としていたがそんな様子も妙に気品がある。

なるほど、確かにいいところのお嬢様である。

が、着物の上に革ジャンは如何なものだろう。

現在は壁際にかけられているものの、ここに入ってきたときは一瞬面食らったものだ。

誰も突っ込まないのなら問題はないのだろうか、微妙にシニールだと思っ俺はおかしいのだろうか？

まあ、元がびつくりするくらい美人さんなので似合っているといえは似合っているのだが…

因みにその式さん。

幹也さんにお熱らしい。

本人がベタベタしているわけではないのだが、出会って数日とたた



ない俺にすらまるわかりのお熱っぷりだ。

……本人に自覚があるのかは微妙そうだが。

そんな風に観察していたのがバレたのだろうか。

橙子さんが凶面から眼を離して俺の方を向いていた。

「どうした高美 ラテン語の学習の方は進んでいるか？」

「ええ、まあ」

曖昧な返事を返す。

正直なところ言語系は余り得意ではない。

「へえラテン語ですか 鮮花がなにか教えているな、とは思っていませんけど」

仕事に一区切りついたのだろう幹也さんも話に加わってくる。

「ええ 妹さんには本当にお世話になります 俺はラテン語なんて全く判らなかつたので」

「うん まあ僕なんて英語すら怪しい気もするから頑張っただけ、ぐらいいいかいえないけど なにか手伝えることがあれば手伝うから遠慮無くいつてね」

「はい」と答えつつも俺は幹也さんの優しさに感動していた。なんて良い人なんだろう、と。

「黒桐、あまり私の弟子を甘やかしてくれるなよ。こういうのはある程度苦勞しなければ身にならないんだ」

至極正しい意見ではあるのだが…。

まあ、橙子さんにはなにもいうまい。

「帰る」

と、式さんが唐突に帰り支度を始める。

確かに、いわれてみれば外はもう薄暗くなってきたおり、時刻は五時を廻っている。

「ちょ、ちょっと待ってて式。一緒に帰ろう。あ、橙子さんもう上がっても大丈夫ですか？」

帰り支度、とはいっても革ジャンを羽織っているだけなのだが、を始める式さんの姿に慌てたように幹也さんが動き始める。

「ああ問題ない。今日の分の仕事は終わっているし。もう今日は上がっていいよ」

なんて幹也さんの方をニヤニヤ見ながら橙子さんが告げる。

幹也さんも橙子さんの視線に気がついてはいるようなのだが動じない。

それを無視して素早く帰り支度を進めていく。

式さんへの想いに迷いがいいのか、それとも単純に橙子さんのからかいに耐性があるのか。

なんとなく後者な気もするが、何れにしても橙子さんのからかいを華麗にスルーする幹也さんを見て、尊敬の念を覚えるのであった。

「それではお疲れ様でした所長 高美くんも勉強頑張つてね」

そう告げた幹也さんは「あ、式、待つてよ」なんて走りながら事務所から去って行くのであった。

二人が消えた事務所は妙に広く感じられる。

今までいた二倍の人口が一気に半分に減ったからだろうが、妙に寒々しい。

「私もそろそろお暇するかな」

と、橙子さんが伸びをしながら告げる。

……お暇もくそも橙子さんのねぐらはこの建物なのだが。

「それでは高美 私はもう帰る くれぐれもサボらず勉強しておけ  
それが読めねばそもそも話にならないからな」

なんて師匠みたいなことをいって出て行く橙子さん。

…師匠みたいじゃなくて師匠だったな。と自分自身の頭にツッコミ

をいれるのであった。

\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*

自分以外誰も居なくなつた事務所。  
11月もそろそろ半ばを迎え、霏困気だけでなく物理的にも寒さを増してきている。

まあ、現在は寒さなど問題ないといえば問題ないのだが…

因みに、こんな体になってからも毎日眠って？いるから忘れがちだが、そもそもこの体は休養というものが足りない。

そして、目の前には大量の宿題。

ここから導きだされる俺が採るべき行動は、いつぞや橙子さんが冗談交じりに告げていたことだと思う。

不眠不休、一心不乱の大勉強。

要するに、「諸君、私は勉強が好きだ 諸君、私は勉強が好きだ 諸君、私は勉強が好きだ」ということである。

そんな冗談はさておき、そう決めたのなら即行動に移すべきであろう。

辞書と宿題を再度確認する。

台所へ行き、コーヒを淹れる。

橙子さん御用達のロケットペンスルの芯を詰め替える。

……準備は整った、それでは勉強を始めよう。

そう自分自身に告げて、俺は再び勉強を再開したのだった。

こうして、高美の長い長い夜は始まったのである。

## 第九話（後書き）

あ…ありのまま 今 起こった事を話すぜ！

「本格的に魔術修行編になるはずがいつの間にか大勉強会になっていた」

な…何を言ってるのか わからねーと思うが おれも何をされたのかわからなかった 頭がどうにかなりそうだった…

超スピードだとか催眠術だとか そんなチャチなもんじゃあ 断じてねえ もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…

はい、こんにちは。

やっぱり少しは自重した方が良いのかなんてことを考えるTGO9です。

今回の話、『魔術修行するにしたってそもそも魔道書読めねーよ』と『いつの間にか鮮花が高美にフラグを立てる』の二本立てでお送りしました。

あるえー？ 鮮花はヒロイン枠では無いんですけど。

私の鮮花への愛が溢れてしまったようです。本当にすみません。

次は言語学習編をスキップして本格的に魔術修行編に移ります……  
移るはずです。

因みに、改めてタイムテーブルを確認したところ橙子さんさよならフラグまで三ヶ月ほどしか存在しない件が発覚しました。

これは思いのほか早くロンドン編に移りそうな感じですよ。

……とりあえず、今は取らぬ狸の皮算用よりも堅実にコツコツ話  
ずつ積み重ねて行こうと思います。

ツッコミ、応援なんでもかまいませんので待っています。

因みに、今日は冗談抜きで忙しいため次の更新は明日からになると  
思われます。

それでは。



## 第十話（前書き）

魔術修行編？の第十話。

独自解釈・独自設定っぽいのができるのでそういうのが嫌いなたは「戻る」を押してください。

## 第十話

鮮花さんに師事してきっかり一ヶ月。

鮮花さんと式さんがどこかへ出かけていった頃になって、やっと最初に橙子さんから貰った魔道書の内容を理解し切ることに成功した。

これで毎週の休日にわざわざ外泊許可を取って教えに来てくれていた鮮花さんに顔向けが出来るというものである。

そして今日、そう、今日からやっと本格的に魔術の修行に入ることになったのだ。

現在時刻朝の八時。

事務所にはやってきたばかりの橙子さん、そして俺の二人だけしか存在しない。

因みに、幹也さんは日課のコーヒーを淹れに席を立っている。

「ようやく読みきったか 本来ならもっと早く始められるはずだったのだが…言語のことを忘れていたとはな」

「ええ この一ヶ月、人生で一番勉強したんじゃないかと思えます」

そう、この一ヶ月。  
魔道書を読むことが出来ないという致命的な事実が発覚してからの一ヶ月はまさに不眠不休とはかくあるべし、というような勉強量をこなしてきたのだ。

単純な時間換算で31日×24時間。つまりは744時間。  
人間の限界を遥かに超える連続学習時間ではないだろうか？  
おそらく、ギネスに申請すれば前人未到の大偉業になること間違いなしである。

橙子さんに高次元生命体になったのだ、なんて云われてはいたもののこんなことで自らの変化を自覚させられるというのも微妙なものだった。

が、寝ることも食べることも排泄することも必要ない肉体とはいえ、流石に744時間もの勉強は果てしなく辛かった。  
具体的に言つと熱心かつ献身的に教えてくれる鮮花さんがいなければ投げ出していたか発狂していたレベルではあった。

「それにしても、いや、まさか本当に不眠不休で学習し続けるとはな……修行の進行を見直した方が良いか？」

なんて寝ているんだか眨しているんだか微妙な表情で言う。  
というか、最後の方に聞き捨てならないセリフがあった気がするのだが。

「流石に今回みたいなのはもう勘弁です 毎週毎週わざわざここまできて教えてくれていた鮮花さんが居たからこそ発狂せずにいられたようなものですよ」

「ん？ お前鮮花に気があるのか？」

どこをどう勘違いしたのか、ニヤニヤしながらそんなことを聞いてくる。

「違いますよ わざわざここまで来て教えてくれているのに成果が出ないんじゃないですか つまりはそういう事です」

「どういうことなんだか…それにしても、それなら修行の件は問題ないじゃないか これからは私が教えるんだ、指導の成果がでないと思つて頑張ればいいだろう？」

それとも鮮花のためには頑張れて私のためには頑張れないのか、なんて意地悪なことを言うてくる。

やはりその顔はニヤニヤしているのだが…確かに言っていることに間違いはない。

では俺にとつて鮮花さんが特別なのか、といえばそんなことはない……ないはずである。

確かに綺麗だし、いい人だし、とてもタイプではあるが……そんなことは断じてない。

なにより鮮花さんは幹也さんのことを偏愛しているので俺になんか可能性があるわけがない。

だから絶対に違うのだ。

そう、あくまで勉強を教えてもらったことへの感謝の念に過ぎない。そんな風に自分に言い聞かせつつ橙子さんに懇願する。

「勘弁してくださいよ 確かに言っていることは正しい気もします

けど 流石に不眠不休は精神的に辛いです」

通じるとも思わないが、最後の手段泣き落としてである。  
勿論、

「なにをいつている 休む必要のない体、素晴らしいじゃないか  
魔術を学ぶものにとっては勿論、何かをなそうとしているものにと  
っては垂涎の的だぞ」

なんてバツサリと切られるのだが。

どう言えば橙子さんが考えなおしてくれるのだろう、と頭をひねっていた時、コーヒーを淹れにいていた幹也さんが事務所に戻ってくる。

俺の微妙そうな様子を察したのだろう。

幹也さんが橙子さんに問いかける。

「橙子さん 高美くんに何かやっただんですか？」

「いや 高美が我侬をいつてね 今はそれを諭していたところなんだ そう、優しく、な」

優しく、を妙に強調して橙子さんが答える。

……優しく諭すもくそも、俺からすれば弄られていたようにしか思えないのだが。

そんな俺の思いに気がついたのか、はたまた橙子さんとの付き合いから判ったのか

「橙子さんが高美くんに意地悪してただけでしょう で、結局どんなことで虐めていたんですか」

なんて橙子さんに言う。

ありがとう幹也さん、本当に素晴らしい人だ、なんて感謝と感動の念を抱きながら橙子さんの方を見る。

「意地悪、とは人聞きが悪いな 高美が不眠不休で勉強していたのは知っているだろう？ それが出来るのなら魔術の修行のほうも少し詰め込んでも大丈夫だな、とそういつただけだよ」

なんて悪びれもせずいう。

それに呆れたような顔をしながら

「何いつてるんですか 休息が必要ないからといつたっていくらなんでも無茶苦茶ですよ」

と正論を述べる。

言っている内容自体は俺と全く一緒だが、俺と幹也さん対橙子さんという構図を不利に思ったのだろうか。

橙子さんが手をパタパタと振りながら

「なんだなんだ、男が寄ってたかって女をいじめるとは ちょっとした冗談じゃないか そもそも高美が不眠不休で修行するとなると

私もそれに付き合わなければならなくなる　私は生身なんだ、そんなこと出来るわけがないだろう」

なんて少しバツが悪そうにいうのだった。

俺は、いじめられるような玉かよ、なんて思ったのだが賢明にも口をつぐんでいた。

流石にいつぞやの姉妹喧嘩の際のような馬鹿な真似をするわけにはいかない。

そんな風に考えていると、よし、と橙子さんが空気を変えるようにこちらを向く。

そして、それでは高美、と前置きして

「おふざけはこころへんにしてそろそろ始めよう　下の工房で待っておけ　私は少し準備をしてからそっちに向う」

と先程までの御巫山戯が冗談だったように真面目な顔で告げてくる。

俺は遂に魔術を教わることができなのだ、と一ヶ月前と同じような興奮を抱きながら工房へと向かうのであった。

## 第十話

「またせたな 高美」

工房でまつこと五分弱。

そういつて橙子さんが工房へやってきた。

手にはバカでかい旅行かばん。

そしてよく判らない機材一式。

これからなにを始めるというのだろうか。

「えーと、橙子さん？ 何をしているんですか」

目の前でなにやら準備を始めている橙子さんにそう尋ねてみる。

そんな俺の疑問に対して橙子さんは視線すらよこさないまま。

「お前が勉強をしている一ヶ月、私とて何もしていなかったわけはない お前が本格的に訓練をするようになれば以前の様に魔力の



余波だけで壊れる結界では追いつかなくなる」

だから、と一端言葉をタメ、

「私はお前専用の結界を準備し続けていた お前の魔力の余波で壊れることなく、魔術の修行ができるようにな」

まあお前が魔力を完全に制御下に置けばそんなもの必要ないんだがな、なんて最後に付け足しながら準備を続ける橙子さん。

なんていうか、俺は橙子さんのことを見損なっていたのかもしい。

橙子さんは幹也さんに仕事を丸投げして遊んでいるだけのダメダメ魔術師ではなかった。

偶然拾った？俺のためにここまで考えて行動してくれていたのだ、なんて感動に打ち震えていた俺に橙子さんがようやく顔を向けながら告げる。

「なにをどうおもっているのかは聞かないが …… 勿論今回の材料費及び労働費はお前もちだということをお忘れな」

だから早く一人前になって返済しろよ、なんてのたまう橙子さん。

……これはきつと橙子さんなりの激励なのだ。

少しでも早く魔術師として大成して欲しいという師匠なりの心遣いなのだ。

そうに決まっている…といいなあ。

なんて思いつつ、気を取りなおして橙子さんに向かい合う。

「ところで、結界の件はわかりましたが　ところで、俺はこれから何をするんですか？」

「ああ、最初は魔術回路の開け閉めを確認したあと形式化された術式に魔力を流しこむことで魔術の発動というものを知ってもらう」

魔術の発動、魔術の発動である。

俺が待ち望んだ実践がついにそこまできている。

興奮をおさえきれなかった俺はハイテンションのまま橙子さんに尋ねる。

「魔術ってどんなやつをするんですか？　火ですか？　それとも水？　ああもしかしてあの窓を直すやつですか？　それと「少しは落ち着け」…はい」

矢継ぎ早に尋ねていく俺を橙子さんが止める。

その顔には苦笑と呆れが混じっていた。

「今日お前にやってもらうのはルーン魔術だ　あれなら発動そのものはそれほど難しくはないし、私のルーンにお前が魔力を込めれば発動自体は可能だからな」

俺とは対称的に冷静にそう告げてくる。

……まあハイな橙子さんというのもあまり想像は出来ないのだが。

それはともかく、橙子さんの言葉で幾分冷静になった俺は橙子さんの説明の続きを静かに聞く。

「まあその前に魔術回路の開け閉めの確認からだ　私の結界がきちんと機能するかも確認したいし　なによりお前は魔術回路を開くのは一ヶ月ぶりだろう　感覚を思い出してもらわねばそもそも話にならないからな」

そういつて結界の方を指差し俺にそちらに向かうよう指示する橙子さん。

逆らう理由もない俺は一ヶ月ぶりに魔術回路の起動を行うというこゝとで緊張しながら結界の中に入る。

俺が結界の中にキチンとはいったことを確認した橙子さんは

「それでは結界を起動するぞ」

といつて地面に手を付け、なにやら呪文を唱え始めた。  
それを俺はじつと眺め続けていた。

いつぞやの結界発動と同じく全く意味の判らない呪文が終わるとなにやら俺の周囲に不可視の『膜』が張られたことを確認する。

「その結界に触れてみる」

結界の機能を確認するためだろうか、橙子さんがそう告げてくる。  
俺は壊れないのだろうか、と内心で思いつつそーっと『膜』に手を向ける。

俺の手はゆっくりと『膜』に近づいていき……そして触れた。

以前と同じくゼリーのような、それでいて水のような、俺の語彙では表現できない奇妙な感触がする。

そして、それと同時に手の先から力が抜けていくような感覚がし、『カツ』と結界が光を放つ。

あまりの光量に俺は咄嗟に眼を閉じることもできなかった。

……かともうと一瞬の後には光は消え、そこには先程と同じく結界がきちんと存在していた

「ふむ、実験は成功だな 結界も術式も問題なく機能している あとはどの程度までの魔力量に耐えられるかだが……」

急に発生した光に驚いていた俺の耳に橙子さんの眩きが聞こえる。

「さっきの光はなんだったんですか？」

そんな疑問を橙子さんに尋ねる。

すると橙子さんは我が意を得たりと言わんばかりに解説を始めた。

「ああさっきの光か アレはお前の魔力を結界の術式が回収した際の副産物だろう 全く害はないので気にする必要はない」

はあ、と相槌を打つ。

そんな俺を気にせず橙子さんは解説を続ける。

「以前の結界はお前の魔力量故に壊された訳だ であるのならお前自身の魔力を用いて結界を補強してやればいい」

だろう、なんて目で聞いてくる。

確かに、俺の魔力が大きいから壊れるのならば同じく結界も強化すれば確かに拮抗する。

が、それは一過性のものだし、以前俺の魔力を用いて張った結界も結局は俺の魔力で壊れてしまったはずなのだが…。

そんな疑問を読み取ったのだろう。

橙子さんが続ける。

「ああ、確かにお前の魔力を一時的に用いたところでまた魔力をぶつけられればあっけなく結界は崩壊するだろう。だからこの結界にはお前の魔力が結界に触れた瞬間その魔力をこの地の霊脈に流しこむように細工している。まあ魔力の一部は結界の維持及び強化に回されているがな」

そう一息にいった橙子さんは、要するに避雷針みたいなものだよ、  
と喋って説明を終えた。

なるほど、避雷針。

確かに受け止められないのならば受け流せば良いというのは常識的だ。

なるほど頭がイイ、そんな風に感心していると橙子さんが、

「それでは納得もいったことだろうし、魔術回路の起動を行なってもらう。魔術回路を起動し十秒間経ったら回路を閉じる。それで結界が壊れることがなければ本格的に魔術の修行に移っていく」

そういつて結界の観測のためだろうか、地面に手を付けた橙子さんは俺を急かしてくる。

一ヶ月ぶり、そう一ヶ月ぶりの魔術回路の起動である。  
忘れていないだろうか、きちんと出来るのだろうか、そんな風に緊張してくる。

鼓動が早鐘の様に脈打つのを感ずる。

冷や汗が額から流れ落ちる。

これではだめだ。

魔術回路の起動には集中が必要だったはず。

そう思い出した俺は深く深呼吸をする。

そして緊張から眼を逸らすため、そして自分に気合を入れるために  
「よしっ」と呟くと、深く自分の中に潜っていくのであった。

## 第十話（後書き）

こんにちは。

佐々木少年の月姫真月譚第九巻を手に入れて読んだTGO9です。いや、本当に佐々木少年さんは素晴らしいですね。

冬発売の次巻で最終回とのことですが、毎月追っていない私としては最終巻が楽しみでなりません。

そして明日はFateのDVDとFALCOMの零の軌跡が発売されます。

どちらも予約しているので本当に楽しみなのですが、それが理由で執筆が滞りそうな気がします。

……まあ最低一日一話は上げていきますでご容赦の程を。

さて、今回の第十話。

魔術修行編っていったのに魔術使ってないじゃんよ？というツッコミは勘弁してください。

結界に関しても頭の中にあるものを上手く文章に書き起こすことが出来ずこんな中途半端なものになってしまいました。

考察も今回は結構雑なのでツッコミがあればお願いします。

その際は出来ればソースも一緒だと個人的には大助かりなので併せてお願いします。

中途半端なところで終わってしまいました。今回は本当の本当に魔術修行を開始します。

まずはルーン、次いで強化の魔術などへと続く予定です。

まだまだ先は長いですが、これからも応援宜しくお願いします。



## 第十一話（前書き）

久々更新第十一話。

ようやく魔術修行が本格的に開始です。

魔術について独自解釈や独自設定を含んでいるかも知れませんが、  
そういったものが嫌いな方は『戻る』を押してください。

## 第十一話

魔術回路の起動、維持、終了は思いのほかあっさりと成功した。

それはもう、あれほど緊張していたのが馬鹿らしくなるほど簡単だった。

橙子さん曰く、一度起動出来ているのだから当然だ、とのことだが魔術の修行を開始して一ヶ月、魔術の魔の字も出てこないほど勉強漬けだった俺からすれば本当に不安だったのだ。

そんな感慨に耽っている俺を置いてきぼりにして橙子さんは修行を進めていく。

「魔術回路の起動と終了は無事成功だ。それでは魔術の実践に移るぞ」

そういつてカバンの中から奇妙な形をした木…のようなナイフ？を取り出す。

そして何かを確認するかのようにそのナイフ？をひとしきり眺めたあと俺の方へと手渡してきた。

いきなり手渡されたナイフらしきもの…もうナイフでいいだろう。

そのナイフは妙につるつるした手触りをしており、重厚そうな見た目に反して妙に軽かった。

ところどころに刻まれたよく判らない刻印のようなものがあるので、魔術に関連した品であるのだろう。

見た目はちょっとオカルトチックなペーパーナイフといったところだろうか。

手渡されたナイフをしばらく観察した俺は、結局これがなんなのか、そして何を望まれているのかが分からず橙子さんい問いかけた。

「これはなんですか？」

「ああ、それは所謂『杖』だ」

俺の間に橙子さんが答える。

『杖』。

どうみてもナイフにしか見えないこれは曰く『杖』らしい。

「でも橙子さん これはナイフにしか見えないんですが…杖なんですか？」

思ったことを尋ねてみる。

「確かにそれはナイフの形をしているが、間違いなく魔杖だよ」

そういつて一息いれた橙子さんは説明を続けた。

「さつきも言ったとおりお前にはまずルーンを教えようと思ってる…ルーンが何かわかるか？」

ルーン。

北欧に根ざした魔術体系で、力ある『文字』を刻むことによって神祕を顕現させるものである。

「ええまあ一般的なことなら」

「そうか では細かい成立背景の説明は省くとして、ルーン魔術というのは力ある『文字』を刻むことで神秘を発現する技術のことだ つまりルーン魔術は刻む『文字』と刻む『方法』が重要になってくる」

ここまでは大丈夫か、と橙子さんが確認してくる。

それに俺が頷いたのを確認して橙子さんが説明を続ける。

「ここでいう『文字』というのはルーン文字のことだが、理論も知らない素人であるお前は仮に正しくルーンを刻めたとしても魔術を発動することは出来ない」

だからオカルト趣味の素人のものは発動しないんだ、とタバコの煙を吐きながら付け足すように呟く。

…なるほど、確かにルーンなんてものは正誤の区別そのものは分からないものの割とあちこちに溢れている。  
それこそ、ちよつとオカルトに興味のあるものならいくらでも調べることが出来るだろう。

であるにも関わらずルーン魔術というものが隠匿されているということは、それがオカルト趣味の範疇に収まっているということだ。

そう納得した俺は橙子さんに説明の続きを促す。

「だから今回はルーンを刻む『方法』の方をこちらで用意すること  
でとりあえず魔術を起動させることにした そのためこの『杖』  
だ」

「はあ……」

つまりは、レベル1の魔術師見習いである俺に魔術を使わせるために最高ランクの魔法の杖を装備させよう、ということなのだろうか。

「この杖はね、トリネコの木から彫り出された逸品だ。これ単体での芸術的価値もさることながら蓄積年数、括っている術式そのものもたいしたものだ。さらに、ナイフの形であるから『刻む』という概念を内包しているし、ルーンを刻むための礼装としては一級品だろう」

なんてよく判らないことを一息で説明される。

「……えーと。つまりはとてもすごい杖ってことですよね」

おれがそう確認すると妙に白けた顔で、そうだ、と答えられた。俺の反応が芳しくなかったからだろうか。

高かったんだぞ、なんて拗ねたように言ってくる。そんな姿に不覚にも萌えながらも、説明の先を促した。

「それで、これを使ってどうすればいいんですか？」

「先程もいったが、これからお前には魔術の発動というものがどういったものなのかということを感じとして覚えてもらう」

そういつて一枚の紙をこちらに見せる橙子さん。

俺はその紙に書かれた妙な記号のようなものを注視した。

あえて言えば『F』に似ているだろうか、そんなことを思っている  
と橙子さんが紙束を抱えながらこちらに話しかけてくる。

「そのルーンをお前はできるだけ忠実に、そしてできるだけ魔力を  
込めるようにしてこの紙に書き込んでもらおう」

紙はいくらでもあるからな、といいつつ大量の紙たばを俺の目の前  
に置く。

「そのルーンは『アンザス』 火を司る基本的なルーンだ ……まず  
はその紙を焦がすことが出来れば合格というところだろう」

そういつて、早くやれ、と目で促してくる。

「わかりました」

そういつて、俺はルーンを正確に記憶し、ありったけの魔力をナイ  
フにまとわせて紙へとルーンを刻む。

一切の妥協なく刻まれるルーン。  
膨大な魔力が結界内を荒れ狂う。

…ルーンを刻みながらイメージするものは『火』。  
紙を燃やす『火』をイメージしてルーンを刻む。

そうして、魔術回路が臨界に達し、膨大な魔力が紙に収束すると共  
に俺は光の洪水に飲み込まれた。

## 第十一話

「失敗だな」

光の洪水が収まり、視界が元に戻った俺に掛けられた第一声がそれだった。

あれほど荒れ狂っていた魔力。

数値にして一千を遥かに超える量の魔力を用いられて行われた魔術？は、その実、紙を焦がすどころかその魔力の大半を霧散させるだけに終わってしまった。

「まあ素人のお前に理論も何も教えないで魔術を起動させようとした私が悪いんだが……そうだな、高美はルーンを刻むときにどのようなことに注意していた？」

「えーと、魔力をルーンの形に収束させてそこに『火』のイメージを投影するような感じで……」

「なるほどな」

俺の曖昧なイメージを伝えると橙子さんは「納得がいった」とばかりに深くため息をついた。

「これもまた教えていなかった私が悪いんだが……お前に渡した魔道書はきちんと読み込んだか？」

「ええ、かなり読み込んだつもりですが……」

「では魔術とはどういうものか説明してみる」

そう言っただけで短くなっていたタバコを灰皿に押し付け、新たなタバコを啜えながら橙子さんは要求してきた。

魔術。

魔力を以って行う秘儀、禁忌の類ではあるが奇跡ではないものごと。

もとは魔法（奇跡）で、根源から引いている決められた力。よって、それを知っている人間が増えれば増えるほど力が弱くなる。



魔術の起動に必要なものはその起動に必要な魔力量とエンジンを回すためのキー（パス、呪文、コード）、そして魔力をエンジンに注ぎ込むための魔術回路の三つである。

そう橙子さんに回答する。

少なくとも魔道書にはそう書いてあったから間違いはないだろう。

「そうだな 魔術の起動に必要なものは3つ、つまり魔力、魔術回路、魔術基盤への接続だ」

そういつて啜えていたタバコに火を灯すと、煙を深く吸い、それをこちらへ向けて吐き出しながら説明を続けた。

「では先程のお前に足りなかったものはなんだと思う？」

そう橙子さんが尋ねてくる。

俺は自分自身の魔術行使？を振り返ってみた。

魔力。

正直なところこれは十分過ぎるほどに足りていたと思う。

一般的な基準はわからないが、橙子さんを驚かせるほどの魔力だ。それで足りないということは大抵の魔術師にはその魔力を用意できないということになる。

では次、魔術回路。

これは、魔術行使の前に実験したとおりきちんと起動できていた。であるからこそ魔力はきちんと練ることが出来ていたのだから。

であるならば、魔術基盤への接続だろう。

魔術基盤。

世界に刻まれた魔術理論。既に世界に定められたルール。大魔術式。魔術を構成する為の二種類の基盤のうち、世界に刻まれたもの。

つまりはコンピュータに於けるプログラム。もっといえはOSに近いモノを指す。

これがあるからこそ魔術は起動できるし、その神秘を発現する。

つまり、この魔術基盤へ接続することが出来なければそもそも魔術は起動できないということだ。

一人考え込んでいた俺に橙子さんが回答を急かしてくる。

「で、判ったのか？ 時間がないのでサクサクいきたいんだが」

「はい、魔力も魔術回路も十分だったと思うので、消去法的に魔術基盤への接続が足りなかったのではないでしょうか？」

橙子さんは俺の回答に満足したように

「ああ、その通り 正解だ 先程のお前はただ闇雲に魔力を垂れ流して無理やり結果を持ってこようとしていたが、普通そんなことが出来るやつはいない 勿論お前にもだ」

なんてことを言ってくる。

…普通はそんな奴はいないというが、いる可能性を否定しないとい

うことはそんなことが出来る奴がいるということだろうか。  
魔力さえあればとりあえず結果を持つてくる。  
どこの世界のチーとかと…。

そんな無駄な思考に自分自身で気が付き、慌てて思考を修正する。  
そして、新たな疑問を橙子さんにぶつける。

「ではどうすればその魔術基盤に接続できるんですか？」

「そうだな…本来は知識の蓄積によって手順を踏みながらそこへ到達するんだが、今回はいろいろと飛ばしているからこちらでサポートしよう」

「はあ…ところで、俺が魔術を起動できないってことは判っていたはずなのにどうして魔術を使わせようとしたんですか？」

「それはお前、あれだよ。今のお前に魔術の起動というのがどういうものなのかきちんと分からせて、きちんと手順を踏まなければならぬってことを実践で体験させようとしたんだ」

なんてとてもありがたい言葉をいただく。  
つまりは習うより慣れろ、ということだろう。

思うところはあるものの、橙子さんのいうことにも一理あったためそれを飲み込む。

そして橙子さんに向き直る。

「具体的にはサポートってどうするんですか？」

「ああ、私の魔術回路とお前の魔術回路を同調させて私がお前の魔術回路を基盤まで導く お前は基盤へ接続する感覚を覚え、そこに魔力を流しこむだけで良い」

わかったか？、とこちらに問いかけながら橙子さんが結界の中へと入ってくる。

そしておもむろに俺の服のシャツを脱がすと……脱がす？

「って橙子さん！ 何やってんですか!？」

「なにつて、魔術回路の同調には出来る限り接触が必要だからなお前の服を脱がして私と物理的に接触させようとしていたんだが……因みに、私も脱ぐぞ？」

なんて平然と言ってくる。

そして宣言通り上半身を覆っていたワイシャツのボタンを開け始めた。

小振りながらも形の良い乳房がブラジャーの中に収まっているのが眼に入る。

そこまで観察して、自分が何をしているのかを自覚した俺はすぐさま橙子さんから眼を逸らした。

橙子さんは何をしているのだろうか。

いつものからかいにしてはたちが悪い。

女性は無闇矢鱈と肌を晒してはいけないのだ、特に男性には。

……思考が暴走しているのを自覚する。

冷静になれ、俺。

KOOLだKOOLになるんだ。

橙子さんの顔は真剣でおふざけの色は見えなかった。

……魔術の修行だからそういうのも必要なだろう。

橙子さんが真剣にやっているのに俺がいやらしい目で橙子さんを見てはイケない。

そう自分に言い聞かせた俺は改めて橙子さんへと向き直る。

『すみませんでした』そう告げようと橙子さんと顔を合わせた俺は、橙子さんがとてつもなくいやらしい表情をしているのを見た。

「どうしたんだ、高美 そんなに赤くなって ははーん……………欲情したか？」

前言撤回…いや、まだ謝っていないから前言もくそもないが、前言撤回。

橙子さんはこちらの反応を見て楽しんでた。

先程の真面目な表情もそのためのブラフだろう。

俺としたことが騙された。

そんな思いを視線にのせる。

しかし、橙子さんはそんなものはどこ吹く風と俺をからかい続ける。

「お前は鮮花に気があると思っただけだ。私も捨てたものではないということか。で、どうだ？ 私の体をどう思う？」

そういつて小振りな胸を精一杯張ってこちらにアピールする。

白い肌、形の良い胸、細い腰……正直、これまで見た女性の体でも美しいと思う。

……まあ女性の体なんて年齢制限の雑誌や映像でしか見たことはないのだが。

俺が凝視していることに気がついたのだろう、橙子さんはますます以ていやらしい顔つきになる。

そして酷く蠱惑的な表情をしながら、俺の耳元でささやく。

「どうした、視ているだけでは辛いというのなら触らせてやらんでもないが……うん？」

……本当に勘弁してください。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

「冗談は置いておいてだ、可能な限りの肉体的接触が必要だというのは本当のことだ」

橙子さんの誘惑に耐え続けていた俺に橙子さんが真面目な口調で告げてくる。

未だに上半身は下着しか付けていない格好の橙子さんだが、あまりにも真面目な顔で説明を始めたため俺の興奮は沈静化していた。

「わかりました 始めますか？」

「ああ、私が合図をするからそれに合わせて回路を廻せ お前はただ自分の中に眼を向けて自身の魔術回路が魔術基盤へつながる感覚を覚えることだけに集中しろ あとのことは私がやってやる」

そういつと橙子さんは俺の背中の方に回り込み、俺の背中に橙子さんの背中をくつつけてきた。

自分とは違う体温。

なめらかなシルクを思わせる肌。

自分の意識が背中に集中していくのがわかる。

そんな俺に気がついたのだろうか、橙子さんは思い出した様に告げる。

「ああ、そうだ、高美」

「はい？」

「背中合わせよりも向い合っでの抱き合いの方がよかったか？」

「……勘弁してください」

間があつたのは漢の性というやつだ。  
だから突っ込まないでください。

「…ふん、まあいいだろう　こんなことが原因で失敗されては目も当てられんからな」

顔は見えないが絶対ににやっついているとわかるような口調でそう告げた橙子さん。

その口調が一転して真剣なものへと変わる。



そうであつたから俺も煩惱を投げ捨て、改めて集中を開始する。

「では始めるぞ、カウントに合わせて魔術回路を起動しろ……3・2・1……0！」

橙子さんのカウントに合わせて魔術回路を起動する。

と同時に、背中から感じる橙子さんの魔術回路と自分の回路が同調していくのを感じる。

自分と橙子さんの感覚が曖昧になっていくような錯覚。

世界が広がり、どこまでも果てがなくなるような認識。

自分が融けだし、世界と一体となるような、何でも出来るのではないかというような万能感。

そんな、これまで体験したことのないような感覚のあと、自分がどこかに繋がったことを感じる。

茫然自失としていた俺は、その繋がってしまった感覚だけを足場に自分の意識を再構築する。

キツカケさえあれば自分を再構築するのは容易い。

そうして再構築された（生まれ変わった）俺は、明確な意識の元世界に命令を下した。

『燃えよ』と。

世界が俺の命令に従うのを感じる。

世界と俺の等価交換。

俺は魔力を、世界は神秘を。

世界が契約を履行する。

現象の名は『炎』。

俺は確かな手応えと共に現実の認識へと帰還していった。

集中するために閉じていた眼を開いた俺の眼に飛び込んできたのは、

戦場跡の様に崩壊した工房だった。

…えーと、これはどういうことだろう？

そう思つて、答えをくれそうな橙子さんの方を振り返る。

橙子さんは不機嫌そうな、それでいて呆れたような顔をして俺の方を見ていた。

「えーと、これはどういう状況なのでしょう？」

「……」

「……」

「……」

沈黙が痛い。

「魔術は失敗したということですか？ それとも魔術の暴走とかでしようか？」

沈黙に耐えられず矢継ぎ早に思ったことを告げてみる。

そうするとようやく橙子さんは口を開いた。

相変わらず微妙な表情のまま。

「いや、魔術は成功している。きちんと紙は燃えているし、間違い

なく『アンザス』のルーンは発動した」

「はあ……………で、この惨状はどういうことなんでしょうか？」

「……………まあ、私の落ち度でもあるか お前の魔力量を想定に入れていなかったな」

なんてことを呟く橙子さん。

もしかしてあれだろうか？

初めて魔術回路を起動した際の暴走事故的な。

「『アンザス』のルーンはちょっと火を付ける程度の魔術のはずなんだが……………お前がばかみたいな魔力を注ぎこんだからこんな有様になってしまったということだ」

「……………」

「魔術というのはな、術に対する理解、つまりは術理、術の純度と注がれる魔力量によって威力が変化する 普通は術の純度を極限まで上げるかそれ以上の魔術を以て威力を上げるものなんだが、お前の場合にはアレだ、有り余る魔力で無理やり威力を底上げしたとか……………いかなれば、ロウソクに火を付けるためにナパームをぶっ飛ばしたようなものだ」

つまりは魔力の供給過多ということだろう。

その結果がこの惨状。

おそらく、瞬間的にここは煉獄の炎に焼かれたのだろう。

橙子さんの張った結界が存在していなければ死なない俺はともかく

橙子さんはどうなっていたことか…。

その可能性に思い至った俺は橙子さんに謝罪する。

「すみませんでした 俺が未熟なばかりに」

死なせてしまっていたかもしれない。

そう思うとなおさら気分が沈んでいく。

そんな俺に橙子さんは気にしていないとでもいうように手を横に振り、すずを払いながら立ち上がる。

そうして結界の外に置いておいたシャツを探し始めるも、そんなものが残っているはずもなく、仕方なさに半裸のまま工房の扉へと歩き出す。

そして、背中を向けたまま。

「気にするな、誰にだって失敗はある 因みに、今日の修行はこれで終了だ 今日やった魔術基盤への接続の感覚を覚えておけ 明日は一人で発動できるようにしてもらってからな」

そう告げて扉から出て行く。

俺は感謝と謝罪を込めて頭を下げたままそれを見送る。

そんな俺の方を振り返ることなく、橙子さんは去り際に

「…あと、明日も修行は行っから明日までにここの清掃は済ませておけ」

なんて行って去っていった。

「……」

改めて工房を見渡す。

部屋の中にあつた雑多なものはほとんど消え去り、部屋の壁は炭化している。

床には大量の灰。

おそらくその中には元シャツも含まれているのだろう。

部屋の一角、元々脆そうだった壁に至っては完全に崩壊し外の光景を一望できるようになっている。

「あー、ゆうひがきれいだなー」

部屋の惨状を改めて確認し現実逃避気味にそう呟く。

これを一晚できれいにする。

……正直投げ出したいが、自分の未熟の招いた結果であるから仕方がない。

よし、そう気合を入れて腕まくりをする。

それじゃあボチボチ始めるか。

時間はたっぷりとあるのだから。

## 第十一話（後書き）

こんにちは。

お久しぶりです。

最近は大学開始&風邪&畑仕事&零の軌跡のせいで執筆が滞っていました。

……ええまあ最初の三つはともかく四つめは私の怠慢です。

本当に申し訳ありませんでした。

さて、今回のお話。

ルーン魔術を使うにあたって高美が一人で簡単に魔術を行使できるのもどうだろう、ということからオリジナルの礼装であるナイフと橙子さんの同調？を行なってしまいました。

ぶつちやけ、大体のあらすじだけ立てて筆の赴くまま？執筆しているので、書きあがったときに自分でも驚く展開になっていることが多々あります。

今回の礼装しかり、橙子さんしかり。

橙子さんに関しては『Fate/stay night』real t a n u a』のUBWルートに影響されました。

描写が追いつかないのはひとえに私の力不足です。

……流石にPC版は自重しました。

礼装に関しては、北欧神話、オーディン、ルーン、トリネコの木、刻むといったキーワードからの連想ゲームで作りました。



特に名前はありませんが、もしかしたらこれからも使っていくかもしれません。

今回の話は突っ込みどころが満載っぽかったので、原作設定との矛盾や誤字脱字などのご指摘があればどんどんいただけると幸いです。

それでは。

## 第十二話（前書き）

この物語は作者の妄想です。

独自解釈・独自設定が受け付けられないかたはすぐさま『戻る』を  
押してください。

## 第十二話

初めてルーン魔術を起動してから約一週間。

その間に、どこかへと出向していた鮮花さんと式さんは伽藍の洞へと戻ってきた。

なんでも橙子さんと同じ封印指定　すごい魔術師のことらしい  
とやりあつてきたということだが……妖精がどうか記憶がどうか、俺にはよく判らない話だった。

まあ、あの二人がそろって負けるというのも余り想像出来ないので問題はなかったのだろう。

現に帰ってきて数日たった今朝、鮮花さんは幹也さんを無理やり引っ張って自称・デートに行ってしまうくらいなのだから。

……式さんは幹也さんがいない伽藍の洞になど用がないのだろう。  
今日は顔を見せていない。

まあ、幹也さんと鮮花さんのデートに思うところがあつて引き籠っている可能性もなきにしも……ないような気がする。

そんなわけで、現在伽藍の洞には橙子さんと俺しか存在しないのだ  
った。

話を戻して、ルーン魔術を教わってから一週間。他にも様々なルーンの実践を行うと同時に、不眠不休でルーン魔術に関する魔道書を読み込まされている。

……最近、不眠不休で勉強することを苦にも思わなくなってきたのは良いことなのだろうか？

なんでも 実践で得られるものも大きいが、魔術師というものの本質は知識の蓄積にある とのこと。  
ということで現在、ルーン魔術の成り立ちとその発動原理についての項目を学習しているのである。

ルーン魔術。

その成り立ちは古く、遥か神代にまで溯るらしい。  
伝承では北欧神話の主神・オーディンが自らの片目を代償に得たものだとされている。

力ある文字を刻むことで世界に神秘を発現する魔術体系。  
その発動には幾つかの手順が必要であるとされている。  
つまりは『理解』『刻印』『充填』『発動』である。

『理解』は文字通り個々のルーンについての理解である。  
自身がどのような現象を起こそうとしているのか、それを理解せずして魔術は発動しないのだから当然である。

次に『刻印』。

これは読んで字の如くルーンを対象に刻印することである。

そして『充填』。

ルーンは『刻印』しただけでは発動しない。

『刻印』したルーンに力 魔力や祈りなど を込めることでルーンに力を持たせるのである。

最後に『発動』。

『理解』 『刻印』 『充填』 が済んだルーンは既に『発動』するだけだ。

この『発動』によってルーンに込められた意味・力を解放し世界に神秘を顕現させる。

こんなところだろうか。

そんな風に現在学習していた項目を頭の中でまとめる。

ふと時計を見れば既に十一時。

橙子さんはタバコをくゆらせながら何かの図面に向かって仕事をしている。

…失礼な話だが、幹也さんがいないのに仕事をしている橙子さんというのも不気味なものではある。

そんな思いが伝わったのだろうか？

橙子さんを見ていた俺の視線と眼を図面から離れた橙子さんの視線がぶつかった。

「どうした高美。もうその魔道書は読み終わったのか」

橙子さんが首を回しながら聞いてくる。

橙子さんの首からは豪快にバキバキという音が鳴っているが、どれだけ凝っているのだろうか？

「ええ、大体読み終えました。……それより橙子さん？ 少しマッサージでもしましょうか？」

「ん？ どういう風の吹き回しだ？ ……まあやってくれるというのなら断る理由もないが」

「了解です。いえ、普段からお世話になっていきますし、魔道書の方も一段落ついたので」

決して橙子さんの首から出た音にビビったとかそういう理由ではない。

本当に、そして純粹に橙子さんへの日頃の感謝の気持ちの発露なのだ。

なんて誰に向けたのだから判らない言い訳をしながら橙子さんの背面へと移動する。

そして、橙子さんの肩に手を置くこととして、

橙子さんの体に眼を奪われた。

細い首筋、華奢な肩、そして短めの髪……それらの組み合わせが妙に色っぽい。

以前、橙子さんの半裸を見た際にも思ったが、改めて、橙子さんはかなりの美人さんだと思う。

体つきはスレンダーだがそのパーツの一つ一つが完成していて、結果ひとつの芸術品のようにまとまっている。

そんなことを考えていたのがバレたのだろうか？

橙子さんがこちらを見上げながらニヤニヤしながら、

「どうした高美。私の体に触れるのは初めてというわけでもあるまいに。一度は（ほぼ）裸で体（背中）を合わせた仲じゃないか」

第三者が聞いたなら完全に誤解するようなことを言ってくる。

「何言ってるんですか橙子さん！ そんなんじゃありません、ただポーとしていただけです」

全く　なんて自分と橙子さんを誤魔化しながら無理やりマッサージを開始する。

始めのうちはなんだかんだとからかいの言葉を向けていた橙子さんだが、暫くすると俺が反応を返さないことに飽きたのかマッサージ

に身をゆだねるように身体を弛緩させた。

橙子さんの身体はその華奢な外見に反してかなり凝り固まっていた。普段自由気ままに生きていてストレスなど感じていなさそうな橙子さんだが、やはり色々疲れが溜まっているのだろうか？

そんな失礼な感想を抱きつつ、少しでも橙子さんの凝りを解そうと一層力を込めてマッサージを続ける。

「どうですか橙子さん？ 痛くはないですか？」

「ああ問題ない。……それにしても高美はマッサージが上手いな」

「ええ、昔から母にしてあげていたんですよ。母が寝たきりになってからも身体が固まらないようにって毎日マッサージをしていますし」

そう言いながらふと母のことを思い出す。

最近は魔術の修行に没頭していたために思い出すことの少なかった母のことを。

いつも優しく、女手一つで自分をここまで育て上げてくれた人。

そして、あの日………自分が殺した人。

母のことを思い出すと焦燥感じみた衝動に襲われる。何かに急かされるようなそんな感覚。



何かをしなければならぬような。

泣きたくなるような、それでいて泣いてはいけぬような。

そんな衝動。

……おそらくこれが罪悪感なのだろう。

母を殺してしまったという。

母をあの螺旋から救いだせなかったという。

母を見捨ててあの螺旋からひとりだけ逃げ出してしまったという。

それら全てに対する罪悪感。

そんな思考に沈んでいたからだろうか、橙子さんがこちらを覗き込んでいることに最初気がつかなかった。

「どうした高美。手が止まっているぞ」

云われてみればそうだ。

考えに集中しすぎていてマッサージをする手が止まっていた。

「すみません。ポーとしてしまっ」

そういえマッサージを再開する。

先程の思考を追い出すかのように没頭しながら。

静かな時間が過ぎていく。  
元々街の喧騒から離れた郊外にたつ事務所だ。  
街の騒音からは遠く、現在は時計が時を刻む音と僅かな布ズレの音  
しか存在しない。

無言の中に二人の人間がいるという気まずさもなく、ただただ静かな時間だけが流れていった。

暫く経った頃だろうか、橙子さんが思い出したように呟く。

「おまえは後悔しているのか？」

それは何に対する後悔だろうか？  
魔術を習い始めたこと？

……おそらく違うだろう。

ではあのマンション（螺旋）から抜けだしてしまったこと？

それとも、母を殺してしまったこと？

……何れにしても後悔など無い。

そもそも後悔などする必要はないし、そんな意味もない。

その時その時の選択は、その時その時の自分が下した決定だ。であるならば後悔などしていいはずがない。

それは過去の自分に対する裏切りだし、そこから続いている自身の否定に他ならない。

間違えたりすることはあるだろう。

巻き戻してしまいたい過去もあるだろう。

それでも後悔だけはしてはいけない。とそう思う。

だから、

「後悔はありません」

そう答えていた。

自分が如何に弱い人間かは知っている。

だからいつかきつと俺は後悔してしまう時が来るだろう。

それでも……それでも、後悔はしたくない。

後悔しなくとも良いように生きていく。

そう在りたい。

「……そうか。面倒くさいイキモノだな、お前は」

呆れたように橙子さんが呟く。

俺もそう思います　そんなことを思いながら、マッサージを続けるのであった。

## 第十二話

静寂は十二時の鐘と共に打ち破られた。

「そろそろ昼か。すまなかつたな高美、大分肩が軽くなった」

「いえ、気にしないでください」

気がつけばかれこれ一時間近くマッサージを続けていたことになる。不老不死の肉体になってからは肉体的疲労から開放されたとは思っていたが、まさかこんな活用法があるとは…。

人間マッサージ器高美爆誕　なんて馬鹿なことを考えていると、橙子さんがコートを着込んでいるのが目に入った。

「あれ、橙子さんどこかへ出かけるんですか？」

「ああ……といっても私だけじゃなくお前も出かけるんだ」

だからさつさと支度しろ　　といって橙子さんはどんどん外出準備を整えていく。

何がなにやらよく分からなかったが言われるがままに準備を行う。

とはいっても、基本的に着のみ着のままな俺に準備などというものは必要なく、橙子さんよりも後に始めて、橙子さんよりも早く終了してしまった。

……やはり橙子さんといえども女性、準備もそれなりに必要なのだろっ。

そんなことを考えながら待っていると準備を終えた橙子さんが目の前に立っていた。

「それで、どこへ行くんですか？」

「どこって、そりゃ飯だよ飯、昼食。時間も丁度良いしな」

「はあ」

気の抜けた返事をする。

それは普段出かけない橙子さんがどういう風の吹き回しなのだろうか、とか、不老不死になってからの俺には食事は必要ないのだが、とか、そもそも俺は金を持ってねーよ、とかそんな思いの発露だった。

「橙子さん？ 俺は食事の必要はありませんし、なによりお金が無いのでお一人で行かれたほうが……」

「食べる必要はなくても食べられないということではないんだろう？」

確かに、何度かお菓子やコーヒーは摂っているし、不可能ではないだろう。

とはいっても、排泄を行った記憶がないのでおそらく全て魔力として自分の中に吸収されているっぽいのだが。

そう考え　ええ、まあ　と返す。

「それなら問題ない。気にするな、マッサージの礼だ、今日は奢ってやるっ」

そういつて早くドアから出るように急かされる。

そしてあれよあれよという間に橙子さんの車　スポーツカーみたいな車　に乗せられるのであった。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

橙子さんの車に乗せられて暫く、着いた場所は何故か焼肉屋だった。

焼肉・大帝都。

……今日は月に一度の1000円ポツキリ喰い放題らしい。

「あの、橙子さん？　ここは焼肉屋なんですけど…？」

「なにか問題でもあるのか？　今日は1000円喰い放題だしな。それにここの肉はうまいぞ、そこらの焼肉屋とはワケが違う」

なにか思い入れでもあるのだろうか？

妙に饒舌な橙子さんと共に大帝都に入る。

まず目に入ってきたのはデカデカと掲げられた『大帝都』という看板。

そして、その横に飾られている無数の色紙のようなものだった。

何気なくその色紙を眺めながら席へと案内される。

いつの間にか橙子さんが喰い放題二人前を注文していた。



「なんだかすみません。奢ってもらたりして」

「気にするな、先程の礼だと言っているだろう。それよりも高美、昼からはルーンではなく別の魔術の修行を開始するから今の内に英気を養っておけ」

「はい。ところでどんな魔術をするんですか？」

「……話を振った私がいうのも何だが、こんなところで魔術、魔術と連呼するな。ここは一般の店だぞ」

それにほら　　そういつて橙子さんは皿やタレを持ってきた店員を顎で指す。

「折角の機会だ、そんなことはあとに回して今は食うぞ！」

皿とタレを受け取った橙子さんは早速メニューと睨み合いを開始した。

…確かにさっきの会話は危なかった。

魔術は隠匿するもの、そんな大原則をすっかり忘れてしまおうとは。

そんな風に自省していると橙子さんが肉の好みを聞いてくる。

俺は鶏ささみと豚トロを頼み、再び飾られている色紙に眼を写した。

……あれは大食いの記録を打ち立てた人たちの名を残すために飾られているらしい。

店の端から端まで、左側をスタートとして右側まで続いているそれは、より右に近づくだけ大食い記録が伸びていく様になっているらしい。

何の気もなしにその名を順に追っていく。

知った名前はない。

当然だ。

俺は元々交友範囲が広い人間ではないし、そもそも大帝都などという焼肉屋の存在は知らなかったのだから。

そう考えながらも目は名前を追っていく。

そして、一番右端。

つまりは大食いキングともいうべき記録保持者の名前を認識した時、俺は飲んでいたお冷を吹き出していた。

そこには『おおざきあおこ・おおざきとうこ』という名が燦然と輝いている。

いきなりお冷を吹き出した俺の方に橙子さんがおしほりを渡してくる。

「どうした高美、妙なことをして。……あれか、新手の一発芸の練習か？」

橙子さんが俺にかわいそうなモノでも見るかのような視線を投げか

けながらそう問いかけてくる。

……いきなりお冷を噴出す一発芸なんて誰が喜ぶんだろう。

そんなことを考えつつ、俺は見つけてしまった名前について橙子さんに確認した。

「あの〜橙子さん？　つかぬことをお聞きしますが、あそこにある『あおざきあおこ・あおざきとうこ』というのは橙子さんのことですか？」

「ん？　ああ、そうだな」

そう問いかけると橙子さんが突然不機嫌そうな顔になる。  
…またしてもなにか地雷を踏んでしまったのだろうか？

「えーと、なにか気に触りましたか？」

「いや……ただ、な」

ただ、なんだとうのだろうか？  
妙に深刻そうな、それでいて怒りを押さえつけているような顔を  
した橙子さん。

ここには嫌な思い出でもあるのだろうか？

「ただ？」

「なに、ただあのバカ女に負けてしまっているというのが気に食わないだけさ」

云われて記録に目を向ける。

……確かに妹さん、つまり青子さんの名前の方が右端にある。

つまり橙子さんは青子さんに負けたのが悔しくて妙に不機嫌になったということだろうか？

沈黙が妙に重い。

その沈黙を破ったのは橙子さんだった。

「今日は体の調子も良い。朝から何も食べていないし……やるか？」

自分自身に問いかけるような小さな小さな呟き。

しかし、俺の耳はその言葉を完全に拾っていた。

……何をやるというのだろうか？

そう疑問に思っていると、橙子さんがすごい勢いで呼び出しボタンを連打する。

そして、飛んできた店員に対して　このメニューの右上から左下まで全部持ってきてくれ　なんて漫画みたいな注文を行う。

なるほど、橙子さんは自分自身と、そして青子さんの記録を抜きにかかるということか。

なんて他人事の様に考える。が、

それを五人前、二セット持ってきてくれ　なんて不穏な言葉が聞こえる。

「あの、橙子さん？　流石に五人前の二セット、つまり十人前は橙子さんでは無理だと思いますよ？」

なんて現実から目を逸らすために精一杯惚けてみる、先制で。

「何を言っている。半分はお前が食べるんだよ。私に火を付けたんだ、責任を取って一緒に食べてもらうぞ？」

……責任、という言葉に真っ先に反応するのは漢の性なのだろうか。私に火云々は出来れば別の場面で言っただけ欲しかった。

なんて現実逃避をしながら、慌てて去りゆく店員を見送る。

厨房の方からは　あおざきだ、あおざきがきたぞー！！  
なんて声が聞こえてくる。

「小便はすませたか？　神様にお祈りは？　肉を全て食い尽くすための腹の準備はOK？」

橙子さんも橙子さんでいい感じにネジが外れているようだ。

そんな風に現実逃避を続けていると数人の店員が大量の肉を載せたカートと共にやってくる。

そして机に入りきらないほどの肉を並べていく。  
訂正、入りきらないほどではなく事実入りきっていない。

補助の机を持ってきても肉が入りきらなかったのをみて店員も諦めたのだろう。  
入りきらなかった分の肉をカートに戻し、申しわけなさそうに告げてくる。

「申し訳ありませんお客様。お肉の方が机に載せきることが出来な  
いためカートに積んだままこちらにおいて置かせていただきます」

ちよつと待て店員！！

違つたらう？

そこは持って帰る場面だらうJK。

畜生！

神は死んだ！！

やっぱり現実逃避を続けていた俺の目の前で橙子さんが肉を焼き始める。

その匂いにつられて俺は現実へと帰還した。

確かに橙子さんがいうだけあって良い肉を使っていようだ。

匂いだけでかなり食欲をそそられる。

が、それは目の前の光景、所狭しと並べられた肉がなければの話だ。正直なところ視ているだけで胸焼けがする。

「どうした、食わないのか？」

先程焼き始めた肉がもう焼けたのだろう。

橙子さんが肉を口に入れながら問いかけてくる。

目の前には大量の肉の山。

正直食欲は湧かない。

が、貧乏所帯だった俺は食事を残すということが出来ない質だ。

母さんも言っていたじゃないか。  
食事は絶対に残すな、食事は別の命を自分のために消費するものな  
んだから、って。

そう自分に言い聞かせ、俺は肉の山へと箸を向けるのであった。

\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*

結果から言つと、肉は全て食べきることが出来た。



どころか、俺はさらにお代わりを注文し、店長が泣きついてくるまで延々と食べ続けた。

総重量30kg以上。

俺の身体がこんな風になっていたからだろうか？

いくら食べてもそれは全て魔力へと変換されていったため満腹になるといことがなかったのだ。

故に、満腹などという人間が有する限界など無視して、純粹に良い肉を使っているここの焼肉を心ゆくまで楽しむことになる。

その結果が店長の泣きつきというわけだ。

因みに、橙子さんはお代わり二回目あたりでギヴアップして、トイレへと駆け込んでいた。

……大丈夫だっただろうか？

そんなこんなで、今日、焼肉屋・大帝都には新たな名が刻まれたのだった。

因みに、後日、ギネスブックには『杯門高美』という名が載ったと  
か載らないとか…。

## 第十二話（後書き）

こんにちは大学が始まってドタバタしているTG09です。

今回はルーン魔術に関する描写を端折って『強化』の魔術に入ろう  
と思っていました。

が…あるえー？

気がつけばマツサージと焼肉の話になっていました。

らつきよの時間軸でいえば『殺人考察・後』まで約一ヶ月。

つまりは橙子さんさよならまで残り一ヶ月〜二ヶ月しかないのです  
が…orz

この調子で進んでいって大丈夫なのかかなり不安になります。

因みに、次こそ本格的に『強化』の魔術の修行を行ないます。

最後に、時間軸的に『月姫』に介入できなくもないのですがどうし  
ましょう？

？ ロンドンでウェイバークんとキャツキヤウフフの魔術修行編

？ 『月姫』 介入、 実戦経験とかどうだろう？

どちらが良いでしょうか？

どちらにしても私の技量では駄作にしかならないと思うのですが…。

今回はこんなところで。

それでは。

## 第十三話（前書き）

今回は独自解釈や独自設定がいつもより出てきます。

そういったものを受付ないという方はすぐに『戻る』を押してください。

## 第十三話

ある意味でカオスだった昼食から帰ってきてはや一時間。

大帝都ではトイレのお世話になっていた橙子さんも段々と持ち直してきたようで、現在は俺に茶を淹れさせている。

……普段のコーヒーではなく式さんが置いていった高そうな緑茶を要求しているあたり実は結構ダメージは大きいのもかもしれないが。

そんなこんなで俺は今、喧しく蒸気を上げている薬缶の前にぼーっと突っ立っている。

手元には普段使わない急須と素人目にも高そうな容器に入れられた茶葉。

カチリ、とガスを止める。

薬缶の中のお湯はすぐさま注ぐことはせず、そのまま放っておく。

お茶は熱々のお湯で入れるよりも少しだけ冷ました方が美味しくなる……らしい。

らしい、というのはこの知識がどこで手に入れたものか判らないからだ。

おそらくテレビか何かだとは思っただが…。

そんなどうでも良いことを考えながらテキパキと急須に茶葉を入れていく。

急須と湯のみの準備をしている間に湯はだんだんと冷めてゆく。

確か、高級な茶葉は60度位の温度が一番美味しく淹れられる。そんなことを聞いたような気がする。

流石に指を突っ込んで湯の温度を確かめるわけにもゆかず、適当に冷ましたところで急須に湯を注ぐ。

。この後は、確か1分：1分半？ 浸しておく良かったはず。

そんな曖昧な知識の元時間が過ぎるのをただボーと過ごす。

何を考えるでもない。

ただ時計の秒針だけを追う。

そんな時間も嫌いじゃない

なんて厨二病じみたことを呟いている間に時計の秒針は一周飛んで半周りしていた。

すぐさま湯のみに茶を注いでゆく。

そして、ようやく淹れ終えた茶を盆に載せ、橙子さんの元へと向かうのだった。

## 第十三話

「うまいな。たまには茶もいいかもしれん」

それが、橙子さんの第一声だった。

大帝都を出た時点では未だ顔色悪く、いつリバースしてもおかしくないよう状態だった橙子さんだがしばらく休んでいたのが効いたのだろう、現在ではかなり顔色もよくなってきているようだ。

「ありがとうございます。テレビかなにかでみた通りにやったんですけど、そう言ってもらえてよかったです」



眼鏡を外しているにも関わらず妙にのほほんとしている橙子さんにそう返す。

湯のみを両手で抱え、目を細めて茶を啜る橙子さんは、その、妙に………萌える。

昔、高校の友人が『萌え、萌え』と連呼していたが、いま彼の気持ちが変わった。

田中、今ならお前の言っていた『萌え』が俺にも理解できるよ………！！！！

そんな馬鹿げた考えが面に出ないよう努力しながら、茶を啜り続ける橙子さんに午後の予定を問う。

………もう少し橙子さんを眺めていたいだなんてこれっぽっちも思っていないので悪しからず。

「ああ、そうだったな。流石にルーンばかりやっつけても仕方がないし、一通りの起動は出来たんだ。あとはお前自身の研鑽あるのみだ」

橙子さんは湯のみを話さないまま続ける。

「というわけで、この後はお前に『強化』の魔術を教えていく。どこの門派でも一番最初に教わる類の簡単な魔術だ」

そう言って再度湯のみを口に持ってゆく。

『強化』。

初步にして極めるのは至難とされる魔術。

存在意義を強化するもので、刃物なら切れ味、食材なら栄養度、メイドなら萌え度が増す……らしい。

存在意義を強化するという性質上、曖昧なモノを曖昧に強化することはできない。

そんな魔術である。

……メイドの萌え度を増すことが出来るというのは一部の強者達にとって垂涎の的となるのではなからうか？

そんな風にあらゆる意味でフリーダムな魔術だからだろうか？

『強化』には決まった形式というものが存在していないらしい。

…自由すぎるのも考えものということだろう。

そんな風に『強化』の魔術について頭の中で整理していると、茶を飲み終えた橙子さんが湯のみを置いた。

「『強化』は基本であるが故にある意味簡単だが、お前にとってはかなり鬼門となる魔術になるだろう」

「はあ……」

簡単なのに鬼門。

どういう事だろう？

その疑問を視線に乗せる。が、橙子さんは既に席を立ち、工房へと向かい始めていた。

「何をしている高美。早く行くぞ。お前と違ってこっちの時間は無限じゃないんだ」

……もう完全に治ってしまったのだろう。

とりあえず疑問は置いておいて橙子さんの後を追う。

……断じて、断じて先程までの橙子さんの方が良いなーなんて考えてはいないので、いちおう。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

工房へ着くと、橙子さんがなにやらよく判らない塊を床にぶちまけているところだった。

材質は…スライムだろうか？  
色という色はなく、無色透明に見える。

水粘土とでもいおうか？  
そんな不思議物質である。

「橙子さん？ そのぶちまけているものはなんですか？」

「ああ、これはエーテル塊だよ。本来は未熟な術者が魔術に失敗して作り出してしまうものだが、今回はお前の修行のためにわざわざ作っておいた」

「えーと、ありがとうございます。ところで、『強化』の魔術というのはモノを強化する魔術じゃないんですか？ 確かエーテル塊は魔力を通してもすぐに元の形に戻ってしまうんじゃない？」

スライム、もとい水粘土はエーテル塊であると告げられ、エーテル塊に関する項目を思い出しながら問いかける。

「そうだな。が、エーテル塊はとにかく良く魔力を通す。だからこれを使つてモノに魔力を通すということを実感してもらおうと思つたんだ」

なるほど　　そう納得する。

確かに、いきなりモノ　例えばナイフなど　の『強化』をしろといわれても、魔力をモノに通すということを理解していない俺ではお話にならないだろう。

だからこそ、まずは魔力を通すということだけを学習する。ということだろう。

そう理解した俺は早速修行を開始することにした。

床に刻まれている結界の術式を起動する。

……そう、結界の術式を起動するのである。

つまるところ、俺は修行用の結界を起動できるようになった。

それもこれもルーン魔術の修行の際、橙子さんに毎回毎回結界の起動から終了まで全て任せていたということの申しわけなさに起因している。

修行のたびに橙子さんの手を煩わせていた俺は、少なくとも一人で

修行が出来るように、と術式の起動に偏った修行を行なった。

結果、術に対する理解と術式そのものさえあればどんな魔術でも起動できるようになったのである!!!!

……まあ、ルーンとこの結界以外は理解出来ないので大した『魔術』を行使できる訳でもなく。

そもそも、偉そうにはいつているものそんなことは見習い魔術師にだって当然の様出来る技能なのである……orz

気を取りなおして。

結界範囲内に入り結界を起動する。

そして、床に転がっていた？エーテル塊に手を触れる。

…手触りはスライム。

いつぞやか100円ガチャポンで手に入れた発光するスライムに似ている。

ここからどうすれば良いのか

そう橙子さんに目で問うと、

好きなようにやってみる

とこれまた簡潔に返された。

いいだろう。

不眠不休で修行を続けたこの俺の実力、とくと見るがいい！！！！！！

結果。

大・爆・発！！



ええ、まあいつものアレです。  
魔力の込めすぎ。

エーテル塊に気合を入れて魔力を注ぎ込んだ俺は、その急激かつ膨大な魔力に耐えられず破裂したエーテル塊を全身に浴びていた。

元が魔力 エーテル なのでそんなことはないはずなのだが、全身ローションを浴びせかけられたかのような。

……もちろん、ローションなんて使ったことも見たこともないが。

そんな俺の惨状を前に、橙子さんは笑いを堪えようとして失敗していた。

「つぷ……つくく……いやっ……うん……ふう。どうだ、失敗の原因はわかったか……つく」

「魔力の込めすぎですね。……ところで、橙子さん。我慢は身体に良くないですよ」

「ん……くく、ああそうだな。他ならぬお前の忠告だ、きちんと聞いておこう……クックッククック」

手を口元に添えて笑う橙子さん。  
本当ならイラッとくるところだが、自分の失敗が原因であるわけだし、自分自身の無様な格好も理解していたためそのまま放置していた。

暫くして、笑いが収まったのだろう。  
橙子さんが真剣な顔をこちらに向けてきた。

「先程のお前の失敗だが……本来エーテル塊が弾けることなどないのだがな、お前の魔力に耐えられなかったらしい」

「はい」

「が、それだけではない。お前は根本的な間違いを犯している」

そういつてタバコに火を点ける。

……先程まで啜っていたタバコは笑った拍子に床に落ちてしまったらしい。

「いいか。モノに魔力を通すというのはお前がしたようにただ闇雲に魔力を流すということではない。モノに存在する僅かな隙間、そ

れを埋めるようにしてモノを満たす。それが本来のやり方だ」

…なるほど。

確かに無理やり流された魔力では無理が出る。

だからこそ隙間を見つけてそこに魔力を流しこむということか。

それは判った。

判ったのだが……。

「その隙間ってというのはどうやって見つけるんですか？」

そう。

その隙間というものは目に見えるものではない。

人間ならば肌の汗腺や目、口、鼻などから魔力を流しこめばいいの  
だろうが……いや、それも間違いだろう。

というかそれはジャンル違いのSF映画だ。

落ち着け、俺

考えが明後日の方へ飛んでいく癖のある俺は自身の思考を修正しな  
がら橙子さんからの返答をまつ。

が、普段明瞭な答えしか返してこない橙子さんが困ったような顔を  
してこちらを視ている。

「隙間……隙間か、我が表現ながらそれでは誤解を与えるな。いい

表現がなかったからそういっただけで実際に隙間があるというわけではない。つまりはその存在が持つ可能性を便宜上隙間と呼んでいるに過ぎない」

つまりだな

一息でそこまで離れた橙子さんは説明を続ける。

「そのモノが持つ限界を見極めつつ、そのモノの可能性を伸ばしてやる。それが魔力を通す、ひいては『強化』魔術の基本だ。故にその隙間を見つける手段を教えるというのは酷く難しい。個人個人によって感じ方は異なるし、それを言語化することも難しい」

「つまりは教えられない、そういうことですか？」

「いや、そこまではいつていない。感じ方が違うだけで視ているもの自体は同一なんだ。であるならばそれを追求していけば自ずと隙間がみえてくるだろう」

「はぁ……で、その視ているものってというのは何なんですか？ さつき言っていた可能性？」

「そうだな、可能性だ。例えばナイフ、これはもしかしたらもっと鋭く、切れ味が良くなるかもしれないだろう。だからこそ、もっと強度のあるものを『切る』ことが出来るようになるという可能性を内包しているといえる」

「はぁ、つまりモノの特徴にあった可能性を探せば良いということ

ですね？」

「その通りだ。それでは、そのエーテル塊の可能性を探ってみる。……そうだな、まずは強度、その可能性を捉えられるようになれ」

私は上で仕事を片付けてくる

そういつて橙子さんは工房から出て行った。

先程まで俺にまわりついていたエーテル塊を見る。

……いつの間にか最初と同じスライムの塊に戻ってしまっていた。

エーテル塊に手を当てながら瞑想を開始する。

このエーテル塊の持つ可能性。  
強度の変数。  
それを探る。

意識を自分の中から外へと向けるイメージ。  
自身の触覚がエーテル塊に触れ、その中へと入り込んでいく。  
そう空想する。

探る探る探る探る探る探る探る探る……。

探る探る探る探る探る探る……。

探る探る探る探る……。

探る探る探る……。

…？

この感触はなんだろうか？

空想の触覚が何かを探し当てる。

それは触覚であるが故に言語化することは酷く難しかった。  
が、おそらくこれが橙子さんの言っていた隙間であり、可能性なの  
だろう。

それでは魔力を注ぎ込もう。

少しずつ、少しずつ、少しずつ注ぎこむイメージ。

よし、イメージは固まった。

そねどほ、ほじめちひ。

結果。

大・爆・発！！！！！！



二度ネタはもういりません

そういつてしまいたくなるほど俺の状況は先程に酷似していた。

全身を硬くなったエーテル塊が覆っている。

……というか、硬くなりすぎたエーテル塊を全身に浴びているせいでほとんど身動きを取ることすらできない。

今の俺はローションを全身に塗ったままあぐらをかいている変態オブジェにしか見えないだろう。

こんな姿を誰かに見られた日には表を歩くことがでk「高美、タバコがそこら辺にある……かぁ？」……っ。

……ああ、そうか。

これがフラグ建築と回収ってやつなんだな。

やっと俺にも判ったよ田中。

橙子さんが図ったかのように工房にもどってくる。  
おそらくはタバコを忘れたのだろう。

工房に申しわけ程度に置かれている机の上には橙子さん愛用のタバコが置きっぱなしにされている。

「高美、二度ネタとはあまり関心しないな。やるならもつと趣向をこらせ」

橙子さんが無表情にそう告げてくる。

が、俺は決して見逃さない。  
橙子さんの口元と目元が笑いをこらえているかのように痙攣しているのを……っ!!

「先程もいいましたが……我慢は身体に良くないですよ?」

「そうだな。そのとおりだな」

そこが限界だったのだろう。  
橙子さんが大笑いを始める。

……珍しい橙子さんの大笑いを視られてラッキーとでも思っておけばよいのだろうか?

そう現実逃避をしていると橙子さんが笑いを抑えながら結界の中へ

と入ってくる。

そして、俺の顔をその両手で掴み、俺の顎を持ち上げるようにしながら自身の顔を俺の顔に近づけてくる。

橙子さんの端正な顔がだんだん近づいてくる。

橙子さんの息遣いすらも肌で感じることができそうだ。

そんなことを思っているうちにも橙子さんの顔はどんどん近づき、数瞬の後には唇がふれあいそうな距離になっていた。

頬が赤くなるのを自覚する。

心臓が早鐘の様に鳴り響く。

おそらくこれもいつものからかいなのだろう

そう理性では理解しているのに、橙子さんの顔の美しさ、その圧倒的リアルさ故に唇が触れるのではないかという期待を抑える事ができない。

後数センチ。

二センチ。

一センチ。

残り五ミリ。

……。

そうして、橙子さんの唇は当然の様に、俺の唇に……

触れることなく耳元へと持って行かれた。

……うん。

さっきも言った？けど判っていたさ。

橙子さん一流のジョークだってね！

……絶対、絶対残念だなんて思ってないんだからね！  
勘違いしないでよー！！

「なるほど。『強化』自体はできている。となればやはり…」

絶賛混乱中だった俺の耳に橙子さんの呟きが入ってくる。

橙子さんは俺の頭に付着しているエーテル塊を触りながら何事か納得すると、急に身体を離し、同時にニヤニヤとこちらの顔を覗き込んできた。

「…期待したか？」

「するか！」

「……………期待したか？」

「……………」

「……………期待したか？」

「……………はい」

橙子さんのまなざしに俺は屈した。

俺だって思春期の男の子。

文字通り 永遠の十七歳だ。

期待だってするし、正直性欲をもてあます。

そんな自己弁護を行っている俺をひとしきりニヤニヤしながら眺めた橙子さんは よしっ といって表情を引き締めた。

「冗談はこれくらいにして。高美、今回の失敗だがどこで間違えたかはわかるか」

急に師匠としての顔を前面に出した橙子さんに、俺も弟子として答える。

先程は確かに何かを感じ取った。

それにエーテル塊は硬くなっている。

つまりはきちんと強度が『強化』されている。

であるならば…。

「魔力過多、ですか？」

なんというかおなじみになってしまったセリフを吐く。

「そうだな。今回のお前は『強化』自体は成功していた。にもかか

わらずエーテル塊が破裂したのは最初と同じく魔力を注ぎ込み過ぎたからだ」

いいか

とって橙子さんは説明を続ける。

「今回のお前は言ってみれば水を注ぐべきコップを見つけ、水を入れようとして水道ではなくダムの水門を開いてしまったようなものだ」

なるほど。

コップごときの容量でダムの水を受け入れようとするればコップが崩壊するのは当然のことだろう。

つまりはそついうことか。

エーテル塊はきちんと隙間に魔力を注がれたことで『強化』されたものの、隙間に入りきるはずもない魔力量を注がれたために崩壊した、と。

確かに理解はした。

理解はしたが…。

「あの、橙子さん？ 俺だって流石に学習しないわけじゃありません。今回魔力を流す時に可能な限り少しだけ流すよう調整したつも

りなんですけど…」

「きつと『したつもり』だったんだろう。つまりは出来ていなかったんだよ、お前は」

一刀両断。

バツサリである。

「『強化』の修行を始める前に言ったことを覚えているか？」

？

どのことだろうか。

そう思いつつ自身の記憶を探っていく。

……

……

…

ああ、あれか。

「『強化』が俺の鬼門ってやつですか？」

「そうだ。お前の様に魔力の制御が全く出来ていない者にとって『強化』は難しいだろう。が、何時までも魔力の制御ができませんではどう仕様もないからな、そういう意図もあつての『強化』魔術の



修行だ」

なるほど。

たしかにそうだ。

初めて『アンザス』のルーンを行使して工房を焼き払って以後、俺の魔術の失敗原因の大半は魔力制御不足だった。

それを見かねたということなのだろう。

「わかりました。次からは魔力の制御に意識を割いてやってみます」

「そうだな。そうしてみる……といたいところだがもういい時間だ。今日の修行はここまでにしておこう」

云われて時間を確認する。

夕方の六時過ぎ。

未だ冬も盛りということもあって外は暗闇に包まれている。

「そうですね。今日はありがとうございました。……今から一人で練習していても良いですか？ 折角『強化』の足がかりを得たのにここで辞めるというのは……」

「ああ、いいだろう。……それにしても、妙に頑張るな。最初詰め込みの修行は嫌だと、幹也と一緒になって私を口撃したくせに」

云われてみればそうだ。  
確かに少しノメリこみすぎかもしれない。

……が、別にそんなことはどうでもいいだろう。

色々な意味で終わってしまった『杯門高美』の人生だ。  
どうせなら今度は悔いの無いようにやってみたい。

……それにやることもないのだし。

そんな風に自己完結する。

「まあ、予想以上に魔術は楽しいですし。なんていうか世界が広がっていくような気がします」

そういった俺を、橙子さんは珍しく呆けた顔で見つめていた。

「楽しい、か。そうだな、だからこそなのかもしれないな」

最後の方はよく聞こえなかった。  
今、橙子さんはなんと呟いたのだろうか？

「えと、橙子さん。今なんて言ったんですか？」

「いや。なんでもないよ」

そういつと橙子さんは机の上のタバコを回収し、俺に背を向ける。  
その背中に向かって。

「今日はありがとうございました。明日もまたお願いします」

「……ああ、まああれだ。頑張ってみろ」

そんな言葉と共に橙子さんは工房から出て行った。

アドバイスもある。

魔力は十分。

エーテル塊も元に戻った。

準備は万端。

それでは修行を再開しよう。

時間はいくらでもあるのだから。

### 第十三話（後書き）

なんていうか幕引きがいつぞやと同じだし、話の流れ、時間の流れが不自然に過ぎる…orz。

今回のお話、『強化』の魔術修行編ですが、それ以上に自身の文才の無さが浮き彫りになるお話でした。

会話と会話のつなぎや地の文の流れがどうにも不自然になってしまします。

なんていうか、プロットに肉付けすることの難しさを改めて思い知ったという感じでしょうか。

いつか文章力がついてから修正したいな、と思います。

次回更新は明日か明後日に行ないます。

それでは

## 第十四話（前書き）

今回も独自設定や独自解釈が多数存在します。

原作に忠実ではなくなっているかもしれないので、そういった表現が嫌だということだけは『戻る』を押してください。

85000アクセス、100000ユニーク達成しました。

本当にありがとうございます。

## 第十四話

『強化』の魔術の修行を始めて2週間。

あれからほぼ不眠不休で修行を続けていた俺は、しかし今日もまた  
エーテル塊を全身に浴びるのであった。

「大丈夫ですか高美さん？」

そんな俺の顔を覗き込むようにして見つめてくる鮮花さん。

……なんていうか、ハイ。

あれです。

最初のうちは恥ずかしかったんですけど、もう今更というか。

見られすぎて感じねーよ！ というか……。

「今回はあと少しだったんです。なんとなく感覚を得ました。大丈夫です鮮花さん。俺は次こそは頑張ってみます」

「そうですか……私自身魔術回路の制御に関してはどうこうアドバイスできませんが。次こそは成功させましょう」



なんて泣いてしまいそうな程優しい言葉を掛けられる。

橙子さんなんて　鮮花、高美をあまり甘やかすな　なんていつて最近は何のことを放置している。

……いや、魔力の制御が上手くいかなければ次の段階に進めないから、現在橙子さんがいても出来ることなんてないといえはないのだが。  
なんていうか、応援くらいは欲しかったりする。

そんなことを考えながらエーテル塊を無理やり引き剥がしていき、一塊に纏める。

すると　ニユニユニユニユニユ　なんて効果音でも出しそうな動きでそれらはひとりりで動き出し、元のムニヨムニヨしたエーテル塊へと戻った。

……よく考えればこれも不思議物質だよな。

魔力をよく通し、どんなに強い魔力で括つてもすぐに元に戻る。  
それに四大の属性いずれにも属さず、本来は何の意味も持たない物質？。

確か昔橙子さんが　エーテル塊とはそもそも第一魔法の……　なんて話していたような気がするので実はものすごい可能性を秘めた不思議物質なのかもしれない。

なんて無駄な思考が流れる。

頭を振ってその思考を振り払う。

今は目の前の修行に集中するべきだ。

先程鮮花さんにいったことは別に気休めでも嘘でもない。

苦節二週間。

ようやく魔力の制御のコツのようなものを発見したのだ。

……正確にはコツといつかなんとというか。

俺は魔力を生成・放出する際、無意識の内に全ての魔術回路を起動していた。

が、橙子さん曰く、魔術回路というものは必要に応じて起動していくものらしい。

つまりは、十の魔力が必要ならその魔力に見合っただけの魔術回路を。

百の魔力が必要ならその魔力に見合っただけの魔術回路を…という具合だ。

今まで俺の魔力制御が上手くいっていなかったのは、必要な魔力量に関係なく全ての魔術回路を起動していたから。

つまり、いつでもどこでも全力投球してしまっていたからに他ならないらしい。

そういうわけで、修行開始3日目にその事実をしった俺はさらに4日間かけて魔術回路の限定起動を習得した。

そう習得したのだが……先程のように無様な結果自体は変わらなかった。

なんと、俺の場合 魂を永久機関として無尽蔵の魔力を生成するらしいので一般的な魔術回路を持つ魔術師のように回路を閉じていれば魔力が生成されない、なんてことはなかったのだ。

橙子さん曰く、 魔術回路というより魔術炉心 とのころらしい。

そんなわけで、早くも挫折するかと思われた修行だが、魔術回路の制御は思わぬ結果を齎した。

そう、俺の場合馬鹿みたいな魔力がいつでも生成されているもの、それを放出しているのはあくまで俺の魔術回路。

つまりは魔術回路を絞ったことによって放出される魔力自体は一気に減少したのだ。

が、それでもやはり魔力量が大きいらしい。値にして数百。

絞りに絞ってやっと百程度にまで落としこむことに成功した。

その結果、大爆発を破裂程度にまで抑えることに成功したのだ。

しかし、魔術回路を抑えることで魔力量を抑え、魔術の暴走を防ぐというアプローチは既に頭打ちである。

そもそも、現在起動している魔術回路は1。

つまりこれ以上抑えようもないのである。

よって、二週間目は延々その魔力を制御することにのみ重点をおいて修行を続けてきた。

そしてついさつき、魔力の流れとつかないかつかないか。

言葉に出来ない感覚なのだが、いわゆるヒラメキ、コツのようなものを掴んだ…… ような気がする。

そんな長い思考を終え、目の前のエーテル塊に集中する。

意識を内側から外側へと向ける。

意識の触覚はエーテル塊をくまなく走査し、魔力を流し込むべき隙間をすぐさま発見する。

……この手順にも手馴れたものだ。

最初は一回走査するのに半時間も掛かっていたのに、現在では一瞬である。

今なら橙子さんが言っていた曖昧な感覚というのもよくわかる。

いふなればこの手順は『解析』なのだ。

モノの構造を部分部分ではなく全体として把握し、魔力を流しこむことが可能な隙間を発見する。

そのための『解析』。

なんてことを考えつつ魔術を進めていく。

隙間は発見した。

魔術回路を起動する。

銃弾には魂を、銃身には肉体を

呪文ではない。

これはあくまで自身を作り替えるための自己暗示。

ヒトから魔術師という生き物へと自身を変革していく。

感覚が広がっていく。

本来内側にもみ向いているはずの触覚は外へ外へと向かって伸び始める。

そんなイメージ。

そうして、その触覚をエーテル塊へと接続する。

因みに、この触覚は橙子さん曰く、  
パス（魔術経路）  
らしい。

パスは通った。

隙間の確認も十分。

魔力は必要な分だけ。

それでは始めよう。

パスを通して魔力をエーテル塊の隙間という隙間へ流しこむ。  
普段ならここで一気に制御を手放してしまう魔力の手綱をどうにか握り続ける。

無理やり制御しようとするのではなく、流れを作って誘導する

そう。

これこそが先程つかんだコツだ。

考えて見れば当然のことなのだが、俺はこれに気がつくまでに二週間もかかってしまった。

内心落ち込みながらも魔力の制御は離さない。

少しずつ少しずつ。

そして慎重に慎重に魔力を流しこんでいく。

.....

.....

……

…

そうして全ての工程を終了する。

エーテル塊は爆発していない。

突っついてみると何日も放置した餅のように硬くなっている。

つまり……俺は、今、初めて、『強化』の魔術を成功させた。

## 第十四話

「やりましたね高美さん」

鮮花さんは我事のように喜んでくれている。



「はい。はいっ！ やっと成功しました。苦節二週間、それもこれも鮮花さんの応援があったからです。本当にありがとうございます」

俺は深々と頭を下げる。

何時ぞやも言ったかもしれないが、ずっと一つのことをし続けるといふのはいくら俺でも精神的にかなり厳しいものがある。

だから、身近で応援し続けてくれていた鮮花さんには本当に感謝しているのだ。

おそらく鮮花さんの応援がなければ俺はすぐに折れてしまっていただろうから。

そんな気持ちを込めて鮮花さんを見つめる。

「いえ、高美さんの努力あってのものですよ。本当におめでとうございます」

ああ、鮮花さんはいいい人だなー。

そんなことを思う。

成績優秀。  
容姿端麗。  
性格美人。

ここまで完璧な人間というのなかなかないのではないだろうか？

まあ、

「高美くん。成功したのかい？」

「兄さん!!!」

……ブラコンなんですけどね。

「はい、幹也さん。やっと成功しました。……それにしても珍しいですね、幹也さんが工房にくるなんて」

「いや、そうなんだけどね。橙子さんから 高美が成功したようだから上に連れてこい なんて言われてね。高美くんを呼びに来たんだよ」

幹也さんは頬を掻きながら答える。

……それにしても橙子さんはどうして俺が成功したことが判ったのだろうか？

「わざわざありがとうございます。すぐに向かいますから幹也さん

は先にもどっていらっても良いですか？片付けなんかを済ませ  
てくるので」

「判った。橙子さんにはそう伝えておくよ」

「お願いします。………鮮花さんも幹也さんと一緒に先に行っ  
てください」

先程から幹也さんを盗み見ている鮮花さんにそう告げる。

「……！わかりました。それでは先に上に行っていますね。さあ兄  
さん行きましょう」

………気を回しすぎただろうか？

まあうれしそうだったからいいか。

そんなことを思いながら片付けを始める。

まあ、片付けといっても結界の終了とエーテル塊を容器の中に移す  
だけではあるのだが。

ものの数分もかからずに片付けを修了した俺は、師匠の呼び出しに  
応えるべく工房を後にするのであった。

「お待たせしました橙子さん」

「ああ、遅かったな高美。たかだか『強化』にどれだけの時間をかけているんだ」

いきなり辛辣な言葉を掛けられる。  
そう言われれば返す言葉もないのだが……。

「なんていうかすみません。本当、俺不器用で……」

自分で言っていて落ち込んでいく。  
自分でも最初歩といわれる『強化』の魔術に二週間もかかってしまっているのはどうだろう、と思っていたのだ。

それを他人に、しかも師匠に指摘されると本格的に自分の才能の無さに絶望してしまう。

「いや……なんだ、そのお前はよくやったと思うぞ？ うん、二ヶ月前まで素人だったお前がここまでこられたんだ。お前は誇っていると思う」

俺のあまりの無様さを哀れに思ったのだろうか？

橙子さんが微妙な顔でフォローを入れてくる。

が、俺にはそんな優しさすらも辛かった。

「…ありがとうございます。でも、本当今回の一件で自分の才能の無さにほとほと呆れました」

「いや、別にお前が落ち込んでいるから言ったわけではないぞ高美。本当にお前の成長には驚いている。アレだけの魔力、それを僅か二

ヶ月で制御するんだ。そのお前に才能がなくて他の誰に才能があるというのだろうか」

「そうですねよ高美さん。私には魔術回路はありませんけど、発火の魔術を起動するだけでも半年以上は掛かりました。ですから高美さんは十分才能があります」

橙子さんと鮮花さんの慰めに多少持ち直す。

「ありがとうございます橙子さん鮮花さん。はい。もう少し頑張ってみます」

「ああそうしろ。つたく、ちょっとした冗談だったのにここまで落ち込むとは思いもしなかったぞ高美」

「すみませんでした。ところで、遅くなってしまいましたが橙子さんが俺を呼んでいるってことでしたけど、何の用事でしょうか？」

「というかそもそもどうして俺が『強化』に成功したと判ったのでしょうか」

そう問うてみる。

「どうしてお前が成功したのか判ったか、だって？ ああ、それはあれだよ。お前の魔力が喚起された後いつもの大爆発が起ころなかったからな。『強化』自体は二週間前に成功していたんだ、それならば魔力制御さえ出来れば爆発は起ころない、故に成功したと判ったのさ」

「なるほど。それで、要件の方は？」

「ああそっちは大したことではない。次の指示を与えようと思ったんだがあいにく手が離せなくてね。だからこっちに来てもらったというわけだ」

「はあ」

確かに、珍しく橙子さんが忙しそうに仕事をしている。

今も俺と話しながらも図面に向かい続けているし…。

相当忙しいのだろうか？

「気の抜けた返事だな。……まあ良い。『強化』の修行はとりあえず自分で続けておけ、魔力の制御ができるようになったんだ、知識さえつけければ『変化』や『投影』も何れ勝手に使いこなせるようになるだろう」

『変化』 『投影』

どちらも『強化』魔術の上位魔術である。

『変化』は『強化』によってそのモノが持ち得ていない新たな機能を付け加える術だ。

『強化』がモノの持つ可能性を強化するものだとすれば、『変化』はモノに新たな可能性を付与する術だといえるだろう。

そして『投影』は『強化』と『変化』のさらに上位魔術だ。

こちらは元となるモノが存在しておらず、術者のイメージと魔力を用いてモノを現実に創り出す魔術だ。

こういうと万能の魔術に聞こえるが、世界はそのような幻想を許しはしないため魔力供給を止めればすぐさま霧散してしまう実体幻想に過ぎないらしい。

故に、失われてしまったモノを僅かな時間だけ用意するためにしか現在では使われていないのだとか。

……確かに、『解析』と魔力の運用さえどうにかなれば何れ使いこなすことが出来る魔術ではある。

どちらにせよ『強化』の延長線上でしかないのだから。

そう納得する。

「了解です。で、次は何を学ぶんですか？」

「次は結界を学んでもらう。何れお前は時計塔に向かうことになるだろうし、なにより自分自身の工房の結界を自分で張れないというのでは魔術師として話にならないからな」

「はい。それでは工房に向かいますが、どうやって修行をすれば良いでしょうか？」

「そうだな、今日は工房に向かう必要はない。今から渡す魔道書を読んで、適当な結界を作ってみろ。それが今回の課題だ」

そういつて机の中から分厚い魔道書を取り出してくる。

本自体が随分と古く、考古学的な価値すらも有していそつだ。

中をパラパラを流し見る。

……やっぱりというかなんというか、またしても日本語ではなかった。



今度は大陸系の書物だろうか？

うだ  
なんとか読むことはできそうだが、またしても時間はかかりそう

そう考えた俺は早速魔道書を持って事務所を後にする。

最近では工房で寝起きすることが多く、工房にはベッド替わりのソファーと自分自身の知識を纏めるための魔道書 大学ノート  
などが収められた本棚が設置されている。  
何気にポットとカップが置かれているあたり生活臭が漂ってくると思う。

そんなことを思いながらソファーに座り込む。

固めのスプリングは多少腰を痛めそうだが、それでもコンクリートの床よりはましだろう。

手元には当然の様に緑茶を用意してある。

橙子さんたちはコーヒばかり飲んでいますが、日本人としてはやはり緑茶が一番だと思うのだが……。

まあ人様の趣味趣向に関してどうこういえるような偉い人間でもないが、そう完結して意識を魔道書へ向ける。

改めて見ても古めかしい本だ。

おそらくは大陸系の書物。

洋書にはない東洋らしさがにじみ出ている。

字はおそらく中国語。

結果ということだからインドかどこかにあった原典の写本なのだろう。

そんなことを考えながらページをめくり始める。

……少し読んだだけでもかなり難解な内容である。

が、何時ぞやのように全く読むことが出来ないというわけではない。

挫けそうになる自身に気合を入れる。

それでは学習を開始しよう。

\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*

気がつけばお日様が昇って降りてを三度繰り返していた。  
つまりは三日間もの間魔道書を読み続けていたらしい。

……本格的に自分自身がおかしくなってきたような気がする。

そんな風に内心おののきながらお手製の魔道書に視線を走らせる。  
俺お手製の魔道書　　大学ノート　　には様々な走り書きが残されている。

『結界』。

本来は聖域を守るための境界線であつたらしい。  
所謂鎮守の森や鳥居などが該当するのだろう。

結界は境界そのものに意味があるものと結界内部に効果が現れるものがある。

土地、建物などのもとからあるものに手を加える、魔力で編んだ網を土地に張ってその内部に手を加えるなどの、いわば地形魔術。

因みに、結界による攻撃は間接的な干渉になってしまうため、魔力を纏っている魔術師への効果は薄いようだ。

ここ数百年では術者を守るためのモノとして定着している。

などと纏まりのない文章で書きなぐられている。

最後に、　　所謂バリアー　　などと書かれているが、書いた俺は馬鹿なのだろうか？

そんなこんなで、とりあえず結界の基本について学び終えた俺は橙子さんからの課題　結界術式の作成　を行うことにした。

術式の作成とはいってもさして難しいものではなく、既存の術式を組み合わせることによって望んだ効果を発揮する結界の術式を構築するだけである。

今回読んでいた魔道書にも幾つかの術式が記載されていた。

それは大別して『遮断』『掌握』の二つに分けられる。

『遮断』とは文字通り何かを遮断するモノを指す。

例えば対象からの干渉を『遮断』することで術者を保護する結界や、音や光などを『遮断』することで認識を阻害する結界などである。

これの最高峰は空間遮断になるようだが、今の俺には使いこなすことは出来ない類の術式なので置いておく。

次に『掌握』。

これは文字通り空間を掌握するモノを指す。

例えばその結界内の生命を掌握することで対象を攻撃する結界や、結界内の認識・法則を掌握することで外界からの干渉を防ぐ結界などがある。

これの最高峰は世界そのものを掌握し、自身の心象風景を具現化する固有結界らしい。

当然のことながら行使することは今の俺には出来ないし、何らかの才能のようなものも必要らしい。

これらの中から術式を選択していく。  
まずは音を遮断する術式を選択する。  
そして光を遮断する術式、認識を遮断する術式、音を偽装する術式、  
光を偽装する術式、認識を偽装する術式。  
そして結界そのものの魔力を遮断する術式、異常を正常に偽装する  
ための術式。

これらを組み合わせると一つの術式を構築していく。

術式の構築というのは所謂数式の組み合わせのようなものだ。  
aという術式とbという術式を組み合わせる際には、その二つを結  
ぶための法則を四則演算から選び、独自に組み合わせしていく。

もちろん、数学でいうところの四則演算は例えでしかないものの、  
あなたがちハズレというわけではない。  
aという術式とbという術式、これらを

a + b  
a - b  
a \* b  
a / b

のいずれかの形で組み合わせ、新たな術式をさらにつなげていく。  
そうして出来上がった術式は複雑に入り組んだものとなっており、  
術者術者によって組み合わせ方が異なるために全く別の術式へと変

貌していく。

こうして、術としての完成度や流派ごとの術式の違いなどが誕生していくのである。

これはなにも結界の術式に限った話ではなく、魔術全般にいえることである。

そういうわけで、古来より術式の効率化というのは積極的に行われ続け、現在ではある程度のフォーマットというものも出来上がってはいる。

が、フォーマットがあるということはそれだけポピュラーな術式であるということであり、それに対向するための術式も当然の様に多く存在している。

故に、今回は自分自身の感性に任せて術式を構築していくのだ。

なんてことを思いながらも腕は動かし続ける。

術式の効果、必要な魔力量などを慎重に計算していく。

.....

.....

.....

……

……

……

…

そうして、ようやく術式が完成した。

多少魔力消費量は大きいものの、それは俺にとって余り意味のないことであることだし、術式の強度や効果には見合っているはずだ。

術式を自己評価しながら工房の床に術式を刻んでいく。

今回は丁度良い素材がなかったため、何時ぞやのルーンの修行の際に貰ったナイフ　魔杖　で指先を切り裂き……訂正、切り裂くことは出来なかったので自身の歯で噛み切る。  
指先から流れ出る血を以て術式を構築していく。

そうして、術式を刻み終え、いざ起動するという段になって橙子さんを呼んでおいた方が良くということに気がついた。

俺は慌てて工房を抜け、階段を駆け上がる。

事務所横の台所では幹也さんがコーヒートを淹れていたがスルー。



事務所の扉を開ける。

「橙子さん！ 結界の術式が完成しました。今から起動するので見ていただけませんか？」

開口一番口にする。

事務所の中には橙子さんの他に式さんがいた。

「なんだ高美か。随分と引き籠っていたようだが………そうか、もう出来たのか」

思っていたより早かったな

そう呟きながら橙子さんが立ち上がる。

「それじゃあお願いします。もう術式の設置まで終了しているのであとは起動するだけです」

「そうか、それじゃあ採点タイムというところか」

そういつて事務所から工房へと向かう。

橙子さんは工房へと向かう傍ら、コーヒーマシンを淹れている幹也さんに、

「黒桐、コーヒーは下の工房まで持ってきてくれ。私は今から少し工房に向かう」

と告げていた。

工房へと到着し俺は早速術式の最終調整に入る。

……最終調整とはいつでも術式に不備がないか確認するだけではあるのだが。

そんなことをしているとコーヒーをもった幹也さんとそれについてきた式さんが現れる。

「ふむ、勢揃いだな。喜べ高美、ギャラリーが多ければ多いほど失敗した際のフォローは多くなるぞ」

どの口が言うのだろうか。

おそらくフォローしてくれるのは幹也さんだけ、橙子さんはあからさまにバカにするだろうし、式さんは無表情な侮蔑という高等技術を魅せつけてくれることだろう。

なんて先程までのハイテンションは一転、妙に緊張しながら術式の起動に入る。

「それでは橙子さん。いきます」

そういつて魔術回路を起動する。

銃弾には魂を、銃身には肉体を

起動する回路の数は3。

流しこむ魔力量は200。

術式への魔力供給を開始……………成功。

術式の起動を確認。

力の循環を構築。

想定効果の発動を確認。

全工程終了。

「起動できました。どうですか橙子さん？」

テストを母親に見せる小学生のような気持ちで橙子さんに問いかける。

かかってないほどの手応え。

術式は完璧だったし、魔力の制御も完璧だった。

さて、評価はどうだろうか？

「……………驚いたな。お前は結界に才能があるらしい。……………小川マンシヨンの件といい因果を感じないでもないがな」

そう橙子さんが呟く。

予想以上に高評価らしい。

「…合格ですか？」

「そうだな、私でも起動する場面を見ていなければこの結界を認識することは出来なかっただろう。……合格だ。まさかここまで才能があるとは思わなかった」

「……べた褒め過ぎて怖いんですが、本当に本当ですか」

「疑り深いな、本当に本当だ。多少魔力消費量が大きいのが気になるが、機能や隠匿性はなかなかのものだ。………そういえばお前は第三の具現だったな、精神はともかく存在としては完成しているのだから結界に適正があって当然といえば当然なのか？」

後半はよく聞こえなかったものの、とにかく本当に褒められているのだる理解して急激になにかがこみ上げてくる。それは感動だったり感謝だったりと色々と混ざってしまっているものだったが、

「ありがとうございます」

そう自然に口にしていた。

そんな風に想いを噛み締めていると、前方から　バチンツ　と　いう音がしてくる。

何事だろう、と疑問に思い顔をあげると興味深そうな顔をした式さ

んが結界に触れて『殺して』いるところだった。

なるほど、式さんの直死の魔眼なら結界くらい殺せるもんね……  
…って式さん!?

「あの、式さん？ 何をなさっているのでしょうか？」

「んあ？ ああ、荒耶宗蓮が連れていた結界はよく観察出来なかったからな、折角だonnaもんかよく『視て』おこうと思ってな」

『視て』いるだけならよかったものの、式さんのアレは明らかに『殺して』いる。

「式さん。折角作ったんで『殺さ』ないでくれませんか？」

「いや、殺しても殺しても出てくるから別にいいだろ、これ」

そう、結界は施設した術式が無事ならばパスを通して俺から魔力を供給することで何度でも再生するように調整してある。

つまり、式さんがいくら表層の結界を『殺し』たところで術式自体が無事ならば何度でも蘇るのだ……魔王のごとく。

だからといって、折角作った結界をおもちゃか何かのように『殺さ

れ」るのはあまりいい気はしない。  
が、別に悪意があるわけでもないのに式さんに強くいうことも出来ない。

そんな俺を見かねたのだろう幹也さんが式さんをたしなめる。

「だめだよ、式。高美くんが一生懸命作った結界？なんだから。それよりも上で一緒にコーヒを飲まないかい？ここは隙間風が入ってきて寒いしね」

そついつて式さんの肩を押す。

普段にはない強引さを発揮した幹也さんにたじろいだ式さんは、そのまま幹也さんに工房から連れだされていった。

俺と橙子さんだけが残される。

「さて、この結界に関してだが、先程も言った通り合格だ。結界に關しては私以上に才能があるらしい。正直、ここまできちんと理解されていると私がどうこう教えることはないだろう」

気持ち悪いくらいのべた褒め、しかし悪い気はしない。

「あとは…そうだな。次は私の専門である人形作りについて教えてやる。が、そのためには多少準備が必要だ。だから暫くの間は今ま

で教えたルーンと『強化』、そして結界の修行を続けている」

そういつて足早に工房を出て行く橙子さん。

身体を震わせていたところを見ると工房が寒かったらしい。

……先程幹也さんも隙間風が云々いつていたが、確かにこの工房は寒い。

何故なら、本来四方を守っているはずの壁のうち一面は既に存在していないからだ。

……そう。何時ぞやの『アンザス』暴発事故で吹き飛ばしてしまったあの壁だ。

一月も終盤。

寒さも本格的になってきた今日この頃。

この工房はおそらく氷点下にまでなってしまうのではないだろうか？

そんな事情もあつて、寒さごときではどうにもならなくなってしまった俺以外の面々は、温かい事務所へと避難していつてしまった。



工房を見渡す。

思えば印象深い場所ではある。

自分が今の自分として初めて目覚めた場所であるし、修行が始まってからは半ば自分の部屋のようにならなっている。

殺風景　　自業自得だが　　ではあるものの妙な愛着すら湧いてくる。

そんなことを考えつつ、最近根を詰めすぎて精神的な疲労が溜まってきた俺はソファーへと歩み寄り、その身を投げ出した。

硬いスプリングが全身を押し返してくる。

多少硬すぎるくらいはあるものの、休むには十分だろう。

そこまで思考した俺は徐々に思考を放棄してゆく。

そうして、おねは、かりそめのたびじへと、おもむくのであった。

## 第十四話（後書き）

こんにちは。

朝大学へ向かったら祝日ということで授業がなかったTG09です。

……今回のお話、少しだけ俺TUEEEEの片鱗をだしていきま  
した。

が、以前上げた設定を読み直してみると現在の高美よりも数段上の  
実力になっている予定だったばいことが判明しました。

なんていうかアレです。

臨機応変。

それで行こうと思います。

次回は人形作りと使い魔づくりを行ないます。

使い魔と行っても擬人化とかそういうのはありませんので悪しから  
ず。

因みに、使い魔といえば猫とカラスどちらが良いでしょうか？

そんな感じです。

前々回のアンケート？でお聞きした件ですが、？     ロンドンでツ

ンデレ     ルートで行くことにしました。

答えてくださった方はありがとうございました。

それでは。

## 第十五話（前書き）

難産。

話が割と崩壊というか滅茶苦茶です。

そついうのが嫌な方は『戻る』を押ししてください。

## 第十五話

現在、2月に入って約一週間。  
工房に籠って約二週間が経過した。

工房で一人延々とこれまでにならった魔術の復習を続けていた俺だが、結果はともかく、ルーンや『強化』に関してはあまり成長は見られなかった。

結果はおそらく一人で工房の構築くらいは出来ると思われるが、ルーンは精度が低く、『強化』は『変化』に辿り着いたりつかなくなったりと安定しない。

そんな風に進歩があるんだかないんだかよく判らない修行を続けていた俺をよそに、伽藍の洞では少しだけ異変が起きていた。

なんでも式さんが久しくマンシヨンの方へ帰っていないらしく、それを探し回っていた幹也さんも痺れを切らしたのか橙子さんにいつて休みをとり、ずっと式さんを探し続けているらしい。

どうして式さんが行方不明になったのかは不明だが心配である。  
いや、式さんがどうこうなるような状況というのも余り想像出来ないのだが、女性であることだし、なによりアレだけの美人さんである。

万に一つでもあれば大変だ。

が、考えようによっては幹也さんにも見つからないということは式さん本人が逃げ回っているということだろうし、実は本気で心配は

していない。

……橙子さんも認めている幹也さんの『捜しモノ』から逃げ続ける式さんもすごいが。

そんなこんなで、伽藍の洞は妙に寒々しい空気をまとっているのがある。

……物理的にもそうなのだが。

そんな風に近況を思い返していると久しぶりに橙子さんが工房へと降りてきた。

最近は何が一人で習熟すべき段階にあるとかで魔術書の類の受け渡し以外ではあまり顔を合わせていなかったのだ。

久しぶりに見た橙子さんの顔は当然のことだが余り変わっていないかった。

幹也さんや式さんのことも全く心配していないように見える。

『魔術師は身内には甘いんだよ』なんて言っていた橙子さんがそういう態度をとっていることに俺は疑問を覚えた。

「お久しぶりです橙子さん。直接会ったのは………3日ぶりでしょうか？」

「そうだな……あぁ3日ぶりだ」

「お元気そうですね。…ところで、式さんや幹也さんの件はどうな

「つたんですか？」

「さあな。何の連絡もないから元気にやっているんだろう。ほら、昔から言うだろう『頼りがないのは元気な証拠』と」

「そうですね…。式さんが行方不明になっっているのに心配ではないんですか？ 幹也さんが見つけることが出来なくても、魔術でダウジングでもすれば見つけれそうなものですが……」

暗に『どうして動かないんだ』という不満を混ぜる。

おそらく俺のそんな考えなどお見通しなのだろう。

橙子さんはタバコを啜えたまま妙に遠い目をして、崩壊した一角から外を眺めて語りだした。

「心配はしていないし、探すこともしない。そもそも式が自ら飛び出していったんだ、なんの心配もいらないうささ」

「それはそうですが、幹也さんが探して見つけれないというのなら式さんが何らかの事件に巻き込まれた可能性だって……」

「ああ。事件には巻き込まれているだろうさ。というか、式自体が飛び込んでいったんだ。3年前の精算だよ。まあ式と幹也の物語の山場でもあるかな」

「事件に飛び込んでいったって…。それはそれで心配すべきだと思いますが、物語の山場ってどういうことですか？」

そう尋ねる。

遠い目をして語っていた橙子さんはこちらをまっすぐに見つめ、再び語り始めた。

その顔にあるのは……懐古だろうか？

「山場ってのは式と幹也の『自分のあり方としての山場』ってやつだよ。あいつらの関係は色々とおかしい。式は異常を究めたような奴なのに対し、幹也は平凡すぎるほどに平凡だ。」

「割と失礼なこと言ってますね」

そうツッコむ。

が、確かに言われてみればそうではある。

式さんは曰く、「」に繋がった人間で直死の魔眼なんていう伝説級の魔眼を有しているらしい。

対して幹也さんはなんの異能も持たず、特別な才能や外見を持っているというわけでもない。

……まあ捜し物に関しては異能じみているが、ここでいう異能とは方向性が違うので置いておく。

そんな二人が相思相愛でありながらもつかず離れずの微妙な状態のまま漂っている。

……確かにおかしいといえばおかしいのだろうか？



本来『異常』とは『正常』と相容れないゆえの『異常』だ。にも関わらず式さんと幹也さんは交わろうとしている。

そんな理想<sup>ユメ</sup>。

本来在り得るハズがないと理解しているであろう式さんが幹也さんから離れられない矛盾。

式さんを幹也さんが離さない幸運。

確かにいつかどこかで精算しなければならぬ時が来るのだろう。そういつた意味での『山場』。

つまりはそういうことか。

「まあ、でも橙子さんの言いたいことも分かります。鮮花さんには悪いですけどあの二人ってお似合いですもんね。……アンバランスですけど」

「アンバランス……そうだな。式は自分が異常だとこれ以上ないくらいに理解している。そのくせ幹也なんていう普通を求めているんだ。今回の一件、式なりに思うところがあって事件に飛び込んでいったんだろう」

まあ本人が自覚しているのかは分からんがな　そう締めくくる。

確かにそうであるのなら俺や橙子さんは介入して良いたぐいの話ではない。

式さんと幹也さんが抱えていた矛盾。それを精算しようとしているのならば当事者以外が立ち入って良い類の話ではない。

「だからこそその静観ですか？」

「そうだ。まあ荒耶みやいなおかしのが介入しているというのなら話は変わってくるが……今回の一件は式の因縁みただいな」

「なるほど」

橙子さんのタバコが燃え尽きる。

橙子さんは新たなタバコを取り出し、口に咥えながら話題を変えてきた。

「それよりも、だ。修行の方はどうだ？」

「ええまあボチボチといった感じです」

「またえらく曖昧だな。今朝一番で注文していた機材が届いたから人形作りを教えてやろうと思ったのだが……それならば先に修行の成果を見せてもらおうか」

「了解です」

そういつて結界の術式を刻んでいる床へと移動する。

最初は橙子さんが構築したこの結界だが、修行の一環として結界を自力だけで刻み直したために現在工房内には四力所に同一性能の結界が刻まれている。

因みに、俺が移動したのは最もぶち抜きの壁？から遠い結界だった。一応、俺が術式から再構築したもので、きちんと起動することだけは確認している。

……レベルの方は判らないが。

そんなことを考えつつ陣の中に完全に入り込む。

「それではまず結界の起動からしてみる。みたところこの結界もお前が刻んだものようだし丁度良いだろう」

そういつて橙子さんが鋭い目を向けてくる。

久々の実演。

緊張が喉奥からせり上がってくる。

「それではいきます」

そういつて魔術回路を起動するため自身にもぐり始める。

一種の自己暗示。

この段に至っては先程感じていた緊張などどこかへ吹き飛んでしま  
う。

それほどまでの深い集中。

これなくして魔術など夢のまた夢だ。

魔術回路を起動する。

銃弾には魂を、銃身には肉体を

自己暗示の呪文を呟く。

自身を作り替えていくイメージ。

自分が作り替えられていくイメージ。

俺という人間が、俺という魔術師へと変貌する。

さあ準備は整った。

それでは修行の成果を見せつけてやろう。

……大して進歩していないが。

## 第十五話

「微妙だな」

俺の修行の成果を一通り見ての橙子さんの第一声がそれだった。確かに、自分でも自覚していたので反論はないのだが、それでももう少しオブラートに包んでくれば、とか思わないでもない。

……まあ結果は変わらないのだが。

「かろうじてルーンは進歩しているようだが……まあ腕が落ちてい  
なかつただけよしとしよう」

確かに。

ルーンについては多少式が純化したような気がしないでもない。というか、橙子さんは僅か数年でオリジナルの純度に近づけたというのだからその優秀っぷりが信じられない。

『強化』に関しては辛うじて『変化』の領域に辿りつきそうというレベル。

具体的には球体が楕円形に見えなくもないモノへと変わる程度のレベル。

これでは進歩しているとは到底言いがたいだろう。

なにせ普通の魔術師の数倍の密度で修行しているのだ。

……時間的な意味で。

それでこのレベルというのは本格的に才能がないのかもしれない。

そう自分で考え、自分で落ち込む。

それを誤解したのだろうか？

橙子さんが俺に慰めの言葉を投げかける。

「まあ気にするな。魔術師の家系でもない第一世代がここまで出来ているんだ、とりあえずは十分だろう」

「……ありがとうございます。でも魔術ってあれですね。修行したら修行しただけ先が長くなるというか……」

そう愚痴る。

それに対して橙子さんは自嘲するような哀れむような声で笑う。

「フツ。そうだな。魔術師というものは絶対に辿り着けない場所へ永遠に歩き続ける愚か者たちの総称だ。その感覚を得られたということはお前も立派にその一員ということだよ」

「……………」

「これから本格的に魔術を修行しようという者にいう言葉ではなかつたな。……………それにお前の場合は何故か辿りついてしまったらしいしな」

さて

妙に重くなった空気を払拭するように橙子さんが殊更明るく言う。

「それでは人形作りの方に移ろうか」

「はい」

橙子さんの発言に乗る。

あの重たい空気を脱却したいという思いもあったし、それ以上に人



形作りに興味があつたからだ。

「人形作りといつても技術的な指導に関しては行つつもりはない。それは芸術とか感性の問題だからな」

いきなりそう宣言する橙子さん。

…それでは何を教えてくれるのだろうか？

「お前に教えるのは人形作りの目的と基本的な手段だ」

「はい。お願いします」

そういつて頭を垂れる。

そんな俺を見ながら橙子さんはカバンの中を漁りだした。

アレは……粘土？

橙子さんが取り出したのは見たところただの粘土に過ぎない様に思われた。

「橙子さん。それは…粘土ですか？」

「そうだな…まあそのようなものだ。今からお前にはこの粘土を捏ねて人形を作ってもらおう」

「人形…ですか？」

「そうだ。人形だ。この粘土はある特殊な加工がしてあつてな。元はホムンクルスなどの肉体の欠損を補うための生体パーツなんだが、その特性上魔力で形を整えながら整形してやれば自由に形を作り替える事ができる」

「なんだかスゴそうですが。……万能細胞のようなものですか？」

「そうだな。一度人形として起動してしまえば形を変えることはできなくなるが、起動する前であればいくらでも作り替える事ができる。人形師の修行にはもってこいの素材だよ」

まあ多少値は張るがな

なんて不吉なことをいう橙子さん。

……………ごめんなさい幹也さん。今月も給料は厳しそうです。

いつか幹也さんにお返しをすることを心に誓いながら橙子さんの話の続きに耳を傾ける。

「とにかく習うより慣れろ、だ。まずは何でもいいから人形を作ってみろ。……………ああ、心配するな。お前に芸術的センスは求めていないから安心するといい」

こちらの内心を見透かされたのだろうか？

美術の授業で常に3だった俺にとってこういう創造的な試みはあっていないと思うのだが…。

とにかく、橙子さんもああ言っていることであるし、笑われること覚悟で作ってみよう。

そう決めた俺は橙子さんから粘土を受け取る。

さて、何を作ろうか？

粘土の大きさは二十センチ四方程度。

これで人間を作れというのも酷な話だと思つのでなにか動物だろうか？

……そう例えば鳥とか。

そう考えた俺は頭の中から鳥の映像を取り出していく。

……今さら今更なのだが、俺は写真記憶を習得？していたらし

い。

こんな存在になってからあまりにも学習効率が高いのでおかしいな  
と思っていたのだが、見聞きしたことは勿論。

その時の空気の状態、雨の一粒一粒の形、感情や感覚……。  
などなど一切合切克明に思い出すことが出来るのだ。

橙子さん曰く、  
記憶は脳に保管される訳ではなく、魂に刻まれ  
ていくものだ。肉体の枷から解放されたお前は普通の人間がそうで  
あるように肉体の記憶の限界に縛られることもない。肉体がないの  
だから当然だがな

とのこと。

つまり、肉体が存在するが故の『銘記』『保存』『再生』『再認』  
という記憶のシステムの限界 有り体に言えば記憶の劣化など  
をとっばらってしまったということらしい。

ここまで俺スゲーと自画自賛の嵐だが、結局何が言いたいのかとい  
うと、創造はともかく記憶にあるものの再現なら割と得意だとい  
うことだ。

なにせ頭の中に完全ともいえるビジョンが存在している。

あとはこれを現実に取り出してやればよいのだ。

まあ、如何にして頭の中から取り出すかは……… 美術の成績3の俺  
にお任せということぞ。

そんなことを考えながら手を動かし続ける。

作り出すはムクドリ。

思い出すのは近所の公園の池で見た姿。

それを可能な限り忠実に再現していく。

丁寧に丁寧に。

少しずつし上げていく。

顔を汗が伝う。

それが目に入り

俺もまだ汗をかくんだ

じる。

と場違いな驚きを感じる。

汗を拭って粘土に集中する。

ディテールを正確に。

あの飛んでいた際の躍動感を少しでも顕せるように。

一筆入魂とでもいうように丹念に作り上げていく。

そうして、時間にして二時間。

遂に人形第一号『ムクドリさん』が完成した。

我ながら素晴らしい出来だと思っただが、橙子さんの評価や如何に

！？

そんな感じで橙子さんの方を振り返る。

手の上には『ムクドリさん』。

俺の顔には満面の笑み。

妙に気分が高揚している。

かつてない最高傑作を作り上げられたからだろうか？

『ムクドリさん』を橙子さんの方へ突き出したまま下を向いて評価を待つ。

が、いつまで経っても橙子さんからの反応がない。

疑問に思った俺は妙なテンションを落ち着けて顔を上げる。

と、目の前には

いねむり している とうごさんの すがたが!!!

「なんでやねん！」

あまりにもあんまりな展開に妙なツッコミを入れてしまう。

まさか眠ってしようとは……というより、さっき『ムクドリさん』をさし出していた俺は相当に間抜けな構図に成っていたのではあるまいか？

そんなことを考えながらも視線は橙子さんを観察し続ける。

規則正しく上下する薄い胸。

とはいっても両手を組んでいるために妙に胸が強調されている。

静かに呼吸を繰り返す唇。

とても瑞々しくプリっとしていてなにかの果実のようだ。

壁に寄りかかっているからだろうか？

髪が僅かに肩にかかり、反対側からはうなじがのぞいている。

……結論、妙にエロイ。

なんていうか無防備過ぎると思うのですが。

暫く眺めていたものの、色々と危なくなってきたので橙子さんを起こすことにする。

橙子さんの肩に僅かに手を乗せ、揺すってみる。

「……橙子さん？ 橙子さん？ 出来ましたよ、人形出来ました」

そう言いながら暫く揺すっていると橙子さんのまぶたが震え始める。

「うんーうん……。んっは！ 私は寝ていたか？」

橙子さんの寝起き顔に萌えながらも質問には答える。



「そうですね。少しだけ眠っていたみたいです。とりあえず人形が出来たので出来を見てもらおうと思ったんですが……大丈夫ですか？」

「ああ、少しだけ寝不足だったようだ。……それよりも作品の方を見せてみる」

暫くこめかみを揉んでいた橙子さんは意識を切り替えたかのように師匠の顔に戻る。

少しだけ残念な気がしないでもない。

そんなことを思いつつ『ムクドリさん』を橙子さんに見せる。

フッフッフ。

この『ムクドリさん』は自信作ですよフロイライン。

さあ！評価や如何に！？

やっぱり少しだけ妙なテンションで橙子さんの評価を待つ。

暫く俺が作った『ムクドリさん』を眺め回していた橙子さんは微妙そうな顔で

」  
「30点」

とそう短く告げた。

「…え？ いやかなり自信作ですよ？ 結構忠実に作ったつもりだったんですけど…」

「まあ、確かに外観はそれほどひどいというわけではない。芸術性はないものの、少なくとも見た目だけならそこそこ上手く出来ていないわけでもない……まあそれでも上手いとホめるほどではないがな」

かなり厳しいコメントをいただく。  
確かに、頭の中のモノを現実に具現化するというのはかなり難しかったが、そこまで酷評されるほどだろうか？

「不満そうだな。まあディテールつてのは現実に追いつくのが最低条件だ。お前の場合はそこにすら辿り着いていないのだから要修行ということだ」

仕方なしに納得する。

「まあ、それなりの素材を使えば人形に宿す魂の形に自動で形を変えさせる素体を作ることが出来ないこともないが……そういうのはどっかで専門的に学ばなければならぬからな」

なるほど。

そんなに便利なものがあるのか　そう感心する。

そういえば式さんの片手もそんな感じだったということ思い出す。きつとああいうものかを言っているのだろう。

そんなことを考えていると橙子さんが問うてくる。

「ところで、造形はともかく、何故ここまで点数が低いかわかるか？」

造形はともかく　というところに引っかからないでもないが、今は低得点の原因を考える。

……造形はともかくということとは形の問題ではないのだろう。  
それではなに？

……芸術性？

そんなモノを求められても困るのだが…。

そこまで考えて　お前に芸術的センスは求めていないから安心する  
るといい　と橙子さんがいつていたことを思い出す。

つまり芸術性でもないということだろう。

それであと考えられるのは……色？

色塗りを忘れたからだろうか？

なんとなく違うとは思ったものの、他に答えが見つからなかったためダメもとで答える。

「え〜と、色塗りを忘れたからですか？」

「……………はあ〜」

橙子さんが重い溜息をつく。  
やっぱり駄目だったらしい。

「やっぱり違ったんですね。……………それで、答えは何なんですか？」

「判らないなら判らないといえればいいんだ」

そういつて一息入れる。

橙子さんが吐き出した煙が俺の方へと漂ってくる。

……………というか、橙子さんは何時タバコを吸ったのだろうか？

そんなことを考えていた俺に橙子さんの解説編が始まる。

「お前の……は特殊だから私でいい。私の身体の中には何が入っている?」

いきなりそんな問を投げかけられる。

身体の中に入っているもの……なんだろうか?

「え〜と、橙子さんの身体の中に入っているものは……夢と希望?」

ついつい先程の眠っていた橙子さんを思い出して反射的に答える。

「……………」

「……………」

「……………」

「すみません。わかりません」

ため息すら吐かれることのない沈黙が痛くて素直に謝る。

流石に夢と希望はまずかったか?

「はあく。どうしたんだ高美。今日のお前はどうかしているぞ。……まあいいだろう、答えは内臓だ」

「内臓？」

確かに身体の中には内臓があるが、人形の話とどうつながるのだろうか？

「正確には内臓や筋肉、骨、血管、神経などだ。先程の素体はともかく、普通の人形を自律的に動かそうと思えば通常の生命と同じような機構を作り上げる必要がある。魔力を用いて人形を動かし続けるという手段もないではないが、それには器用さや魔力制御なんかも必要になるからな」

なるほど。確かに。

外見だけのハリボテが動くことはありえない。

人形を動かすためには動くだけの機構を備えることが必要であることは自明の理である。

が、完全に医学とか生物学とかの領域だと思っただが。

普通の人形師は皆そんな知識を有しているのだろうか？

そんな疑問を橙子さんにぶつける。

「いや、そんな精巧な人形を作るものはあまり居ない。ある程度動くだけの機構を組み込んだ後、魔力や術式を用いてそれを補助する

のが普通だ」

「ですよ。流石に全てを再現するなんてあまりにも難しいですし」「そういうことだ。歩くためには骨格と筋肉、そして筋肉に命令を伝える神経さえあればあとはある程度までつくり込むだけでいい。他の場合も同様だ」

「なるほど。つまり俺の人形の評価が低かったのは中身について一切考えられていなかったからということですね？」

「そういうことだ。とはいっても、最初から中身まで作られるとは思っていなかったから想定通りといえば想定通りだ。まあ中身に関しては一朝一夕ではどうにもならないだろうからな、医学書やらなんやらを読んで知識を蓄積していくしかないだろう」

つまりは前途は多難ということか。

が、であるならばこの後は何をするといいのだろうか？

流石に生物の内部構造なんて今すぐにどうこう出来る問題ではないし、素体とやらも作ることは出来ない。

さっきの粘土だって橙子さんの話から考えれば人形を作る上での心構え？というか基本を教えるためだけに利用されたようだし。

……ぶっちゃけ詰んでね？

「あの、橙子さん？ もう出来ることがないような気がするのですが、この後は何をしますか？」

「そうだな。人形作りの方はお前の要研究ということで、人形を作り上げてから先のことを教えていこう。つまりは起動だな」

「はい……ところで起動ってなんですか？」

「起動というのは謂わば人形に命を吹き込む作業のことだ。正確には生命力である魔力と魂を注入してやることなんだがな」

そう言われて理解する。

確かに、動くことが出来る機構が完成したところでそこに魂が宿らなければ人形は何時まで経ってもただの人形に過ぎない。

そこに命を吹きこんでやることで一種の魔術生命として確立する必要がある。

が、一つだけ疑問がある。

確かに魂がなければ生命として確立できないが、魂を扱うすべを確立したものはほとんどいないということではなかっただろうか？

そう橙子さんに尋ねる。

橙子さんは ああ と納得したように語り始めた。

「確かに魂を扱うことが出来る魔術師というのは極端に少ない。というかほとんど存在しないだろう。が、単純な霊体ならいくらでも扱うことができるからな。魂というから誤解させたが実際には自然霊を人形に封じることその人形を起動するんだ」



なるほど。

確かに意思の曖昧な自然霊を人形という方向性の中に入れてしまえばその形に引きずられることだろう。

「まあ自然霊なんてものを扱う以上高度な知性を持った生命を作ることには出来ないがな。人間やその他高度な知性を持った生命を作る際には実際に人間を生贄に捧げたりする場合もある」

人間を生贄……。

血の匂いのしない魔術師は半人前というが、俺は暫くは半人前でいたい。

流石に生贄とかそういうのは現代日本で生きる俺の価値観からは難しいが故。

「とにかく、そうやって人形を起動してやるわけだ。それでは実際に起動を行ってみるか」

そういつて橙子さんが先程と同じ粘土で出来たと思われる猫を取り出す。

一見して本物と見分けがつかないほどの精巧さ。

自分の作った『ムクドリさん』が恥ずかしくなるほどの素晴らしさである。

「そこら辺にいた猫をモチーフに作ってみた」

そう言われてその猫を良く見つめてみる。

柔らかそうな毛がふさふさしている。

体躯的に子猫だろう。

おそらく品種は………メインクーン？

「可愛いですね。それで、これからどうすれば？」

「そうだな、この猫の人形を『強化』する要領で魔力を収束させてみる。それからここにある術式を起動させてやればいい」

そういつて工房の床を指差す。

そこには確かに何かしらかの陣が刻まれていた。

「わかりましたやってみます」

「そうしろ。魔力は自然霊を集めるための謂わば撒き餌だ。その撒き餌によってきた自然霊をそこに刻まれた術式で人形に叩き込む。どうだ？ 簡単だろう？」

そう言われるとかなり悪質な誘拐の様にもきこえるが……。  
まああまり気にしても仕方が無いだろう。

そう開き直って人形と共に術式の中に入り、魔術回路を起動する。

銃弾には魂を、銃身には肉体を

人形を解析する。

解析してみると分かるが、外見の精巧さだけでなく中身の精巧さにも驚かされる。

もしかして、橙子さんが居眠りしたのはこれを徹夜で造っていたからではあるまいか？

そんな思考が走る。

……今は施術中だ無駄な思考は省いておこう。

再度解析を開始する。

一瞬のうちに人形の全貌を把握し、所謂隙間の位置を全て把握していく。

そして隙間に破裂する一歩手前の魔力を注ぎこんでいく。

……自動で起動するように設定されていたのだろうか？

魔力を撒き餌として機能させるための術式が走り始める。

周囲を見渡せばなにやら人魂のようなものが人形に収束していくの

がわかる。

少しずつ少しずつ。

魔力に引き寄せられるように段々と集まってくる。

まだ足りない、まだ足りない。

まだ足りない、まだ足りない。

まだ足りない、まだ足りない。

.....

.....

.....

.....

.....

...

「今だ！」

橙子さんの声に反応して詠唱を開始する。

「術式確認、接続開始……………接続完了。」

抽出準備、収束開始。

10・9・8・7・6・5・4・3・2・1…0

収束完了。

続いて固定化を開始。

一部外部術式を引用、 の調整開始……………完了。

再度外部術式を引用、魂の 化を開始……………成功。

霊体と肉体の固定を開始……………完了。

魔術回路接続開始……………同調成功……………レイラインの構築を完了。

全工程終了」

確かな手応え。

なんとなくできそうだからと組み込んだ術式も無事成功した。  
おそらく文句なしの出来栄だろう。

そう考えて、集中のために閉じていた目をゆっくりと開ける。

周囲にはマナの残滓が漂っているもののじき晴れるだろう。  
橙子さんが目を開ききっているが今はスルー。

目の前の人形だったものに目を移す。

そこには、かわいらしい、こねこさま、が、いた。

「にゃくん？」

………っは！

あまりの可愛らしさに一瞬我を失っていた。

とりあえずこちらを見上げている子猫を抱え上げる。

そして何故か未だに呆けている橙子さんへと向かい合う。

「あの橙子さん。一応成功したみたいですが。………あのどっかしましたか？」

実は割と心当たりがあるもののそう惚けてみる。

「お前、さっきは何をした？」

「なんのことでしょうか？ 俺にはさっぱ」「魔法を使ったな？」

……まあそういう考え方も無いわけではないというか……」

厳しい顔でこちらを睨む橙子さん。

………そういえば橙子さんって魔法嫌いだったっけ？

「あの、無神経でしたか？」

「そうだな。ヒトの目の前で魔法を限定的とはいえ行使するとは……

……遠まわしに私を殺すといっているのかと思っただぞ」

なるほど、魔法云々ではなく人前で使ったことに怒っていたのか。  
………っていつか橙子さんを殺すようなことがあるだろうか、いやない。

それだけはキチンと伝えておく。

「俺が橙子さんを害そうとするなんてありえませんよ。橙子さんには本当に感謝しているんです」

「………そっそうか。……まあ良い。とにかく、人前でそれは行使するな。文字通り価値が下がるからな」

「わかりました」

「ところで、だ。さっきの追加術式だが……アレは何だ？」

「はい。さっきのはアレです。自然霊だと粗があるようだったので霊体を一つに纏めて調整して一つの魂をでっち上げました」

「なんとかアレだな……………うんアレだ」

「なんだか失礼なことを言われているように感じるのは間違いではないだろう。」

「まあいい、問題はないだろう。ところで、その猫だが…………一応きちんと出来ているようだな。人形との契約も出来ているし、使い魔としても十分使っていけるだろう」

「使い魔？ さっきの術式は人形に命を吹きこむだけじゃなかったんですか？」

「そう問いかける。」

「橙子さんは人形に命を吹き込むための術式だと説明していたはずだが…。」

「確かにそうだがな、自立にしる傀儡にしる新たに生まれた生命には術者が命を送り込み続けなければならない。そのために半ば自動的に使い魔契約も含まれるというわけだ」

なるほど。

確かに、術者が最初に注ぎ込んだ命　魔力　がなくなれば、その魔力で活動している人形　生命　の活動も停止するのは自明の理だろう。



故の使い魔契約。

レイラインを通すことで術者から人形に恒常的に魔力を流し続け、生命を維持するということだろう。

が、この猫。

別に魔力を送らなくても生命として自立しているような気がするのだが……。

そう橙子さんに聞いてみる。

「そうだな。確かになにやら自身で魔力を生成しているように見える……。おそらくはあれだろう。自然霊を宿しただけでなくきちん」と魂としての体裁を整えたために魔術回路が構築され自身の肉体を維持するのに必要な魔力を生成しているのだろうさ」

なんとのご都合主義。

まあ仮に魔力を送りつづけなければならなくなってもおそらく送っていたとは思っただが。

「この人形はお前にやろう。……まあ生命として独立した人形なんて最早人形でもなんでもないんだが」

「ありがとうございます。それじゃあ名前を付けてやらなきゃですね」

そういつて人形もとい猫に目を向ける。

俺の手の中で丸くなっている子猫は、起動前の粘土色から茶色と黒のソリッドが入った毛並みへと変わっている。

…… エイズ フト装甲と同じ理屈だろうか？

こっ、起動したら色が付く的な意味で。

そんなことを考えつつも名前を考える。

猫といえば…… タマ？

いやいや流石に安直すぎるし、なによりあまり似合っていない。

それでは…… レオ…… コテツ…… そもそもこいつはメスだ!!

…… モモ…… ナナ…… ココ…… メイ…… メイ？

こいつメインクーンみたいだし、なにより可愛らしい気がする。

「メイ、お前の名前はメイでどうだ？」

子猫にそう話しかける。

すると子猫は俺の腕に顔を押し付けるようにしてくる。

使い魔契約の影響だろうか？

なんとなくコイツのうれしそうなのが伝わってくるような気がする……

「よし、ならお前は今日からメイだ。俺の名前は杯門高美だ、これからよろしく頼む」

そうして 片側通行の 名前交換が終了する。  
名前の交換は契約に於いて重要だったことだしな。

そんな俺達？のやりとりを見ていた橙子さんがこちらが終わったことを察して話しかけてくる。

「終わったか。…………… ちょっとした想定外はあったが概ね今日の内容は完了だ。時間が時間だし今日の修行は終了しよう」

流石に日が落ち始めて寒くなってきたからだろう。  
橙子さんが白い息を吐きながらそう告げてくる。

「了解です。今日もありがとうございます。因みに、次は何をすればいいんでしょうか？」

「…………… そうだな、これから少し忙しくなるから修行を見てやれる機会が減るだろう。これからは今までやったことの反復と…………… あとはそうだな人形の中身を作れるように医学書でも読み込んでおけ」

そう告げると橙子さんは足早に工房を立ち去る。

工房には俺とメイの一人と一匹だけが残される。

ブルリ

腕の中にいるメイが震える。

使い魔とはいえ肉体も魂も正真正銘の子猫。

流石にこの寒さは厳しいのだろう。

そう考えた俺は久々にソファーと毛布を引っ張り出しそれに横にな

る。

そして腕の中にメイを抱え込み毛布をかぶる。

これで少しでも寒さが和らげばよいのだが

震えるメイを見ているとそう思わずにはいられない。

そんな俺の気持ちの流れでいったのだろうか、メイがつぶらな瞳で俺を見上げてくる。

「にゃん」

そう一声鳴いて小さな身体を一生懸命俺に押し付けてくるメイ。慰めてくれているのだろうか？

そう考えると妙に温かい気分になる。

メイの体温が愛惜しい。

俺はこの小さな生命をこれから守っていかねばならないのだと

実感する。

そこまで思考した俺はメイが夢の世界へ旅立ちそうになっているのを見た。

目を細め、全身の力を抜いて俺の腕に抱きついてくる。

その様が異常なくらいに可愛らしい。

俺はメイを起こさないようにそっと毛布をかぶり直す。

そして、久々の眠りへと旅立つことにした。

## 第十五話（後書き）

なんだかんだで過去最長の長さになりました。

今回は難産なんてレベルじゃねーぞ、って感じでした。

書き終えた今でも場面展開が急だとか、文章が色々おかしいとか感じるのですがどのように修正すれば良いのか皆目見当が付きません。

……いつものことですが。

今話、これから先パートナーもとい癒し系になっていく使い魔のメイを登場させました。

使い魔はもとより、人形の設定に関しても多大な独自解釈や独自設定をふくんでいます。

というか、自分で書いていて意味が分からない！！

そんなわけで、人形や使い魔に関して致命的なミスがあればどなたか教えてください。

今回はリアルがヤバくてかなり遅くなってしまいすみませんでした。

まだまだ先は長いですがこれからもどうかお付き合い下さい。

それでは。

## 第十六話（前書き）

独自設定・独自解釈が多発します。

そういうものが受け入れられないかたは『戻る』を押ししてください。



## 第十六話

幹也さんが倒れた。

より正確に言えば左目を不審者に潰されて入院することになったらしい。

小川マンシヨンの件では両足を切られ、今度は左目を潰され、普段は橙子さんに弄られ……これを機に少し身体と心を休めて欲しいと思う。

……因みに、心配していないというわけではない。

とりあえず命に別状はないと知っていたからこそだ。

2月11日。

巷で噂になっていたらしい殺人鬼と式さん、幹也さんは出会ってしまったらしい。

……正確には殺人鬼も式さんも幹也さんもそれぞれがそれぞれを追いかけていたらしいので、出会ってしまったというよりは出会うべくして出会ったらしいのだが……。

そんなこんなで、出会った殺人鬼と式さんは殺し合い、幹也さんは左目をつぶされたらしい。

俺がそれを最初に聞いたのは橙子さんからだった。

なんでも、事件直後幹也さんの携帯電話から事務所の方に連絡があったらしい。

その電話を受けたらしい橙子さんは工房でメイと戯れていた俺を引っ張って倉庫街へと赴き、そこで血まみれの幹也さんと式さんを発見したというわけだ。

二人の近くにはバラバラの肉塊が落ちていた。

それを認めた瞬間俺は吐いてしまい、自分のことだけで精一杯だったため後から聞いたのだが、あの肉塊は白純里緒……巷で有名な殺人鬼だったとのこと。

式さんの魔眼で殺されたため完全に『死んで』いたらしい。

普通、殺人事件が発生すれば警察に真っ先に警察に連絡する幹也さんが警察ではなく橙子さんに連絡したのは式さんが白純里緒を殺してしまったかららしい。

……いくら幹也さんが式さんに惚れているからといって、そんなものを見逃すというのは考えにくいのだが、なにかしらか幹也さんの中で変わったのだろうか？

その後、死体と良く判らない植物は橙子さんと俺が全て燃やし尽くし、証拠隠滅を行ったあと橙子さんの伝手で幹也さんは市内の病院に入院することになった。

幹也さんは約三週間の入院が決定した。

因みに、病院から戻ってとりあえず一息淹れていた俺と橙子さん、式さんだったが、その休息は長く続かなかった。

血相を変えた鮮花さんが伽藍の堂に飛び込んできたからである。

なんでも、橙子さんに連絡を受けた途端学園のシスターを突破して無理やり外泊許可を取ってきたとのことだった。

伽藍の堂に飛び込んできた際の鮮花さんの形相はそれはもう凄かった。

美人さんが怒るととっても怖いというが、まさに言葉通り。

壮絶な怒りをたたえた鮮花さんは幹也さんに面会が出来ないと知るか否や伽藍の堂へ向かったらしい。

そうして、飛び込んでくると同時に式さんに掴みかかり、押し倒した後罵詈雑言といっても過言でない言葉を浴びせ続けた。

最初のうちは黙ってそれを受け入れていた式さんだったが、元々がそんな質の人でなかったからだろう。

途中からは式さんも反論を始め、口喧嘩を始めてしまっていた。

……後半は幹也さんのケガの責任の所在云々よりも式さんの惚気の方へ怒っていたような気がしないでもなかったが。

……幹也さん、殺人鬼　白純里緒　の肉塊の横で告白するか男前すぎます。

なんでも、幹也さんは式さんを一生離さ　許さ　ないらしい。

式さんは無表情を装おうとしながらそういつていたが、顔の紅潮は全く隠せていなかった。

珍しく口元には笑みがたたえられていたし……。

それを聞いた鮮花さんはどこから取り出したかごつい手袋をはめて式さんに殴りかかり、式さんは当然のようにそれをいなしていた。

途中からは鮮花さんの拳に文字通り火が入り始め、俺は急ごしらえの結界を張るはめになった。

そして、メイを連れて自分の工房へと避難した。

……女性同士、まして式さんと鮮花さんの喧嘩は冗談抜きで危険だ。死なない俺はともかくメイのほうは殺されれば死ぬのだから当然だ。

工房でソファアーに横になる。

おねむだったメイは俺の腕の中で丸くなり、うつらうつらと眠りに落ちていった。

メイが眠るのを見届けた俺は、メイ分を補給し、メイと同じく眠りの世界へと堕ちていった。

因みに、鮮花さんと式さんの喧嘩は夜明け前まで続けられ、式さんではなく鮮花さんが病院で幹也さんの世話をすることということで落ち着いたらしい。

ケガをした幹也さんというのはお門違いであると判ってはいるが、敢えて言いたい。

このリア充め！！ 爆発しろ！！ と。

## 第十六話

そんなこんなで今日は3月7日。

幹也さんの退院の日である。

結局、式さんは幹也さんのお見舞いに行くことはなかったようだが、あれからも時たまやってくる鮮花さんと仲良くじゃれ合っていた。

……まあ鮮花さんからすれば愛すべき人を奪われたようなものだ。

元から鮮花さんのものであったことなどないというコミコミは色々  
とマズイので自重するが。」

因みに、今日は幹也さんの退院日であるが、俺と橙子さんは現在伽  
藍の堂の事務所でコーヒーを啜っている。  
メイは俺の膝の上でお昼寝中だ。

「もう幹也さん退院しましたかね？」

「そうだな、おそらくそのうちやってくるだろう。それにしても、  
式の奴は変わったな」

「そうですね。なんていうか、こう、やってらんねHぜって感じで  
す。幸せいっぱいというか……」

「ひがむな高美。お前にもいつかいい出会いがある……といいな」

「ひどいですよ橙子さん。俺にだって……メイがいます」

「……」

「……それよりも、鮮花さんですけどやっぱり幹也さんのところ  
でしょうか？」

「だろうな。まあ判らんでもないがな。……限りなく勝率は零だろ  
うが」

そう、現在俺と橙子さんは伽藍の堂で幹也さんをまっているのだ。式さんは当然のように幹也さんのお出迎え。最初の内は鮮花さんも伽藍の堂で待っていたのだが、色々と抑えきれず出ていってしまった。

故に二人。

馬に蹴られたくなかった俺と橙子さんは待機中というわけだ。

「それよりも、最近の橙子さんはなんだか忙しそうでしたが何かあったんですか？」

「ああ、それはな……」

コーヒを一口啜った橙子さんは

「そろそろ旅に出ようと思ってな。色々と準備をしていたんだ」

なんて爆弾を投下した。

「へっ？ 旅…ですか？ どちらへ？」

「いや旅行とかそういうのではなくな。……少しここに長居しすぎたようだからな、またどこぞ新しい土地を探してみようと思ってる」

なんてことをさらりと告げる橙子さん。



つまり、伽藍の堂を引き払ってどこか別の場所へ移るといことだろうか？

「つまり引越しですか？ でもどうしてですか？ 別にわざわざ引越さなくたって……」

「私は封印指定の魔術師だ。流石に一箇所にとどまり続けるのは危険だからな。……居心地が良かったから長居してしまったが、本来はもっと早く別へ移るはずだったんだ」

それは俺という弟子を拾ったからだろうか？

それとも別の？

そう問いかける。

「それはアレだ。お前や鮮花を弟子にとったということもあるし、式たちの結末を見届けようなんて老婆心を出したというのものもある。まあここが気に入っていたというのも強いがな」

「そうですね。……ところで何時出発を？ 俺も準備しなきゃですし……まあ持つべきものなんてほとんどないんですけど」

自分の言葉に苦笑する。

今の俺が持つべきものなんてメイ以外にはほとんど無い。唯一服くらいのものだろうか？

そんな俺に橙子さんが告げる。

「ああ、その件だな。……お前を連れて行く気はない」

「へっ？」

我ながら間抜けな声が出たと思う。  
つまりはどういうことだろうか？

俺ってもしかして捨てられる？

無一文かつ戸籍もない俺が橙子さんから見捨てられたら、メイと一緒にダンボールに入って誰かが拾ってくれるのを待つ以外に生きていくすべはない。

だれか拾ってください 的な意味で。

そんな俺の絶望？を見て取ったのだろう。

橙子さんが苦笑しながら俺の誤解を指摘する。

「早合点するな。別にお前を放り出そうというわけではない。……

…私自身魔術に関しては特化している部分があるからな、ここらで  
一つ、お前に時計塔への留学を勧めようと思っていたんだ」

「はあ」

「幸いなことにお前は魔法使いなんていうVIPだし。時計塔にはあのバカ女もいる。おそらく在籍するのは比較的簡単に成功するだろっ」

だからここらで行って来い

そう告げられる。

確かに、言われてみれば最近は何の修行といえは反復練習ばかりだった。

ここらで一つ、魔術の最高学府と呼ばれる時計塔で本格的に魔術を学んでみるというのもいいのかもしれない。

「どうだ、興味はあるか？」

「そうですね……………はい。もしも可能ならば行ってみたいです」

「そうか、ならば手続きの方は私に任せろ。善は急げだ。4月にここを引き払うと同時に倫敦へ飛んでもらおう」

「はい。判りました」

「良い返事だ……………で、だ」

そういつて橙子さんが真剣な目で俺を見つめてくる。

なんだというのだろうか？

こんな顔をした橙子さんというのは大抵俺を叱るときなのだが…。

そう身構えていた俺に橙子さんが告げる。

「これから約一ヶ月、お前には魔術師としての心構えを叩き込んで

やるつ。

メイの起動の際にも思ったが、お前は自身の持つ力、お前という存在の重要性を全く理解していない。

お前が魔術師の道を歩まないというのならば多少の忠告だけでもまそうと思っていたが、魔術師の総本山・時計塔へ向かうんだ。

最低限利用されないように心構えだけはしっかりとしないでほらないからな」

そう断言する橙子さん。

……いわれてみれば、書物で『魔術師とは常に己を律し、殺すもの』や『魔術は隠匿するもの』なんて言葉を覚えはしたがきちんと意識して行動したことはない。

いくなれば今までの俺は魔術を研鑽のため、上の位階に登るためではなく、単純に興味の延長、手段として扱っていたように思われる。……いくなれば魔術師ではなく魔術使いだろうか？

そんな俺がこれから向かうのは時計塔。

魔術師がひしめく魔都・倫敦だ。

確かに心構えだけはしっかりしていたほうが良いのかもしれない。

そう納得した俺は橙子さんの言葉に　是　と答えていた。

「そうか、時間がないからな。ビシバシとスパルタ方式でいくが付いてこられるか？」

「大丈夫です。むしろ橙子さんの方こそ付いてきてください」

「よく言った……吐いた唾は呑めぬと思ひ知らせてやるっ」

そういつた橙子さんの顔は怪しく歪んでいた。

……少し早まったかもしれない。

その後悔してももう遅い。

俺は打ちひしがれながら無意識にメイを撫で回す。

…最近は無意識でメイに癒しを求めるようになってしまっている。

「にゃん？」

急に撫でられて驚いたのだろう。

昼寝をしていたメイが起きてこちらを見つめてくる。

「ごめんなメイ。起こすつもりはなかったんだが……無意識に撫でていたみたいだ」

「にゃう〜ん？」

俺の顔を覗き込んでいたメイは俺を励ますかのように俺の腕に顔を押し付けてくる。

……ああ、可愛い。

正直、お持ち帰りしてしまいたい。

まあ、お持ち帰りもクソも一緒に生活しているのだが。

そんな馬鹿なことを考えていると、事務所の下の方が騒がしくなってきた。

おそらく幹也さんたちがやってきたのだろう。

そう思って橙子さんに目をやる。

橙子さんも同感のようだ。

俺はメイを抱えたままドアの方へ向かい、幹也さんを出迎えることにした。

そして暫く、式さんにつっかかる鮮花さんの声とそれをなだめる幹也さんの声が聞こえ始める。

俺はドアを開け、幹也さんたちの到着をまつ。

そうして…

「こんにちは橙子さん、高美くん。お久しぶりです。無事退院できました」

「ああおかえり」

所長用の椅子に座ったまま橙子さんが幹也さん迎える。

「お久しぶりです幹也さん。……そういえばこいは始めてでしたね。俺の使い魔になった子猫のメイです。……ほら、メイあいさつして」

「じゃ」

橙子さんに続いて幹也さんに挨拶をする。

そうして、メイと幹也さんが初対面であることを思い出し、メイに挨拶を促した。

すると、メイはそっぽを向いたまま前足をピシッとあげ、挨拶？をしてみせた。

「ははは。可愛い子猫だね。挨拶もできているし、うん賢い子だ」  
そういつて笑う幹也さんは後ろで言い争いをしている鮮花さんと式さんをおいて自分の席へと着いた。

「僕が居ない間に仕事が溜まったんじゃないですか？ 病院でしっかり休んできたので体力は十分です。バリバリ働きますよ！」

退院したばかりだというのに幹也さんは妙に張り切っているようだ。式さんの様子を見るに、二人の仲は進展したようだからそろそろ給料三ヶ月分を渡そうとでも考えているのだろうか？

「だけどそれって……………」。

「ああ、仕事の方はほとんど全て処理しきっている。お前の出番は今余り無いぞ」

「へ？ 橙子さんが全部こなしただんですか？」

「そうだ。なにか問題があるか？」

「いえ、無いんですけど。無いということが今は少し問題というか」

「おかしな奴だな……………まあいい。そんなわけで今日はやってもらいたいことも特に無い」



だから今日は帰って休め

そう告げる橙子さん。

幹也さんは何か引つかかっているような顔をしていたが、結局は橙子さんの言葉通り帰って休むことにしたらしい。

「それでは、今日は帰らせてもらいます。それではまた」

「ああ、それじゃあな。病み上がりなんだ、気をつけて帰れよ」

「……………随分とまた優しいですが、どうしたんですか？」

「……………失礼な奴だな。純粹な厚意だよ」

「わかりました。それでは。高美くんもまた明日」

「はい。幹也さんもあまり無理をしないようにしてください」

了解

なんて少しだけおどけながら幹也さんは美少女二人をお供に事務所から出て行く。

そうして、事務所のドアが閉められようかというタイミングで。

「そついえは黒桐。伽藍の堂は今日で閉店だ。明日からは仕事がないから来る必要はないからな」

「?」

なんて爆弾を投下した。

……… 勿論、その後ドアは閉められることはなく、幹也さんたち相  
手の事情説明会となったのは言うまでもないことだ。

## 第十六話（後書き）

こんにちは。

第十六話を投下しました。

後一話程度を挟んで倫敦編へ行こうと思っています。

今回の話は伽藍の堂終了のお話でした。

次回は倫敦へ向かう高美に魔術師としての心構えを叩き込んでいきます。

感想やご指摘、ご質問等があれば感想の方へお願いいたします。  
それでは。

第十七話（前書き）

色々グダグダな話。  
今回はちょっとグロイかも。

## 第十七話

目の前には額を撃ち抜かれた赤髪の女性。

匂いなどがぐことが出来る状態でもないというのに、むせ返るような血のおいを感じる。

それほどまでにここは、血と惨劇で彩られていた。

つい今しがた、拘束された状態で額を撃ち抜かれた女性は未だに額の孔から盛大に血をブチマケ続け、四肢は痙攣を続けている。

ビクン、ビクン、ビクン

ビクン、ビクン

ビクン、ビクッ

そうして、暫く痙攣を続けていた身体は遂に停止し、額の噴水もその勢いを止めた。

なぜこうなってしまったのだろう

そんな思いが脳裏を埋め尽くす。

このような悪夢。

このような非日常。

俺はただいつもの様に起床し、いつもの様に勉強し、いつもの様に散歩に出かけ、いつもの様に……あれっ？

そこで記憶は途絶えてしまっている。

「気分はどうだ？ ……とはいっても、答えることなんて出来ないと思うがな」

先程女性を撃ちぬいた男がやってくる。



男は骨と皮で構成されている様に細かった。  
頭髪は所々抜け落ち、かなり年がいつていることを窺わせる。  
その身には物語に出てくるようなローブじみた布を纏っていた。

こいつは誰だろう？

俺と親しかったであろう女性を殺した男。

何故か記憶は曖昧になっているが、あの女性はきつと親しかったはずだ。

それを、無残に、冷酷に殺した……………。

俺には大層な魔眼なんてないけれど、可能な限りの殺意を込めて男を睨みつける。

絶対に殺してやる　と。

その意思だけでも呪いとなるように願いを込めて。

が、その想いは男が腕に抱いていたモノを見て絶望へと変わった。

男の腕には見覚えのある子猫が……。

確か、そう、あの子猫は俺の家族だったはず。

名前は……メル？

違う……メ……メ……そう、メイだ！

何故忘れてしまっていたのだろうか？

メイは俺の大事な家族だったはずだ。

本格的に記憶がおかしい。

何者かに介入でもされているのだろうか？

そんな逃避じみた思考を自覚する。

両手両足はおろか、言葉を発する自由さえ無い今の俺には、男が成すであるう凶行をただ眺めていることしか出来ない。

「これに見覚えはあるか？ ……いや、別に答える必要はない。公園でお前が手に抱いているのは確認したし、なにより、直に手渡されたモノだ。間違えようはずもない」

……俺がああ男にメイを渡した？

………？

記憶を探ってみてもこんなに怪しい男は出てこない。  
先程から何者かに記憶を弄られているような気がするので、純粹に忘れさせられているだけなのかもしれないが……。

メイを誰かに渡すことなどありえないと思うのだが…。

記憶を走査する。

該当件数一件。

…もしか、あの時の男の子だろうか？

が、目の前の男の様に大きくはなかったはずなのだが…。

「ああ、なるほど。この姿ではなかったな。……簡単な幻術だったのだが、思いのほか簡単にかかってしまったな。魔法使い相手ならばと、秘蔵の魔道具まで持ち出していたのだが……所謂うれしい誤算というやつか」

幻術。

つまり、あの男の子はこの男だったということだろうか？

……まあそれはいい。

今更そんな事実を告げられたところで現状がどう変わるわけでもない。

それよりも、メイをどうするつもりなのだろうか？

「コレには実験のための生贄になってもらう。勿論、コレ自体もおかしな構成をしているようだし研究に使わせてもらうがな」

そう告げた男はメイをフックのようなものへと吊るす。

……全く反応しないということは意識を失っているのだろうか？

そんな風に、これから起こるであろう惨状から逃避する。

そんな俺をあざ笑うかのように、男は、

「が、この身体はいらないな」

そういって、一気に、メイの

りょうつて、りょうめし、を、ひき、ちぎった。

「えっ？」

予想は出来ていたはずなのに、俺の頭は一瞬で真っ白に漂白される。

いま、あいつ、は、なにを、した？

痛みに意識を戻されたのだろう。  
メイが絶望的な鳴き声を上げる。

「これも、いらん。これもだ……」

そんなメイの鳴き声など全く聞こえていないかのように、男は淡々とメイを解体していく。

両手両足をもぎ取った後は腹をナイフで切り裂き、内臓を丹念にブチマケ始める。

丁寧に、丁寧に、丁寧に。

一片も残すまいとでもいうかのような偏執さでそれら全てをぶちまける。

.....

.....

.....

.....

...





今なら救えるかもしれない。

両手両足はおろか指一本すら動かすことが出来ない俺だが、膨大な魔力を以て、俺を拘束しているこれを破壊すればあるいは………。

そう考える。

銃弾には魂を、銃身には肉体を

自己への埋没はほぼ一瞬。

一刹那の思考よりも疾く魔術回路を起動し、魔力を練りあげる。

数値にして3000。

通常の魔術師の総容量の実に100倍。

それだけの魔力を全て物理干涉へと変換し、周囲に存在する枷を全て吹き飛ばす。

そう、吹き飛ばそうとした。

が、枷はビクともしない。

どころか、こちらへの拘束をより強めていく。

「クッ……」

死ぬことはありえないが、それでも強力な締め付けに声が出る。

そんな俺の状態に気がついたのだろう。

やはり男は無表情で、

「それは混沌の渦だ。『何物にも成らない』性質を持つ『混沌』を練に練りあげて創り上げた捕縛結界。いくらお前が魔力を持っているようが、そもそも何物でもないのだ。破ることなど叶わぬぞ」

と言った。

魔術師の性だろうか？

こちらの疑問を察した男は淡々とそれだけ説明するとメイの解体を再開した。

為す術も無い事態に打ちひしがれる。

唯一絶対のアドバンテージともいえる魔力は役に立たず、同様に魔術も行使できない。

肉体は指一本動かさず、泥から目だけが覗いている状態だ。

完全に詰んでしまっている。

俺は、無残にも毛をむしりとられ、丸裸にされたメイが次なる解体を行われていく様を、眺め続けることしかできない。

男はなにやら液体の詰まった瓶にメイの胴体だけを漬け込み、一瞬の後引き上げた。

「……………はっ？」

実際には音は出ていないだろうが、内心そう呟く。

目の前の光景が意味不明すぎて、何が起こったのか全く理解することが出来ない。

男が掴んでいたメイには、

くびから、した、が、なかった。

「首から下は必要ない。必要なのは脳と脊髄だけだ」

そういつてメイの首と、そこから垂れ下がる紐のようなモノをホルマリン？がつまった瓶の中へと封入する。

瓶の中でぶかぶかと浮かぶメイの首。

その瓶はなにやら不可思議な装置へとつながれている。

さらに、驚くべきは、首だけの状態のメイが未だ生きていることだ  
ろっか？

俺の中からつながるレイラインは確かにメイへとつながり続けている。

つまりは、未だ生きている。

そこまで、無意識に思考した俺は、自身の思考が段々と鈍っていくのを自覚した。

俺の常識から外れたことが多すぎる。

親しかった女性は俺を守るために死体となり、メイは生きたまま標本にされた。

あまりにもおかしい。

おれのせいかいはこんなはずではなかった。

だってそうだろう？

こんなにふじんなげんじつがりあるなわけがない。

「そうだな、タカミ・ハイモン。これは悪い夢だ。お前は眠ってしまえばまた日常へと帰ることが出来る。だから今は全てを私に委ねて眠れ……………」

どこからかおとこのこえがきこえてくる。

……………ねむれば、また、もとにもどる？

……………そういえば、かあさんもいつていた。

……………あくむは、ねむれば、いつか、おわるって。







……  
……そんな、ゆめを、みた。

第十七話

「これで何回目だ、高美」

橙子さんは開口一番呆れたような声でそう告げた。

……………状況がつかめない。

……………っは！ そうだ、メイ、メイはどこだ！？

錯乱しながら目を周囲へと向ける。

すると……いた。

寝そべっている俺のすぐ横で丸まって眠っている。

「ああああ。メイ、メイ、メイ！！ 良かった。本当に良かった  
！！」

周りには橙子さんと鮮花さんがいたような気がするが、恥も外聞もなくメイを抱きながら号泣する。

生きている。

メイは生きているのだ。

暫くはそうしてメイを抱いていた俺だが、暫くすると冷静になってくる。

先程の夢。

いや、あれは夢だったのだろうか？

夢にしてはリアルに過ぎるし、きちんと五感も存在していた。

……まあ、あんな現実にはゴメン被りたいのだが、それでも妙に納得  
がいかない。

「……記憶に不備でも出たか？ 存在が存在だから出来る限り  
強力なものを使ったが……これは早まったか？」

俺の様子を観察していた橙子さんがそう呟く。

「記憶って……なんのことですか？」

「はあ……。高美、私たちが何をしていたのか覚えているか？」

「……………」

首を傾げる。

先程のものが夢であったのなら、俺は眠っていたはずだし、橙子さんが俺の睡眠に干渉してくるとは思えないのだが…。

添い寝でもされていたのだろうか？

もしかして、もっと大胆なことも……………！？

自分でもアホな思考だと自覚する。

が、先程のシヨックから抜け出すための役にはたったようだ。

俺は段々と目覚めてきた頭で現状を再確認していく。

現在俺がいるのは伽藍の堂にある工房だ。

目の前には呆れ顔の橙子さんと心配そうな顔をした鮮花さん。

崩壊している壁を見てみると空が紅く染まっているので、現在は早

朝か夕方なのだろう。

そして、俺自身。

妙に仰々しい幾多の魔法陣の中心に横たわっている。

複雑奇怪なその文様は、俺の知識では何を目的としたものなのか判別できない。

……状況を見るに、俺を対象とした魔術の実験を行っていたようなのだが。

そこまで考えて橙子さんを見つめる。

正直なところこれ以上は思い出すことが出来なかった。

「ふ〜。……鮮花、この寝坊助に状況を説明してやれ。……まだ寝ぼけているみたいだからな」

「はい、橙子師。……高美さん、今まで私たちが何をしていたか、どこまで覚えていますか？」

？

正直なところ何一つ思い出すことが出来ない。

なんとなく喉元まで出かかっているような気はするのだが……。

「そうですか、では順を追って説明しますね」

そういつて鮮花さんはこれまでの経緯を説明し始める。

……

……

……

……

…

つまりは、いついつとだるうつか？



魔術師としての、そして魔法使いとしての自覚があまりにも無い俺を見かねた橙子さんは、荒療治として幾多の暗示を組み合わせ、俺に魔術師としての自覚を叩き込もうとしていた、と。

……言われてみればそうだった気がする。

いや、きっとそうだった。

確かにそうだった。

今朝は早くから橙子さんと二人、工房に籠って橙子さんが俺に暗示を掛け、フィクションの状況を幾つも体験しながら、魔術師としての心構えを叩き込まれていたのだった。

たしか、そう。

鮮花さんが来たのは昼の三時頃で、鮮花さんが来てすぐ暗示を掛けられ……あの夢？を観たのだ。

「……思い出しました。確かにそうでしたね」

「ああそうだ、因みに、この特訓を始めて一週間。これで通算40回目の失敗だ」

そう、この暗示。

橙子さんが想定した状況を舞台として、魔術師としての心構えを問われるような幻覚を強制的に俺に見せ、それに俺がきちんと対処できるかどうか見る特訓だったのだ。

「……さすがにここまで続くと呆れる他ないな。……今回の失敗の原因を聞く前に、もう一度確認しておこう。魔術師とはなんだ？」

「了解です。魔術師とは……」

『魔術師』

文字通り魔術を用いる者のことを指し、研究が第一のヒキコモリ。一子相伝で研究の成果を継承していき、いずれ「へと到達することを目的としている。」

その研究の過程では 人道的 などという言葉は存在せず、ただ果てを目指すことだけが至上命題となっている。

魔術師を監督する『魔術協会』も、魔術師が法を犯そうが人をいくら殺そうが、それが表に露見しない限りは動くことがないため非人道的な研究も規制されていない。

つまりは、究極のマッドサイエンティストの集団ということだ。

「……そうだな。魔術師とは己を高めることだけに執着するものだ。つまりは常識など二の次……いや五の次と豪語するような連中ということだな」

そう橙子さんが言う。

……橙子さんが言うつとすごい説得力を持つのは何故だろう？

「で、だ。それを理解している高美くんに聞こうじゃないか。先程の状況で、お前が犯したミスはなんだった？」

そう言われて考えこむ。

……先程の状況。

時間設定は約4カ月後。  
場所は魔術師の総本山にして最高学府、時計塔のあるブリテン島は  
倫敦だ。

俺は時計塔への入学を一ヶ月後に控え、魔術や英語の学習をして生活していた。

最初に出てきた赤毛の女性に関してはよく覚えていない。  
たしか護衛がどうか……きっと大したことではないだろうから、  
いまは置いておこう。

とにかく、一日の大半を勉強で過ごしていた俺は、メイを連れての散歩が日課となっていた。いつもと同じ散歩コース。

その途中の公園で出会った少年に『抱かせてくれ』と強請られてメイを抱かせ……そこで意識を失ったのだ。

その結果が先程の悪夢である。

そこまで考えて気分が悪くなった俺は、頭を横に振って意識を切り替え、橙子さんに言われてみたことを考えてみた。

「男の子にメイを抱かせたことでしょうか？ ……いや、それとも意識を奪われたこと？」

考えつくのはその程度のものだ。

が、橙子さんはその答えがお気に召さな方らしい。

「は。他にもあるだろう。というか、あれだ。そもそも、あんな爺が使ったような簡単な幻覚に引っかかった時点でもうダメダメだ。あそこで子どもがおかしいと気がついていれば後の悪夢は避けることができたというのに……」

そういつて再度ため息を吐く橙子さん。

が、俺にだって言い分がある。

「でも、橙子さん。あんな子どもが魔術を使っているなんて普通気が付きませんよ。そもそも、俺には相手の魔術をみやぶるなんてことは出来ないんですから」

そんな俺の反論を聞いた橙子さんはますます呆れたような顔になる。

「そんな訳があるか。お前の目は弱いとはいえ魔眼だ。魔術の痕跡くらい意識を凝らせば十分見破れるし、そもそも、魔力量の桁が違いお前は強力な対魔力を持っている。にも関わらずあんな子ども騙しの魔術にかかるなんていうのは、お前の意識がたるんでいるからだ」

388

……… なんとというかアレだ。

一の反論には十の反論というか…。

言われていることはどう仕様も無いほど正論なので言い返すことも出来ない。

確かに、言われてみれば魔眼で魔術の痕跡くらい発見できるし、今現在だって、ここに敷かれている大規模な魔術式は俺に幻覚を見せるために橙子さんが敷いた大魔術だ。

つまり、そうでもしなければ暗示すら掛けられないほど俺の対魔術

は強力なはずなのだ。  
にも関わらずあんな子どもだまし　　橙子さん曰く　　に引つかか  
ってしまったのは、偏に俺の意識の付け込む隙が大きかったからだ  
ろう。

「つまりだ、なんとも言おうようにお前には意識があまりにも足りない  
ということだ。魔術師、まして魔法使いともなればお前のことを  
ホルマリン漬けにして研究したいと思うような奴は掃いて捨てるほ  
どいるだろう。時計塔の連中は特にそうだ」

グウの音も出ない。

事実、先程も架空ではあるものの魔術師に捕まって俺は勿論、メイ  
まで実験材料にされてしまったのだ。

流石に今回は色々効いた。

もしも俺にだけ被害がいくのなら諦めも出来ただろうが、今回はメ  
イも一緒だった。

……おそらく橙子さんの思惑通りの展開ではあるのだろうか。

「だから、だ。せめて相手がどのような意図でお前に近づいてくる  
のか、その程度は察することが出来るよういつでも最低限気を張っ  
ている。魔術師になるとは、魔法使いになったとはそういうことだ」

「……わかりました。俺だけでなく周囲にまで迷惑をかける訳にもいきません。以後気を付けます」

そういつて橙子さんを見つめる。

と、橙子さんの目が妖しく光ったような気がし「っ!!」

瞬時に目を逸らし、魔術回路を起動する。

と同時に意識を全力で護りに入る。

「上出来だ。今日の修行は終了しよう。流石に疲れたからな」

突然魔眼を俺にかけてきた橙子さんはそう笑って工房から出て行く。

おそらく…感覚からして意識操作の類だったのだろうが、かろうじて防ぐことが出来た。

今のように認識が間に合えば意識するだけで対魔力の恩恵に預れるし、一瞬で落とされない限り、大魔術であろうと魔力でむりやり押し流す事はできる。

つまりは、先程橙子さんが言ったことを早速実践出来ているかの試験のつもりだったのだろう。

……流石に心臓に悪いが。

とりあえずのところは合格をもらえたことにほっとしていると、未だ工房に残っていた鮮花さんが話しかけてきた。

「お疲れ様でした高美さん。先程は随分とうなされていたみたいですが……大丈夫ですか？」

その優しい一言だけで十分に救われる。

ああ、メガネなしの橙子さんにもこの十分の一でも優しさがあれば……。

なんてことを思う。



「いえ、ありがとございます。そう言ってもらえるだけで十分です。……………まあ、言ってみれば自分でまいた種ですし」

そういつて自嘲する。

ここ一週間。

色々なシチュエーションを橙子さんに体験させられてきたが、今回のものが最も堪えた。

流石にメイや周囲にまで被害が及ぶとは考えていなかったのだ。

……………少し考えればわかりそうものであるにも関わらず、だ。

「……………そうですか。でも、高美さんは本当に頑張っていると思いますよ。たった数カ月でここまで来られたんです。今回間違っただころは次また間違えない様にしましょう。今はそれでいいんだと思います」

「……………」

本当にいい人だ。

ぶつちやけ、勢いで色々と危ないセリフを吐きそうになるのをこらえる。

流石にそれは間違っているだろうし、俺自身それが錯覚であると理

解している。

「ありがとうございます。これからも頑張ってみます」

ところで、時間は大丈夫ですか

そう尋ねる。

確か、外泊する時は実家で寝泊りしていたはずだし、門限がどうか言っていたような気がするのだが……。

そんな俺の質問を聞いて急に不機嫌になる鮮花さん。

「あの、何かあったんですか？ 俺でよければ相談に乗りますが……」

鮮花さんの怒気を見て尻すぼみになる俺の言葉。

それに、怒気を必死で抑えているように見える鮮花さんが答える。

「ええ、今日は上で寝ますのでご心配なく。……それにしても兄さんも兄さんよ。………ついこの間までお父さんたちと喧嘩していたっていうのにあの女を連れて戻るなんて……」

私が言っても戻ろうともしなかつたくせに

段々と呟くような音量になった鮮花さんの言葉だが、最後の言葉だけは良く聞き取られた。

……つまりは、あれだ。  
所謂ご挨拶。

『お義父さん、お義母さん。お宅の息子さんとは清く正しいお付き合いをさせていただいてきました。

そしてこの度、息子さんと一緒にいたいと考え、参った次第です。

どうか、息子さんを私にください!!」

うん。

あれだ、ツッコミどころが満載。

……ご両親への挨拶なんてしたことがない俺にはこの程度が限界だ。そういうことにしておこう。

つまりはそういうことだろう。

だから鮮花さんはここまで不機嫌、と。

……なんといえはいいのだろう？

正直、俺の短い人生経験では太刀打ち出来ない問題なのだが。

……誰かを真剣に好きになったことも無いわけであるし。

そんなことを考えていると、

「……よしっ！…ごめんなさいね高美さん。みっともないところを見せてしまった。……というわけで、今日は上の事務所の方で寝泊まりします」

だから今日は眠らせませんよ？

そんなことを笑顔で言ってくる鮮花さん。

正直参りました。

いや、判っているんですよ？

これがジョークだってことくらい。

眠れないのが英語の勉強のためだってことくらいは。

……でも、でも、男ならそんなことを言われれば猛ってしまっ……！

……そうだろうっ？

「どごしたんですか？」

鮮花さんの声でぶっ飛んでいた思考が着地する。

そして、誤魔化すように、

「いえ、なんでも無いです。それよりも、早速勉強を見てもらっても良いですか？」

告げる。

「はい。それじゃあ上で準備してますから高美さんも勉強道具を持って上まで来て下さい。早速始めてしましましょう」

そういって工房から出て行く鮮花さん。

一人になった工房を見渡す。

ここに住むのも後僅か。

そう考えると感慨深く、妙に感傷的な気分になる。

それはおそらく、ここでの時間がとても濃く、そしてどう仕様も無いほど気に入っていたからなのだろう。

そんなことを考えていると、

「にゃくん、なあん？」

メイが声をあげながら、俺の肩によじ登ってくる。

そして、肩を滑り台の様に滑り降り、俺の両腕の中に収まった。

感傷的になっていた俺を慰めてくれているのだろうか？

言葉は判らないもののなんとなくそんな気がする。

「ありがとう、メイ」

その優しさに感謝を告げる。

そつだ、俺にはメイがいるし、橙子さんや鮮花さんとも今生の別れというわけでもない。

いつでも会いに来ることは出来るし、いつでも戻ってくることも出来る。

そう考えると、先程までの感傷も吹き飛んでゆく。

「そつだな。うん、そつだ」

確認するように呟きながらノート、辞書、筆記用具を集めていく。



「よし、メイ、行こうか。鮮花さんを待たせる訳にもいかないからな」

メイをしっかりと抱き直す。

準備したものは全て左手のバックの中に。

準備は完了した。

それでは行こう。

まだまだ先は長いのでから。

## 第十七話（後書き）

こんにちは。

色々とリアルで残念なことがあったTGO9です。

まあ身から出た錆ではあるのですが…orz

さて、今回の話。

高美に魔術師としての心構えだけでも教え込もうと悪戦苦闘する話でした。

本当は倫敦で本当に騙されながら自覚させていく予定でしたが、結局こんな形に。

因みに、高美の魔眼ですが、『見えないものを視ることが出来る』程度の魔眼です。

特別な効果はなし。

倫敦へいくまでに橙子が改造して、一般の魔術師が持つ暗示程度は行使できる魔眼になる予定です。

決して厨二な性能は存在しませんので悪しからず。

最近、最後の締めが難しく何度か書き直します。

こういうところで悩んでいると、他の作者さんの自然な幕引きを行う技量にに頭が下がる思いというか……。

そんな感じです。

今回の話は色々とグダグダしていた気がしますが、  
コミュニケーションや誤字  
脱字、感想などがあればお願いします。

それでは

## 第十八話（前書き）

この物語はTYPE-MOON作品の二次創作です。

多数の独自設定や独自解釈などが横行していますので、そういったものが受け入れられない方は『戻る』を押ししてください。

140000アクセス、17000ユニーク達成。

これもみなさんのおかげです。

これからもよろしく願います。

## 第十八話

工房の隅から隅までを掃き清める。

工房の隅には魔道書　大学ノート　や橙子さんから貰ったナイフなど、ここ伽藍の堂で手に入れた僅かながらの物品がトランクに詰められて置いてある。

元々、俺が焼き払ってしまったためにほとんどモノが無かった工房だが、現在はその僅かにあったものすらもトランクに纏められているため、何一つ無い廃墟のようになってしまっている。

既にソファアールや毛布のたぐいは無い。

それらは先日処分した。

橙子さん曰く、　向こうで買った方が安上がり　なんだとか。

ここ3ヶ月程寝食を共にしてきた？だけに多少惜しいという感情もあった。

が、新たな旅立ちを迎えるというのならばそれもまた仕方のないことなのだろう。そう納得した。

そんなことを考えつつ工房を掃き続ける。  
ほぼ毎日掃除は欠かしていなかったためそれほど汚れてはいないの  
だが、それでもおそろく最後になるのだ。

であるならば、徹底的に綺麗にしておこう。  
つまりはそういうことである。

無心で掃き続けること暫く。  
壁に掛けられた時計を見る。

現在時刻は午前9時30分。

掃除を始めたのが8時頃だったので、かれこれ1時間半ほど掃除をしていたことになる。

元より大して掃除する場所も無かった工房だ。  
既に隅々まで綺麗になっている。

そんな風に考えつつ工房を見渡していると、壁際。

……正確には壁があった場所でメイが日向ぼっこをしている。

コロコロと転がっている様に吸い寄せられたのだろうか？  
気がつけば俺はメイを抱き抱え、床に座り込んでいた。

思えばここから見える光景にも見慣れたものだ。  
見晴らしが良くなりすぎたここからは、工業地帯とも住宅街ともとれるような街並みを一望することが出来る。

最近はこの風景をメイと飽きるまで見るのが日課になっていた。  
……ひと足早い郷愁だろうか？

そんなことを考えているとメイが俺を見上げてくる。  
ラインから俺の感情を感じ取ったのだろうか？



何となくではあるものの、私がいるよ　と語っているような  
気がする。

……まあそれも都合の良い妄想なのだろうが。

時間だけが流れていく。

メイと俺しか存在しない穏やかな時間。

風は軽く、俺と工房を駆け抜けていく。  
陽の光は暖かく、ようやく訪れた春を否応なく感じさせる。

現在、4月3日。

俺は明日、ここを旅立つ。

## 第十八話

「高美、出かけるぞ」

俺とメイの時間を破ったのは橙子さんのそんな声だった。

声の方へ振り返る。

そこには、タバコを啜えながら工房へ入ってくる橙子さんの姿があった。

「出かけるって……どこへですか？」

「そりゃあれだよ。買い物だ、買い物」

……明日ここを出る俺が今更何を買おうというのだろうか？

出来れば荷物は少ないほうがいいのだが。

そんな考えが顔に出たのだろうか？

橙子さんは 違う違う と手を横に振りながらこちらへ近づい

てくる。

そして俺の目の前までやってきて、

「お前の買い物じゃなくて私の買い物だ。私ももうじきここを離れるからな、色々と買い込んでおかなければならないんだよ」

なるほど。

そういう事か。

確か、橙子さんは俺がここを出て三日後にここを旅立つようなことを言っていた。

如何な橙子さんと言えど女性。

色々と入用なのだろう。

と納得する。

が、一つだけと問いたい。

「あの、橙子さん。俺は荷物持ちですか？」

「勿論だ。折角暇そうにしている弟子がいるんだ。有効活用しなくては嘘だろう」

一瞬の間もなく返される。

……まあそう言われれば反論の仕様もないのだが。

なんせ橙子さんは俺の師匠だ。

それに、住所不定無職の俺をここで養ってくれていたという恩もある。

……さらに言えば、橙子さんのような美人とお出かけというだけでもご褒美のようなものだ。

まあ、それが単なる荷物持ちであろうとも、だ。

そうであるのだから、俺の答えは決まっていた。

「了解です。どこまでもお供します」

「素直でよろしい。三十分後に出発するからそれまでに準備を終えておけ」

そういつて踵を返す橙子さん。

その背中に、

「あの、準備することなんて無いのですが……」

そう告げる。

出かけるのならば早いほうが良いだろう

そう思つての言葉だったのだが、橙子さんは不機嫌そうな顔でこちらを睨みつけてくる。

「お前になくとも私にはあるんだ。……お前、私が女性だということをお忘れてはいないか？」

ああ、地雷を踏んだつばい。  
そうであった。

母は病弱で出かけるといったことが稀であつたし、一緒に出かけるような親しい女性もいなかった俺は体験したことはないのだが、  
資料 漫画やテレビ によると女性というのは準備に大層時間のかかる生物らしい、ということを見聞きしたことがある気がする。

であるのならば、非があつたのは俺の方なのだろう。

……どこらへんが非なのか判らないあたり自分でも情けないのだが。

「すみません。橙子さんの都合を考えていませんでした。……俺は

待っていますので、存分に準備してきてください」

「なんだそれは、皮肉か何かか？」

言われてみれば多少言い方がおかしかった気がする。

が、結局いい言葉も思い浮かばなかったので曖昧に笑って誤魔化すことにした。

「ふん、まあいいだろう。では10時15分に下のガレージで落ち合おう。」

そういつて、改めて去っていく橙子さん。

……出発する前から色々ダメダメっぽいのだが、どうすればよいのだろうか？

まあ自業自得ではあるのだが。

そんな俺の現実逃避を、メイだけが呆れたように見つめていた。





ガレージで待つこと暫く。

あの後、現実逃避から立ち直った俺はすぐさまガレージへと移動した。

……ただでさえ地雷を踏んだあとだ、万が一に橙子さんより後に到着したなんてことがあればさらに状況は悪くなるだけだろう。

因みに、流石に買い物にメイを付き合わせる訳にもいかないの  
で、メイは今日はお留守番だ。

……メイを置いていく際のあの瞳は思い出さない様にしよう。

捨てられた子猫のような目で見られて辛かった。が、橙子さんがヤバめな兆候を見せていたのだ。

犠牲は俺だけで十分だろう。

そんな意図もあつてのお留守番なんだ。

納得してくれ。

なんてメイになんだが自分になんだかよく判らない言い訳を続けていると、

コツコツ                    というハイヒールがコンクリートの床を叩く音が聞こえてくる。

橙子さんが来たのだろう。

割と早かったな

なんて感想を抱きながら振り向く。

そこには、普段着ないようなフリフリのついた黒のブラウスに黒のパンツ。  
白のネクタイ、オレンジ色のフレームの眼鏡をかけた橙子さんがいた。

「……………」

普段のシンプルな姿を見慣れているだけに、あまりに予想外の姿をした橙子さんを見て固まってしまっ。

……いや、別に似合っていないわけではなく、むしろ似合い過ぎて  
いるというか。

これからこの人の横を歩いて買い物をしなければならないのか、と  
思つと色々と厳しいものがあるように思われる。

なんせ、俺はジャージにTシャツという軽装なのだ。  
流石にこんな奴が今の橙子さんの横に立つというのは……………。

そんな風に思考が暴走している俺を尻目に橙子さんが段々と近づいてくる。

そして、

「ハアイ！ お待たせ！」

なんて、片手を上げた橙子さんが笑顔を振りまいてくる。

「……………」

今日世界は終わるのだろうか？

あまりにもありえない。

まさか、橙子さんが笑顔を振りまいているなんて……………っ！！

そんな失礼なことを考えつつ、俺は再度橙子さんを見直す。

……………相変わらず笑顔だ。

決して俺の認識ミスってわけではないらしい。

……すわ!! 新手的スタンド攻撃か!?

精神攻撃の可能性すらも想定していた俺は、大分先日の修行に毒されたらしい。

「なにを固まっているの? さ、今日は一日たっぷり付き合ってもらうからね」

……この生物は何なんだろう?

『青崎橙子』はこんな生命体では無かったはずだ。

そんな失礼なことを考えつつも、これが橙子さんであるというのは紛う事無き事実である。

いつぞやの少年in爺の鬼畜魔術師のように幻覚というわけでもないらしい。

そんな風に現実逃避をしつつ、別のところでは未だだフリーズしている脳をどうにか再起動しようと努力する。

そうして、

「……とても似合ってますよ。その格好」

辛うじてそれだけ搾り出した。

「あら、ありがとう。でも、格好だけなのかしら？」

蠱惑的な表情で俺の顔を覗き込んでくる橙子さん。

いつの間にか、橙子さんがそんな近くまで接近していたことに今更ながら気が付く。

俺は、自分の顔がかって無いほど赤くなっているのを自覚しながら、

「いえ、……その、橙子さんも大変お綺麗です」

そう呟いていた。

そんな俺の言葉に満足したのだろう。

ウン

なんて猫のような顔で頷いた橙子さんは俺の腕を取って車へと歩き出す。

……橙子さんに取られた左手に感じる柔らかい感触については言及しない方が賢明なのだろう。

辛うじてそれだけを考えていた俺は未だフリーズしたままだった。

気がつけば、橙子さんの愛車・アストンマーティンの助手席に座っていた。

ここにいたるまでの記憶は曖昧だが、おそらく思い出さない方が良いのだろう。

……なんていうか、左手に残る嬉しい感触的な意味で。

そんな風に、やっと本当の意味で再起動を果たした俺は、運転席から橙子さんがこちらを見ていることに気がついた。

「？」

なんだろう？

なにか不備でもあったのだろうか？

そんなことを考えていると、

「やっと元にもどったようですね。今日は折角のふたりつきりな  
だから、思う存分楽しみましょう？」

なんて、輝くような笑顔で言ってくる。

「……………」

そうして、おねは、せいど、しゅりおち、するのだった。





「ふむ。なかなか美味しいな」

眼鏡は付けたままの橙子さんが、コーヒーを口にしたらあとそう満足そうに呟く。

現在時刻は午後2時。

出発が遅かったため、多少遅めの昼食をとっているところだ。

場所は喫茶・アーネンエルベ。

なんでも、ジョージとかいう妙に渋いマスターが経営しているものらしい。

薄暗い店内をポツポツと照明が照らしており、落ち着いた雰囲気がある。

内装は日本風ではなく、どこか異国の情緒を感じさせる。

鮮花さんによると、ここのパイは逸品らしく、ラズベリー系が特に美味しいのだとか。

なんでもマスターはイタリア料理の達人で、軽食もあるらしい。

そんな情報を思い出しつつ、目の前のポークカレーとサラダに目を落とす。

………… イタリア料理はどうした！ というツッコミは勘弁で。

別の席でカレーを食べていたシスターを見てしまい、妙にそそられたのだ。

対面の席では橙子さんがきのこパスタに舌鼓をうっている。

買い物の途中からいつもの様子に戻った橙子さんだったが、パスタを食べるさまはどこまでも上品だ。

橙子さんを見つめていたのがバレたのだろうか？

橙子さんが どうした といった風に見つめてくる。

なんでもありません

そういつてカレーを食べることに集中する。

一口。

辛さの中にもまるやかなコクと旨みが広がっていく。

……いままで食べたカレーとは一線を期すウマさだ。

正直なところ、先程のシスターはあからさますぎて釣りかとも思ったが、どうやらどっこい。  
とんでもなく当たりだったらしい。

……俺は何を言っているんだろうか？

そもそも、初対面のシスター相手に釣りがどうとか考えるほうがどううかしている。

……なんとなくだが、この思考は放棄して忘れた方が良い気がする。

そんなことを考えながらもカレーをどんどん腹に収めていく。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

行儀は悪いものの、カレーを一気に食べきったあとサラダを完食する。

.....しよじぎ、かなり満腹だ。

いや、物理的ではなく精神的意味で。

それくらい美味しかった。

今日はある意味記念日といっても過言ではないだろう。

.....どれだけ粗食だったんだよ、というツッコミはなしの方向で。

そんなわけで、食事を終えた俺は手持ち無沙汰になり、再度橙子さんを見る。

先ほどと同じく上品にパスタを食べているが、もうじきに食べ終えるだろう。

そう考え、俺はコーヒーに口を付ける。

しばらく置いていたにも関わらず、未だかなり熱いのは、元々熱めだったからだろう。

口の中に苦さが広がっていく。

が、それは不快なものではなく、深みのある類のものであった。

正直、コーヒーの良し悪しなど判らないが、これがおいしいコーヒーというものなのだろう。

コーヒーを味わうこと暫く、橙子さんがパスタを片付けた。

「美味しかったですね、橙子さん」

「ああ、鮮花が言っていたから来てみたのだが…当たりだったようだな」

そういつてコーヒーを啜る橙子さん。

その姿も妙に様になっていて……有り体にいえば綺麗だった。

「ん？ どうかしたのか？」

「いえ」

またしても見つめていたのだろうか？

橙子さんの疑問を流す。

すると、橙子さんは　そうか　といってコーヒーに再度口をつけ、……にやりとした。

嫌な予感がする。

具体的に言えば、からかい倒されそうな。

そういう予感。

「そういえば高美。今朝は随分と可愛らしい反応をしていたな」

ニヤニヤを隠さずに橙子さんが問うてくる。

……おかしいとは思っていた。

今朝アレだけ手のこったことをしていたにしては、何のからかいもないな、と。

それが今来ただけだ。

そう自分に言い聞かせる。

大丈夫。

想定していたのだからちゃんと流せるはずだ！！

「いにえ……いにえ、橙子さんがあまりにも綺麗だったもので、驚いてしまっちゃんできゅよ」

ハワワ、ハワワ

……盛大に囃んだ。

なんというか内心の焦りが駄々漏れというか……全く流せていなかった。

「クツクツクツ。慣れない世辞などいおうとするからだ。……まあ、その心意気だけは買ってあげよう」

そういつと、橙子さんは満足そうにコーヒーをすすり始める。

暫く静かな時間が流れていく。

場を満たすのはしっとりとしたクラシックのBGMとコーヒーを啜

る音だけ。

そんな静寂を破ったのは橙子さんだった。

「そろそろ行くか」

そういつて伝票を手にする橙子さん。

……情けないことに、今日もまた橙子さんのおごりなのだ。

早いこと収入を得る手立てを手に入れなければ、負債だけが膨らんでいく。

橙子さんは気にするなといったているが、正直、橙子さんに借りを作っているのも恐ろしいので、個人的には割と切実なのだ。

そんなことを考えつつも、現状手立てのない俺は橙子さんの後を付いていく。



午前中も色々買い物に付き合わされたが、昼からもまた同じような展開なのだろう。

……下着コーナーは色々なモノが削れていくということは学習したが、あの置物やツボはどういう意図があって購入したのだろうか？

そんなことを考えていると、会計を済ませた橙子さんがやってくる。

「それじゃあ、行こう。まだまだ時間はたっぷりあるからな。覚悟しておけよ」

ご丁寧にウィンクまで付けてくる橙子さん。

正直、萌えてしまった俺は間違いではないだろう。

田中、やっぱりお前は正しかった

久々に高校の同級生を思い出す。

が、一瞬後には忘れ去り、車へと向かっていく。

昼からもあの苦行のような買い物に付き合わされると考えると、げんなりする。

が、橙子さんのウィンク一つで　頑張ろう　なんて思っている俺は安上がりなのだろう。



いくら春になったとはいえ、日が暮れだせば未だ空気は冷たい。

白い息を吐きながらそう再確認する。

現在時刻は午後6時30分。

俺と橙子さんは伽藍の堂へ戻ってきていた。

そうして、今は俺の　正確には橙子さんの　工房で向き合っていた。

工房には、今日買ったよく判らない置物やツボなどが大量に置かれている。

「それにしても買い込みましたね……………お金大丈夫なんですか？」

「気にするな、どうせ私の金じゃない。あのバカ　妹　の口座からチョッパってきたものだ」

あまりに大量の物品に心配してそう問うと、そんなことを言うてくる橙子さん。

……………いくら姉妹とはいえ、ヒトの口座から金を引き出すのはどうだ

ろっつ？

そう思ったおれだが、賢明にもその思いは口にしない。口にすると、妹さんへの愚痴が始まるような気がしたからだ。

「そうですか。……ところで、どうしたんですか？ 明日は出発ですし修行も今日はなしということだったと思うんですが」

「そうだな。いや、明日からお前はある意味独立していくわけだからな。最後に師匠らしいことをしようと思ったわけだ」

そういつて橙子さんはタバコに火を付ける。

そうして、 呆 とした表情のまま話し続ける。

「倫敦に着いたらまずはあのバカを探せ。たしか空港で待っているとかいつていたからすぐに見つけられるだろう。」

それから、大英博物館へ昨日渡した紹介状を持っていけ。あのバカが付きそう予定だが、紹介状があった方がすんなりといくだろう」

明日、旅立ってからの予定を淡々と告げていく橙子さん。

「そうしたらどこか住む場所を紹介してもらえ。確か、学院は安い物件を幾つも所有しているはずだ。おそらく手頃な奴が見つかるだろう」

淡々と説明を続ける橙子さん。

工房の設置法や注意点、学院での歩き方などを順に続けていく。

「まあ、こんなところだろう。判らないところがあればあのバカに聞けばどうにかなるだろう。私と違って上にも顔が効くはずだしな」

そう締めくくる。

……一応妹さんを信頼しているのだろうか？

「判りました。青子さんに頼ってみます。他に注意する点はありませんか？」

「いや、これ以上は実際に向こうに行ってからの方が良いだろう。とりあえずはコレだけだ」

そういつてこちらを見つめてくる橙子さん。

「今はあくまで業務連絡みたいなものだ。……最後に師匠らしいことをしよう」

そういつと、橙子さんはベルトに指していたナイフ？のようなモノ

をこちらにさし出してくる。

「受け取れ。お前はまだまだ未熟者だが、これからは私たちと同じく自分の力で道を切り開いていかななくてはならない。だから、とりあえず一人前の証だ」

「……………」

「いいから早く受け取れ。これはアゾット剣。いわば見習い終了の証明の記念品みたいなものだよ」

そういつて俺の右手にアゾット剣を手渡してくる。

右手を見つめる。

刃渡り10cmほどの儀礼用の短剣…だろうか？

一人前の証ということだが…………。

「橙子さん。俺にはまだコレをもらう資格がないような気がするのですが」

正直、今の俺には過ぎたものだと思う。

俺は未だ一人前どころか半人前にも満たない。

であるならば、これはもつと未来に受け取るべきだろう。

そう思ってたことだったのだが……

「いいから受け取れ。さつきも言ったが、お前の未熟は十分承知している。だからこれは新たな門出を迎えるお前への饒別だよ」

そう言われては無碍に断ることも出来ない。

俺は、アゾット剣を握り直すと、

「ありがとうございます。ここに来て3ヶ月。右も左も判らない俺がここまで来られたのは全て橙子さんの導きがあつたおかげです」

なんて、自分でも恥ずかしいセリフを吐いていた。

が、それは正直な俺の気持ちだった。

小川マンションで、俺を拾ったのが橙子さんでなければ俺は今もつと別の場所にいたことだろう。

おそらくは、今よりももっとひどい、そういう場所に。

「……恥ずかしい奴だな。まあ、気持ちだけは受け取っておこう」

橙子さんがそう返す。

「はい。いずれこの恩は必ず返します。本当に今までありがとうございました」

「ああ。期待しないで待ってるよ」

そういつた橙子さんは急に真剣な表情をする。  
そうして、改めて俺の顔を見つめ、

「杯門高美。これまで3ヶ月の修行ご苦労だった。これからは一人の魔術師として弛まない研鑽を続けていけ」

そう告げる。

そして、最後に、

「……………よつこそ、こちら 魔術師 の世界へ」



そう、一人の魔術師として俺の門出を祝福した。

## 第十八話（後書き）

こんにちは。

多少日が空いてしまいました。第十八話更新です。

……正直、色々と詰め込もうとして失敗した感があります。

今回のお出かけイベントは一応橙子さんなりの懐古とか名残惜しさなんかの発露です。

最後の師匠イベントでは、バトルでもさせようかと思いましたが、魔術師的にそれってどうよ？ と思いきこのような形になりました。

次回、青子と一緒に倫敦での生活準備に入ります。

それでは。

## お知らせ

大変時間が経ってしまいすみませんでした。

リアルでの生活が色々ハードで、小説を書いている余裕がありませんでした。

次話より倫敦編を予定していましたが、設定部分に色々と思うところがあるため一時休載し、修正後アップしようと思います。

修正は今月中に行っていく予定です、今暫くお待ち下さい。

更新再開に当たりまして「小説家になろう」から撤退し、自ブログの方で更新を行っていくことにしました。

つきましては、もしよろしければそちらの方も御覧ください。

TYPE-MOONSS Linkの方は以後ブログの方からリンクすることになります。

ブログ『紅工房』URL：<http://crimsonworks.blogspot.jp/>です。

一応規約を読んだのですが、URLを張ってはいけなかった場合は感想の方でお教えください。

修正前の本作もブログの方に上げておきます。

色々どタバタしてすみませんでした。

## 第十九話

大英博物館。

古今東西の美術品、書物などが700万点も収蔵されている世界最大級の博物館である。

収蔵品は美術品や書籍のほか、考古学的な遺物・標本・硬貨やオールドゴールなどの工芸品、世界各地の民族誌資料など多岐に渡っており、イギリス自身のもも所蔵・展示されている。

余りに多岐にわたることから、常設展示だけでも一日で全てを見ることはほぼ不可能である……らしい。

が、それは表向きの顔であり、一部の者たちにとっては全く別の意

味を持つ場所になっている。

そう、つまり、魔術の最高学府であり、魔術協会三大部門の本部である『時計塔』としての顔である。

『時計塔』には鉱石学科、降霊科、霊媒科などが存在し、大学の様に基本的な事柄を教授する教育機関としての側面と、豊富な研究資料を元に各々が研鑽を積む研究機関としての側面が存在している。

教育機関としての機能は、基本的にロンドン市内に分散して存在している……らしい。

また、研究機関としての機能、つまり工房は大英博物館の地下に存在し、深く潜れば潜るほど狂気度が増していく……らしい。

他にも、魔術協会の機能として、封印指定や神秘を漏洩した魔術師の処理を執行し、魔術の保護や拡散防止も執り行っているらしいのだが……。

コピーに口を付けながら資料を再度読みなおす。

……やはり詳しくは載っていないようだ。

割と根を詰めて読んでいたらしく、読み終えた資料をテーブルに置くくと、息を長く吐きつつ伸びをした。

「フーア……あの、一応この資料読み終わりましたけど」

目の前でパンケーキを口に運ぶ女性へと声を掛ける。

「んっ?」

腰元まで伸びる黒髪、整った顔立ち、長い手足……。

モデルかと思紛うが如き美しさを持った彼女は、しかし、豪快にパンケーキを口に放り込むと、アイステーでそれを流しこみこちらへ視線を向けた。

「いえ、あの、資料……パンフレット？は読み終わりましたよ」

「そ。なにか分からないところはあった？」

「いえ、封印指定とか神秘の漏洩とかそこらへんについてあまり書かれていないみたいなんですけど……」

「そりゃ広報がそんなこと書くわけ無いでしょう。まあ積極的に所属者をさがしている訳ではないにしろ、一応教育機関も兼ねているわけだしね」

「なるほど。云われてみればそうですね。判りました、ソッチの方は追々自分で調べてみます」

「もう大丈夫？ よし、そんなじゃ、出発しますか」

そういつて、残りのパンケーキを口に放りこみ、アイスティーの残りを一気に口に流し込む。

折角、きれいな顔立ちをしているのに

そう思わないでもないが、人様のことに一々口出しするのもどろかと思つし。

……なによりあの人の妹さんだ、下手なことは言わないに限る。



そう自分に言い聞かせている内に、パンケーキとアイスティーは消え去っていた。

慌ててコーヒの残りを飲む。

「よし。充電完了！ じゃ、行きますか」

そういって、男前に伝票を握って歩き出す……青子さん。

……悲しいことに、俺は未だ奢られる立場にあるのだ。

「…んっ？ どったの？」

歩き出さない俺に疑問を持ったのか、青子さんが戻ってくる。

「いえ……奢ってもらうしか無い自分の現状を嘆いていただけです。本当に、すみません。いつかきちんとお返ししますので」

「いや、別にコレくらいなら問題ないわよ。……いざとなったら姉貴に請求すればいいし」

さらりと恐ろしいことを告げる青子さん。

そんなことをされれば流血沙汰はさけられないだろう……周囲の。

「いえ、絶対、すぐに、返します！ だから橙子さんに請求するのは勘弁して下さい」

「そう？ まあいいんだけどね。じゃ、問題も解決？したことだしチャッチャか行くわよ」

そうして、今度こそ会計を終えた青子さんは外へと歩き出す。

「あっ、待ってください」

外へ出て行く青子さんの姿を見て、慌てて後を追う。

ここがどこなのかすら理解していない俺が、こんな場所で放り出されれば途方にくれる以外ない。

ここは俺にとって完全にアウェーだ。

そう、俺は英国はブリテン島、魔の都・倫敦の地を踏んでいるのである。

第十九話

喫茶店を後にした俺たちは、大英博物館へと向かっていた。

「それにしても……」

「んっ？」

俺の呟きを拾ったのだろう。

先に行く青子さんが顔だけこちらに向けて問いかけてくる。

「いえ、なんていうか石造り？の建物が多いのを見て外国に来たんだけだーって思ってただけです」

「はーん。早くも郷愁の念にかられたってことか」

「ええ。まあそんな感じですよ。青子さんはそうなのって無いんですか？」

「今の生活も気に入ってるし、ないっちゃないかな。ま、要は慣れよ慣れ。暫くこっちにいればその違和感もなくなるだろうしね」

「そんなものですかね？」

「ええ。そんなもんよ」

そういつて再び前を向く青子さん。

俺は、それに置いて行かれないようにひたすら歩き続けるのであった。

日本とは根本的に異なる風景に圧倒されながら歩くこと暫く、

「ついたわよ」

青子さんに声を掛けられると同時に、黒い鉄柵の向こうに、白亜の建物がみえてきた。

454

「ここが……」

「そ、あなたがこれから何年間かを過ごすことになる魔術協会・『時計塔』への入り口よ」

ここが、魔術協会。

俺がこれから学んでいく学びや。

魔術の世界への本格的な第一歩

そんな風に、感動やら決意やらをしていた俺は、青子さんの先を促す声で我に返った。

「さっ、こんな所につつまってないでチャツチャか行くわよ。まだまだやらなきゃいけないことはたくさん有ることだしね」

青子さんについて歩く。

鉄柵を超え、白亜の門をくぐる。

と、そこには幾多の展示を行う博物館の姿があった。

「じゃね……すげえですね」



「ええ、そうね。ここに展示されているのはほんの極々一部だけど、それでも確か十……十五万？ それくらいはあったはず」

青子さんの言葉に、改めて周囲を見渡す。

と、ロビーホールでどこか見知った集団が目に入った。

「イギリスまで来たっていうのに……案外日本人もいるみたいですね」

おそらくはツアーなのだろう。

日本人の団体さんが、日本人だけで固まって周囲を見渡している。

……日本人旅行者のテンプレ（イメージ）であるスーツにカメラ装備の強者はいないようだが。

「ええ、まあ一応ここも観光地なわけだし、なんだかんだで色々な国の人間が来るのよ」

「なるほど」

倫敦の街並みに圧倒されていた気持ちがあんなにか落ち着く。

かくも恐ろしきは日本人の癒しパワーだろうか？

……まあ、外国の地で同郷の人間に出会えたという安心感なのだろうが。

そんな馬鹿な事を考えている内に移動したのだろう。

エントランスホールの端の方に立っている警備員に二三言話しかけた青子さんがこちらへと手招きをしていた。

「……っと、どうしたんですか？」

「いや、呆けてるみたいだったから、先に入るための申請をしておこうと思ったのよ」

そんな言葉と共に　はいっ　と軽やかな調子でなにかが投げ渡される。

慌てて受け取ったそれを覗き込むと、それはカードのようなモノだった。

透明なケースに入ったカードは、首からかけられる様になっている。

これは所謂入館許可証とかそういう類のものなのだろう。

「本来はそんなモノ必要ないんだけど、高美はまだこの人間じゃないから、とりあえずの入館許可証ね。」

それがないと不法侵入者扱いされて、気がつけばメルヘンなサイババルワールドに引きずり込まれてた、なんてことも有り得るから……絶対に無くしちゃだめよ?」

「いや、メルヘンでサイババルって……なんですかそれ?」

「さあ、前にそんな目にあっただなんていつてた奴から聞いたただけだから詳しくは知らないんだけどね。なんだが、人生観変わったやつたらしいわよ?」

それでも知りたいの?

なんて聞いてくる青子さん。

人生観が変わってしまうメルヘンでサバイバル……。  
個人的には『不思議の国のアリス』が浮かぶのだが、まあそんなに可愛らしいものでもないだろう。

別に今の人生観が気に入らないというわけでもないのだし……。なに  
より、君子危うきに近寄らず、だ。

「はあ、やっぱりその話はいいです。知りたくありませんし、絶対にこれは無くしませんから。」

「賢明な少年。よし、それじゃ先を急ぎましょうか」

そういつて、警備員さんの後ろにある階段へと歩き出す青子さん。

それに慌てて続くのであった。

階段を降りること暫く、ようやく終着へと到着すると、そこには青子さんが待ち構えていた。

「気づいたかもしれないけど、今の階段が魔術師と一般人を選別するための『門』よ。あそこは登録した魔術師が高美のように許可証を持った人間しか降りることが出来なくなっているの」

「なるほど」

……全く気が付きませんでしたか？

「それで、あの『門』を過ぎればここが魔術協会倫敦支部、通称『時計塔』の入り口ってわけね」

そういつて青子さんが指し示す先を見ると、受付と階段しかないホールがあった。

「えーと、ここが入り口ですか？」

「そ、あそこの受付で諸々の手続きをした後、各階段で講義室とか教授室、工房なんかがあるってわけ。

まあ講義室に関してはここだけじゃなくて、ロンドン市内のあちこちに分散して存在しているんだけどね」

「そうなんですか。いや、その……」

「想像していたのと違った？」

「ええ。なんていうか大学みたいなのを想像していたので」

「なるほど、そういうことか。てっきり殺風景すぎるってことをいっているのかと思ったのに。」

あ、因みに大学みたいな場所……というか大学そのものもあるわよ。

地上の……たしか北のほうに講義用の学舎があった……はず？」

「正確にはすぐ北のロンドン大学の横にある学舎よ」

青子さんの曖昧な物言いに、どこかからか捕捉が入った。

「そう！そこそこ。いやーあそこに行つてたのなんて昔の話だからなかなか思い出せなかったのよ。ありがとね、アルマ」

声の主は受付にいた女性だったらしい。

青子さんの話を聞く限りアルマさんというらしいが……。

「あの、お知り合いですか？」

「んっ？ あそっか、高美には紹介してなかったわね。この無愛想なのはアルマ。ここで受付をしてるからなんかあったらコイツに頼れば何とかしてくれるわよ」

「……随分な言い草ね青子。それに無愛想なのは生まれつきよ」「

「こんななりしてるけど、私よりも歳上だから気をつけなさい？  
油断していると喰われるわよ？」

「えっ……？」

青子さんに云われて思わずアルマさんを凝視してしまう。

砂金のような見事な金髪に、チヨコンとした黒縁メガネ。  
顔立ちも小さく纏まっていて整っている。

なにより、体躯がかなり小さい。

正直、自分よりも年下だと思っていたのだが……。



……なによりゴスロリだし。

「なにかしら？」

俺の不躰な視線もしくは思考に気がついたのだろう。

なにやら青子さんと言い争っていたアルマさんがこちらを睨め付けていた。

「いえ、その……なんでもありません」

流石に、  
人体の神秘に感動していました  
なんていうわけにもいかず、俺は言葉を濁すことにした。

「引つかかるけど、まあいいでしょう。」

……そういえば自己紹介がまだだったわね。私はここで受付をしているアルマ・オーティスよ。

その青子とは……そうね、個人的知り合いかしら」

「はじめまして。今日からここに所属します杯門高美です。  
何かとご迷惑をおかけすると思いますがよろしくお願いします」

「迷惑はかけないで。面倒くさいから。」

……まあ、そのバカほど無礼でもないらしいし、多少やってあげなくもないけどね」

「……………なんというか……………はい、そのよろしくお願いします」

これが！

これが！！

近未来に於いて一世を風靡するという例のアレなのだろうか？

リアル金髪ゴスロリ婆（？）でツン　レとかいうやつ！？

……………ふうー。

どっかから電波を受信したような気がしなくてもないが、おそらくは気のせいだろう。

とりあえず分かったことは、アルマさんは割といい人であるという

ことだ。

「それでね、アルマ。今日は高美の登録とか住居斡旋をしてもらうために来たんだけど。連絡は着てる？」

俺とアルマさんのやりとりをニヤニヤしながら聞いていた青子さんがアルマさんに問いかける

「ええ、アホな魔法使いと新米の魔法使いが来るから丁重に扱えってね。

因みに、あなたたちにやってもらうことは殆ど無いわよ？

上から着た書類の必要事項の大半は埋まってるし……後はそうね、サインと受講する科目を選べば登録完了といったところかしら？」

「へーえらく手際がいいわね。

仕事が遅いことで有名な事務にしては張り切ってるじゃない」

「そうね。多分何も知らない新米魔法使いを取り込みたいなんて考えてるところから圧力でも掛かったんじゃない？」

見たところ彼、騙されやすそうだし」

「やっぱりそう思うー？ 姉貴のところによれば多少すれるかなーなんて思ってたんだけど。」

「やっぱり私があっちこっち引張ってったほうが良かったかしら？」

「やめておいて正解よ、それ。そんな事したら此処に来る前に彼、荒みきっていたでしょうしね」

当事者である俺を置いてきぼりで会話を続ける二人。  
なんだかねでアルマさんも青子さんと仲が良いようだ。

それにしても、割とヤバ気なことや失礼なことを云われていたような気がするのだが、そのところどうなのだろう？

「あー。取り込みって何ですか？」

とりあえず、ヤバ気な方だけでも知ろうと、二人の会話に割って入る。

「ああ、それはアレよ。高美ってポツと出の魔法使いじゃない？そ

れも魔術師になつたばかりの。

本来魔法使いに手をだそうなんて考える奴は少ないんだけど、それが素人同然の高美なんだつたら話は別。

上手く取り込めば派閥としての力も上がるし、あわよくば魔法を奪おう……なんて考える奴がいるでしょうねって話」

「つまり、これから先色々あるからダメされない様になさい、というこことよ」

「はあ……判りました」

正直、未だに自身の価値……というか『魔法』の価値がよく判らないのだが、同じ魔法使いの青子さんがいうのだ、おそらくは正しいのだろう。

「その顔は判っていないって顔ね。……まあいいわ、しょせんは他人ごとだし、せいぜい気をつけなさい」

「なんかあったときは私にいえば何とかしてあげるわよ……」  
「うっ、砲撃的に？」

「いえ、お気持ちはありがたいですけど……と、ところで、選択する科目についてお聞きしたいんですけど大丈夫ですか？」

橙子さん曰く、『あのバカは魔術師としてはダメなのに、破壊に関してはアレだから……』とのことなので、あまりお手伝いいたたくわけにもいかないだろう。こつ、周囲の被害的な意味で。

「あからさまね。まあいいでしょう。私としても青子が暴れると後始末が大変だし。」

そうね、受講科目についてはこつちのパンフレットを見て決めればいいわ。

大抵の人はここに目的を持って来るから受ける科目は決まってるものなのだけど、見たところあなたはそうでもないみたいだし。

そうね、今日は学徒登録の書類とアパルトメントの契約書にサインさえしてもらえればいいわ。

科目については後日、改めて来るまでに決めておきなさい」

そういつて、幾枚かの書類と一冊のパンフレットを手渡される。

『一緒に学ぼう、楽しい魔術』

パンフレットの表紙にはそんな言葉が踊っていた。

なんていうかアレだ。

魔術の隠匿はどうしたとかはどうでもいい。

が、俺の魔術協会への幻想は完全にブロークンだよ！！

なんだこの妙に凝ったファンシーでキラキラしたパンフレットは！

ここの広報部にはきつと若い女性と暇人が居るに違いない。

魔術師ってのはもつと暗いものだと思っていたその価値観を破壊されつつ、書類へと目を通していく。



書類に目を通して暫く。

要するに、

- ・ 『時計塔』の学徒としての承認及び一般施設の利用許可。
- ・ 特待生として学費の免除。
- ・ 奨学金として毎月約10万円の支給（何れ返済の義務あり）
- ・ 協会所有のアパルトメントの無償貸与。

ということらしい。

学費免除やお金の支給、アパルトメントの貸し出しはありがたいのだが、先程の青子さんの話を聞いている限り素直に喜ぶべきでもないのかもしれない。

であるから、可及的速やかに独立する必要があるだろう。

が、無一文の俺からすると本当にありがたい話だ。

正直、この話がなければいきなり家なき子生活が始まっていた可能性も否めない。

そんなことを考えながら書類にサインをしていく。

「これで…よし、と。大丈夫ですかね、アルマさん？」

「……………ええ、大丈夫よ。これで今日はおしまいね。後は青子がどうにかするでしょうから、私は少し席をはずすわ。

科目選択の件は一週間以内に解答を貰えれば構わないから。それじゃ」

そういつて上へと上がっていくアルマさんを見送る。

決して、その姿に小さいななどという感想はいただいていないので悪しからず。

「あの、青子さん。一応終わったみたいなんですけど、これからどうするんでしょうか？」

「そうね、何をするか、とはいつても、正直することって余り無いのよね。

協会内の案内なんかは後でもらえるだろうし、高美の家に行くこうにも鍵がないしね。

うーん。そうね、今日はもうこれで終りにしましょう」

「そうですね。俺がこっちに着いたのが昼過ぎだったし……そろそろいい時間ですね」

「そゆこと。私は明日から少しここを離れるから面倒をみる事が出来なくなるけど、代わりを頼んであるから、分からないことがあったらそっちに聞いてみて」

「了解です。因みに、その代わりの人ってのは？」

「それが、アルマに仲介してもらったから誰がくるのか知らないのよね、私。

確か明日の正午にここに来ればいらしいんだけど。

……まあであってからの楽しみって思っておけばいいんじゃない？

それじゃ、私はもう行かないと」

そういつて階段を登って行くつとする青子さん。

が、何を思ったか再び降りてきた。

「どうしたんですか？」

「どうしたって。高美はホテルまで自力で戻れるの？」

「……………たぶん、おそらく、願わくは」

「そんな高美に、ハイッこれ。ここらへんの地図と私の電話番号ね。なにかわからないことがあったら、電話すればいいわ。……………多分、何回かに一回は出られるから」

475

それではあまり意味が無いのでは？

と思わなくもないが、普段から旅を続けているような人なのだから、  
と思ひ直す。

地図と電話番号の書かれたメモを俺に渡した青子さんは、  
「こんど」  
そ満足したように歩き去っていった。

窓から見える景色を見る。

日本とは違うとはいえ、倫敦も都会。

夜の闇に浮かぶ無数の光源は、全てが人の営みなのだろう。

宝石のように輝くそれを眺めつつ、膝の上に丸々メイを撫でる。

アレから、何度も迷い、地図と親切な人達の助言に従って歩き続けること2時間。

本来は30分ほどの道のりを踏破した俺はホテルに戻る事が出来た。

その後、夕食を終え、シャワーを浴びた現在、ホテルに置いてきぼりにしていたメイのご機嫌取りに勤しんでいるというわけである。

柔らかく、滑らかなメイの体をゆっくりと撫で続ける。

先程まで、機嫌をこじらせてこちらを見向きもしなかったメイは、今では膝の上で安らかな寝息を立てている。

新しい環境、新しい世界に一人で飛び込んだ今の俺には、膝の上の

僅かな重みと暖かさがなによりも頼もしく、そして愛おしく感じる。

「メイ、ついに始まるぞ。俺たちの新しい生活が」

ピクリ、とメイが反応する。

が、暫く耳をぴくぴくと動かしていたメイは、結局眠りの世界から帰ってくることはなかった。

その様に微笑ましさを感じつつ、メイを起こさぬように抱え上げる。

必要のない眠りだが、メイを見ているとそれがとても魅力的なことに見えるから不思議である。

そんなことを思いつつメイをベッドへと運んでいく。

そして、自らもベッドに潜り込み、メイを抱き抱えつつ毛布をかぶる。

現在時刻は午後10時。

多少早くはあるが、もう今日は眠ろう。

そうして、自らの意思で意識を黒く塗りつぶしていく。

そういえば、にほんではそろそろ、ひがのぼるのかな。

という思考を最後に、俺の意識は暖かな世界へと沈んでいった。



## 第十九話（後書き）

お久しぶりです。

祖母が倒れたり、貯蓄がマイナスになったり、バイトの同僚が辞めていってバイトが忙しくなったりで、リアルがヤバ気だったため遅れに遅れてしまいました。

お待ちいただいていた方には本当に申し訳ないです。

さて、感想の方にあまりに多くの『元のままにしろよ』の書き込みがあつたため、そのままの設定で更新を再開しました。

多少パワーダウンはさせる予定ですが、それでも最強系のままいきます。

今回のお話、倫敦についてから新生活を始めるまでのつなぎだったのですが、自分はイギリスなんて行ったことないし、行ったことのある海外なんてハワイとオーストラリアだけなので、そちらのイメージとグーグルマップ&色々なブログの旅行記などを参考に書いています。

そんなわけで違和感たっぷりな感じだと思いますが、そこらへんには目を瞑ってください。

もしも、そういった点でご指摘があればバンバン受け付けますのでどうか宜しく願います。

久々に書いたからか、それとも元来のものか、ほぼ確実に後者ですが描写が薄かったり展開が飛んだり、ご都合主義だったりしますが、そのうち上手くなる(といいなあ...)ので生暖かい目で見守ってください。

それでは。

## 第二十話

朝、カーテンから零れ出した陽の光で目覚めた。

目覚めると同時、そこが見慣れた廃工場のような工房ではなく、質素ながらも洗練された調度品の並ぶ部屋であることに困惑する。ここは一体どこなのだろうか？

自らの体を包み込んでいるベッドの上で、毛布にくるまりながら考える。

………温かい。

羽毛だろうか？

暖かく柔らかかな毛布にくるまれているとここが何処かなんてどうでも良くなってくる。

と、腹の方でモゾモゾと動く物体があることに気がつく。

……………？

なんだろうかと、自身も布団の中に潜り込みその正体を探りにいく。

「にゃーん？」

布団の中に潜り込んだ瞬間、なにやら可愛らしい物体と出会った。

「にゃーおなーん？」

うん、わかった。

お前は可愛い。

だから一緒に気持ちよくなるっ？

霞がかった頭のままその可愛らしい物体をかき抱く。

暖かくてフワフワで、妙に抱き心地がよい。

ああ、もういいやあ。

うん、あれだ。

なにか用事があったような気がするがもうどうでもいい。

可愛いは正義！

可愛いは絶対！

………惜しむらくは、この可愛さを表現しきれない己の文才の無さ  
だろうか？

そんなメタな事を考えつつ、俺は再び心地良い世界へと落ちていく  
のであった。

## 第二十話

現在時刻、午後一時。  
窓から入り込む強力な日光で目が覚めた。

ボーと視線をさ迷わせつつ、回転の鈍い頭を起動していく。

ここは……………そう、ホテルだ。

昨日は日本からロンドンに到着して、青子さんに連れられて協会受付まで行って……………そうして、そう金髪合法ロリのアルマさんに出会って……………。

そこまで考えたところで、何かを忘れているような違和感を感じ取る。

そういえば、そう。

今日は何か予定があったような気がするのだが……………。

回想によって順調に回り始めた頭で改めて自身の記憶を探り返す。

……………思い出した、今日は確かアルマさんが用意した案内の人に会う予定だった。



そう青子さんが言っていた筈だ。

確か時間は……正午に協会受付。

ふう。

思い出せて良かった。

なんて、今日の予定を思い出せたことに安堵する。

……まあ、俺の記憶が失くなることなんて有り得ないんだけどね。  
なんて自分自身の安堵を笑いながら現在時刻を確認する。

………ん？

……現在時刻午後一時十五分。

( ; |  
) . |

( ) ヲ  
ツ

( ; )  
)

( ) ヲ  
ツ

( . )  
)

約束の時間より一時間十五分が経過。

「Oh Goddess やっちまった」

未だ会ったことすらない人との待ち合わせで一時間以上の遅刻。  
これはヤバい。

失礼にもほどがあるし、これから先の関係性に於いても深刻な影響  
を投げかけること請け合いだ。

ドタバタとベッドから抜け出し、身だしなみを整えつつ後悔する。

ああヤバい。  
本気でマズイ。

僅か三分で全ての準備を終えた俺は、橙子さんから貰ったルーンナイフを腰に差し、ホテルの扉へと向かう。

と、扉の前には悲しげな瞳でこちらを見上げるメイの姿が。

その瞳は 今日も置いていくの？ と悲しげに語りかけてきて  
いる。

……流石に今はメイを説得している暇はない。

そう、仕方ないから今日はメイを連れていこう。  
うん。べっべつにメイの瞳に負けたわけではないんだからね！

なんて自分に言い訳をしつつ、メイを上着の中に入れる。  
すると、苦しかったのだろう。  
俺の胸元から顔だけを出したメイがこちらを非難するように見上げ  
てくる。

……これが萌えか。  
分かったよ田中。

……ってやってる場合か！

和みそうになる自身に活を入れる。

そうして、部屋から出ると、最速でエレベータに乗り込む。

そして、ロビーを抜け、ホテルの外へと向かう。

ホテルから『時計塔』までの道筋は昨日の迷子で覚えた。

が、どんなに急ごうとも通常あそこまで十五分は掛かってしまう。  
金のない俺はタクシーなんて手段を用いることなんて出来ないわけ  
で……。

であるならば、普通でない手段を用いれば良いのではないか？

俺は曲がりなりに魔術師……いや、魔術師見習い。

であるならば、常識という壁を乗り越えることなど容易い筈だ。

周囲を確認する。

人通りは僅か。

車もない。

……注意すればどうにかなりそうだ。

そう瞬時に確認し、袖に隠すようにしてルーンナイフを取り出す。

そして、靴紐を結ぶかのような自然さで靴に早駆けのルーンを刻む。

銃弾には魂を、銃身には肉体を

一瞬で自身に埋没し魔術回路を起動する。

前身に魔力を行き渡らせ身体能力を強化すると同時にルーンを起動する。

「行くぞメイ。しっかり掴まっているよ?」

そう呟き、俺は、風になった。

現在時刻は午後一時二十五分。

本来の三倍以上の速度で道を駆け抜けた俺は、現在協会受付にやってきていた。

そこで俺を待ち受けるのは限りなく冷たい視線を送ってくるアルマさん。

そして、無感動な目でこちらを見つめてくる少女だった。

いや、少女というのは多少語弊があるだろう。

おそらくは俺と同年代。

鮮やかな赤毛に、しゃんと伸びた背筋。

戦闘の事などよく判らない俺ですら判るほど隙のないその佇まいは、一つの機械のようにすら思われた。

「おはようございます……アルマさん」

「ええおはよう。ところであなた、時計の見方は判るかしら？ いえ、もしかして日本では時計の見方がこつちと違うのかしら？」

冷たい視線のままそんな皮肉を投げかけてくるアルマさん。その横に立つ赤毛の女性はこちらを見つめ続けている。

「いえ、あの……たぶんこつちと日本で時計の見方は変わらないと思います」

「そうですね。でも、もしかして、と思ったのよ。あなたは時計の見方を知らないようだしね」

そうですね？

と冷たい視線のまま可愛らしく首をかしげ



るアルマさん。  
なんていうかアレだ。  
お人形さんのようなアルマさんが、冷たい視線のまま可愛らしい仕草をすると、かなり怖い。

流石に、これ以上皮肉を聴き続けるのも辛く、かといって皮肉に怒るには俺に過失がありすぎたため、俺は

「あの、遅れてしまっただけにすみませんでした」

と全力で頭を下げるのであった。

「……ふん。まあ私は別にいいんですけどね。どうせあなたが来なくともここに居るのは仕事だったわけだし……」

と、意外と簡単に謝罪を受け入れてくれるアルマさん。が、

「私はいいけどこちらの方はどうかしらね？ 忙しい中時間を作っていただいたっていうのに、肝心の相手が一時間以上も遅刻してくるなんて」

ねえ？　なんて赤毛の女性に話を振るアルマさん。

おそらく、一緒になって俺をねちねちといたぶろうという魂胆なのだろう。

殊勝な顔をしているように見えるが、こちら側からは口の端がつり上がっているのが丸見えだった。

自分が悪いのだから、とアルマさんを止めることも出来ずに赤毛の女性を見つめる。

と、俺の視線と彼女の視線が正面からぶつかり合った。

「いえ、予定より確かに遅くなりましたが、問題はありません。

本日の業務は『杯門高美の案内』以外に入っていませんし、なによりこちらでも仕事です。

例え遅れていようと遂行可能ならばそれは誤差の範囲内です」

まあ、今後は時間を厳守して貰いたいですが

と、かなりセメントなコメントが発せられる。

アルマさんはそれがあまり面白くないようで、多少拗ねたような顔をしているが、そんなことお構いなしに彼女は話を続ける。

「今日は、魔術協会の関連施設の案内と、あなたのアパートメントへの案内及び荷物の運びこみを予定しています。」

「……多少予定より遅れていますし、協会関連施設の案内は主要な場所のみとし、その後アパートメントへ案内します」

何か質問は？

と問うてくる彼女。

……質問、ね。

うん。流石に、これ以上『赤毛の女性』や『彼女』と言い続けることにも無理があるだろう。

なにより、これからお世話になる相手の名前も知らないのではコミュニケーションに重大な支障をきたす。

「えーと、俺の名前は杯門高美です。失礼ですが、あなたのお名前は？」

「……そうでしたね。私だけがあなたの名前を一方的に知っているというものなんですし、

なにより、名を名乗られて名乗り返さないのでは礼を失します。

私の名前はバゼット・フラガ・マクレミッツ。  
協会よりあなたの護衛と世話を任されたものです」

バゼットと呼んでください

「丁寧にごうも。これから宜しくお願いしま……す？」

護衛と世話？

それに協会からの依頼？

昨日の話思い出す。

もしや、これも取り込みの一環なのだろうか？

それとも、そういうことから守るためにアルマさんが手を廻してくれた？

「えーと、護衛……ですか？」

流石に『あなたはどこかの派閥から送られてきたんですか』と聞くわけにもいかず、多少遠回りをすることに。

「はい。あなたの身を護るように、と教授会で決定され私が派遣されました」

「なるほど」

教授会………というのはおそらくお偉いさんたちの話し合いなのだろう。

が、複数人の教授たちが話し合った結果であるのなら、特定派閥への取り込みというわけではない？

「どうして護衛が必要なのでしょう？ 別に俺が狙われるような事態なんて無いでしょうし……」

なにより、俺は死にませんよ？

と問ってみる。

すると、バゼットさんは得心がいったような顔で、

「ああ、なるほど。護衛云々より、私が派遣された理由が疑問なのですね。」

「……こう云ってはなんですが、私は所謂監視役です」

「監視役？ 俺のですか？」

「それもあります。が、同時にあなたへ近づくものたちへの監視でもあります。」

「あなたは、自身の立場をご存知ですか？」

立場。

「……新米で素人の魔法使いということだろうか？」

「その通りです。」

「話は少し変わりますが、魔術協会では教授会や貴族たちが派閥を作って内部を支配しています。」

「大抵の魔術師たちはいずれかの派閥に属し、その派閥をより強くしようと日夜権力闘争を行っています。」

「……そこへ、あなたが現れた」

「……取り込みやすいにもかかわらず、取り込むことが出来れば大きく力を伸ばしうる。」

要するに『鴨が葱を背負ってきた』って訳ですね？」

「そういうことです。」

ですから、あなたの取り込みを巡って闘争が起きてしまう可能性があります。がありました。

あなたを取り込むというメリットは大きいですが、そのために戦いを始めてしまつてはどの派閥も大きな被害を被つてしまいます。

ですから、上層部は『何れの派閥も杯門高美に干渉せぬよう』という決定を下し、私を派遣しました」

「なるほど。でも、どうしてバゼットさんなんですか？」

バゼットだつてどこかの派閥に属しているのだらう。

であるのならば、バゼットが監視に付くということは、俺がいずれかの派閥からの取り込みを受けるということに他ならない気がするのだが……。

「私である理由……そうですね、私が調度よい存在だったからでしょうか？」

マクレミツツの家は協会内に於いて名家といわれる家です……が、まあうちはあまり力もありませんし、私自身が封印指定の執行者なんてことをしています。

ですから、丁度良かったのでしょうか。

名門であるマクレミッツの子女を当てることで新たな魔法使いを粗雑に扱っているという印象を無くせませし、

私は執行者ですから、どこか特定の派閥で権力を握る可能性というのも限りなく低いとふまれたのでしょうか」

なるほど。

だからバゼットさんだったのか。

……バゼットさんの話だと、基本的に俺には不干涉の方針のようだが、それだと護衛は必要ないのでは？

という疑問をバゼットさんにぶつけてみる。

「ええ、まあそうなのですが。それはあくまで建前で、あなたに干渉しようとするものは多く存在するでしょう。

それに、あなた自身が魔術に関しては半人前ということで、あなたの魔法を狙うモノもいないとは限りません。

というより、おそらく多数いるでしょう。

そういった輩からあなたを守護する。それが私の役目というわけ  
です」

「理解しました。

それじゃあ、これから宜しくお願いします」



そういつて深く頭を下げる。

「いちらじぞ。

それでは、早速本日の行程を進めましょう」

そういつて、ツカツカと歩き出すバゼットさん。

先程から置いてきぼりだったアルマさんは、既に受付へと引込み、紅茶を嗜んでいるところだった。

「それじゃあアルマさん。行ってきます」

気だるげに手だけで返してくるアルマさんを背に歩き出す。

「ふぬア〜ん」

ここに向かう間、あまりの風圧に耐えられず引っ込んでいたメイが、いまさらになってモゾモゾと顔だけで這い出してくる。

目を細めてあくびをするメイの頭を撫でつつ、俺はバゼットさんの後を追いかけていくのであった。

現在時刻は午後五時三十分。

あれから、休む間もなくロンドン中を引きずり回された俺は、『時計塔』の主要な機関を廻ることになった。

そして現在、バゼットさんに連れられた俺は最後の行程。

つまり俺がこれから住むことになるアパルトメントへとやってきていた。

肉体的な疲労は有り得ないが、あちこちを引きずり回されて、俺は精神的に多少疲れてしまっていた。

バゼットさんはどうなのだろう　とバゼットさんに視線を向けてみると、未だ以て背筋はシャンと伸び、カツカツと俺の前を歩き続けていた。

そんなバゼットさんの体力に感心していると、唐突に彼女は止まり、こちらをまっすぐに見つめてきた。

「ここです」

そう短く告げられた俺は、目の前に立つ建物へと視線を移す。

……一言でいえば豪邸。

正直な所、一人で住むには多少大きすぎるように思われる。

大きな庭と、レンガ造りの屋敷。

これだけのモノを作るとなると、どれだけかかるのだろうか？

なんて考えていると、懐から何かを取り出したバゼットさんが屋敷の入り口へと歩き始めた。

これから暮らす家……いや、屋敷の大きさに呆然としていた俺は、慌ててバゼットさんの後を追う。

そうして、バゼットさんが鍵を開けた門を潜り、遂に屋敷の中へと足を踏み入れるのであった。

「おぉー」

屋敷の中に入ってすぐ、俺はそんな感嘆の声を上げていた。多少古いが、掃除の行き届いており、調度品も最低限は揃っている。そしてなにより、いつぞやかに長崎のグラバー園で見たような、絵に描いたような洋館だ。

日本生まれの日本育ちな俺からすると、ここでこれから生活するというのが多少信じられない。

「すごい屋敷ですね」

その感動を素直にバゼットさんに告げる。が、バゼットさんはこちらの話を無視してなにやら屋敷の壁や床を探っている。

「……あの、バゼットさん？  
何をなさっているんですか？」

もしかしておかしな人だったのだろうか？

という疑惑を込めつつ尋ねる。

と、これまで機械のようだったバゼットさんに初めて表情らしきものが浮かんだ。

「なんですか、その『この人大丈夫かなー』という視線は？」

それは怒り。

笑顔のまま目をぴくぴくと痙攣させている彼女は、泣きぼくろが魅力的だった。

「いえ、決してそんなことは。ただ……いきなり壁や床を撫で回し始めたので、そういうのが趣味なのかな、と」

初めて感情らしい感情を見せたバゼットさんが嬉しくて、そんな馬鹿げたことを言ってみる。

「そ、そんな訳がないでしょう。これはアレです。」

この屋敷に盗聴や盗撮の類がないか走査していたのです」

顔を多少紅くしつつ、そう早口でまくし立てるバゼットさん。

……なるほど、実はバゼットさんって可愛らしいひとだったのか。

なんて、本人が聞いたらより可愛らしくなるであろう感想を胸にし  
まいつつ、バゼットさんの言葉にあった気になる単語について追求  
する。

「盗聴…盗撮ですか？」

「……ええ、その通りです。」

このように、使い魔の類や妙な術式が屋敷のあちこちに存在して  
いますから、それを探し出していたんです」

そういうと、バゼットさんは石で出来た……ネズミ？を取り上げて  
こちらへと見せてきた。

「石で出来た簡易ゴーレムですが、こんなものでも数があると面倒  
です。」

纏めて走査しましょう」

と、バゼットさんはポケットからいくつか石を取り出し、爪でなに  
やら刻んだ後、それを地に放り投げた。

すると、その石たちは命を吹きこまれたように床を自在に動き出し、暫くすると見えなくなっていくた。

「今のは？」

「今のは『探査』のルーンです。

あなたもルーンを使うようですが、分からなかったのですか？」

「うっ」

そう云われると弱いのだが。

一応、ルーンは全種刻むことは可能になっている。

が、未だ発火や簡単なルーンしか刻むことは出来ないし、そのルーンをみて瞬時に効果を割り出すという域にまで達していない。

「まあ、魔術師としては半人前ということですし、そのようなものでしょう。

……と、帰ってきましたね」

屋敷中を走りまわってきたであろう石を拾い上げるバゼットさん。



「どつでした？」

石を手に考え込むバゼットさんに尋ねる。

「使い魔が15、簡易ゴーレムが120、妙な術式が20。

………面倒ですね。いつそのこと全て壊してしまうというのは…  
…」

なんて物騒なことを呟きながら手袋をはめるバゼットさん。

何をどう壊すのかは不明だが、その剣呑な瞳からはあまり良い未来は描けない。

なんていうかアレだ。

先ほどは可愛らしなんて考えていたがアレは一部訂正。

この人結構短期で危険な人だ！

バゼットさんにガクブルとしていた俺は、すぐさまバゼットさんを  
止めねばならないということに気がつく。

さもなければ、俺とメイは家なき子に成ってしまうだろう。

「いえ、バゼットさん。物騒なことはやめてください。

要するにアレでしょう？それらを処分すれば良い、と。

俺だって盗聴や盗難されてるのは嫌ですし、協力しますから、ね  
」？  
」

バゼットのスーツの袖にすがりながら嘆願する。

「ほら、メイ。お前もちゃんとやわなないと俺たち家なき子になっちゃうぞー！」

「なおくん？」

俺にそそのかされたメイが悲しげな瞳をバゼットに送る。

「い、いえ。別に屋敷ごと壊せば速いのに、なんて思っではいませんよ？」

「思っていないから、その卑怯なことをやめなさい」

紅くなりながらアワアワと弁明を始めるバゼットさん。

うん、やっぱりアレだ。

バゼットさんはいじられキャラに間違いない。

……まあ、いじりすぎると痛い目にあっつてしまっそうだが。

「いいいえ、冗談ですよ。ほら、メイ、バゼットさんは俺らの家をこわさいでいてくれるらしい。」

「……ところで、その使い魔やらは、どうやれば取り除けるんですか？」

「……引っかかりますが。」

まあ今はおいておきましょう。

そうですね、使い魔やゴーレムは回収して物理的に破壊すればそれで良いでしょう。

術式の方は……その術式の基点を見つけて地道に解呪していくほかないでしょう」

「なるほど面倒くさいですね。」

「……ところで、バゼットさんは何か魔術礼装の類を身につけていますか？」

「はっ？ まあ、護衛も兼ねているわけですし、一応いくらかは持っていますか」

「じゃあ、それは外に置いてきてください。」

でないと壊れてしまいますし」

「壊れる……？ 何をしようというんですか、あなたは」

懐疑の視線を投げかけてくるバゼットさんが、個人的にはそれが妙に面白い。

だから、俺は敢えてそれをぼかしていく。

「……いまさらですが、高美でいいですよバゼットさん。」

あと、質問については……そうですね、大掃除ですよ大掃除」

そういつて、バゼットさんを外に追い出す。

バゼットさんはなにやら抗議の声をあげつつも、結局は俺に押し切られ、外へとでていくことになった。

さて準備を始めようか？

銃弾には魂を、銃身には肉体を

自身の中に潜り込み、魔術回路を起動する。

瞬間、俺の回路を満たしていく魔力。

それが溢れないように回路の中を循環させる。

そして、手首をルーンナイフで深く切り裂く。

と、同時に溢れ出す血液。

……正確には、俺の肉体はエーテル体のようなもので、血液と  
いうよりはそれらしきもののだが、まあそれは良い。

その血液を以て地面に陣を刻みつけていく。

組み込む術式は音を遮断する術式、光を遮断する術式、認識を遮断する術式、結界内の魔力を遮断する術式、音を偽装する術式、光を偽装する術式、認識を偽装する術式。

そして結界そのものの魔力を遮断する術式、異常を正常に偽装するための術式。

さらに、この屋敷と俺自身をリンクさせ、認証外の存在が近づいてきた際にそれを認識するための探査術式を組み込む。

術式容量がかなり重くなってしまったが、おそらくはコレでも最低

限。

一応魔術師の拠点として必要な術式は組み込んでいるが、工房が持つという防衛のための機能など一切有していないし、本当に魔術師のねぐらを隠すためだけのものだ。

自身の血に魔力を流すことでその形を変え、一瞬にして術式を刻みこむ。

と、慌てた様子のバゼットさんが駆けこんできた。

「なんですか、この魔力の高まりは!？」

「いえ、家の中にある使い魔と違って魔力の過負荷で壊れますよね？手っ取り早くぶっ壊して、ついでに結界も張ろっかな…なんて？」

「なんで疑問形なんですか!？」

「……いえ、まあ確かに過負荷で壊れはするでしょうが、乱暴すぎます」

「乱暴…？ それをバゼットさん&…いえ、ほら手っ取り早くや  
ったほうが良いでしょう？」

別に俺たちに問題があるわけでも無いですし…ね？」

「まあ、確かにそうなのですが…。」

ところで、先ほどなにやら言いかけていたようですが…なにか  
？」

「いえ、なんでも無いです。

それじゃあやりますね。……いつきまーっす！」

バゼットさんを説得？し誤魔化す。そして、これから行くことが周  
囲に露呈しないように屋敷を簡易結界で覆う。

バゼットさんとはいうと、なにやら引つかかる様子ではあるものの  
まあ手間が省けていいか みたいな感じで諦め顔である。

銃弾には魂を、銃身には肉体を

お決まりになつてきた呪文を唱える。  
先ほどから回路の中を循環させていた魔力の制御を放棄し、屋敷の中に解放する。

瞬間、あまりの密度に物理的質量を持った魔力の風が屋敷中を蹂躪する。

ゴゴゴゴツという轟音と共に一瞬にして屋敷を蹂躪した風は、しかし収まる際も一瞬だった。

あとに残るのは、魔力の過負荷で砂のように崩れ去つた使い魔や簡易ゴーレムの残骸と壊れた術式、そして某野菜人の様に髪を逆立たバゼットさんだった。

「えーと、バゼットさん？

まずは謝らせてください。私が考えなしでした。

それと……御髪が大変なことになってしまっているのですが……」

先手必勝とばかりに謝る。

が、バゼットさんは多少様子はおかしいものの、対して怒ってはいないようだった。

「いえ、問題はありません。

この程度の被害で、屋敷内の使い魔たちを一掃できたのですから。



……が、少しだけ気分が優れません。おそらくは魔力に当てられたのでしょう」

と、申告してくるバゼットさん。

確かに、全く怒っていないようだ。

自分でやっておいてなんだが、それって女性としてどうよ？と思わなくもないが、怒られないに越したことはないので黙っておく。

ところで、気分が悪いということだったが……。

「大丈夫ですか？

その、気分が悪いのなら少し休んでいてください。

というより、今日はもう帰っていただいても大丈夫ですよ？

荷物はこっちに送ってくれるという話ですし、後は結界を張るだけです。

また明日も予定があるというのなら言ってもらえれば大丈夫ですし……」

バゼットさんが本当に気分が悪そうなのでそう進言してみる。

が、バゼットさんの口から出たのは驚愕の言葉であった。

「いえ、それには及びません。この程度でへたっついては封印指定の執行者など務まりませんし。

……なにより、帰るも何も私は今日からここで生活しますので。

住居に戻ることを帰るといっているのであれば、私はもう既に帰っています」

なにやらよく判らない言い回しではあるが、つまりはこういこと  
だろうか？

これから俺とバゼットさんはここで同s…もとい同居する、と。

なるほど、なるほど。

うん、そうだよな。

「ってんな訳ないでしょう！？ どうしてそんな話になっているん  
ですか？」

「何をいつているのですか、あなたは。

護衛をすると最初にいったではありませんか。

とはいっても、流石に私にも別の仕事がありますので、学院が正  
式に始まる9月までが任期となります。

高美の行動を阻害することはほとんどありませんし、私自身も常  
に張り付いているという訳ではないので安心してください」

「はあ。でも、バゼットさんは大丈夫なんですか？

同年代の男と一緒に生活するなんて」

「……それは高美が私を襲う可能性を示唆しているのですか？

であるならば問題ありません。確かに未だ経験はありませんが、  
任務の都合上そういったことがあるということは覚悟しています。

それに……」

と、そこで言葉を切り、こちらを酷く怖い笑顔で見つめるバゼットさん。

「あなた程度から身を守れないようでは護衛として失格です。

安心してください。高美がおかしな気を起こした際には容赦なく私の秘奥を叩き込んであげましょう。

ああ、そういえばあなたは死なないのでしたね……。

そうですね、新しいサンドバッグが欲しかったので私としては好都合です」

だから、大丈夫です。

と、自信満々で言い切られる。

流石に、そこまで言われて手を出そうとするほど俺も愚か者ではない。

……まあ、最初からそんな気は全く無いのだが。

「了解です。誠心誠意気をつけたいと思います。

それじゃあ、とりあえず結界を起動しておきますから、そこら辺で休んでいてください」

と、胸に入っていたメイを外に出しながらバゼットさんに伝える。

銃弾には魂を、銃身には肉体を

再度自己に埋没し、結界術式に意識を向ける。

術式開始。

術式構成演算開始……………終了。

術式はこの屋敷を対象とした結界。

拡張余地を確保しつつ術式強度を最大に……………成功。

術式対象：屋敷とのリンクを開始。

そこまで術式を展開させ、俺は架空の触覚を屋敷、ひいてはこの土地の霊脈に接続していく。

俺の触覚が際限なく広がっていく。

広く広く、大きく大きく。

そうして、見えるはずのない屋敷の中を全て探査すると、次にこの土地の霊脈に触覚を接続する。

接続開始……成功。

術式起動、魔力を可能域限界まで注入。三、二、一……成功。

術式及び結界の確認……終了。

全行程終了。

意識を術式から離す。

色々と粗くはあるが、急ごしらえの結界にしては十分な出来ではあるまいか？

なんて自己満足に浸りながらバゼットさんの方を振り返る。

が、バゼットさんはメイに寄り添われながら眠っていた……眠っている？

いや、正確には気絶していた。

「って、バゼットさん！？ 大丈夫ですか？」

バゼットさんの口元に顔を近づけつつ、胸部に目をやる。

おお、素晴らしい二子山！！

……俺、自重しろ！

改めて、顔にはバゼットさんの吐息が当たるし、胸部は確かに上下している。

多少呼吸が乱れているようだが、問題のあるようなレベルではなさそうではある。

となれば、あれだろう。

おそらく、術式に集中しすぎて、制御外の魔力がまたもバゼットさんを襲った、と。

流石にバゼットさんが職務中に眠ることなどないだろうし、なにやりバゼットさんの眠り方がいささか不自然に過ぎた。

なんていうか、こつ、寝ていたというより急に意識を失って倒れたというか……。

後頭部に瘤ができてるのが良い証拠だろう。

「やっ…」

バゼットさんの無事は確認できたし、結界のとりあえずは完成した。

となれば……

「バゼットさんを部屋に寝かせておくか」

そう決断してバゼットさんに目をやる。

少しだけ荒い息、上下する立派な胸。

赤い髪は短く切られ、苦しそうに歪む顔には泣きぼくろが。

鎧のように着込んだスーツは鍛えられた体を包みこみ……っておい！

流石に、気絶している女性を見つめ続けることに罪悪感を感じた俺は、努めて心を動かさぬようバゼットさんを横抱きにする。

そして、バゼットさんを横抱き……所謂お姫様抱っこしたまま、屋敷の中を練り歩くのであった。

バゼットさんの寢床を求めて。

……ふうー。





## 第二十話（後書き）

後書き

またしても遅くなりました。

みなさんこんにちは。

さて、今回のお話ですが、正直詰め込みすぎて全体的に薄くなりすぎたかな、と。

特に、ロンドン観光もとい協会施設見学編は諸事情により端折りました。

ええぶつちやけそこまで考えきれませんでした。

これから先、協会で色々としていくのでその時においおい出していきたいと思います。

バゼットさんですが、本作中では二十歳前です。

聖杯戦争を2003年に想定しているので、本作中では……18歳くらいです。

彼女の話し方って正直良く分かりませんが、そういったご指摘があればお願いします。

## 第二十一話

イギリスの朝食といえはなんだろう？

トースト、ソーセージ、卵料理、ベイクドビーンズ……そんなところがテンプレだろうか？

時刻は午前七時三十分。

現在、俺は寝癖のついた髪型のまま台所に立っていた。

起きだしているのは俺のみで、バゼットさんとメイは未だ起きだしてくる気配がない。

こんな生活が始まって三日。

ようやく荷解きやこちらの生活リズムというものが見えてきた。

昨日ようやく冷蔵庫を手に入れたので、今朝はこちらに来て初めての自炊をしているところだ。

フライパンにバターを落とし、そこに砂糖、塩、ミルクを溶き合わせた卵を流しこむ。

ジューワー、とほのかに甘い匂いを漂わせながら固まっていくな。  
それを菜箸を用いて崩していく。……本来の作り方は知らないが、  
これで一応スクランブルエッグっぽいものが出来るだろう。

そして、スクランブルエッグを作ると同時、塩を入れたお湯に太めのソーセージを投入していく。

本来は油で焼く方が美味しいのだろうが、あの脂っこさは朝から食べるには多少厳しいものがある。

だから、昔から我が家の朝食ではボイルドソーセージが主流だったのだ。

なんて誰にだかわからない言い訳（説明）をしつつ食パンをスライスしトースターにかける。

そして、冷蔵庫からレタスを取り出すと、五枚ほどちぎって水洗い始める。

七時とはいつても未だ肌寒く、水もかなり冷たいので割と厳しいのだが、野菜を洗う分には水は冷たいほうが良い。

……なんとなくシャキシャキするような気がするのだし。

洗ったレタスをキッチンペーパーで拭いていく。そうして、拭いたレタスはサラダボウルに盛り付け、同じく洗ったミニトマトなんて添えてみる。

本当は、ベイクトビーンズも作ってみたいのだが、如何せん作り方を知らない。  
もしかしたらバゼットさんなら知っているやもとも思うが……どうだろうか？

そうこうしているうちに、弱火にかけていた卵が半熟で固まりだす。スクランブルエッグは、固まらずされど生でもないとというタイミングが一番美味しいと思う。  
故、そのタイミングを逃すことなく器に移していく。

さらに、茹でていたソーセージを取り出して、キッチンペーパーで軽く水気を拭く。  
それをスクランブルエッグの脇に添える。

あとは、焼きあがったトーストとカップに新鮮なミルクを机に運べば朝食の完成だ。

流石に、朝から凝った物は作れないし、作りたくもないのでかなり手抜きだが、食べられる分には問題ないだろう。

さて、それでは朝食だ。寝坊助さんたちを起こさなければ。

第二十一話

「しつ馳走をまでした」

五分。

二人で食べるには多いかな、と思っていた朝食が俺たちの胃の中に消えるまでの時間である。

「あの、バゼットさん。あまり人のことはいえませんが、もう少しゆっくり食べたほうが良いですよ？」

『食べる』というより『流しこむ』というような食べ方をしていたバゼットさんに苦言を呈する。

「...?。いえ、マナー違反はしていないつもりですが？」

そう。

そんな風に怒涛の勢いで朝食を『流し込んだ』バゼットさんなのだが、どういふことだかマナー違反は一切なかった。いや、むしろどことなく気品すら漂っていたのだ。

いふなれば……良家のお嬢様系フードファイター？

そんな存在が存在するとは思えないが、バゼットさんの場合は正真正銘お嬢様であることだし、あながちハズレでもないのやも知れぬ。

「いえ、そういう事ではなくってですね。もう少し噛みながら食べ

ないと体に悪いですよ？」

「…………？ あの程度の食事量で消化不良を起こすような鍛え方はしていませんからご心配には及びません」

俺の苦言に少しズレた反応を返すバゼットさん。

「いや、だからそういう事では…………まあ、いつか。ところで、朝食はどうでした？」

「…………？ 朝食でしたか？」

「は？ ……その、美味しかったかどうかです。もしか嫌いなものとかあったら今度から変えなきゃですし」

「？ 朝食に美味しいも不味いもないでしょう。その日活動するためのエネルギーを十分に補給できるのであれば、それはどのようなものであれ朝食では？」

まあ、そうですね。多少脂質が足りないように感じました。脂質は過ぎれば贅肉となりますが、適度になればいざというときに活動に支障を来す可能性もあります」

「……………ええ、まあそうですね」

なんていうかアレだ。そもそも話が噛み合っていない。分かつちやいたが、この人色々とズレてる。



「ところで、今日の高美の予定はどうなっていますか？」

「予定…ですか？ えーと、確か……アルマさんの所に行って工房設置の許可を取ったあと、9月から俺の担当になる講師に挨拶に行く……だったかな？」

「なるほど。つまり協会へ行くのですね。出発は何時頃？」

「そう言われて時計を見る。」

「現在時刻は午前八時。」

「台所を片して、洗濯してだから……。」

「多分十時くらいですかね？ バゼットさんの予定はどうなんですか？」

「私ですか？ 私は任務があるため、あなたを協会へ送り届けて以降は別行動になります。」

「……おそらく夕食には間に合わないでしょうから、本日の夕食を準備してもらう必要はありません」

「了解です。そんじゃまあ、ちゃっちゃんか片して動きましょうか」

「そうですね。では私は洗濯をしておきましょう。」

「高美の洗い物も一緒に回収しておきます」

「机の上の食器類を流しへと運んでいく。」

と、バゼットがそんな事を言ってくる。

……多分、俺の下着とか見てもどうとも思わないのだから……  
突っ込まないが。

うん、なんていうかバゼットさんは少し女を捨てているような気がする。

今更な上に、俺の意識しすぎな気もするが……。

「了解。ありがとうバゼットさん」

そうバゼットさんに返す。

バゼットさんはその言葉に頷きながら二階に上がっていく。

ところで、イギリスでは日本に於ける一階をグラウンドフロアー、二階をファーストフロアーというそうだが、それは一般家屋にも適用されるのだろうか？

なんて疑問を抱きつつ、袖を肘あたりまで捲し上げる。

相対するは汚れ物（お皿など）。

さて、それでは始めよう。

家事の始まりだー！ー！！

なんて妙なテンションで家事を続けること暫く。  
皿を洗い終えた俺は、洗濯機に悪戦苦闘するバゼットさんの元へ行き、救助することに。

……もちろん洗濯機を。

まあ、あれだ。バゼットさんはなんていうか、その……不器用さんで短気さんなんだ。

そう、俺は日本から持ってきたアイロン一号がヒシャゲてご臨終に成ったときに悟ったのだ。

彼女ってあれだ、口より手が先に出るタイプ。

障害は回避するものではなく破壊していくもの、みたいな？

なんて失礼なことを考えつつも、無事洗濯機を保護し、洗い終えた洗濯物を庭に干していく。

……バゼットさんの下着を俺が干していることが何の問題にならない点もそうだが、スーツを洗濯機で丸洗いするバゼットさんは本当に大物だと思うんだ。

まあ本人曰く、『汚れが落ちさえすれば問題ありません。ダメになれば新調すれば良いのですから』なんて言っていたし問題ないのだろつ。

……そんなところでバゼットさんがいいところの娘さんであるとい

うことを再認識するのもどつかと思うのだが。

そんなこんなで、粗方家事を終えた俺とバゼットさん、そしてようやく起きだしてきたメイはフラットを後にし、大英博物館へと足を向けるのであった。

『時計塔』の受付へとやってきた俺は、なにやら任務があるらしいバゼットさんと別れ、一人アルマさんを待っていた。

受付には他の受付さんがいたので手続きをお願いしたのだが、なにやらアルマさんが担当なので受け付けられないのだとか。

……いつからあの人は専属になったのだろうか、と思わなくもないが、まあアルマさんの方が気が知れているし良いことなのだろう。と思い込むことにした。

待つこと三十分。

現在時刻は午前十一時十五分。

ようやく現れたアルマさんは忙しそうに歩きまわりながら、なにやら資料を運んでいる。

声をかけるのもどうかと考えた俺は暫くアルマさんを観察していることにした。

相も変わらず小さな身体。

流れるような金髪は、今日はポニーにして活動的な印象を与える。

が、忙しそうにパタパタと走りまわるその姿は、髪型も相まって彼女の魅力（幼女っぽさ）をより一層引き立てていた。

と、俺の不躰（失礼）な視線に気がついたのだろうか、気がつくとアルマさんが足を止めてこちらをジト目で睨んでいた。

そして、クイクイと俺を指で受付へと呼び、本人も受付椅子へと腰を下ろした。

「妙な視線を感じただけど……変なことを考えていなかったですよっね？」

「いえ、アルマさんは今日も綺麗（少女）だな、って（人類の神秘に）見惚れていたんですよ。ですが、まあ。女性を凝視するというのは失礼でしたね。本当にすみません」

そう殊勝に謝る。

副音声なんて現実で聞こえるはずもないので、一応誠心誠意の謝罪である。

「き、綺麗？ ……まあいいでしょう。う、うほん。ところで、今日は何の用事かしら？」

『綺麗』というワードに反応して頬を染めるアルマさん。  
本来なら可愛らしいな、と感動するべきところなのだが、妙にそれが涙を誘う。

おそらく。

彼女の容姿的に『可愛いね』とか『愛らしいね』とかは言われ慣れているが、『綺麗』とは言われていなかったのだろう。  
だから、『綺麗』という言葉が琴線に触れたのだろう。

うん。そくに違いない！

なんて、一方的かつ失礼な事を考えていると、再びアルマさんが不審そうな目を向けてきたので慌てて質問へ答える。

「あ、はい。今日は工房設置の許可を貰おうと思って来ました。あと、俺の担当講師になる方にも挨拶しておこうかな、と」

「なるほどね。工房の方は問題ないわ。既にかから許可は出ています……ところで、工房はここに作るの？ フラットに作るの？」

今日の目的を話しつつ、必要書類を取り出していた俺はアルマさんの言葉に動きを止めた。

「へっ？ いや、『時計塔』に工房を作るためには一定の成果を上げなきゃダメなんじゃないんですか？ 確かそう言われていたような気がするんですが……」

「そうね。確かにその通りなのだけど、所謂特例。まあゴマすりの一種でしょう？」

なるほど。

が、別にここに工房を設置するつもりはない。

確かにこのほうが設備や資料は揃っているのだろうが、出る杭は打たれるというし、未だ正式な学徒ですらない俺がここに工房など構えればいらぬ嫉妬を買ってしまうだろう。



……まあ、今更といえば今更ではあるのだが。

というわけで、

「いえ、ここに工房を設置するつもりは当分ありません。うちのフラットでも十分に研究は出来ますし、なにより……」

「なにより……?」

「ここってなんかやばい気がするんですよ。こつ、敵地に陣を築く的な?」

そんな危惧を吐露する。

先日のフラットに仕掛けられていた仕掛けの数々を思えば、そう勘ぐってしまったって仕方のないことであろう。

そんな俺の危惧をアルマさんは肯定し、

「そうね。確かに、あなたがこの人間の悪意を一人でどうにか出来るようになるまではそうしたほうが賢明かしらね。

それじゃあ、その書類を渡してくれる? さっさと処理して仕事をしないといけないから」

「はい、どつぞ」

そう言つてアルマさんに書類を渡す。  
書類に記載されているのは、俺の個人情報と工房設置の目的、場所  
などが記されている。

その書類を流し読みしていくアルマさん。

「……………問題はないうね。はい、コレが許可証よ。書類が出る前  
から許可が出ていたことだし、今日にでも工房は設置して構わない  
と思つわ。」

……………それじゃあ用はすんだわね？ 忙しいから私はこれで……………」

そういつて腰を上げようとするアルマさん。

が、俺にはまだ質問しなければならぬことが残っている。

「あの、アルマさん。俺の担当講師になる……………えーと、ウェイバー  
さんには何処で会えますか？」

「ウェイバー？ ……ああ、ロード・エルメロイ？ 世ね。確か彼は  
……………その階段を降りた先にある教授棟の305号室に居ると思つ  
わよ。」

「教授棟の305ですね？ ありがとうございます。……………それに  
しても、どうしてそんなに忙しそうなんですか？」

「判っているのならいらぬ質問はやめてくれるかしら？ ……まあ、あれよ。ここでのあなたの保護者なバカ女がまた問題を……はーい、今行きます！」

頭が痛そうに、事実頭を抱えながら話し始めようとしたアルマさんを誰かが呼ぶ。

それに答えたアルマさんは、慌てて書類を持つと、受付奥へと入って行ってしまった。

「忙しそうだな、アルマさん。 ……にしても青子さん、なにしかしたんだらう？」

曰く、ロンドンの問題児である俺の後見人の事を思いつつ、用事を済ませた俺はウェイバーさんに会うために階段を下っていくのであった。

地下に存在するのに『時計塔』な、ここ魔術協会は、地上施設よりむしろ地下施設の方が多い。

大英博物館の地下一階には『時計塔』の受付が。

地下二階から四階までは各種講義室が。

四階から五階は各教授の教授室があり、そこから下には学院生の工房が無数に存在している。

……らしい。以上、『時計塔』のパンフレットより。

受付から離れた俺は、俺の担当講師になるというウェイバーさんの元へと歩き続けた。

担当講師。そう担当講師が決まっているということは、つまり受講科目が決定したのだ。

それを決め、必要書類を提出したのが先々日であったことを考えると、これは驚異的な速さでの決定ではないだろうか？

……もしかしたら、最初から決定していたのかもしれないが。

とにかく、俺は先日受講科目を決定した。

受講する科目は現代魔術概論、錬金術、ルーン文字学、召喚術、結界術で、専攻は降霊学にした。

選考基準は自身がこれまで教わってきたこと、そして自身の魔法に  
関連するであろうことだ。

ウェイバーさんは降霊学科の講師で、曰く、プロフェッサー・カリ  
スマ、マスター・V、グレートビッグベン、ロンドンスター、女生  
徒が選ぶ時計塔で一番抱かれない男……などなど、様々な異名を持  
つ時計塔の名物講師らしい。

なんていうか、陰険眼鏡のイケメンを想像してしまうのだが、はて  
さて。

と、期待(?)に胸をふくらませながら歩き続けること暫く。  
ようやくと305号室のプレートを発見した。

先日と同様、胸に入れておいたメイを取り出す。  
一応使い魔な訳だし、しっかり挨拶させつ必要もあるだろう。

コンコン、重厚な木の扉をノックする。

と、どうぞ と不機嫌そうな男の声が返ってきた。

ああ、俺の陰険眼鏡説の中？

「これからお世話になる杯門高美です。失礼します」

そついつて扉に手をかけ、ゆっくりと開いていく。

眼に入るのは予想に反して質素な部屋。  
執務机と本棚以外にはほとんど何も無い。

それに驚いていると、やはり不機嫌そうな声が投げかけられる。

「何を呆けている？」

「いえ、なんでもありません。突然おじゃましてすみませんでした。  
私は今年の9月からこちらでお世話になる杯門高美です。今日はご  
挨拶に伺いました」

「……なるほど。君が例の。ふむ、予想とは多少違うが、そういう  
ことならいいだろう。こちらこそよろしく頼む、最新の魔法使い殿」

「あ、はい、未熟者ですがどうかよろしく願います」

「……………」

「……………」

「……………」

「…………… あっあの、こっちの猫が俺の使い魔のメイです。ほら、メイちゃんと挨拶しろ」

「じゃあ」

器用に前足を上げて挨拶をするメイ。

ああ、今日もメイは可愛いな。

なんて親ばか？なことを考えていると、考え込むようにして、顎に手を当てたウェイバーさんがメイを凝視していた。

「……………この使い魔、元は生き物ではなく人形か？」

「…よく分かりましたね。今まで誰も気がつかなかったんですけど」

「まあ、確かに。造形的にも霊的にも一個の生命として成立しているから分かりにくくはあるだろうな」

「ではどうして？」

「あまりにも完璧すぎるということと、私はとある人形師の人形をこの目で見たことがあってね。これほどの出来だ、君が青崎と関係があることを考えれば予想は付く」

「なるほど、でもそれでは多少弱いのでは？」

「ああ、だから半分は勘だよ。……それにしても、半人前の魔術師にしては良い構成だ。資料に誤りでもあったのか？」

なんて、妙な勘違いを始めるウェイバーさん。

流石に、あまり勘違いをされて後で恥をかくのもなんだし、その勘違いをただすことにした。

「いえ、これはまあ素体が優秀だったからですよ。俺自身はルーンと結界、あとは強化を少ししか使えない半人前です」

「なるほどな。まあそういうのならそうなのだろう。……で、本日の要件は挨拶だけかな？」

「はい、そうですが……お邪魔でしたか？」

「いや、特に予定はないが……だが、まあ。そうだな、一応私が担当することになるのだし、なにか質問はあるか？」

質問……。

特にこれとってないのだが……。

「そうですね……入学まで後半年ほどありますが、その間はどんなことをしていればよいでしょうか？」

「は？……ああそうか、君はほとんど素人だったな。であれば自身の研究などはまだ遠いだろうし……」



なにやら考え込むウェイバーさん。  
そう。本来なら研究なりなんなりをしていけば良いのだが、そもそも研究できるほどの下地が無い俺はこれまでの復習程度しか出来る  
ことがないのだ。

「そうだな。よし、明日またここに来い。そこでお前の腕前を見て、週に一度課題を出そう。入学まで時間はあるのだから、それまで無為に時間を過ごすよりはそちらのほうが有意義だろうしな」

ああ、ウェイバーさんってかなりいい人なのかも知れない。  
初対面の俺にここまで良くしてくれるとは…。

「ありがとうございます！ ご指導宜しくお願いします。明日は、何時頃が都合が良いでしょうか？」

「そうだな……午後一時頃にここに来てくれればそれで良い。他に質問は？」

「いえ、大丈夫です」

「そうか、それでは今日はもう戻ってくれ。すこし用事が出来た」

「判りました。それでは、これからよろしくお願いします」

そういつて講師室を後にしようと、メイを胸元へ入れ、扉へと向き直る。

と、

「ああ、まちたまえ。……君はアレかな。ほら、あの街には詳しいのかな。ウエノとかアサクサとか、そのあたりに近い街の話なんだが……」

よく判らない質問を投げかけられた。

日本に興味があるのだろうか？

それにしても、微妙な場所について聞いてくるものだが……。  
おそらくは……

「秋葉原ですか？ はい、まあ多少は知っていますが……。とはいっても住んでいた場所は少し遠いですし、実際に行ったのは二度くらいです」

「そうか、いや、まあいいんだ。それでは行き給え（……………微妙だな、どうする、話を振ってみるか？）」

「？ 判りました。それでは改めて。失礼しました」

よく判らない質問に答えると、ウェイバーさんは少し考えこむようにしながら退室を促すのであった。

外に出ると、穏やかな日差しが降り注ぐ。  
現在時刻は午後二時。

まさに麗らかな昼下がりといった体だ。

「今日はもう予定もないし……」

そういつて歩きながら周囲に眼をやる。

と、暫くして公園が目に入ってきた。

散歩をする老夫婦。  
ボールで遊ぶ子どもたち。  
木陰で本を読む学生。

そんな穏やかな光景に誘われて、俺は自然と公園へと足を踏み入れていた。

「なあ、うん？」

首だけを胸元から出したメイがこちらをキラキラした目で見つめてくる。

おそらく、公園で遊んでくれるのか？

ということなのだろう。

上着の中に隠れた尻尾が胸の上にタパタとたたきつけられている。

まあ、いいか

予定には無かったが、メイと公園で遊ぶというのも楽しそうだ。

そう考え、メイの頭を撫でつつ広場の方へと向かう。

そして、上着からメイを開放する。

「さて、メイ。かかってこい。今日の俺は一味違つぜ?」

## 第二十一話（後書き）

こんにちわ。

連続掲載？してみたTGO9です。

今回のお話は、フラグ立てと本番への準備編でした。  
短い上に、結局話はあまり進んでいないのですが、とりあえずはこんな感じで進んでいきます。

あまりにも長くなるとあれなので、後一話か二話挟んで入学あたりまで跳ぶ予定です。

アメリカ英語とイギリス英語の違いをあまり把握していないため、言葉におかしな点があると思われるが、ご指摘いただけるとありがたいです。

まあそんな感じです。

今年中に後一度か二度は更新したいと思います。

それでは。

## 第二十二話

結局、思う存分公園で遊びまわった俺とメイは、帰りがけに入ったパブで英国名物のフィッシュ・アンド・チップスを食べて帰宅した。

実際に歩いて帰ってみると分かったことなのだが、あの公園はうちの屋敷と『時計塔』の丁度中間あたり、徒歩で二十分程度の位置に存在していたのだ。

ここからの道もきちんと整備されているし、なにより自然が多くて気持よさそうであった。

もう少し余裕が出来てきたらメイを連れて散歩コースにしてみても良いかも知れない。

とにかく、そう思ってしまう程度には楽しい時間を過ごした俺とメイは屋敷に戻ってきた。

思う存分に遊んで疲れてしまったのだろう。

屋敷に戻ったとたん眠り始めたメイを俺のベッドに寝かしつけ、俺は一人ダイニングルームでバゼットさんを待ち続けた。

手元には「コーヒーと」 the philosopher's stone」という児童向け小説。

日本語にすれば『哲学者の石』もしくは『魔法使いの石』だろうか？

ハリーという少年が魔法に出会い、魔法学校という場所で魔法の勉強

強をしていくという内容の本で、小説というには多少分厚くもある。俺がこの本を手にとったのは単純に暇だったということと、書店のおすすめコーナーに置いてあったからなのだが、読んでみるとなるほど。

俺の境遇に少しだけにているかもしれない。

……まあ、こちらは本物の魔法使いで、魔術を習うために魔術協会に通うわけだが。

純粹に文章としても面白いし、なにより夢に溢れていて良い。

そんなこんなで、家に返ってきて三時間ほど。

バゼットさんが返って来るまでにイツキ読みしてしまった。

「ただいま帰宅しました。……読書ですか？」

「ええ、まあ。今日の帰りにたまたま寄った書店で買って来たんですよ。」

児童向けということでしたが、かなり面白かったです。……バゼットさんも読んでみませんか？」



「……いえ、私は遠慮しておきましょう。ありがたい申し出ではありますが、読むための時間があるのならば己を鍛えた方が建設的です」

帰宅したバゼットさんに読み終えた本を勧めてみるも、すげなく断られてしまう。

まあ、確かにバゼットさんの場合は命のやりとりをするような職に就いているのだ、自身を鍛えることを優先するというのも分からないでもない。

「そうですか。でも、この本はもう読み終えたのでリビングの本棚に置いておきます。暇ができたら読んでみてください」

「そうですね。そうしましょう」

「ところでバゼットさんは夕食は食べましたか？」

何も口にしていないようなら何か軽く作りますが…」

本のことを一旦切り上げて食事について聞いてみる。

とはいっても、今日は夕食をしたしたいした物も無いのだが…。

「そうですね。予想より遅くなってしまったため食事はとっていません。

ですが、問題はありません。食事をしなければならぬほど消耗していませんし、なによりこれからは睡眠を取るだけです。

就寝前の食事はあまり良いとはいえませんが…」

「ですが、戦う者は身体が資本。そして身体の基本は食事ともいい  
ます。少しだけでも身体にいれていた方が良くと思いますよ？」

「……そうですね、ホットサンドでも作りましょう」

「いえ、ですから必要ありません。それに高美にも悪いですし……」

「それじゃあこうしましょう。俺、今日は夕方に夕食を食べたんで  
すよ。」

「だから少し小腹が空いたんです。ですからホットサンドでもつく  
って食べようと思っていたんですが、一人で食べるには多すぎる。」

「……バゼットさん、半分食べていただけませんか？」

別に、無理やり食べさせる必要も無いのだが、妙な意地を張ってし  
まって無理やりにバゼットさんに勧めてみる。

基本的に人が良いバゼットさんだし、おそらく……。

「……………はあ。仕方がありません。半分だけいただきますしよ  
う。」

それにしても、何故そうまでして私に食べさせようとするんです  
か？

「……………いえ、特に理由は無いんですが。強いていえば……………なんなん  
でしょうね？」

「あなたがわからないことを私が判るはずありません。」

「まあ、いいでしょう。正直なところ、私も少し空腹を感じていた  
ところですよ。」

「それなら良かった。すぐに作ってきますから少し待っていてくださいね？」

そういつて台所へと歩き出す。

確か冷蔵庫にはレタスとハム、チーズがあつたはずであるならば、シンプルにしよう。

頭の中で完成形を想像しつつ、俺はキッチンへと入っていくのであった。

朝、とはいっても午前十時なのだが、俺とメイ、そしてバゼットさんは石畳の道を歩いていた。

「この近くにある公園。バゼットさんは知っていましたか？」

「ええ。『時計塔』からも近いですし、知っていますが」

それがなにか？      といったていで返される。

「いや、別にどうということもないんだけど…。」

昨日、『時計塔』からの帰りにメイとそこで遊びまして、良い場所だったので朝散歩でもしようかな、と」

「なるほど。それは良い案だと思いますよ高美。」

魔術師になると大抵の人間は身体が鈍ってしまいます。ですから、適度に運動をすることでそれを防ごうとする試みは良いことだと思います」

いや、別にそういう意味じゃないんだけどね　と口にしつつ、自分が口にした言葉を思い返してみる。

散歩、か。

小川マンションに居た頃はバイトばかりでそんなことはしたことがなかったし、橙子さんの所に転がり込んでからは修行に次ぐ修行でそんな暇は無かった。

ここらで新しい習慣を作ってみるのもいいかもしれない。

……まあ、俺の身体が鈍るのかと言われればほとほと疑問ではあるのだが。

ま、メイも喜ぶだろうし、それも些細なコトだろう。

「そうですね。早速明日から毎朝散歩してみます。

ここだけじゃなくて、あちこち歩いて見て回るのも楽しそうですし」

「そうですね。ところで、本日は『時計塔』にどのような要件ですか?」

散歩の話題から離れ、今日の予定について話し始めるバゼットさん。

今日の予定は確か…。

「今日は俺の講師になるウェイバーさんに会いに行きます。

未だ一人で研究が出来ない俺に、入院前指導をしてくれるそう…。

今日は俺の腕前とか適正を見るんだとか。

……ま、魔術師としてはバゼットさんはおるか普通の魔術師にすら劣るのは判りきっているので、ワザワザ確認するまでも無いんですけどね」

「そうですね。」

ですが、自身の至らなさを認識することは重要です。自身を磨くには自身の能力を見極めることが最も重要ですし。

そうですね、護衛の私も付いていくことは可能でしょうか？」

「多分問題はないと思いますが……くるんですか？」

暗に、来ないでくれというニュアンスを込めて聞いてみる。

流石に、俺の無様をバゼットさんもとい他人に見られるのは恥ずかしい。

「はい。それに、お忘れかも知れませんが私は高美の護衛です。

ですから、他に任務が入っていない限り出来るだけ近くに控えているべきでしょう。

それに、高美の技能を把握するというのも護衛する上で必要なこと…ですし」

「はいはい、判りました。付いてきてください」

口では叶わないと悟った俺はバゼットさんの言葉を遮り、付いてく  
ることを許可する。

まあ、見られても困るものではない。

多少恥ずかしい思いをする可能性があるというだけだ。

「ところで、その予定というのは何時からなのですか？」

「……午後一時です」

「多少早く出過ぎましたね」

現在時刻は午前十時三十分。

約束の時間まで未だ二時間半ほどある。

「どうでしょうか？」

「バゼットさんには何か予定は無いんですか？」

「もしも予定があるようでしたらそちらにお供しますが……」

多少期待を込めて聞いてみる。  
が、

「いえ、私にも今日は予定がありません。

強いていえばあなたの護衛をすることが私の予定です」

「はあ」

気の抜けた返事を返してしまう。  
さて、どうしたものか。

と、公園が眼に入る。

見てみれば、休日故だろうか？

子どもたちが数人フットボールをして遊んでいる。

懐かしい。

昔は俺も近所の公園で、日が落ちるまでボールを追いかけていた気がする。

.....

.....

.....

.....

... 楽しそうだな。

ノスタルジックというか、単純に楽しそうな子どもたちの遊びに惹かれたのか、妙に落ち着かない気分になってくる。



ふだんならこんなことは無いはずなのだが……。

「フム……」

「どうしました？」

「……うん、バゼットさん、ちょっと行ってきますー!」

そう言って走りだす俺。

行き先は勿論公園。より正確にはフットボールをしている少年たち。

「やー少年たち。俺も混ぜてくれないか？」

怪しさ満点と自覚しつつ聞いてみる。

案の定、少年たちはフットボールをやめて不審げな目を向けてくる。そして、リーダー格の少年であろう気の強そうな少年がこちらを睨め付けながら、

「おっさん誰だよ？」

と、直球ど真ん中で尋ねてくる。

少年よ、君の指摘は正しい。知らない人が声を掛けてきたら警戒す

るのは当然だ。  
だがな……！

「おにいさんだよ、少年……！」

いや、ちよつと暇でね。もしよければ混ぜてほしいな、なんて思  
つたわけなんだが……」

「……は？　なんでオッサンなんか入れなきゃならないんだよ。  
オッサンはオッサンらしくベンチで休んでな！」

「……」

「……」

「……」

「あの、別にいいんじゃない？」

少年たちの中から細かい声が聞こえてくる。

そちらへ目を向けると、赤毛にそばかすの、気の弱そうな少年だっ  
た。

「えーでも知らないオッサンだぜ、エイブ。ママも言ってただろ、  
知らないオッサンは無視しなさいって」

「そ、そうだけど……かわいそうじゃない？」

「そうかー。うーん、どう思うアラン？」

赤毛の少年、おそらくはエイブという子の横にいた少年がリーダー格の少年、おそらくアランに尋ねる。

「……………ま、別にいいか。おい、オッサン。特別に仲間に入れてやらないこともないから感謝しろよ。

いくぞユアン。そらっ！！」

そう言っつてボールを蹴り出すアラン。

それにつられて他の子たちも動き出す。

「そんじゃま、許可も出たことだし……………おーい！こっち、こっちだ！！」

童心にかえってみるとしますか。

「あんなたかなかなかやるな！  
ま、また今度会ったら入れてやらなくもないからな！  
おい帰るぞ皆！」

あれから、アランたちと一緒にボールを追いかけていた俺は、結局は暇そうだったバゼットまで巻き込んでフットボールに興じていた。

最後には、年長組（俺＆バゼット）vs年少組（アランたち七名）での勝負になっていたが、バゼットは子ども相手だからと力を押しさえていたのだろう。  
割といい勝負になって、いい汗をかくことができた。

現在時刻は午後十二時十五分。  
少年たちは昼食のために帰宅し、俺たちは木陰のベンチで休憩をとっていた。

手には公園の片隅で売っていたホットドッグ。

それをバゼットさんと並んで食べる。

「それにしても、高美はいきなり過ぎます。」

それに、いきなり見ず知らずの少年たちに話しかけるといっても怪しまれますし、控えたほうが良いですよ?」

「でも、まあ時間は潰せたし………なにより、楽しかったでしょう?」

「……………」

「ま、たまには、ね?」

それにほら、いつも緊張しているといざというとき動けないですし、バゼットさんももう少し気を抜くべきですよ」

「確かに高美のいうことは正しいです。が、私は必要な所以外でまで気を張ってはいませんし、気の抜きどころも心得ています。」

それに、いざとなれば魔術でどうにか出来ますし……」

昨晚の様に話を持って行こうとしたものの、なんだか失敗した。

ところで、少し気になるのだが、気を抜く魔術なんてあるのだろうか?」

「魔術って………どんな魔術ですか?」

疑問をそのまま口にする。

すると、バゼットさんは落ち葉を拾い上げ、それになにやらを刻む。そして、それを俺たちが座るベンチに奥と口を開いた。

「一応、ひと目のある場所でそういう事を口にしないほうが賢明ですよ高美。」

それと、魔術についてですが……いくなれば意識の漂白です」

「意識の漂白？」

「はい。正確には魔術というより自己暗示です。」

自己催眠によって意識を解体、ストレスを識域もろとも消し飛ばすという方法です。」

散り散りになった意識は約二時間程度で自然再生し、生まれ変わったかのような気分で目を覚ます事になります。」

が、その間は無防備になってしまいますし、ホームでしか出来ないというのは多少難点です。」

まあ、この方法に限らず、自己暗示の類であれば自身をリラックスさせることも出来ますし、問題ないということですよ」

「なるほど。……なんだか便利そうですね、それ。」

もしよければ教えてもらえませんか？」

「ええ、まあいいでしょう。」

それでは、そろそろ立ちましようか。時間も丁度良いでしょう」

そう言われて、公園の時計を見る。

午後十二時三十分。

確かに丁度良い時間だろう。

俺は膝の上で転げまわっていたメイを胸元に回収する。

「それじゃ、行きますか」

そういって、俺とバゼットさんは『時計塔』へと歩き出した。

コンコン。

「先日お伺いした杯門高美ですが…」

「入れ、鍵は掛かっていない」

305号室の前に立ち、ドアをノックするとそんな音が返ってきた。

「失礼します。……あの、連れが居るのですが一緒に入ってもかまいませんか？」

「連れ？ まあいい。さっさと入れ」

とりあえず、バゼットさん入室の許可も出たのでバゼットさん共々入室する。

相変わらず　とはいっても見たのは一度きりだが　質素な部屋。  
そんな部屋の奥、木製の執務机にウェイバーさんは居た。

「ん？ そちらは……」

「申し遅れました。協会から杯門高美の護衛を依頼されましたバゼット・フラガ・マクレミッツです。」

本日は任務の都合上同行したただけですので、無視してもらって構いません」

「なるほど、理解しました。」

私はウェイバー・ベルベットです」



ひと通り挨拶をしたのだろう。  
ウェイバーさんがこちらに視線を投げてよこす。

「さて、今日はお前の魔術の腕前、適正を観た後で課題を出そうと思っ  
思う。」

準備は出来ているか？」

「はい。基本的に触媒は使わないのでいつでも大丈夫です」

「そうか、では……そうだな、一番得意な魔術はなんだ？」

「得意な魔術ですか……特にありません。」

強いていうなら、一番歴が長い『発火』でしょうか？」

まあ部屋一着消し飛ばす程度の腕前ではある。」

「そうか、ならばそれで良い。」

そうだな、部屋の真ん中に紙を置くからそれを燃やしてみる」

そういつて、大量の紙束を部屋の中央に置くウェイバーさん。  
とじろで、

「その紙はなんですか？」

「……要らなくなった書類だ。」

どうせ捨てるんだから問題はないだろう？」

そう言われれば問題は無いのだが。

気を取りなおして、魔術に集中しよう。

使用する魔術はルーン。

対象は目の前の紙束。

求める結果は燃焼。

術式を構築していく。

とはいっても、『発火』のルーンじたいは単純で、要するに如何に自身に深く潜れるか、そしてシステム（基盤）に繋がられるかが問題となる。

右手の人差指の先を軽く噛みちぎる。

そして、そこからこぼれ出る血をインクに見立てて空中にルーンを刻む。

『アンザス』

僅か一文字。

しかし、この世界に於いて確かに力を持った文字だ。

その文字を通して、その文字の源泉、つまりは魔術基盤へとパスを通していく。

先へ先へ先へ。

外へ外へ外へ。

その行程を一瞬にして終了する。

『理解』『刻印』は一瞬に、そして『装填』は……

銃弾には魂を、銃身には肉体を

自分の深いところと魔術基盤、そして対象となる紙束を接続する。際限なく広がる自分と際限なく折りたたまれていく自分が矛盾なく同居するような奇妙な感覚。

が、その感覚にももう慣れた。

接続……成功！

瞬時に生成される魔力。

暴れ馬のようなそれを制御しながら、『アンザス』の文字に力を込めていく。

まだ、まだ……ッ！！

今にもはじけだしそうな魔力を制御する。

まだ、まだ、まだ………今だ！！

『装填』を終えた刻印に、その意味、その理の顕現を命ずる。

理の名は『炎』。

その『炎』を以て対象を燃やし尽くせ！！

「まあまあだな。ああ、魔術の腕前はまあまあだ。が、それにしても……っ」

額に血管を浮かび上げらせながら、何かを抑えこむように呟くウエイバーさん。

「いや、君が魔力の制御が下手なものも、半人前なものも知っていた。それに、屋内にもかかわらず燃やせといったのは私だ。」

「そうだ、だから怒ってはいけない。そう、怒ってはいけな……ゴホッゴホッ！」

苦しそうに咳をするウェイバーさん。

彼が何を吸い込んだかというのと、現在、この部屋一体を覆っている黒い雪の欠片である。

まあ、要するに俺が燃やした書類です。……執務机の上にあった幾つかも一緒に巻き込んでしまったらしいが。

先程の『発火』は予想以上にスムーズに起動した。魔力制御にしても以前とは段違いだし、暴発で部屋を丸々一つ吹き飛ばすなんてこともしなかった。

が、資料を一瞬にして黒焦げにし、灰に変えた俺は、しかし制御外の魔力の奔流によって局所的暴風を呼び起こしてしまい、灰を部屋中にまき散らしてしまったのだ。

それにより、

「……………あの、本当にすみません。  
えっと、あの、お似合いですよ?」

その瞬間、ギン!といった鋭い視線を送られる。

なんとというかアレだ。  
被害は書類を燃やすだけにとどまらなかったというか、成功を確信して気を抜いてしまったが故の悲劇というか……………。

有り体にいえば、ウェイバーさんの髪がギャグマンガのようなアフ  
口に変貌してしまった。

……………俺の火によって。

「君、うるさい。少し黙っている……………っ!」

ウェイバーさんの気迫に押されて、知らず一歩下がる。

……なんて、悲劇。

まさかこんな漫画みたいな事が実際におこるなんて。

そんな風な感想など決して抱かず、俺は誠心誠意ウェイバーさんに謝り続けるのであった。

アレから暫く、とりあえず謝罪を受け入れてもらったウェイバーさんから、俺の今後の方針について説明を受けていた。

「そうだな、お前の魔術の問題点は、まず魔力の制御力不足だ。  
なによりもそこが問題で、それ以外は『発火』に関しては大して  
問題はないだろう」



「ええ、そうですね。高美の魔術式は、無駄はありますがダメというわけではありません」

「マクレミツ嬢のいう通りだ。確かに君の魔術式そのものは悪くない……まあ見習いにしてはだがな。

そんなわけで、だ。高美に課題を出そう。

期限は一週間。来週の同じ時、同じ場所で採点をする。それまでに少しでも向上しておくようにしろ」

「……努力します。それで、課題とは何何ですか？」

「これだ」

そういつて取り出したのは………鍵？

「えっと…鍵ですか？」

「そうだ。この鍵を受付に持って行け、そうすればとあるフラットに着ける。

そこに大量のランプを用意しておいたから、そのランプの強化を

一週間で20個は成功させてみる。

あと、この本を読んで魔術師としての知識もためこんでおけ。とりあえずはこんなところだが、なにか質問はあるか？」

「いえ、大丈夫です。鍵を受付に持っていけばいいんですよ？」

「そうだ。ここで口頭で場所を説明してもいいが、それよりは受付で地図を貰ったほうが確実だろう。」

それでは今日はここまでだ。ここにある本も忘れずに持って帰れよっ。」

そういつて、執務机の上にある数冊の書物を顎で指して示すウェイバーさん。

俺はその本と鍵を手にとると、ウェイバーさんと正面から相対し、

「今日はありがとうございました。……それと、頭の件は本当にすみませんでした！　それでは……！」

半ば逃げるように立ち去る。

そんな俺の背後で、

「この髪型も案外……………」

なんていう言葉が聞こえたなんてことは決して無かった。

## 第二十二話（後書き）

またしても連続更新。

まあ、流石に明日（今日）はもう更新できないと思いますが、時間があればまた近々更新します。

今回のお話、かなりの難産でした。

特に、子どもたちとのからみなんて意味が分かりませんし、正直なところ高美は不審者以外の何者でもありません。

まあ、うちの実家ならあなのりで問題ないんですが……。

そして、ウェイバーのところも目新しいことは特になく、このイベントも意味があつたのかというセルフツッコミをしてしまいそう。

まあとにかく、次か後一話を挟んで時計塔入学時、つまりは9月くらいまで一気にジャンプしますので、物語も多少は変化していくのではないかと。

ところで、バゼットさんを書いているとどうにも違和感がぬけません。

なんていうか、俺が書いているのはバゼットではなくセイバーなんじゃないかと。

口調に関してご指摘があればお願いします。

## 第二十三話（前書き）

フライングで試作を上げてしまっていました。  
本当にすみませんでした。

## 第二十三話

「それでは、今日はここまでだ」

ウェイバーの言葉に、高美は集中していた意識を弛緩させた。

ここはロンドン市内に点在する協会の物件の一つ。表向きは大学に偽装された建物の教授室である。本来は執務机と書棚程度しか置かれていないさっぱりとした部屋だが、現在は硝子の破片や焦げた紙切れが散乱しており、酷い有様となっている。

「それにしても……」

最近覚えた魔術　風を起こすだけのもの　で部屋に散らばる紙切れや灰をまとめていると、ウェイバーが感慨深げに呟いた。

「あの下手くそだったお前がよくもまあそんな器用なことが出来るようになったものだな」

おそらく、風の魔術で掃除をしていることを指しているのだろう。確かに、かつて　三ヶ月前　の自分であれば何時ぞやか部屋を焼き払ったときのように、暴走してここに局地的な暴風を巻き起こしていたことだろう。それが、きちんと風を制御しゴミ掃除などという器用なマネを可能とするまでに成長したのだ、彼の感慨も当然のものである。……といっても、やはり強風ではあるのだが。「そうですね。それもこれも教授のご指導の賜物ですよ。……自分でも驚いているんです。あの俺がここまで出来るようになるなんて、つて」

橙子の元で魔術を習っていた頃は、純粹に魔術に関する知識や術式ばかりを学んでいたため魔力の制御は二の次になっていたくらいはあった。

しかし、それでも魔力制御の修行を行っていたし、こちらに来てからもそれは同様だった。にもかかわらず成長しなかった高美は、

才能がないのではないかと内心諦めていたのだが……。

「お前は多少ヒトと違うからといっても根本は同じだ。ならば基本は変わらんし、なにより素人だったから変なクセも付いていなかっただけだ」

そういつて不機嫌そうに鼻を鳴らすウェイバー。

彼の表情は 大したことはしていない と語っているのだが、当然そんなことはない。当初行われていたランプの強化を観察・分析し高美の魔術回路の特性や魔力運用を把握した彼は、魔術回路の動きから魔力運用にいたるまで細やかな指示を繰り返し、高美の魔術回路を仕上げていったのだ。

本来、このような細かな指導が行われることなど有り得ない。何故ならば、基本中の基本であるからである。時計塔にくる魔術師というのは、基本的な魔術を習得しているものがほとんどである。よほど新興の家が鮮花のようなポツと出の突然変異でもない限り基本を知らないというものはほとんど存在しない。つまり、皆が皆魔術回路や魔力の運用などは前提条件としてクリアしているのだ。

ところが、ウェイバーは自らが受け持った生徒に大してはその基本から教え込んでいくらしい。……おそらく、そこら辺の面倒見の良さが時計塔随一の講師と呼ばれる所以なのであろう。

……最も、本人はそのようなことに一切興味がない。というか、むしろ自身ではなく弟子たちが魔術の実践に於いて輝かしい功績を上げ続けることに苛立っているようなのだが。

ともかく、高美の成長は彼無くして有り得なかったであろうし、そのことを高美は正しく認識指定た。

「いえ、本当にありがとうございました。教授の指導がなければここまで成長出来なかったでしょうし、もしそうならば今頃ここには暴風が吹き荒れていたはずですから」

感謝を告げつつ、風によってスフィア状に纏められ浮遊していたゴミに『カノ』のルーンを投影する。一瞬だけ『Y』に似た紋様が中空に描き出され、次の瞬間、ゴミを全て焼き払っていた。

魔術の発動のために僅かに集中していた高美は、ウェイバーから送られる複雑な視線に気がついた。

「どうしたんですか……？」

「いや、相変わらずバカみたいな魔術だと思っただけ。本来そのルーンにはゴミを一瞬で消し去る程の火力はないはずなんだがな。魔力量がここまで違うと妬む気にもならんのが幸運といえれば幸運か……」

そういつて、何事かをブツブツと呟くウェイバー。なにやら複雑な心境のようだが、それに気づかぬ（フリをした）高美は、帰り支度を始めていた。最早愛用となったルーンナイフ、そして魔道書

大学ノート　をカバンへと仕舞い込む。今日はメイとバゼットは留守番をしているため、早く帰って家事を行わなければならないのだ。

バゼットさんは相変わらず力仕事以外は苦手だし、メイの世話もしなければならない。……訂正、メイの世話に関してはほとんど必要ないのだが、高美自身がメイと戯れることを望んでいるのだ。

「というわけで、今日もありがとうございます。次は……確か十三日でしたよね？」

「なにが『というわけで』なのかは知らんが……ああ、そうだ、そういうえば言っていなかったな。後一ヶ月もすれば、お前も含め新たな者たちが時計塔にやってくるからな。面倒ではあるが色々処理しなければならぬ案件が多い。よって事前講習はここまでとして入院までの一ヶ月は自主学習を行っている」

高美の質問に答えるウェイバー。彼は彼で幾枚かの書類を纏めると、足早に教授室の扉へと歩いて行く。

「そうですね。……そうですね。後一ヶ月でしたね」

「……まさか忘れていた訳ではないだろうな？」

一直線に扉へと向かっていたウェイバーが高美のつぶやきに反応し振り返る。

「いえ、ただ早いな、と思っただけです。自習の件は了解しました。教授も準備頑張ってくださいね」



「フンツ。……それではな」

高美の返答を聞いたウェイバーは、不機嫌そうに鼻を鳴らすと今度こそ教授室を出ていったのであった。

暫し閉じられた扉を眺め続け、改めて認識する。こちらに来て三ヶ月。そして一ヶ月後には本格的に魔術師としての研鑽が開始されるのだ。新たな生活、新たな世界。それがもう目の前に広がっている。そう考えると、居ても立ってもいられないような感覚に陥る。

まあ、現在の最優先事項はその感覚を抑えることでも解放することでもなく、家に帰って家事をして、メイと戯れて、メイと戯れて、メイと戯れて、メイと戯れて、家事をすることなのだが。

「そんじゃま、帰りますか」

そう一人つぶやいて、高美は足取りも軽く帰路につくのであった。

## 第二十三話

朝、目が覚める。

最近は健康的な生活を送っているためか、目覚ましを掛けずとも6時には目覚めるようになった。

ふと、ぬくもりを感じて胸元を見ればそこには小さく丸まって眠るメイの姿が。昨晚眠る時には、メイ専用に拵えた小さな寢床に丸まっていた筈なのだが、昨晚もまた入り込んできていたらしい。

小さく体を上下させるメイを見つめる。

この愛らしくも小さな生命は、その時間を固定されてしまっ  
たかのように姿を変えず、未だ子猫のままである。それが良いこと  
なのかどうかは俺には分からない。俺と同じく、成長というものを  
忘れ、悠久の時を生きるであろう彼女は果たして幸せなのだろうか  
？

……なんて、朝からシリアスな気分になるのは多分低血圧のせい  
なのだろう。……血液が流れているのかどうかという問題は置いて  
おくとして、だ。

気を取りなおして、胸の上で眠るメイを優しく撫でていく。背、  
首筋、耳の裏。ゆっくり、ゆっくりと、先程の不安を消し去ってい  
く。

すると、ムズかゆいのだろうか？ 鼻をヒクヒクと痙攣させたメ  
イは、暫くの後自身の眠りを妨げたモノ。つまりは高美を認める  
と高美の胸の上で起き上がり、高美の顔へと歩み寄っていく……  
高美の頬をチロチロと舐めた。

この挨拶（？）は最近のメイのお気に入りらしく、毎日のように  
成されている。故に、高美にとっては最初の頃ほどの動揺は既に無  
くなっている。

自身の顔を舐めているメイをそっと抱き上げる。そうして、自身  
も体を起こした高美はメイを抱えたまま窓へと歩み寄り、外と内を  
隔てていた結界 カーテンそして窓を勢い良く開いた。

8月とはいえ、日本と比べると涼しい風が窓から入り込んでくる。  
風は伸びることの無くなった高美の髪をユラユラと揺らし、僅かに  
残っていた高美の眠気を完全に取り払っていた。

「そんじゃ、顔を洗って出かけようか」

腕の中で抱かれているメイに声を掛け、メイをその場に下ろして  
やる。そして、寝台の乱れを整えた後、寝室を後にするのであった。

階段を降り、ダイニングへ向かうと既にバゼットがコーヒーを飲

んでいた。

「おはよう、バゼットさん……バゼット。今朝も早いね」

バゼットさんとの生活も既に三ヶ月。互いに多少気心が知れてきた頃から、フランクに話そうという事になっていた。……まあ、高美からすれば同年代の女性を名で呼ぶことには未だ抵抗があるのだが。

「おはようございます、高美。それにメイも。今日も散歩へは行くのですか？」

バゼットが、最近の高美たちの日課について尋ねる。そう、何時ぞやか宣言した通り高美とメイ、そして時々バゼットは毎朝散歩に繰り出していた。

「ああ。今から顔を洗って、すぐに出かけようかと思っているんだけど……バゼットはどうする？」

「そうですね。今朝は私も行きましょう。今日は特に任務も入っていませんし、休息に当てるつもりでしたので」

そういつて、自ら淹れたであろうコーヒーを啜るバゼット。

当初、蒸らす時間が間怠っこしいといっってインスタントのコーヒーしか飲んでいなかったバゼットだが、高美の指導の結果、豆から淹れたコーヒーの味に目覚めたらしい。……まあ、未だに質より量というきらいが強いのだが。

「それじゃあ顔を洗ってくるけど……バゼットが先に使う？」

一応、レディーファーストということで聞いてみる。バゼットも高美も、互いにそのようなことを機にするタイプでもないのだが……。それに、

「いえ、ご覧のとおり既に準備は完了しています。ですから高美が使用して構いません」

そう。バゼットは既にスーツで完全武装しているのだ。……一体何時に起きているだろうか？

「了解。チャチャツと済ませてくるから、バゼットはガスの確認をしてもらっていていいか？」

了承の旨の返事を聞きつつ、洗面所へと向かう。そして、洗面所で顔を洗い、後ろからトコトコとついて来ていたメイも温水で軽く洗ってやる。

猫というものは水を嫌うと誰かに聞いたような気がしていたのだが、メイの場合はそのようなことはない。むしろ、水は好きなようで、ともすれば俺よりも長くバスルームに居ることも多々ある。

使い魔だからかな？　なんてメイの水好きの理由を考察しつつ、洗い終わったメイに向けて魔術の風を送る。

出力は最低限。メイの長い毛がゴワゴワにならないように丁寧にクシを通してゆく。

そうして五分後。綺麗サツパリになった高美とメイはダイニングへと向かい、バゼットと合流するのだった。

「うーん！　っはー！　やっぱり朝は気持ちいいねバゼット」

「そうですね。朝の冷たい空気は意識の覚醒にも効果的ですし、集中力を増すという意味でも有効的です」

そんな微妙にズレた会話を行う二人は、メイという共を連れてロンドンの街を練り歩いていた。

現在時刻は午前七時。

仕事へと向かう者たちが忙しなく行き交うのが本来の光景なのだろうが、彼らが歩いていたのはどちらかといえば散歩道。

ペットを連れた者やジョギングに勤しむ若者、散歩を楽しむ老夫婦ぐらいしか歩いているものは居ない。

「高美は今日何かあるのですか？」

朝の空気を胸いっぱいに取り込み、思う存分ロンドンの朝を満喫していた高美に、バゼットが尋ねる。

「いや、確か……うん。今日は魔術の修行をする以外に予定はなかったと思う……あっ！」

バゼットの質問に答えた高美は、ある物を目にして唐突にかけ出

した。

それは仕掛け時計。

何度目かの散歩の際に高美が公園で発見したものである。高さは3メートルほどのそれは、一時間毎に仕掛けが動き出し、小さな劇を披露しているのだ。純粹に細工としても美しい上に、緻密な仕掛けの施されたこの時計は公園のシンボルとなっており高美の、そしてなによりメイのお気に入りとなっていた。

「全く……子どものようですね」

走りだした高美と、高美よりも先に走りだしていたメイを見て呆れたようなため息を吐くバゼット。しかし、彼女の口元は僅かに歪み、子を見守るははお……姉の様であった。

それから暫く。

時計の仕掛けを見ることが出来てご満悦だった高美とメイは公園内をぶらついていた。

因みに、バゼットはというとランニングコースで一汗流してくるのとこと別行動をとっている。まあ、彼女が一汗かくにはどれほどの運動が必要なのかということは置いておこう。

そんな訳で散歩を続けていた一人と一匹だが、彼らは現在少しだけ困った状況に陥っていた。

「いや、だから、ね？ ほら、知らない人のペットに触っちゃダメだってお母さんに言われなかったのかい？」

「少しだけ！ 少しだけだから、ね！ いいでしょう？」

散歩を続けていた彼らは、大凡6歳くらいに見える少年に捕まっていた。淡い金髪に整った顔立ちの彼は、しかし現在瞳に涙を湛えていた。

本来、メイを触らせて欲しいという程度の願いであれば何もたまたらうことなく許可するであろう高美だが、今回は何処か深い部分所謂直感が邪魔をしてそれを拒んでいた。

「うーん……まあメイがいつていうのなら少しは……いや、でも……」  
しかし、元来子ども好きであった高美は、メイを触らせて欲しいと泣きそうになっていう少年に、絆されそうになっていた。

理性ではなぜ断るのかと、本能では必ず断れと訴えかけてくる自身の思考にどうしたものかと悩んでいると、

「その猫かわいいね。俺も触ってみたいんだけど、いいかな？」

どこかゆるい顔立ちに、フワフワ天然の飴色ヘアを靡かせてやってきたせいね……少年は、その場の空気を一気に弛緩させた。

おそらくは高美と同年代であろう。しかし、その雰囲気は年下であるような錯覚を高美に抱かせていた。

「へっ？ いや、べつにいいですけど……」

突然現れた少年のあまりの緩さに思わず許可してしまう高美。と言ってしまった後にふと我に返る。さんざん小さな少年の頼みを断っておいて、いきなり現れた少年の頼みを聞くのはどうなのだろうか、と。

小さな少年は泣いていないだろうかと恐る恐る少年の方に目をやる高美。が、高美の予想に反して少年は涙など一切こぼしていないかった。というよりも、むしろ能面のような表情で高美と新たに現れた少年を凝視し、憎らしげに二人を睨んでいた。

その段になってようやく、高美は少年の異常に気が付き、少年を『視た』。

高美の魔眼に火が灯る。瞳に叩き込まれた魔力は、正しくその少年の正体を映し出していた。

小さな少年と同じく金髪で、顔立ちも整ってはいる。しかし、いささか時が経ちすぎているようだ。おそらく、幼い頃は正しく少年の姿であったのだろう。しかし、現在は老い、しわがれた老人の姿へと変わり果てていた。

おそらくは幻術。高美の有する程度の魔眼で見破れる程度であれば大したことのない術式であったのだろう。が、高美が気がつかない

かったのであればそれは意味のないことだ。

高美の中の警戒レベルが一気に跳ね上がる。と同時に、疎らとはいえ散歩客で賑わっていた公園に高美たち以外の誰も居なくなっていることによく気がついた。

「っ！？ まずい！！」

人払いの結果。人の意識を逸らし、あるいは操作することで一定空間から魔術師以外の者を弾きだす結果である。このような結果が敷かれているということは、おそらく、この少年もとい老人はこちらへ害意を有しているのだろう。

そう判断した高美の行動は早かった。メイと戯れる少年の首筋に魔力を流しこみ、意識を奪う。そして、少年を背中に背負ったまま老魔術師と相対していた。

「何が目的だ！？」

「……フム。魔術師として素人同然であるというのは事実であったようだな。まさかあの程度の幻術で引つかかってもらえるとは思ってはいなかった。……それで目的、だったな」

少年の姿を完全に破棄した老魔術師は、自らのあごひげを撫ぜながら高美を舐め回すように観察する。

その視線に生理的嫌悪感を感じた高美は、背に背負った少年とメイの位置を確認し、逃げ出す算段を始める。

こんな時は……バゼットに合流するのが先決か。この少年の記憶は後で操作しておけば良いし

老魔術師から視線を離さぬまま、魔術回路を起動していく。

「銃弾には魂を、銃身には肉体を」

人であったものが、魔力を廻すためだけの回路へと変貌する。前身を流れるのは血潮ではなく魔力。肉体を構築するのはタンパク質ではなくエーテル。

人からヒトへ。高美は自身を作り替え、膨大な魔力を練り上げる。

その様子を見て、老魔術師は　ホウ　と感嘆の声を上げた。

「素晴らしい魔力だな。なるほど、魔術師としては三流とはいえ、

腐っても魔法使いということか」

そこまで言って、ニヤリと彼は嫌な笑いを浮かべた。

「所詮は三流。魔力だけ無駄に大きくても何ら意味が無い。それを扱うすべを有していてこそだ。……故に、その成果は私が有効活用しておこう」

だから眠れ　と、それが開戦の合図となった。

『銃弾には魂を、銃身には肉体を』

咆哮をあげるが如く回転する魔法使いの魔法回路。その膨大な容量を満たす回路に『基盤』を接続する。

『風よ』

僅か一小節。秒に満たないその詠唱は、しかしあらゆるものを切り裂く真空の刃となつて老魔術師へと突き進む。

威力にしてAランク。純粹に風を起こすことだけを目的としたその魔術は、高美の属性と膨大な魔力量に支えられて攻城クラスの威力で以て老魔術師へと殺到した。

刹那のうちに放たれた魔術は、美しかった公園の芝や木々を切り裂き、薙ぎ払い、荒野へと変えていた。

「やった……か？」

轟々と立ち込める土煙に目を凝らして呟く。

そして、いまさらになつて人一人など完全に消し去つて有り余る威力を込めた魔術を放つたことへの恐怖が沸き上がってくる。

ヒトを殺してしまつたやもしれぬ

既に最も大事な人と自分自身の命を奪つた高美であるが、完全な他人の命を奪つたことはない。にもかかわらず……。

それは直感のようなものであつた

人を殺したやもしれぬという恐怖に体を震わせていた高美は、自らの直感に従つて魔法回路のギアを一気にトップまで持つて行き、後ろへと全力で飛んでいた。



高美が立っていた場所を黒い光弾　極大の呪いが通りすぎていく。

その事実を以て、高美は自らの震えを抑えこむと、神経を張り詰めた。

まだ生きている。いかなる手段を用いたかは不明だがあの死の鎌を潜り抜けたことだけは事実だ。

どのような手段を用いて生き延びたのか。その手段についての思考は最初から破棄する。戦闘者としては下策なのだろうが、魔術師として半人前の俺では策を見破ったところでどこまでできるものでもないだろうし。

……その思考を破却する。まずは眼前に迫る魔弾への対処を。自身の周囲に風の防壁を構築する。風で作られた簡易結界。

それは、爆音と共に迫る黒い光弾を弾き続ける。

四方八方から迫り続ける黒い魔弾。一発一発は大した威力ではないのだろうが、背中に背負った少年に対してはどのような影響を及ぼすか考えるまでもない。

故にギリ貧であると判っているながらも結界を維持し続けることしかできない。……唯一の救いは、潤沢な魔力量故に結界が破られる心配などないということだろうか？

「……う……うにゅ〜」

背中の少年が妙な寝言を口走る。もしや目覚めるのではないかとそう考えた高美は一瞬だけ背中を振り返り、驚愕した。

「……メイ？　おい！　メイ、どこだ!？」

背中に張り付いていた筈のメイ。彼女が居なくなっているのである。

新陳代謝など行われない高美の体に、冷たい汗が流れる。

メイの姿がない。少なくとも、風の結界内には存在していない。

ならば？

考えるまでもないだろう。メイは風の結界の外。つまりはあの魔弾の嵐の中に取り残されているのだ。

「……どうする？　ちくしょう！　どうすればいい……冷静になれ、俺。COOLにCOOLになれ」

熱く沸騰しかけた思考を無理やり冷却する。が、良い手立てなど思いつくはずもない。

「結界を解除した一瞬で全方位に風を放つ。魔弾がどこから撃たれているのかはわからないが、それで一瞬だけでも視界を確保出来るはずだ」

頭の中に術式を構築していく。効果内容、効果範囲、攻撃対象、威力、魔力量。

それらを複数同時展開していき、最後に魔術回路を最大まで加速させる。

『銃弾には魂を、銃身には肉体を』

自らを魔術師と云う名の銃身へと変貌させる。

装填された弾丸は魔弾、風の魔弾だ。

3……2……1……0！！　心のなかで号砲を鳴らす。

風の結界が解かれていく。高美と、そしてなにより高美の背中にいる少年を守っていた絶対の防壁が。

ありとあらゆる方向から迫り来る魔弾。それは、高美はともかく、背中の少年など消し飛ばして余りあるだけの純粋な暴力だ。

一瞬の後、魔弾は高美たちを貫くだろう。

が、高美は魔法使い。この程度覆せずしてなんの魔法使いであろうか？

瞬間、音が消えた

白く漂白される世界。幾層にも重ねられた風の刃は、光すらもねじ曲げて黒い光弾を消し去っていった。

一瞬の静寂、そして轟音を経て世界は通常の運営へと戻った。

残るのは半径50メートルを完全な更地にしたアギトの痕跡と高美たち、そして『黒い泥』だけであった。

「ハアハアハア……結構キクなこれ……」

初めて複数の術式を多重展開した高美は、ジクジクと疼く魔術回路を抑えながら、慎重に『黒い泥』へと近寄っていった。

「……なんだ、こいつ？」

見た目はコールドールのようなゴムのような感じだが、その表面は蠢き胎動している。

「あの魔術師がこれになつた？」

少なくともこの『黒い泥』以外にあの魔術師の痕跡を匂わせるものは何も無い。

高美は、慎重にその泥へ近づくと、純粋な魔力弾を『黒い泥』へとぶつけた。

パシュツと気の抜けるような音共に魔力弾は泥へと突き刺さる………かに見えたが、その魔力弾は泥に吸い込まれるようにして消えてゆき、最後には何事もなかったかのように蠢きだした。

「ひどいことをするね、君は。自分の使い魔に対してなんという仕打ちだ」

高美が『黒い泥』を観察していると、何処からか老魔術師の声が木霊してくる。

「使い魔？ ……メイ！ おい、お前、メイを何処にやった!？」

メイが既に老魔術師の手に堕ちていることを悟った高美は激昂して叫ぶ。何処かに存在する老魔術師へと。

「どこも何も、君の目の前に居るではないか。判らんかね？ 君が魔力弾を撃ち込んでいたその泥の中だ」

「なっ!?!? メイ!?!」

老魔術師の言葉に魔眼を起動し、何一つとしてメイの痕跡を逃さぬよう泥を凝視する。と、確かにメイの反応を感知する。

「メイ! クソ! この泥取れねえ!」

メイの反応を察知した高美は、泥の中からメイを救出しようと、魔力を纏った両手で泥の中へと分けいつていく。

しかし、泥は高美の魔力を吸収し続けてゆき、掻き分ける先から高美を取り込もうと高美へ迫り続ける。

「そんなに使い魔が大事だというのなら一緒にしてあげよう」  
そんな高美の努力をあざ笑うかのように老魔術師は晒う。そして、何事か呪文を呟くと泥は意志を持ったかのように高美へと殺到してゆき、高美とそして背中にくっついた少年を自らの裡へと取り込んでしまった。

「魔法使いとはいつでも所詮はこの程度、か。いや、魔術の威力には多少驚かされたがしょせんはそれだけ。魔道具二つの損失を考えても十分な成果だ」

更地となった公園。その中心に存在する『黒い泥』の泉を前にして老魔術師は晒う。

高美は知らなかったが、老魔術師も『黒い泥』の中に身を潜めていた。そうすることで高美の魔術をやり過ごしていたのである。

「さて、好機であつたから手をだしたものの……流石に『協会』のお膝元であればすぐさま誰かしら飛んでくるだろうしな。そろそろ撤退しなければ」

老魔術師はご機嫌だった。多少運の要素があつたとはいえ、結果からみれば大成功。魔法の体現者というこれ以上とないサンプルを手に入れたのだ。

普段不機嫌そうな顔をしている彼が顔をほころばせてしまうのも仕方のない話だった。

彼は再度『黒い泥』へと目を向け、泥を壺の中へと封入するよう呪文を唱えr……唱えようとした。

彼の笑みが凍りつく。目の前には膨大な魔力を収束させる魔法使い。

自身を7度消し飛ばしてもなお足りぬその魔力は、しかし極限まで収束されて一点の光にすら見える。

「なぜきさま」なぜ貴様が。なんて三下のセリフはよしてくれよ？」

「

魔術師は混乱する。自身の置かれた現状に。

何故だ！ 何故！？ 混沌を練り込んだ完全秩序の泥。<sup>「コスモス」</sup>あの  
中ではあらゆる魔術は起動しないはず…っ！

「何故貴様がここにいる！！ あそこからの脱出は如何な魔法使い  
とて不可能なはずだ！！」

「ハハ。結局はいつちやうんだねそのセリフ。まあ、俺も師匠のパ  
クリだからなんとも言えないんだけど。……ところで、何故脱出で  
きたか、だったね。こういうのを説明すると敗北フラグだし、本当  
はやりたくないんだけど冥土の土産って言葉もあるしね。うん、い  
いよ説明しよう」

冷たい視線を湛えていた魔法使いの表情が一転、疲れたような呆  
れたような苦笑へと変わる。

「要するに、混沌つてことは『なにものでもない』って事なんだろ  
う？ なら、方向性を与えてやればいい。それだけで混沌は秩序へ  
と成り代わる。何も無いってことは何にもなれるってことなんだよ、  
魔術師」

確かに、理屈ではそうだ。方向性が無いがゆえの束縛性であれば、  
方向性を与えることでそれを別の性質へと変質させることが可能で  
ある。

しかし、それはあくまで理屈での話。そもそも、完成している混  
沌に方向性を与えるなど並大抵の魔力では不可能だし、属性の完璧  
な制御も必要となる。

なるほど、確かに目の前の魔法使いは魔力量の問題を解決できる  
だろう。しかし、こいつは見習い以下の腕しか持たない半人前以下  
の魔術師だ。

そのような高度な属性制御が可能であるはずがないし、可能だと  
するればそれはもはや半人前どころの話ではない。

「前情報が間違っていたのか……？」

呆然と呟く。

「何の前情報だか知らないけど、多分考えていることは間違いだよ。

ま、どうでもいいか。それじゃあ魔術師、さようなら、メイに手を出したらどうなるかその身を以て味わうといい」

そうして、一瞬のキラメキの後、二百年を生きた老魔術師の意識は永遠に断絶した。

「いやーそれにしてもびっくりした。変な魔術師が子猫を奪おうとしていると思って近づいてみたらいきなり気絶させられるし、気がついたら変な泥の中だし」

「いや、本当にすまない。魔術師だって全然気がつかなかった」

老魔術師と殺害して暫く、公園のベンチに座った高美と少年、そしてメイは暫し休息をとっていた。

「ところで、本当に今日は助かった。君が居なかったらあの泥から逃げ出すことも出来なかったし……」

「フラット・エスカルドス。フラットでいいよ」

「？ ああ名前か。俺の名前は杯門高美。高美ってよんでくれ」

「ヒエイムン・テイクミ？」

「いや、誰だよそれ？ ……そうか、外国人だと発音が難しいよな

……そうだな、タークって呼んでくれ。これなら呼びやすいだろ？」

「わかった宜しくターク」

「こちらこそ、フラット」

名の交換を終え、暫し静寂が場を包む。

決して気まずい沈黙ではない。ただ、緩やかに時間が流れる、そういう沈黙。と、ベンチの上で丸まっていたメイが高美の体を駆け上がる。

そして、高美の肩へ登ると、高美の頬へ顔を寄せ、チロチロと舐めだした。

ザラザラとした感触と、子猫特有の暖かさが高美のの肌を通して脳へと伝えられる。

「……こいつかわいいな。名前は？」

「メイ、俺の家族兼使い魔だ」

「なるほどね。ほら、メイおいで。ほら、こっちこっち」

自身の膝をポンポンとたたきながらメイへこっち来てアピールを繰り返すフラット。

一方のメイはというと、高美へ『行ってもいい?』と尋ねてくる。バゼットですら一週間は掛かったのにね。……波長があったのか?

珍しく初対面の相手になつたメイに『Go』サインを出す。と最後に高美の頬を一舐めし、メイはフラットの膝の上へと飛び移っていった。

『べつ別に寂しくなんか無いんだからね!!』

なんて妄言を頭の隅で聞きつつ、荒野とかした公園へと目を向ける。

チーチッチッチッチッチ

クワツカクオツククワツカクオツク

どこから流れてくる鳥の鳴き声をBGMにのんびりとする。

「フラットはなんか予定があつて公園にいたのか?」

なんとなく、そんな質問を投げかける。

「ん〜? いや、ただ散歩してただけだったんだけどね。うん、今

日はいい天気だしこのままお昼寝つてのもいいかも知れない」

「昼寝か〜うん、そいつはいい。俺も同道してもいいか?」

「いいさ。はー平和だなー」

「さっきまではそうでもなかったけど、うん、平和だなー」

いつの間にか自身の膝の上に移っていたメイを撫でながら高美も  
呟く。

「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」





かされたのはまた別のお話。

## 第二十三話（後書き）

新年明けましておめでとございます！

前回更新からかなり空いてしまいましたが、第二十三話の更新です。

今回のお話は、一マス下げや改行の自重など縦書き小説を意識して書いてみましたがどうでしょうか？

見にくい、などの意見があれば前回までの書き方に戻すのですが…。

さて、今回のお話は『strange fake』に登場するフラットくん登場&フラグ回収の回でした。

そしてなにより初戦闘なんかもいれちゃって、色々とアップアップな内容です。

まあ、あんなものを戦闘と呼称して良いのかも不明ですが、私の技量が向上するまではあんな感じになると思うのでご了承ください。

次話は『時計塔』入学式編です。

まあ、入学式もくそもないので…。

そんなわけで今回はここまで。

それでは。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9737n/>

---

人形はいつかたどり着いた

2011年1月10日16時32分発行